

# 鹿児島県史料

旧記  
伊地知季安著作史料集  
雑録拾遺  
三

# 解題

本書は『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 伊地知季安著作史料集三』として伊地知季安の著作史料のうち「諸家系図」一—五全冊と「諸家系図文書」一—六のうち四までの四冊を収載する。原本は現在東京大学史料編纂所々蔵島津家文書の「島津家本」史料の中にある。昭和五十七年一月の「舊記雑録月報4 旧記雑録後編2付録」に宮下満郎氏が「磯島津家へ進上書類目録」の紹介文をのせている。それに引用されている明治二十三年七月十四日の島津家家令東郷重持・武宮俊雄連名の伊地知季通宛の進上書類受取目録には総計一七六冊となっているが、箱別にみるとはじめの箱は「管窺愚考」三冊他合一九冊入で伊地知季安編集とあり、次の箱は「寛永軍徴」二八冊他三一冊が伊地知季安編集で別に「慶明雜録」三六冊他合四七冊の計七八冊入となっている。後者は伊地知季通の編集と思われる。終りの箱は「近秘野草」一冊他一四冊が伊地知季安編集とあり、別に「御支族略系図」一冊他系譜類を主に六五冊、合わせて七九冊入となっている。内容的にみて後者には季安の書写、考証したものも少なからず含まれてはいるが、大方その編集は最終的には季通が当たったものと考えられる。本書の「諸家系図」・「諸家系図文書」もその中に入っている。すなわち季安の書写になる「一比志島文書 一冊」(文政十年)・「一樺山文書 一冊」(天保十二年)につづいて、目録には「一諸家系図文書一 一冊 琉球国中山王系譜 志岐氏 後醍醐院氏 秩父氏 淵辺氏 指宿氏 一諸家系図文書二 一冊 平田氏三家 酒匂氏 高橋氏 田代氏 弟子丸氏 執印氏 市来氏<sup>両家</sup> 一諸家系図文書三 一冊 鹿屋氏 諸家文書雜集 肝付氏 前田氏 一諸家系図文書四 一冊 宮里氏 比志島氏 支流 志岐氏 福崎氏 種子島氏 加世田氏 桂氏 祢寢氏 肝付氏庶流 畠山氏 本城氏 鎌田氏 市来崎

氏文書 牛屎氏文書 桑幡氏 牛屎氏 一諸家系図文書五 一冊 入来本田氏 都城本田氏 都城高木住某藏 税所氏  
 財部延時氏 財部米良氏 末吉宮里氏 末吉羽島氏 高岡富満氏 日州大田原村新助藏文書 高岡山下氏 伊東氏  
 入田氏 大脇氏 祢寝氏 小根占池端氏 長谷場氏 野邊氏 一諸家系図文書六 一冊 肝付氏家數十 葉丸氏 津  
 曲氏 勝部氏 鹿屋氏庶流」とあり、その四までを今回掲載、紙数の関係で五・六は次回にゆずることとなった。  
 つづいて「一諸家系図一 一冊 本田氏正統庶流 鎌田氏両家庶流 宮之原氏 市来氏庶流 二階堂氏正統 二階堂氏庶流  
 一諸家系図二 一冊 松崎氏 長谷場氏 平岡氏藤原姓 萩原氏伴姓 肝付氏庶流 祢占氏 床波氏 伊地知氏庶流 吉  
 富氏 一諸家系図三 一冊 税所氏 田代氏 左近尉氏梶原姓 海江田氏 讚良氏 相良氏 永山氏 仁禮氏 江田  
 氏 国分氏 入田氏 菱刈氏 野村氏 小川氏 肥後氏 那須氏 餅原氏 黒田氏 藤崎氏 有馬氏 肥後氏 村  
 田氏 三原氏 鮫島氏 高城氏 土持氏 伊東氏三家 浄楽院 東郷 斧淵氏 菊池氏 相良氏 大河平氏 古加治木氏  
 莫根氏 高木氏 宮里氏 岡村氏祢寝氏 古佐多氏 有川氏 西俣氏比志島家庶流」は明治二十三年進  
 上の際には三までで、残りの四・五は後年進上されたものである。すなわら表紙に「諸家系図卷之四 明治廿九年  
 伊地知氏進上」とあることから、おかれて明治二十九年に至って進上されたことがわかるのである。そしてその目  
 録には「二階堂氏 諸家文書 上原氏 三原氏 富山氏」とあり、「諸家系図卷之五」としての内題に季安筆季通  
 補筆で「執印正統 市来氏 河上正統 羽島氏 五代正統 大寺氏 市来氏文書 河上氏文書 蒲地氏系図文書」  
 とある。

島津家文書が鹿児島島の磯邸から東京の袖ヶ崎邸に移された年時については明らかではないが、伊地知氏進上書目  
 については少なくとも右の事情や、また季通の「旧記雑録」増補の作業が明治三十年頃まで及ぶこと等から、本格  
 的な史料の東京への移動は早くとも明治三十五年以降とみなされよう。この点島津家本「明治三十四年磯編集方事

業報告書」の記事から、なお編集方の存在が判明し、史料の存在も確認できたことによっても裏付けられよう。(本史料の各冊毎の表紙に「三番箱 伊進上」とあり、また内表紙に朱角印「磯島津邸藏書之印」の押捺と裏紙に「島津家編輯所図書大正十二年二月二十日受入」のスタンプ押捺、引継印のあることもその手懸かりとならう。)

二

さてここであらためて本書の掲載順にしたがって「諸家系図」からみてみよう。「諸家系図」一、内表紙内題は季通筆であり、冒頭の「正統本田氏并ニ庶流」は「本田家総譜」をはじめとする本田氏惣庶家の系図集であるが、中に一、二季通の注記がみとめられる。以下の系図も同じくみな藩記録所所在の系図写に所見を注したものであるか。終りの「二階堂氏正統系譜」は安永三年の二階堂行且の系譜写である。二階堂氏系図は季安自筆のものがさらに巻四にも収録されている。

「諸家系図」二、内表紙の内題は季通の筆であるが、冒頭の内表紙「松崎采女貞悦家之系図」は季安筆ではじめに「此系図者延宝四年辰九月より同五年巳十二月迄松崎采女貞悦六十五才ニ而為被寫置山田聖榮之自記式冊之裏ニ有之、横切小冊ニ而連續致し兼候間、暫番付して取崩し如本継合せ此通寫取置、自記者本之様ニ冊子おくもの也」とあり、「甲午(天保五年)七月廿四日 伊地知小十郎季安」の自署がある。これによれば山田聖榮自記の写本の裏に記してあった貞悦自撰の系図を苦心して書写した旨を記している。松崎氏も島津義久の遺臣で、国分よりの移衆である同氏の系譜に季安も格別の関心を抱いたものと思われる。

次の「長谷場氏系図」は季通の筆跡で「慶応四年戊辰三月寫終伊地知季通、藤原姓長谷場氏系図」とあり、本文もすべて季通の自筆である。これとは別に「諸家系図文書」五(次回収録)には季安の筆跡で「長谷場氏文書 主伊地知小十郎」とあり、長谷場氏文書二〇点が採録されている。そのあと書に「右託伊集院兼誼兄模寫之、以備後

採、爾文政己丑秋伊地知季安書」とあり、季安は文政十二年に伊集院兼誼に依頼して長谷場文書を写していたことがわかる。

次の中表紙には季安の筆跡で「系図 藤原姓平岡氏 伴姓萩原氏 伴姓肝付庶氏」とあり、肝付庶流系図は明和年間兼満を祖とする一系を示すが、それは天明七年正月の奥書によれば山県源盛富の作成になるものであることを示す。以下の称占・床波両系図は季通の筆跡、一つ伊地知権右衛門季昭の系図写を以て終りの吉富氏の系図も季通の筆であろう。『伊地知季安先生事蹟』で渡辺盛衛氏は先生自筆とされる。季安・季通の筆跡は書体により酷似しているものもあり、判定の困難なものも少なくない。そのことは「旧記雑録」の筆跡においてもいえることである。吉富氏は平姓薩摩郡司の一族である。

「諸家系図」三は税所氏以下比志島氏庶流西侯氏に至る四〇氏の系図をあげている。季安筆、季通筆、別人筆が入交っており、明らかに季通筆のものが二点ある。その一つ菱刈氏略系図は二男家系図で『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ七』所収の八一・12、一七一―2号文書の写と思われる。もう一つの西侯氏系図の添書には宝永三年西侯氏より本家の比志島氏宛に「私家元祖ヨリ相知候由緒家傳等、去元禄七年之冬、系圖御方江差出候、亦々此節御再撰ニ附庶流迄相記差出候條、御記録所江御差出可被下候」と書きそえられているところから、近世中頃までに記録所に提出された諸家系図が多く同所に保管されており、その中から摘出書写されたものであることが推察される。

「諸家系図」四の冒頭の「二階堂氏系図」は二十六代行智以降の同氏系図の季安自筆草稿といえる。同氏の系図（「二階堂氏正統家譜文書」二五巻、「二階堂正統系図文書」二二巻）は先代の行且により、先祖以来の系譜が見事に作成されていたのであるが（『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ一』解題、二階堂文書参照）、それ以降（二

十六代行智)のものが未定稿であった。内容からみて同系図は季安が二階堂氏よりの委嘱をうけて二階堂氏系譜の草案に補筆を加えたものかと考えられる。そして記述から行且以後の二階堂氏のことを知ることができる。寛政四年に行智は行且の編纂した家譜等を記録所に提出しているが当時の記録奉行は本田親孚(季安の従兄で教導者)であった。系図は天保八年七月の異国船が兒水に漂した事件の記事で終わっている。当主は二十七代の行尚で續奉行をつとめていた。

なお「諸家系図」のうち四・五の進上が六年おくれたのは季通が「旧記雑録」の編纂補筆や個々の系図についてさらに検討を加える必要があったため等、何らかの事情によるものであろう。

次の「上原氏系図」は季安の天保七年八月十五日の添状に「御記録所ニ有之諸家系圖帳又ハ高所之高系図等御写もらひ、御位牌・墓銘・過去帳・古札改帳など御糺合被成、近世ハ御仕分可被成候、左候而古文書等ハ御願之上御寫濟、惣而御校訂不被成内ニ御淨寫書申候段ニ而不罷成、夫故反古之儘入貴覽申候」とあるから、これまた上原氏の委嘱を受けて季安が諸史料を収集して系図の作成に当たったことを示していることがわかる。そしてここで上原氏の系譜を作成する過程での季安の史料の収集とその考証(上原氏が中原姓であること、日置北郷八幡宮弥勒寺領の惣地頭であること等)をよみとることができる。また延徳四年十一月十三日忠昌書状の取扱い、所蔵者の記載、注記の書様について、ここでの季安のそれと、「旧記雑録」編纂時での季通のそれとを比較することによって、季通が季安の収集書写した上原氏関係史料を、「旧記雑録」編纂に際して若干修整しながら採録していることが具体的にわかるのである。(同文書の所蔵者の記載、注記で季安は敬称を付し、季通は省略している。)

「源姓松本氏系図」・「三原氏系図」・「富山氏系図」もまた季安の書写と思われる。季安は慶応二年、三原氏先祖の招魂墓碑銘を残している。「舊記雑録月報」18、拙稿「伊地知季安と兒玉利器、そして末川周山」参照)ま

た富山氏は藤原姓、中世大隅・日向両国にまたがり繁衍した島津荘々官の一族である。

「諸家系図」五の内題、目録は季安・季通の筆にかかる。惟宗姓執印一族系譜をはじめに関連する同族の由来、大蔵氏等の諸家系図についてとりあげており、島津氏とも関係の深い惟宗氏関係の一族の系譜に季安が深い関心を寄せていたことを示している。或は一つの調査意図をもって収集したとも考えられるのである。中に「大蔵姓河上氏系図文書」は「文政十年丁亥正月写之、主伊地知小十郎季安」とあり、「右丁亥正月三日、高岡郷土年寄河上次郎左衛門持参候間、両日借置寫之也、我九世祖美作守重常妻乃此家故如此云」とあって、季安は系図を三日間借用書写したとあり、また季安の祖先由縁家の系図であることにも注目していることがわかる。この頃季安は伊地知家先祖の歴史を明らかにし、その系譜をつくらうとしていたとも考えられる。

また「羽島氏系図文書」については季安自ら「丁亥（文政十年）三月寫之」と記し、全文季安の書写であることがわかる。そして「旧記雑録」についてもこれから採録されたことがうかがえるのである。「旧記雑録」にはその中の建徳三年八月二十八日の禅恵讓状が漏れているが、これは季通の編集採録の際のとりおとしであろう。なお「諸家系図文書」五（次回收録）にも季安筆で「羽島氏系図 惟宗氏」をのせているが、これには末吉羽島文書として「羽島氏当分家跡ニテ親戚春田良円院格護候を、文政四年辛巳十二月十三日、中侯次兵衛所ニ而写ス」と記しており、それによれば季安は文政四年・十年の二度羽島氏文書を書写したことになる。文政四年書写分はすべて文政十年書写分の中に含まれている。また永仁三年二月十日の檢地目録を「旧記雑録」では撫目録とよんでいるが、本書の季安の写では檢とあり、転写の際のよみ違いであることが判明する。現在羽島文書は宮崎県立博物館所蔵であるが、この文書は現存しない。

「蒲地氏系図」は筑後国蒲地氏の庶流で、建武元年薩摩国河辺郡内黒島・硫黄島郡司職を惣領郡司職の千龜氏の

下で安堵知行が認められた永行の子孫であり、また島津忠良・義久に仕えた蒲地四郎左衛門家の系図で文書写一八点を伝えており興味深い史料となっている。同文書は「旧記雑録」に採録されており、その筆跡は季通のものであるから、季通は「諸家系図」中の右系図から編纂の段階で採録したものであろう。なお「町田氏正統系譜」(『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ三』所収)久倍代には国分蒲地孫太郎家藏文書としてうち七点が採録されている。それは原本によったと思われ、当文書の誤脱を補正し得る。

三

次に「諸家系図文書」についてみてみよう。一の最初に琉球国中山王系譜をあげる。季安は早くから南島・琉球に対する関心は深くその関係の著作も少なくない。恐らく記録所々の舜天王から尚敬王に至る間の中山王系譜を写し、自ら日曆等補訂の注記を書き加えたものであろう。次に菊池流志岐氏の略系・源姓後醍醐氏の正統系図を掲げる。後醍醐氏は懐良(良懐)親王の子良宗を祖とする家で子孫は後醍醐を称した。佐々・小西氏に仕え、宗長代朝鮮の役、庄内の乱、関ヶ原の戦いで武功あり、後醍醐帝・懐良親王の位牌を臨写、後年水戸光圀の家臣に示している。明和・天明の頃までの記述がある。秩父氏系図はすなわち伊地知氏系図で季通の一族であることから廿二代季豊の弟民部少輔(重眞)を祖とする旨の季通の書き込みがみられる。庶流の系譜も併せて掲げている。終りに淵辺氏(牛屎氏)・指宿氏の系譜について一言しよう。

表題の「大平家之舊記」には「改牛屎后復改淵邊」とあり、大平・牛屎・淵辺系図の同根であることを示している。また「當時天明元年高岡士高帳牛屎源左衛門相見得候」ともある。日向高岡にも牛屎氏の所在を知る。次に文治三年五月三日の源頼朝下文、同月日の同御教書、島津師久書状二点、島津元久書状、島津忠国書状各一点の計六本の文書をあげる。はじめの文書は現在島津家文書の歴代亀鑑中にあるもの、次の文書については天和二年六月十



四日の弁官親盈の淵辺弥兵衛宛の「右頼朝公之御判物者、文治三年五月三日薩摩國住人牛屎院司大秦元光代之御下文也、加藤金右衛門妻者牛屎院家之嫡女依無男子、系圖并文書等所持之、今加藤辰之助家ニ有之、此文書一通子授与之、為子祖母也、貴家依為牛屎之一姓、任御望享致進覽之候」の付記があり、以下の文書については天和三年十二月日の元鋪の「右之正文者加藤辰之助家ニ有之、故書写之」の付記がある。この元鋪とは次の「富士野御狩拔書」を書写した平元鎮と同人であり、次の「平姓淵辺家系図」によれば「久元—重元—実元—元繼—元秋—元眞—元辰—元鋪（元鎮）」の元鋪に当らう。また「久元—元親—元幸—女子」が「久元—重元—実元—盛元」の妻となり、その孫元繼（知）が牛屎隱岐守を称する。その女子について「凡依兄弟之不和、其身雖爲女性、系圖文書之類所持之而奉仕国分御前様、御他界之后嫁加藤家、依之文書等有加藤家、其内頼朝公之御教書者依御公用被指上之」とあり、系圖文書を相伝、はじめ島津家久夫人に仕え、その死後加藤金右衛門に嫁したという。前述島津家への文書進上もそのころのことと思われる。その子が辰之助でその相伝文書を元鋪が書写したというのであろう。弁官親盈が写を提供した当の弥兵衛も他ならぬ元鋪その人であろう。牛屎氏は久元の子歛元代に牛屎院より眞幸院に移り、その弟重元の子実元代に母方の名字淵辺をとり、別名淵辺氏を称したという。その子孫が二流に分れ、一が前記加藤氏につながる、一が淵辺を称して元鋪・元詮とつづいたのであろう。これについては後述の「桑幡文書」のところでまたふれることにする。

「平姓指宿氏系図」の収録文書一八点の掲載順は現存する宮崎県高岡町指宿テイ氏所蔵の「指宿文書」中の系圖文書巻物中のそれと同じであり（但し一五号文書まで）、本文書は右巻物と同種のものから書写したことがわかる。このうち一〇・一七号文書について「旧記雑録」の注記に「見于指宿清左衛門忠政系図」とあれば、同系図よりの引用であることは明らかである。またその六号文書は文和三年十月十三日とあるが、これは元弘三年十月十三日の

誤読であろう。そして「旧記雜録」が文和三年のところにも採録しているのは「旧記雜録」の編者（伊地知季通）が指宿文書の採録の際、まずこの「諸家系図文書」によったことを示している。そして併せて元弘三年のところにも収録されているのは、同文書について「高岡士指宿十郎左衛門蔵本」また「道鑑公御譜中、正文在高岡衆指宿左近兵衛忠真」と注記のあるところから季通が重ねて島津氏家譜、すなわち「島津氏世録正統系図」・「島津氏世録支流系図」所収のものから増補したことを示すものであろう。因みに「旧記雜録」には、他にも同様にして五点収録している。なお収録されなかったものも八点、同家に現存しているのである。（『宮崎県史』中世史料編一参照）

「諸家系図文書」二には平姓平田氏の系譜がある。寛文九年藩主綱貫は河野通古らに命じ一門はもろんのこと他家の名家二四家を選定、古系図及び文書を調進させている。平田家もその中に入っており、寛文十年夏、藩主上覧用の系図を作成、進上したものであろう。頭初に「平姓平田氏嫡家断絶系圖亦紛失故不詳」とあるように平田家は宗家断絶のこともあって相伝系図を欠き、聞書や犬追物手組等によりその作成に腐心したようで、その苦心の跡がうかがえる。平宗盛の孫信宗を祖としてその後数代を欠くとして親宗から歴世をあげている。増宗・宗親にいたる嫡流の他に、宗秀・宗清等につながる庶流、一族の系図も列挙している。また併せて帖佐太郎系図、肥後房良西（平田清右衛門殿系図）が採録されている。元禄十三年の平田純音の撰文によれば、先祖は牛屎院太良院を領有、平良を領したのがはじまりかとされるが、火災で系図を失い明らかでない。純貞以降は明らかで純貞を始祖とする」と述べている。純貞―純昌―純正―純直―純貞とつづける。純正については藩主家久から光久への家宝移譲の役をはたしたことや、明暦元年火災があり、家財等は焼損したが、借出収集した文書のみは裏の蔵にいられて守ったという興味深い記事や、明暦三年、島津家譜編纂の報償をうけた記事などが付載してある。「酒匂氏系図」については

宝永七年の家譜序文に総領家の総州家の没落等により系譜必ずしも明らかでないが、その由緒を物語るものとして忠久の御母衣を代々格護していること、坊津一乘院住持頼政法印が同氏の出であることから同院箇蔵の系図の存在を記しその写を掲げている。次に「大蔵姓高橋氏系図」・「佐多家系図」・「祢寝家系図」・「平姓後改田代氏正統系図」等が掲載されている。この中で佐多氏について頼親―親助―親清―親音―親秀とつづく系図は祢寝家小松氏嫡流ではないとする記録奉行河野通古の見解をしめす押札が記されていて興味深い。また祢寝家系図のところでは「御記録所御糺之書」として平家子孫と称する祢寝・平田・田代・野辺氏等の出自について疑義を示しているのも興味深い。次で詳細な「建部姓弟子丸氏正統系譜」を掲載したあと、重ねて「執印家之古系図写」と「惟宗姓市来氏系図」が掲載されている。右系図の記載は前出のものと同併せて島津家との関係を調べる手懸かりともなる。「旧記雑録」にはここからさらに転写されたものと思われる。終りに「莫祢氏文書」―一点が掲出されているが、何れも「旧記雑録」に収載されている文書である。最初の文書の右上に異筆で「以下写ス」とあるのはそのことを表しているであろう。

「諸家系図文書」三にははじめに「鹿屋氏文書系圖」が採録されている。注目すべきは内表紙に季通筆で「鹿屋氏文書 此冊中ノ文書ハ旧記雑録補入ス」と記されていることである。この文書中には二〇点のうち七点が「伴姓鹿屋氏系譜文書」(冊子)から、七点が「鹿屋氏文書」(一紙卷子)からほぼその配列順に収録されている。但し右原蔵者の「鹿屋兼伸氏旧蔵文書」中にあって「諸家系図文書」中に収載されていない文書数は八点、その中から「旧記雑録」に収録されているものもある(五点)から、季通はなおこれ以外の「鹿屋氏文書」からも「旧記雑録」用に採録したのであろう。「諸家系図文書」六(次回収録)にも「鹿屋氏系図文書」が収録されており、文書二八点中、三と重複するもの一〇点を数える。さて本文書系図の構成ははじめに文書をのせ、次に肝付氏系図

と鹿屋氏系図の二編をのせる。終りに元禄五年九月二十三日の時の記録奉行伊地知重英の鹿屋権左衛門宛の「貴方御先祖鹿屋周防介殿儀元久公御家老職被為勤仕候儀證書多々有之候、貴方御家御系図ニも被載置候得共為後證任御尋如斯候」の副書をのせているところから、本系図文書は当初記録所に収集した分の写をその提供者に返付した控かと思われる。

次の「諸家古文書雑集」は、(寛永十五年)正月九日付の島原の乱関係の川上久国書状をはじめ、庄内の乱に関する伊集院忠貞、島津義弘書状、朝鮮半島引揚時の島津義久の義弘宛書状、慶長十七年の垂水島津氏の起請文、寛永十三年の光久用の国分築城許可書、寛永十八年の在江戸家老川上久国から国許家老宛、幕府へ提出の系図文書修補の報告等、さらに時代を遡って北山文書、文治五年十月三日の源頼朝御教書や、文治三年九月九日の同下文等、島津家文書他諸家文書中から三十数点が季安によって摘出掲載されたものと思われる。その中で志布志山田文書の参津時条々は応永四年、元久名代久豊の探題出仕の際の心得書であるが、「応永記」・「酒匂安国寺申状」等を参考にせよとの季安の注記があり興味深い。但し最後の本田貞親書状は偽文書であろう。次に「肝付氏系図」は内表紙に「伴家正統肝屬氏近代之系圖」とあり、また「正嫡肝付八郎左衛門治兼之家」とあり、兼統より治兼の次の兼群までの系図を掲げる。はじめに「近代之後右系圖ニ不相見得申候間、良兼より當代迄可書出旨被仰渡候ニ付」とあり、「宝永四年丁亥五月廿五日如斯相改御記録所へ差出候事」とある。季安は天保年間、肝付家の相伝の文書を豊富にとりこんで「新編伴姓肝屬氏系譜」を編纂しているが、この系図ももちろんその基礎資料となったものである。(『鹿兒島県史料 旧記雜錄拾遺 家わけ二』解題) 次の「前田氏系図」は伴姓前田氏嫡家の加世土前田茂右衛門家他四家分の系図を集成したものである。

「諸家系図文書」四の内表紙は季通の筆、はじめに季安筆の「宮里氏系図」をのせる。孝元天皇にはじまり、文

化元年にまで至る。紀姓、宮里・高江氏分、宮里郷郡司、新田宮執印、五大政所同宮座主職を世襲、のち薩州島津家に仕えたが、正平の代、その没落にあい衰退とある。次に「比志島源左衛門家略系圖」、同家は義信以来、義住、国守、国貞、国貞、国隆とつづく。国隆誅滅以降国守、国親、国詮、国廣と相統の統で季安の朱注がある。「藤原姓志岐氏略系圖」、加藤清正に従って朝鮮に従軍した肥後志岐領主親重（室島津義虎女）の子親昌は寛永九年加藤家改易後入薩、子孫島津家々臣となる。（『熊本県史料中世編四』所収、志岐文書、藩記録所へ提出の「志岐家系圖文書由緒書等之覚書」に詳しい。）「平姓福崎氏系圖」、福崎は上野国の旧領地名、重斯の二子能広が伊地知季隨に従い入部、谷山に宝動寺、鹿兒島に林香庵を建立、島津貞久の被官となっている。「種子島氏十二代武蔵守忠時四男出雲守時述系圖」以下庶流三家系圖、「平姓加世田氏系圖」、これには季安の注記、補記がある。そして「桂彦太夫家系圖」をのせ、ついで内表紙に「右家略系圖」として、平姓祢寝氏、庶流伴姓肝付氏、源姓島山氏、藤原姓島津支族本城氏、庶流藤原姓鎌田氏の系圖を掲載している。次の内表紙は「古文書 市来崎氏・牛屎氏」とあり、「写取済也」と記されている。

はじめの市来崎文書二四点掲載の末尾に「右山門家古文書、天保二年卯六月廿一日写置也」の季安の後筆がある。はじめ市来崎氏は山門郡司の庶家であったが、のち山門氏を称することになる。現在原文書は鹿兒島県歴史資料センター黎明館所蔵となっており、『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ六』に「山門文書」としてその後の成巻順に二四点が収録されている（同解題参照）。原文書の一点、貞和六年九月二十五日の足利直冬書下が「諸家系圖文書」に収録されておらず、「旧記雑録」にも掲載されていない。これは季安が天保二年書写した時とりおとしたのであろう。逆に「諸家系圖文書」に収録されていて、「旧記雑録」にも収録されている延文元年七月十日の足利尊氏御教書が「山門文書」中に現存しない。同文書は「諸家系圖文書」の市来崎文書の最後に記載されているもの

である。かくして「旧記雑録」の載録は「諸家系図文書」の記載に基づいていることが明らかとなった。

牛屎文書については端書に「本書加治木桑波田氏有之、卯四月写」（季安筆と思われる）とある。卯は天保二年であろう。以下『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ六』桑幡文書の三〇号の掲載順通りで古写原本が早くから成巻されていたものをそのまま書写したのであろう。「旧記雑録」には「正本在加治木桑波田氏」とある。この文書もまた原本↓「諸家系図文書」↓「旧記雑録」と転写されたことをしめしている。これらは現在県文化財に指定されている安元元年の右近衛府牒、並びに同三年の右近衛府政所下文の二通と一緒に相伝されていたものと考えられる。このあとに季安の注記、及び「大秦姓桑幡氏系圖季安愚考也」が続く。そしてあらためて牛屎氏系図が収載されているが、ここで先掲の淵辺氏系図との重複関係が示される。中で久元―欽元―元親―元幸―女子（淵辺権之允盛元室）、久元―重元―実元―盛元―元次―元知（継）（牛屎隠岐守）―女子（加藤金右衛門妻）とあり、「右女子嫁加藤家之時持参系圖文書、依是文書等在加藤家、其内頼朝公之御教書依御公用被指上是」とあるのに注意すべきであろう。桑幡氏は実元―元継―元秋―元眞―元辰―元能―元祇―元彬―元長―元通の統であろうが、別に牛屎氏の系図・文書を相伝した統のあったことが、牛屎文書が二分されて伝えられていることを示しているのではないかと思われる。後考を俟ちたい。またこれらとは別に「諸家系図文書」に収録されず、「旧記雑録」にも採録されていないが、本文書に共通する文書として鹿児島大学附属図書館現蔵「大秦文書」のあることを付記しておく。（『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ六』に収載済）

#### 四

伊地知季安は文政年間から天保年間にかけて諸家の系図・文書を積極的に書写している。（借写、出張しての書写）また諸家の中で系譜原稿の作成について季安の力を借りようとしている者も少なからずいた。季安はその写し

「諸家系図」巻一～巻五、「諸家系図文書」巻一～巻四、文書・記録・記事等点数

巻数	文書数 (収載) <未収>	系図・記録・ 記事等	目録上史料 総数	掲載史料数
諸家系図 一	(0) <sup>1</sup> <1>	19	20	20
諸家系図 二	(3) <sup>12</sup> <9>	14	26	26
諸家系図 三	(2) <sup>5</sup> <3>	48	53	53
諸家系図 四	(28) <sup>39</sup> <11>	21	60	60
諸家系図 五	(119) <sup>137</sup> <18>	34	171	150
諸家系図文書 一	(29) <sup>36</sup> <7>	13	49	44
諸家系図文書 二	(17) <sup>23</sup> <6>	24	47	47
諸家系図文書 三	(48) <sup>55</sup> <7>	11	66	66
諸家系図文書 四	(37) <sup>39</sup> <2>	20	59	50

- 注 1 収載とは、「旧記雑録」収載文書を示し、未収とは、未収載文書を示す。  
 2 掲載史料数とは、『伊地知季安著作史料集 三』内で掲載した重複分を除く史料数を示す。

たものをさらに書写し、それらが季通の手によって「旧記雑録」に収録されていったのである。この期間、すなわち季安の四十代から五十代にかけての間はまた彼の著作として代表的な「雲遊雜記伝」や「管窺愚考」等が次々と産み出された時期でもあり、もっとも活潑に史料の調査収集、書写、考証が行われた時期であったといえよう。

なお、「諸家系図」・「諸家系図文書」と同種の性格をもつ史料集に「諸旧記」・「諸旧記文書」があり、前者が系図と文書を組み合わせるのに対して後者は「文明記」・「行脚僧雜録」・「樺山玄佐自記」といった記録類と「樺山氏文書」・「酒匂家文書」といった文書類と組

み合わせて編集している。何れも季安・季通の書写収集になるもので最終的なとりまとめは季通の手になる。また「御支族系図文書」も「諸家系図文書」が島津氏以外の外様の家を対象としているのに対して、北郷氏や喜入氏といった島津氏庶流を対象として家の系図や文書を組み合わせ、まとめられており同種の性格のものといつてよい。そしてこれらが「旧記雑録」を集成する際の基礎資料としての役割を果たしていたといえる。

繰り返すことになるが、厳密に言えば「諸家系図」・「諸家系図文書」は「旧記雑録」と同様、父伊地知季安がその基本をつくり、子の季通が追補、修成した史料集といふべきであろう。そしてそれらの一々は「旧記雑録」集成の過程で基礎史料として活用されたり、参考史料として利用されたり、副次史料として産み出されたものといえるであろう。終りに参考資料として本書掲載分の史料点数と、文書について「旧記雑録」に収録済のもの、未収録のもの、の点数を示しておこう。(表参照)

(付記)

なお幕末期藩の甲冑所々長、甕島地頭等として活躍した木脇啓四郎(祐業)の『万留』(原口虎雄氏写本)の中に交際のあった季安・季通父子の名が記されている。内容は明治十三年頃、祐業が吉野の季通宅を県庁への再動をすすめに訪問した際の見聞で一には「伊知地小十郎先生ハ古文書を凡拙者腰丈ニ及ほと書籍也、三ヶ国の神社佛閣の蔵書ハすへて集め置れしを、今の喜次郎殿編年躰にせられたる数百冊有之」とあり、二には「伊知地喜次郎殿ハ小十郎先生の嫡子ニ而是もおとらむ父君の生涯集め置れたる古文書を編年躰ニなして其冊数拙者立て躰の上迄有」とある。共に同じ情景を表現した文であるが、当時の識者間で碩学季安の収集した膨大な文書・記録の写類を編年順等に整理、蓄積しつつあった季通の存在が注目されていたことがわかる。それらが後年になって磯島津家に進上



された本書の「諸家系図」・「諸家系図文書」等伊知地家進上本であり、編纂中の「旧記雑録前編・後編」もそれらの中に含まれていたといつてよいであらう。

(五味 克夫)

## 例 言

一 本書は、「諸家系図」(巻一〜巻五)「諸家系図文書」(巻一〜巻四)を底本として刊行するものである。本書の底本とした史料名と所蔵を掲載順に示すと次の通りである。

史料名	所蔵別
諸家系図 巻一〜巻五	東京大学史料編纂所
諸家系図文書 巻一〜巻四	東京大学史料編纂所

一 文書・記録・記事は、原則として底本に従って掲載し、通し番号を文首に付した。重出文書にも番号を付し、重出の旨を注記して本文は省略した。

一 収載した文書をほかの文書や写本等によって補充または校訂する場合は、次のようにした。

ア 補充箇所は▽で示した。

イ 補充や校訂に使用した典拠史料は、次の略記号で示した。

旧記雑録 ㊶

富山文書(宮崎県総合博物館所蔵) ㊷

町田氏正統系譜(東京大学史料編纂所所蔵) ㊸

指宿文書(指宿テイ氏所蔵) ㊹

一 刊行にあたって、文書の体裁をおおよそ次のように統一した。

ア 原注や文書中の異筆・補筆は、原則として「」（墨書）、「」（朱書）で囲み、罫線は点線で処理した。

イ 文書の年月日・差出所・宛所の位置などは、原則として底本の体裁に従った。

ウ 文書・記録・記事中には、適宜読点「、」および並列点「・」を付した。

エ 原則として原注に移動指示がある場合は、該当箇所に移動した。

オ 頭注や行間の書き込みは、底本の体裁に合わせたが、長い場合は関連箇所の文末にまとめて注記した。「諸

家系図文書」所収、中山王世譜では、番号を付して関連箇所に移した。

一 合点は右肩に「ㄣ」（墨書）、「ㄣ」（朱書）で示した。

一 原本の磨滅虫損は、字数を推して□または▭を以て示し、判読不能な文字については■で示した。

一 見せ消は、その文字の左側に「々」を付した。

一 編者の付した注は、原注と区別するために（ ）で囲んだ。

一 欠字・平出・台頭などは、原則として底本の体裁に従った。

一 原文中の地名・人名・官名・年号などに施されている朱引は、全て省略した。

一 変体仮名は現行の平仮名に改めたが、江、茂、者、与など一部はそのまま用いた。

一 系図中の「○」「△」「⊕」などがすべて朱書の時は文末に付注し、文中に「」を付けないこととした。

一 本文中に、後に記入する目的や虫損等の理由で空けられたと考えられる箇所について、□、□、□、…、—、

などがあるものは、原則として底本の体裁に従った。

一 『鹿児島県史料 旧記雑録』との重複及び『同旧記雑録拾遺 家わけ』との重複文書については文末に注を付した。

一 漢字は一部の異・略・俗字を除き、原則として底本の用字に従った。

一 当時一般に使用された文字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

吳(異) 早(畢) 亶(事) 劬(州) 帑(紙) 季(年) 皆(時)  
躰(体) 刁(寅) 喆(哲) 幹(幹) 陳(陣) エ(衛) 魔(鹿児)

旧記雜録拾遺伊地知季安著作史料集三 目次

解題	.....	一
例言	.....	一七
目次	.....	二一

諸家系図

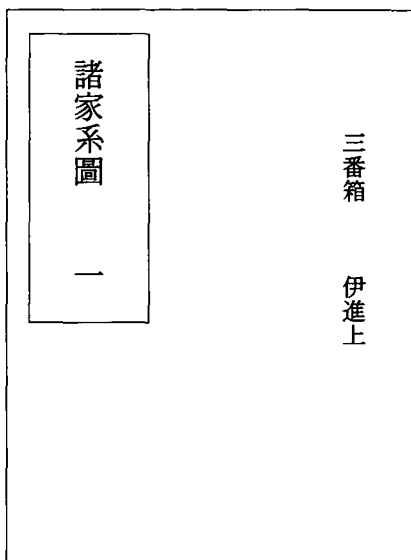
卷一	.....	一
卷二	.....	七一
卷三	.....	一三七
卷四	.....	二一七
卷五	.....	三〇〇

諸家系図文書

卷一	.....	三八三
卷二	.....	四六二
卷三	.....	五五一
卷四	.....	六〇四
文書目録	.....	六七九

諸家系図

(表紙)



三番箱

伊進上

「七」庶流  
二階堂氏

(中表紙)

「  
但寛文九年新撰  
本田家總譜  
系譜之餘燼  
」

- 「一」正統  
諸家系圖一  
本田氏并二庶流
- 「二」庶流  
鎌田氏
- 「三」庶流  
鎌田氏
- 「四」  
宮之原氏  
略系圖
- 「五」庶流  
市来氏
- 「六」正統  
二階堂氏

1 ○本田氏系圖一本ニ曰、親恒女子有一人、奉嫁 忠久公也、親恒無實子之可連續家者、爰重忠二男十二歲之時、母堂早世、親恒養育之、而漸至九歲、于時加首服称重季、十三歲而為親恒之猶子、是以改重季為貞親、其後自 賴朝公賜大隅國守護、而可致忠節於忠久公、就中称勲功之賞、賜惣小川村於貞親云々、

○秩父氏系圖ニ曰、重忠男女七人、第一六郎重保、第二五郎重清、第三十郎重時、第四武藏守重俊、第五女子他腹、第六女子他腹、 忠久公御前也、故本田二郎親常之二男又次郎、持太刀以供奉矣、第七女子本腹ト云

く、

右兩家之譜文、未孰是知再可考、

○親恒

貞親

久兼 兼阿

本田二郎

法名靜觀

親保

○貞親、治承三年生ニシテ建長元年迄七十一也、七十一

之時子ニシテ兼阿延文五年迄百十二之筈也、嘉曆四年・

正和四年

右年号ニ見得タリ、

○兼阿、延文五年入来本田仁右衛門文書ニ見ヘタリ、

○靜觀、嘉曆四年右同人文書ニ見ヘタリ、

○靜觀、治承三年生ニシテ嘉曆四年迄ハ百五十一之筈也、

考ニ自親恒靜觀迄之間、一二世闕タル歟、

○親恒ハ文治二年 忠久公初テ御下向之年ヨリ二十年目

ニ死去也、

○右本田家親恒ヨリ二代靜觀、正和四年權執印氏文書ニ

見エタリ、正和四年ハ 忠宗公御代之内、 忠久公御

誕生之年ヨリ百十七年ニナル、 忠久公御代ニ本田氏

御家老為相勤ト有之ハ靜觀カ、然者 忠久公之御年ヨ

リ為相増筈ニ候、縦ヒ御同年ニテモ百十七歳也、

○丹後局懷妊之始メ、御臺所之威ヲ恐レ、本田次郎親常・

今一人名シスヲ從ヘ、近衛家ヲ頼テ京都ヘ上セラル、右

丹後局懷妊之時、御臺所平政子嫉妬甚シキヲ恐レ、治

承三年 頼朝公之依命、丹後局竊ニ関東ヲ出テ西國江

越候儀有之候、其時本田次郎親常・今一人ヲ從ヘ、近

衛家ヲ頼テ京都ヘ上候儀ハ不相傳候、 忠久公初テ御

下向之時、本田二郎貞親先立テ薩州ヘ差下候ト申傳ツタ候、

1の1 ○綱貴公御代御記録奉行大田小平次久知、本田氏元祖之

一卷ヲ平山氏ニ被申越候状、

本田氏御元祖之儀、細々淺羽三右衛門殿江御尋申候、

其元御所持之御傳記者、皆異説ヲ見得申候、本田之

始祖者宣化天皇ニ而候、武藏之七黨之内、丹之黨ニ

而候、旗頭之由本田・榛澤など申在所、秩父之内ニ

有之候、本田氏紋者田之字を以⊕十字字之ことく有

之由、親経以来者相知不申、親経以前ハ細蜜ニ有之

候、頃日者淺羽殿も是式不仕候得者、系圖書記不罷



2

成、誠ニ本利之世上難堪一笑候、乍去元祖由緒承究  
疑散満足仕候、此段仲兵衛殿御慈母江も御心得可被  
下候、

十一月十三日

大田小平次

久知

平山勘兵衛様

人々御中

○本田氏正統系圖

桓武天皇七代上總介忠恒之二男安房押領使恒親之孫信濃  
守恒文之男也、

○親幹

號本田左衛門尉、信濃守

親正

太郎 早世 ○於宇治川戰死、

○恒親

二郎 左近將監

奉仕 頼朝公、○重忠元來爲一門如後見、故重忠  
威光太也、

○親恒

鬼石丸 二郎 左近將監 左衛門督 信濃守

○元久二年於武州二俣川戰死、

自 頼朝公賜隅州守護職仕忠久公、實重忠之二男  
也、

○貞親

二郎 左衛門督 法名靜觀

野田感應寺ニ當寺開基靜觀大禪伯  
ト位牌有之、尤開山雲山和尚也、  
是又曆應年中之人、御當國禪宗ノ  
初祖也、谷山皇德寺開基谷山家之  
祖佛心大禪伯ト位牌有リ、開山無  
外和尚是又禪宗也、同年之比之人  
也、

女子

嫁畠山重忠、所生之女子奉嫁 忠久公、

久兼

弥太郎 左近将監 法名兼阿 母市後崎氏女 依  
爲他腹不嗣家、

【○入来本田仁右衛門文書ニアリ、道鑑公御書薩摩国山門院内  
本田次郎左衛門入道兼阿、給恩菓成川地頭代官職事、延文五年  
八月廿二日】

○親保

鬼袈裟 二郎 左衛門尉 信濃守 母入来院氏

女

○重親

信濃守 ○氏久公執事 ○應安六年三月三日戰死  
于庄内養原矣、

女子

○氏親

二郎 信濃守

○親治

二郎 因幡守

○爲 氏久公抽忠節、  
○永和二年太守攻取姫木、  
清水兩城、使親治守焉、  
女子二人

女子二人

○元親

○元久公至 久豊公任執事職、屢抽忠功、

後忠親 二郎五郎 左衛門尉 信濃守 法名安  
了

○重恒

又二郎 信濃守 ○子孫記左、

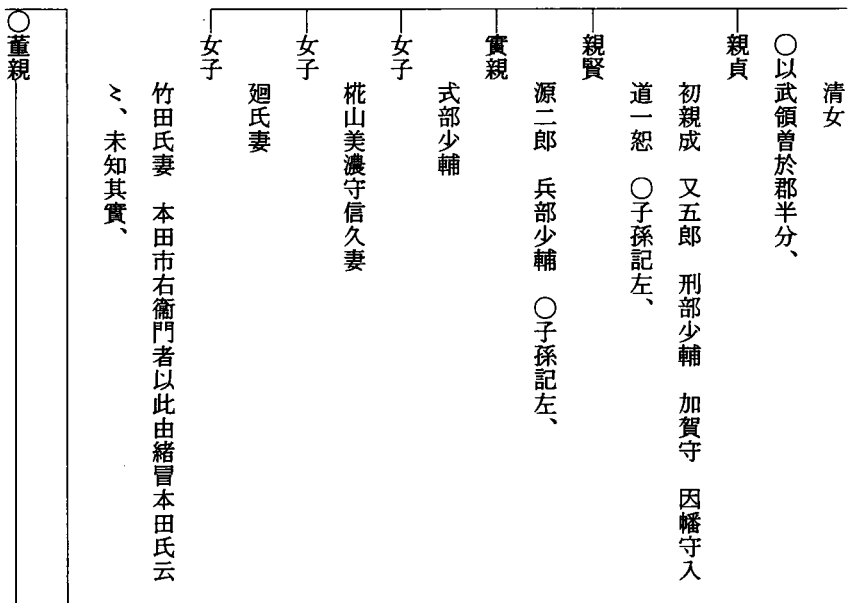
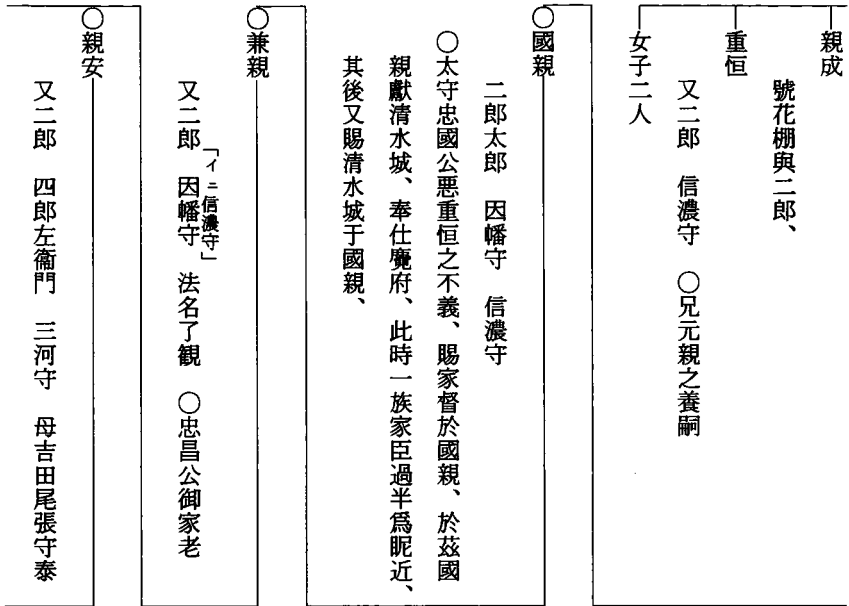
○元親無子、故養弟重恒爲後嗣、重恒驕富<sup>ナイクシロ</sup>上、太  
守怒之賜家督于國親、其後爲國親被殺、

親光

二郎五郎 称小城、

親家

三郎 早世



又二郎 紀伊守

○貴久公賞董親加賜日當山・牛根以下數ヶ所、其後背 嚴命被屠城略地終、

○天文十七年十月九日没落清水城、退去庄内、

女子二人

○親兼

初重親 又二郎 左京大夫 從四位下 大炊大夫  
夫 法名玄齋從久

○重親于時自 天子賜左京大夫朝臣、然トモ辞テ曰

大炊大夫、

○從父董親没落清水城、其後改先非奉仕于 義久公、

親光

源左衛門尉

高岡之土

親貞

權右衛門

○養嗣實同氏

主税介

權介

親良

親興

淡路守親存之三男

親榮

又八 藏人大夫

讚岐守

親友

内膳

親吉

民部左衛門

○加世田之土

與市左衛門

親長

内膳

女子

同氏大学妻

種長

次右衛門 ○田尻

小左衛門種次養子

親宣

太兵衛

次兵衛

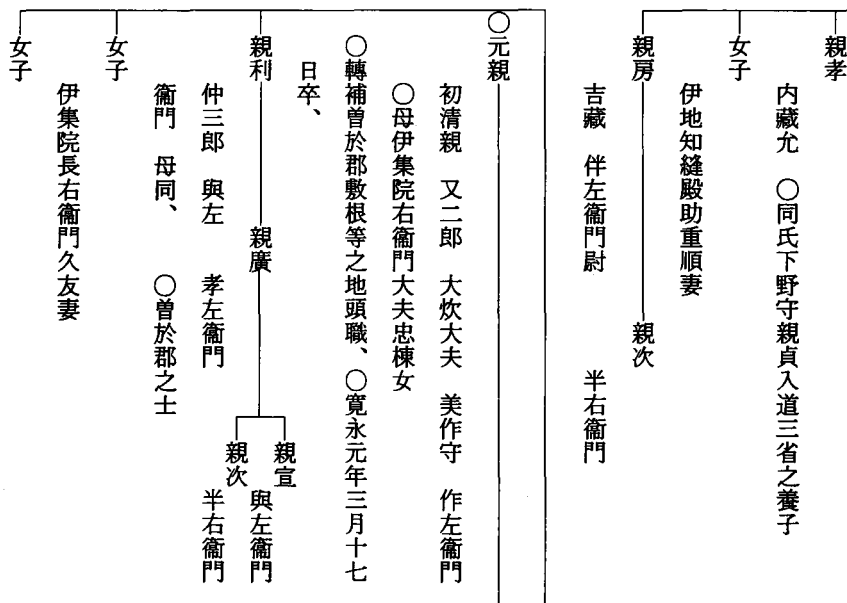
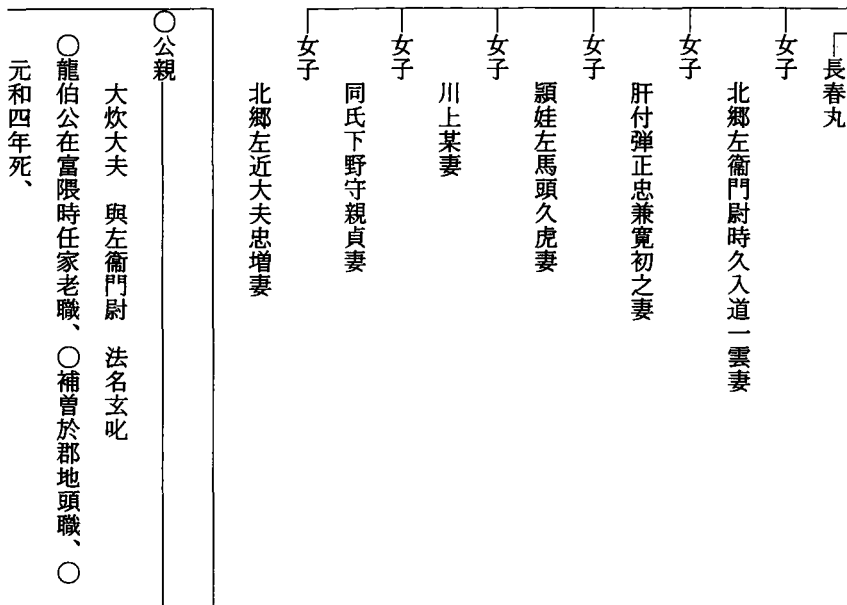
親次

女子

門司伊兵衛妻

親興

次左衛門



後醍醐院喜兵衛宗恒妻

○官親

初昌親 鬼太郎 又二郎 作左衛門 ○母岩切

雅樂助信房女

○敷根地頭職

女子

伊東九左衛門祐秀妻

女子

親道妻 ○母別府主殿助忠清女

女子

福崎清左衛門重正妻 母同、

○親通

郷右衛門 大炊大夫 市右衛門 四郎右衛門

○智養子 實肝屬彈正兼武之二男 ○轉補敷根・百

次・田布施地頭職、

○度親

長千代 又二郎

安親

次郎吉

益親

長兵衛

女子

3

○本田氏

本田家四代貞親他腹之長男

△久兼

弥太郎 左近將監 二郎左衛門尉 法名兼阿

○母市後崎氏女

○久兼屢抽忠職 太守貞久公賜感狀、加以預 將軍

尊氏卿及直義之御感、

△忠恒

又二郎 五郎左衛門尉 勘解由左衛門尉

△兼久

初道親 孫太郎 二郎左衛門尉 左近藏人

爲親

小太郎

親幸

恒幸

孫二郎

△親宗

又太郎 左近將監 周防守 法名全光

親信

與儀

號天辰、

與房

號島田、

△宗親

兼恒

三郎 治部少輔 法名全勝 ○立久公家老

周防守 法名道意 ○忠國公之時於平佐抽戰

功、賜宝刀、

清室

楞嚴寺六世

弥次郎

玄幡

嗣天辰家、

△親尚

又二郎 二郎左衛門尉 法名昌永

○忠昌公至 勝久公四代補家老職、勝久公没落已

後、爲薩摩守實久之家臣、

親辰

上野介

房親

弥次郎

高崎幡磨守養子

△親貞

三郎四郎 治部少輔 淡路守 美作守 ○親

貞迄断絶、

女子

伊地知周防守重武妻

爲親

「祁答院伊勢守重武ノ傳ニ、享祿二年己丑正月廿三日、  
祁答院某押領帖佐攻之時、爲 太守於山田城  
北原方攻落加治木之城、而肝付越前方へ渡シ与フ、其  
遂戦死、  
日不移時尅、伊勢守重武方攻落帖佐之新城、其夜次  
日ニ同ク本城山田之城重武請取云々トミヘタリ」

外記

額娃氏家臣、子孫爲昵近、

外記

爲豊州家之家臣、

女子

高崎氏妻

大和

法名道白 ○額娃氏之家臣、子孫爲昵近、

外記

佐渡守

親綱

出羽守 ○親綱去高崎氏爲本田氏、

善興

楞嚴守住持

豊親

右馬助

親資

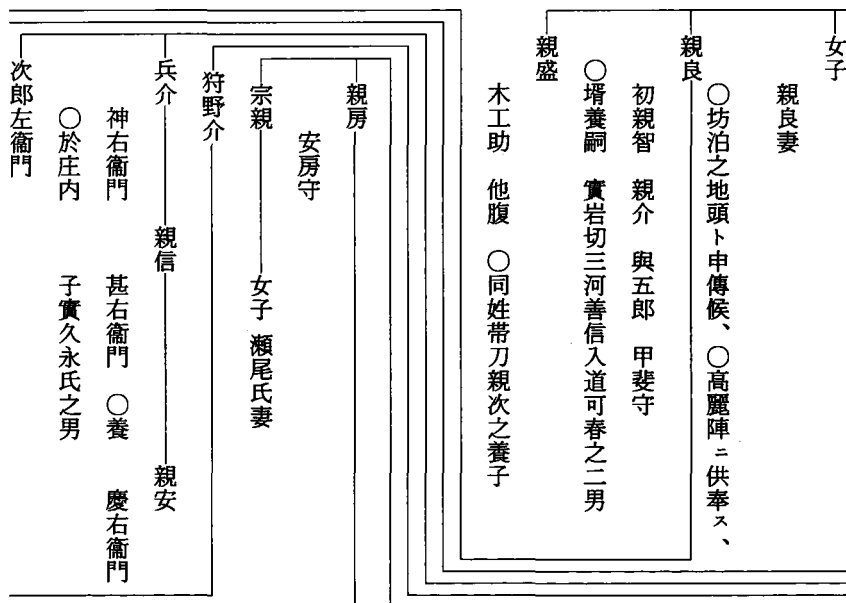
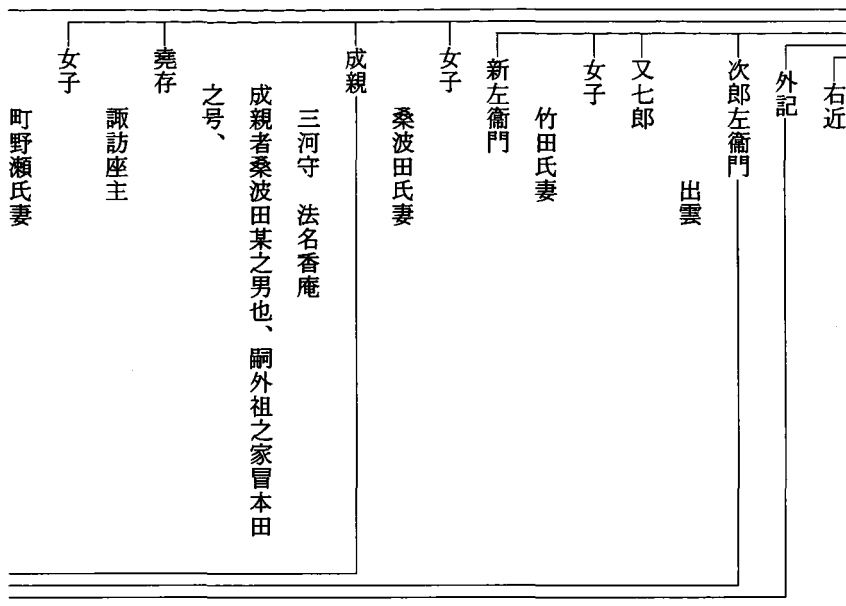
○北原某押領日當山城、 太守貴久公攻取之

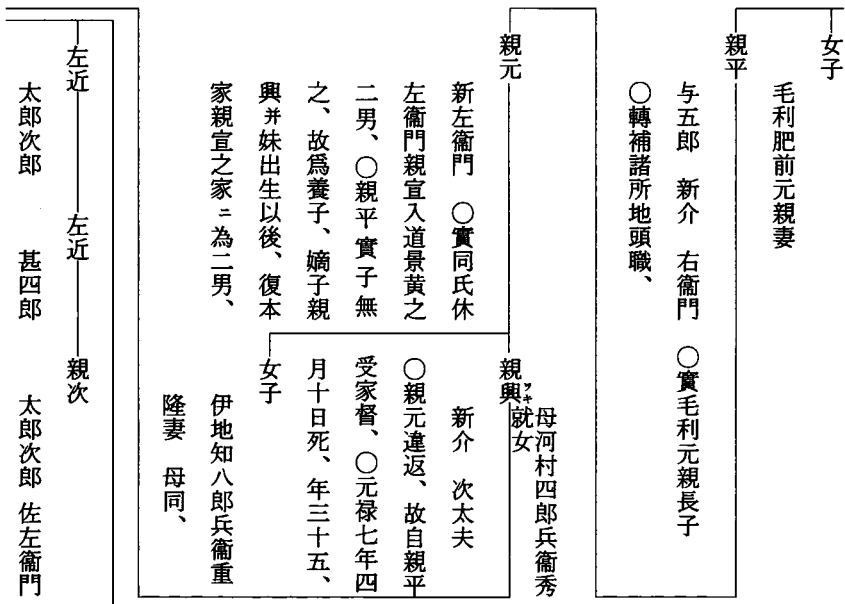
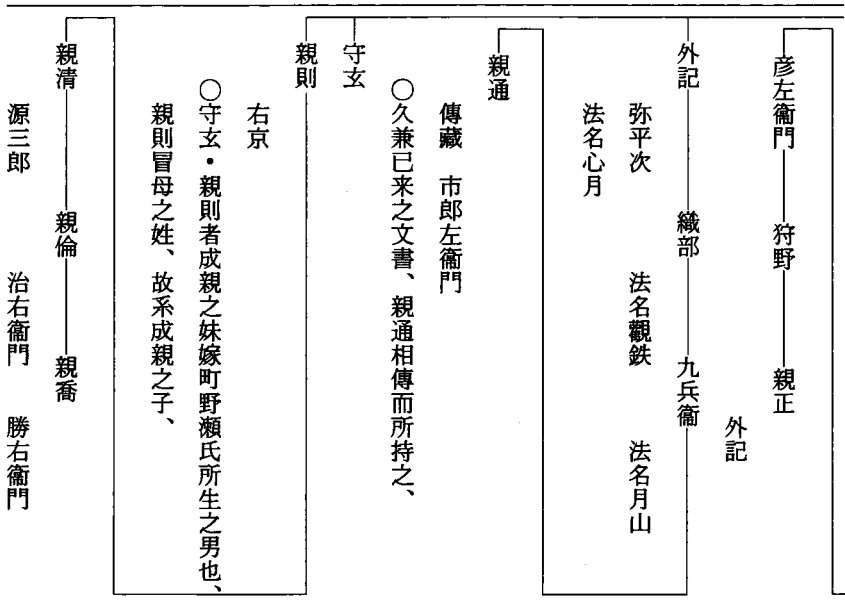
時、親資抽戦功、預恩賞、

弥次郎

○於蒲生西村戦死、







「五郎兵衛——女子

甚四郎

(ハリ紙)

「右衛門親平之譜

○正保四年亥十一月十三日、於江戸王子村犬追物射手役相勤之、同十六日、於御本丸何レモ同前、家光公エ御目見、御時服頂戴、同十二月二日、大納言家綱公へ御目見、御時服頂戴、○羽月・財部・綾地頭 ○吟味役之内琉球在番、京都藏奉行、○綱貴公江供奉ス」

女子

母東郷肥前重利女

女子

母同、

親(マコ)

新八 新助 母同、

「親(マコ)

新兵衛 母同、

4 十代家督  
△重恒

又二郎 信濃守 法名義翁

○受兄元親之讓為家督、○初奉事 大守忠國公、補家老職振權威、終依姪國親之讒訴、背嚴命奪家督賜國親、加之文安三年為佛詣上洛、國親幸之攻取清水城、其後為國親被殺於曾於郡、

△親次

次郎 民部少輔

△實親

次郎 丹波守

親行

民部左衛門

民部左衛門

女子

「女子

平田某妻

△親純

民部少輔 丹波守

○天文廿三年戰死於岩劍、

親次

弥次郎 治部少輔 法名可安

○親歲領隅州菱刈院

馬越之内下手村云々、

○穗北地頭、雖爲親歲之嫡子、有挾野心故追出之、

女子二人 脇元豊前守清元妻 東郷加賀守妻

親歲 永正四年丁卯生、

親貞 永祿六年生、

初親鑑 弥二郎

彈正 山城守

法名喜辰

○轉補伊集院・湯之

尾等地頭、

宗左衛門

初清常 權介 助ノ丞

○親貞者親歲之女子合脇本

豊前守清元所生之孫也、

親歲嫡子治部少輔不肖、

故黜之養親貞爲嗣子、賜

高二百石、

○弘治三年四月十九

日戰死於蒲生、

○関ヶ原亂後 將軍家與

邦君和睦之時、新納旅庵

与親貞相謀有功勞、

○慶長十三年九月廿九日死、

年四十六、法名明巖清圓

居士

親俊

次郎左衛門

○天正六年十一月十

二日戰死於高城、

女子

○父戰死以後、母兄

島氏爲島津金吾歲

久之妾、因之歲久

爲養女、嫁比志島

紀伊守國貞、

親良

親朋

勝吉 蚤死二十三歲、

親正

勝次郎 助ノ丞

○天正十三年生、

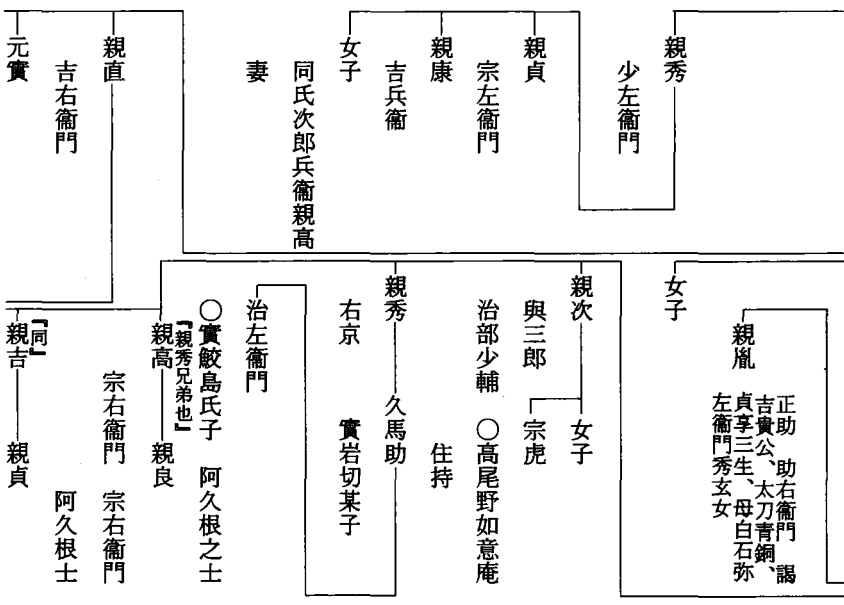
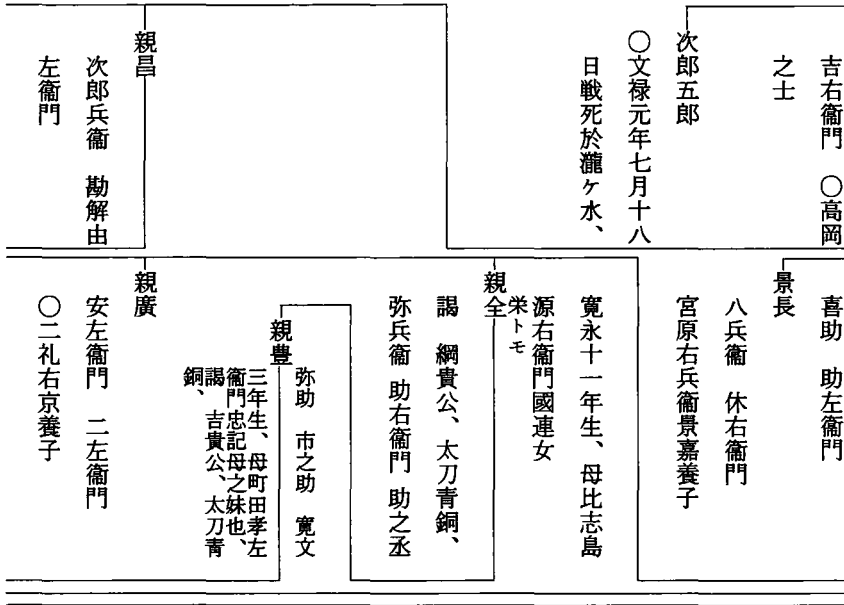
女子 肥後弓右衛門妻

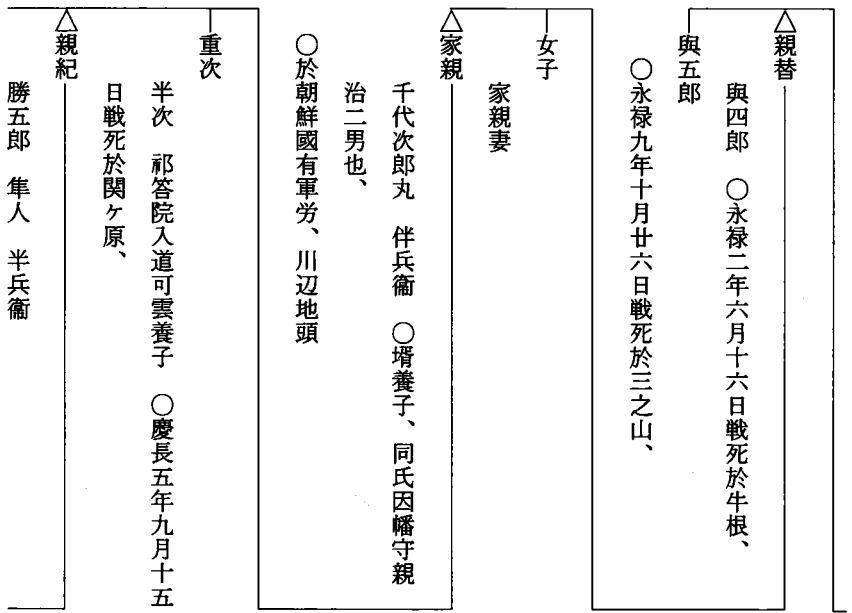
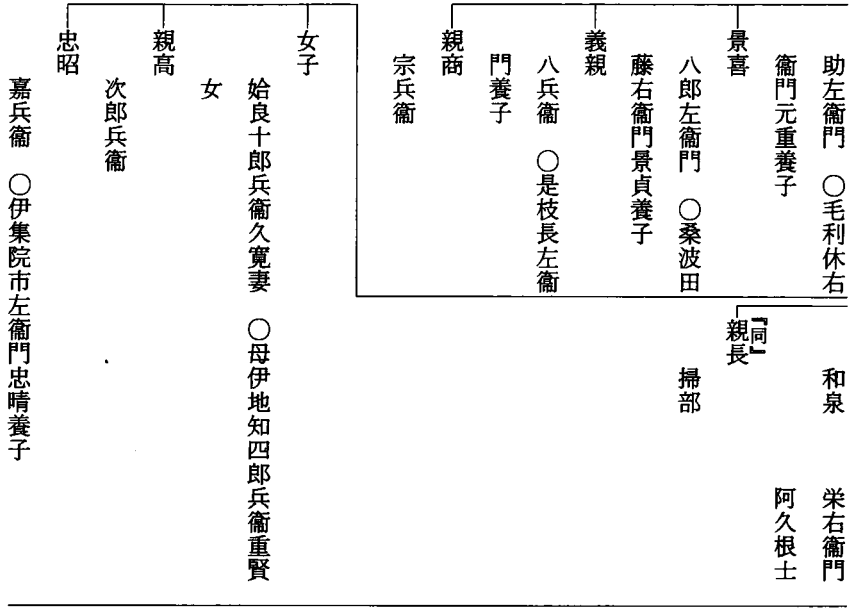
親長

勝八 助ノ丞 ○慶長十

六年生、依命移鹿府、

清良





賴安

但馬 ○敷根十郎賴清養子

種綱

駿河 太郎右衛門 ○山路駿河守養子

女子

祇答院次郎兵衛妻

△親次

勝五郎

女子三人 北条甚四郎時住妻 平山八右衛門忠守妻

仲兵衛親寧妻

義長

小吉 頼母 七郎右衛門 ○最上右近養子

△親寧

三五郎 仲兵衛

○義長相續最上家、故養親寧爲後嗣、實平山八右衛門忠守之二男也、

5 (別紙)

「 ○本田市郎左衛門系略

○清寧天皇

親峯 新中納言 号本田越前守

男子三人・女子一人

親滿 親定 出羽守

親正

越後守

親滿

肥後守

善光

信濃守

○此善光ノ謂ハ、天竺ノ月會長者ニテアリシガ、聖德太子ノ過去ノ師ニテマシマス阿弥陀ニ三世ノ起縁ヲ結タル故ニ依テ、我朝ニ本田善光ト生タル也、故ニ依テ如来ハ津国難波浦ニテ三年放光アリケルヲ、用明天皇御エイラン有テ、綱ニテ拽上ヨトノ宣旨ニテ如来ヲ拽上奉、一尺二寸ノ金銅也、放光日月ノ如シ、漢人奈良ノ京ニ奉レハ、聖德太子云、彼本尊ハ過去七師之師ニテ西方極樂阿弥陀也、過去ノ師ヲヲカミ奉事難有ト仰給、トノ大姫カ瓦ノ

起縁可有ト仰ラル、也、誰カ有ト有ケレハ、御前ニ本田善光申ケルハ、太子本田ヲメシテイツクノ国カ佛法ナキト問玉フ、北国信濃送奉、月會長者、閻浮檀金鑄奉佛、即善光寺如来、本田子孫拜奉、武運名利於末代守給フ無疑云々、

親森 善光ヨリ十七代

号感應寺、法名道観

○平氏重忠

貞親

号畠山、本田之

○薩州出水郡山門院有

本名字

之、本ハ平氏下向之

時、近衛殿ニ参リ藤

原氏ニナル云々、

道親—兼久—忠親—光親—親廣—親時—元親

入来院腹

守親

号小城殿

重親

早世ス、此重親ハ大岳様ニ御敵被申ニヨツテ他国也、物詣也、依之

守親之跡ハ了心ニ給テ家督也、

法名一恕

重親

親貞

繼家督、

○加治木板井口殿頭之

鑓、同太刀初、寄手

北原衆景親ノ子玄阿

弥ハ弟也、

於日州高城豊州衆ト戦ヒ死ス、

法名傑名

親知

刑部少輔

親治

○於大隅西原戦死ス、

正親

参河守 ○高麗留守自惟新公出水衆頭、於富ノ

限 龍伯公ヨリ老名役、



以下略

6 十二代兼親之二男

△親貞

初親成 又五郎 刑部少輔 因幡守 入道一恕

○家嫡紀伊守董親背于 太守之命惡虐、親貞數諫之  
不聽、因之屬守護終身守忠義、

△親知

又友親 又五郎 刑部少輔 ○於大隅州西原戰

死、

弥次郎

早世

女子

菱刈左兵衛尉重住妻

盛親

民部左衛門 信濃守 入道名一葉

○弘治元年隨岩劍之城之時勅軍功、

女子

称大納言、○給仕于 竜伯公、

親直

志摩守

親之 親張

傳左衛門 十左衛門

親次

藤七兵衛

幸親 周栗斎

俊宗法師

○於大口戰死、

佳親 清右衛門

女子

桑波田某妻

朝親 監物

△親治

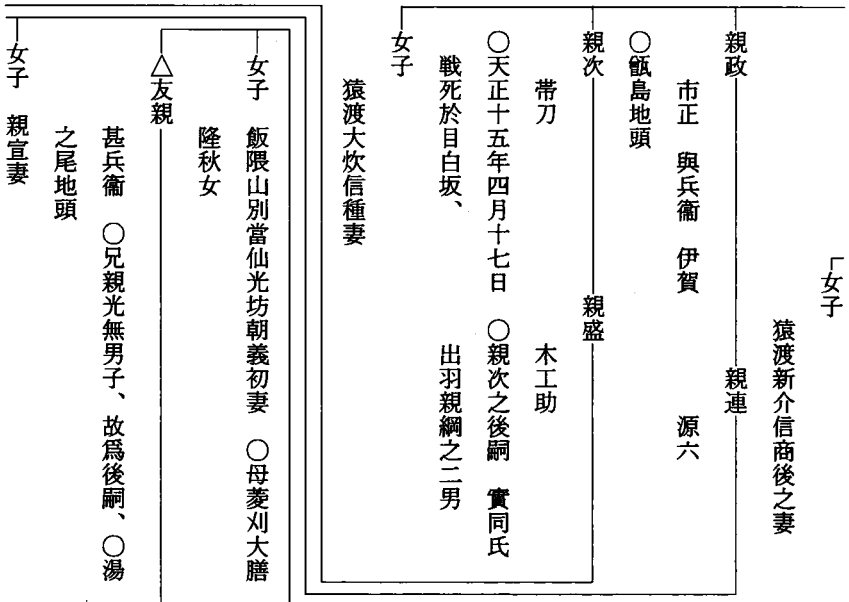
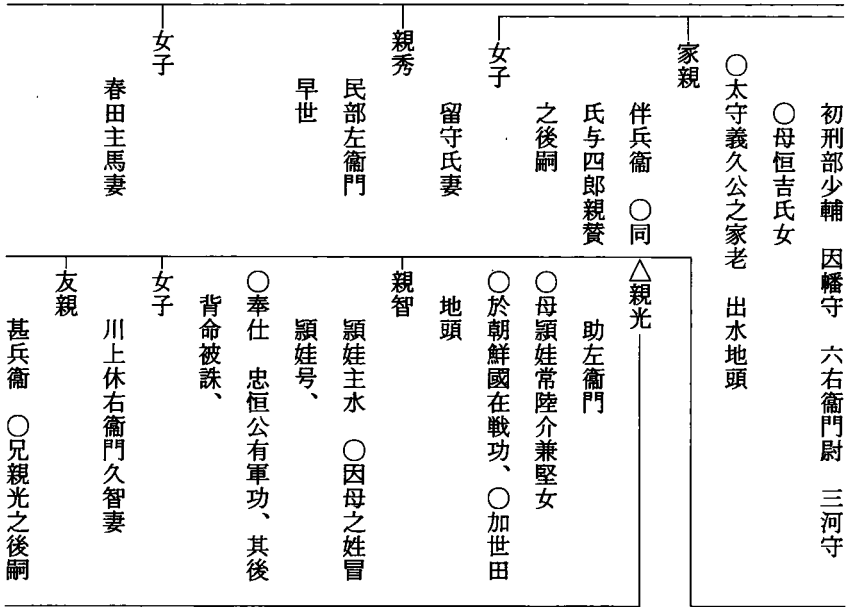
因幡守 ○母島津出羽守忠明女 ○加世田地

頭

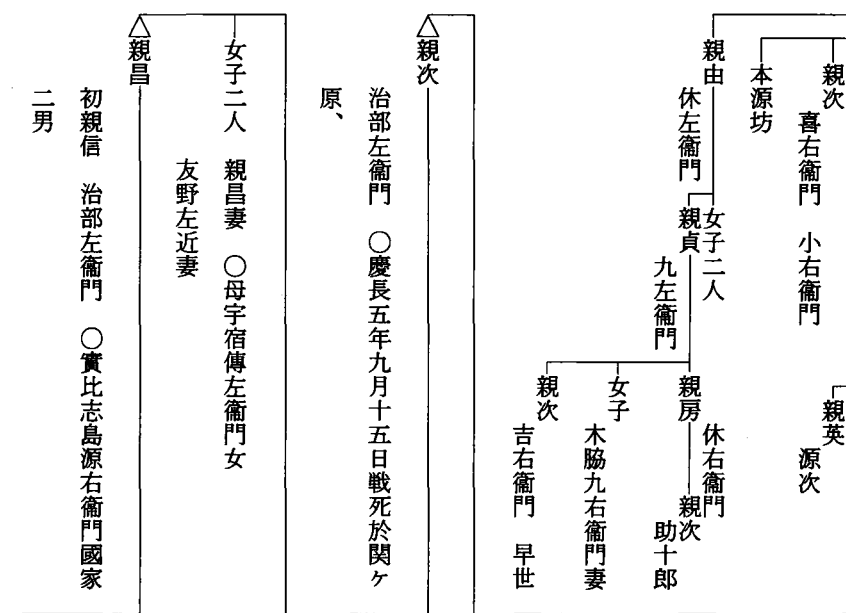
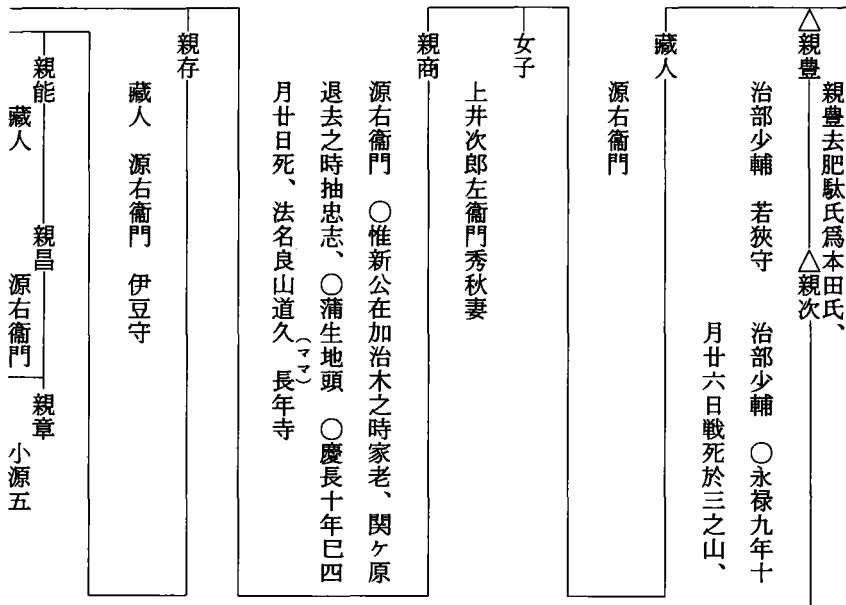
○天正六年相會大友之軍、戰死於新納院高城、法

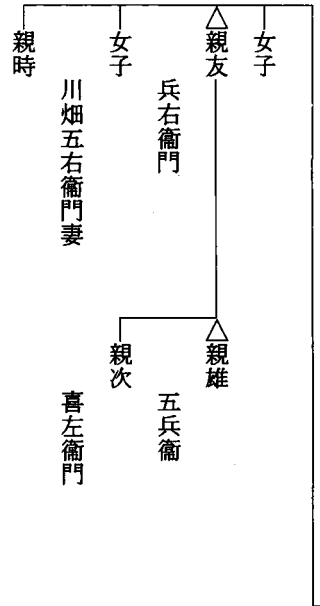
名傑名

△正親









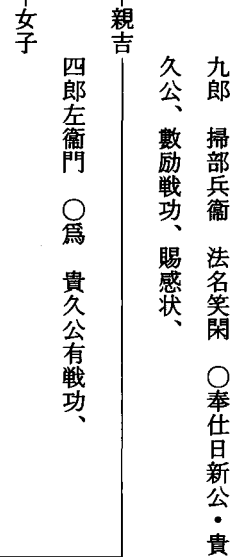
不詳所其自出、今按信濃守重恒之孫丹波守實親之弟民部少輔  
部左衛門親行之法名欵、

△古簾

「イニ越山永超居士」  
道號越岩

△親尚

下野守 法名蘭心 ○奉仕 日新公、屢有戰功、  
伊集院地頭  
親年



九郎 掃部兵衛 法名笑閑 ○奉仕日新公・貴久公、數勸戰功、賜感狀、

民部少輔

女子

△親貞

比丘尼圓通庵住持 休兵衛

弥六右衛門 下野守 法名三省

○兄死後奉 太守之高命、親貞相續遺跡、○義久公之家老、且轉補吉田・加世田等地頭職、○慶長元年丙申五月廿三日死ス、法名太立三省庵主、号本立院殿寺今在加世田之内武田

志摩助父死後其生質不肖ニシテ父勝繼家統是以宗領職伯父親貞分子高二百石令居住于谷山矣

(別紙)

「三省之譜」曰、

○兄死後無可繼後之器、是以奉 太守公之高命、親貞相續當家之正嫡、拜領吉田之地頭、及領吉野并礪而居住礪山下村、時籠置各御正躰鏡於吉野内七社春日・住吉・山神・雀宮・天神・山王及礪白山權現及三船大明神、又曰、自是親貞家臣居吉田・吉野者矣、其子孫等于今現存焉、○天文廿三年九月岩劔城攻之時 義久公御太刀之役、親貞勤之、○天正六年大友家侵日州、自取敗績之日、列成將勞軍務矣、或ハ八景尾之裨將、或ハ豊肥筑後州所々勞役、秀吉公九州征討之時、是成坊カ根白之堅陣ヲ擊テ在軍功

神祇

伊豆守

治部左衛門

天正十四年十二月八日戰死于豊後戸次城下、

九郎

親豊

越中守 ○義久公之時有戰功、

四郎左衛門

正右衛門

爲島津左衛門督歳久之家臣、○文祿四年七月十八日戰死于瀧ヶ水、

親廣

掃部兵衛 ○義久公之時有戰功、○高岡之

士

親友

親良

親長

宮内少輔

弥八郎

仲右衛門

女子

二位卿

○給仕 竜伯公、

親存

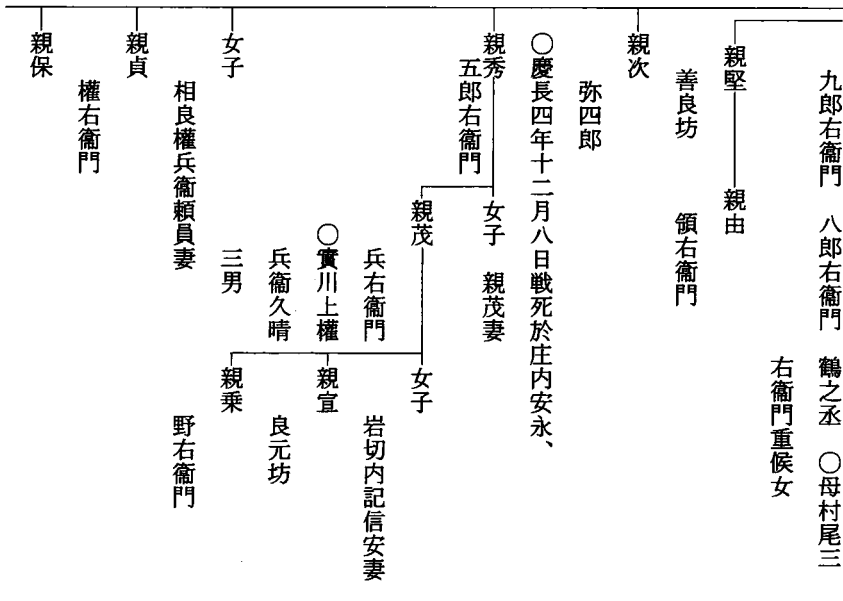
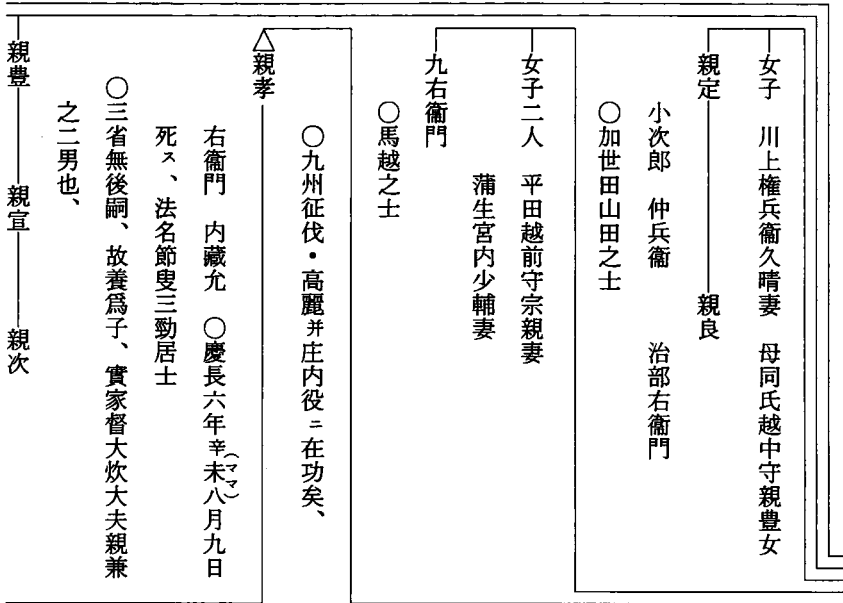
兵右衛門

淡路守

○母指宿能登女 ○

女子

同氏治部左衛門妻



弥七左衛門

出家

文隆

○慶長十四年琉球征伐之時、属柗山久高從役于彼土有軍勞、同十九年甲寅大坂乱之時、御上洛之供奉二十人賦而昇一本使役<sup>ニ御</sup>、親正平常嗜馳馬、依之從義弘公、大坪流馬書六卷直ニ御相傳也、

△親正

弥六 伊豫守 ○母祢寝右近大夫重長女

○轉補曾木・福山等地頭職、○承應二年癸巳六月五日死、法名爲清中無庵主

△親宣

女子

長次郎 早世 六左衛門親武妻 ○母鮫島

筑右衛門女

親秀

大學

△親武

女子

初親昌 径仙 町田源左衛門久英妻

六左衛門

△親方

○於 太守公御前元服、 助六 六左衛門

○兄二人早世、故親武嗣、○轉補數ヶ所地頭職、福

○王子村犬追物在列、 山

△親 (ママ)

助六 元禄四年生、

藤原姓

鎌田愛大夫政詮家略系圖

元祖鎌田權頭通清三代之孫藏人太夫光政之二男加賀守

政重之一流

○政重

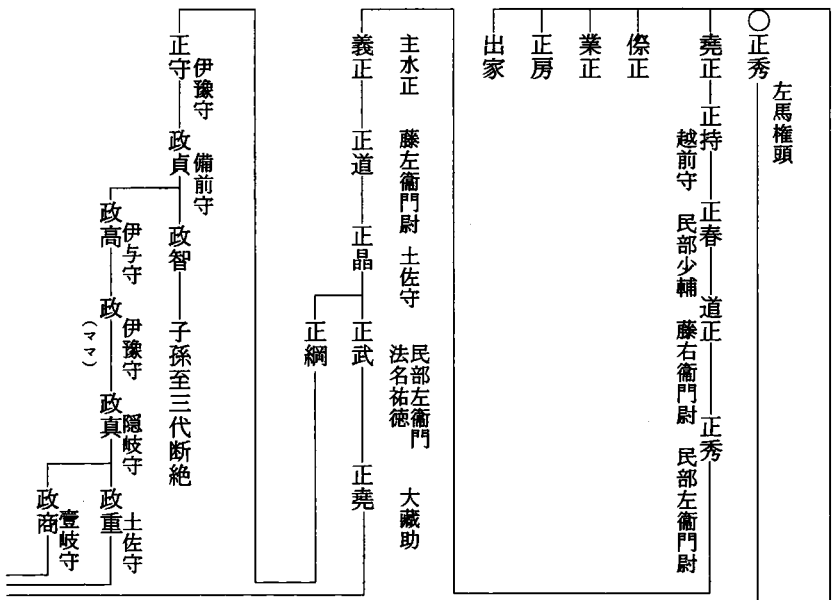
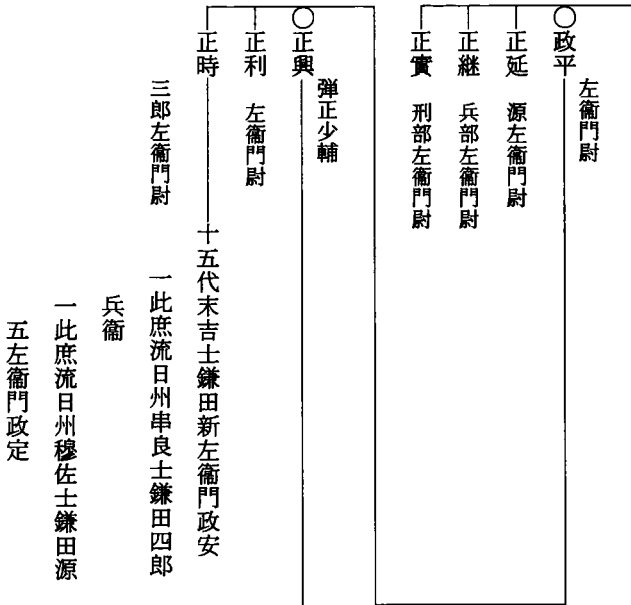
初清忠 正國 鎌田藤三 加賀守 弾正左衛門

忠久公領國以薩隅日三州界於 頼朝卿、因茲使難

波氏・長野氏・石塚氏・福崎氏三州之御家人等為



平均謀、于時政重逐跡而往薩摩州、增勢可同心之旨、蒙 仰則下著薩摩州、而五子相謀爲一統、以赴于關東告其言、仍文治二年丙午八月朔日 忠久公入國、爲供奉下著薩摩州者也、



孫右衛門 五兵衛 五郎右衛門

政公 政國 政勅 日州財部士

(マ)

政盛 新左衛門 政武 新右衛門 國分之士

正延 善六左衛門 正俊 民部少輔

正任 政孝 政光 善右衛門 弥七 清兵衛

政圓 丹波守 彦左衛門 吉右衛門 田布施士 政良 彦右衛門 政慶

政法 伴左衛門 平兵衛 平左衛門 鶴田士 政時 菊千代 政吉 政苗

政信 土佐守 政繼 新助 子孫有于加治木、

「政辰—政秀—政恒—政俊  
采女 財部士 采女 素兵衛 新右衛門

○正長—○正純—○正範—○正泰—  
玄蕃頭 兵部左衛門尉 治部左衛門尉 加賀守

○政真 治部左衛門尉 加賀守

○政真素生薩州川邊之神殿、大永比及暫屬島津實久、其後獻神殿於 日新公、而奉事 實久公、以軍務者多也、○天文十四年乙巳冬、主君疾病甚重、故祈藥不怠也、諸士亦應其心發、自願抽丹誠者多矣、於茲政真蒙靈夢、其告曰、宜奉納於法華經諸國、由是翌天文十五年丙午二月廿三日、發於伊集院之私宅、詣開門山、則入座主坊之室、遂出家、而名於正真聖、著黑衣以赴廻國矣、修行於日本國中、奉納於妙經、而至天文十六年丁丑歲未迨日員六百八十日成就焉、幸而歸私宅矣、然後拜謁 主君、所以賜褒賞、○政真常好種花作焉者有年矣、或時

詠一首之和歌、則化生女性權花下矣、又詠一首則  
消失、實可謂奇妙乎哉、其歌曰、

すかたをは よそにはつとも うへおきし 我  
に八見へよ 花のあさかほ  
色かへて 咲まされとも はかなさハ たゞ秋  
ことの 露の朝かほ

○政春 治部左衛門尉 ○永正十三年丙午(ママ)誕生、

○大炊助

○天文十一年壬寅誕生、○永祿十年丁卯十一月廿三日、  
太守義久公卒大軍、以當陷薩州菱刈院馬越之時成軍功、而遂戰死、法名了性号真庵、

加賀守 ○天正二年癸酉誕生、

○政在

○大炊助無継子、以故為養子、實佐多越後守弟也、  
臨諸所軍場為營苦者、匪啻薩隅日於三州、肥筑豊之於六州亦如斯、略其功不記也、○向島地頭職焉者有年矣、○寛永元年甲子十二月朔日死去、法名三輝珠寅庵主

○慶長元年丙申誕生、

女子 是枝忠存坊室

吉之丞

早世

清二郎 監物

○政貞

○慶長八年癸卯誕生、○補薩州鶴田地頭職也、○寛永十一年甲戌正月三日於江戸死去、享年三十二、法名智覺道見居士

○政榮

龜二郎 清二郎 大炊助 太郎右衛門

○元和八年壬戌八月十日誕生、母稅所但馬守篤清女也、○平松・吉松・野田・小根占・大始良・田代・田布施等之地頭職交賜焉、○明曆二年丙申三月、補御使役而列其座席也、

國治 菊千代丸 次右衛門尉 主膳正

○寬永二年乙丑二月廿日誕生、○比志島監物義之爲養子也、

千熊丸 ○夭亡 十歲

女子 ○早世 十歲

○政高

龜次丸 清二郎 次右衛門尉

○寬永廿年癸未五月八日誕生、母吉田次郎兵衛尉康

清女也、

男子 早世

女子 川上二右衛門忠曉室

○慶安三年庚寅七月十六日誕生、

龜次丸 夭亡、四歲、母吉田二郎兵衛爲清女也、

女子 洪谷三四郎重良室 ○寬永三年癸卯六月九日(マ)

誕生、母同上、

政(マ)

松千代丸

○寬文六年丙午七月二日誕生、母同上、

10 ○田布施之士篠原諸左衛門政盛家之庶流鎌田衛衛ニ

政香之家略系圖

家嫡鎌田氏四代修理亮清重之二男篠原藤次郎清時十代

篠原源五郎政明之二男一流

○政實

初源六 號鎌田、源兵衛尉 壹岐守

源左衛門尉

○兼政

○壹岐守政實無繼子、爲養子連續當家也、實上井伊勢守覺兼入道休安之弟也、武藏守董兼五男也、

「女子

壹岐守政實女也、兼政室

○政徳

左京亮

○天正五年丁丑誕生、○補地頭職、次序馬越、清水・

小林也、○寛永四年丁卯八月十四日死去、享年五

十一、法名貴翁永徳居士

兼安

仲右衛門尉

○天正十三年乙酉誕生、鬼塚秀玄爲養子、○上井仲

五兼政爲猶子、

○寛永十四年丁丑三月五日死、年五十三、法號回慶

宗英居士

秀吉

勝左衛門尉

○文祿元年壬辰誕生、○鬼塚秀玄爲養子、

○寛永十七年庚辰十月七日死、年四十九、法名超億

無一居士

政光

改政有、源五郎 源左衛門尉

○慶長五年庚子三月廿八日誕生、母阿多掃部助忠秋

女也、○鎌田玄蕃允政朝爲養子、

○政喬

源八 左京亮

○慶長十一年丙午誕生、母同上、○務御使役者有年

也、初田布施地頭職、後串木野也、○明曆二年丁

酉十月五日死、年五十二、法名迷悟一空居士

女子

○慶長十五年庚戌誕生、母同前、○山田弥九郎有季

室

政吉

嘉左衛門尉 ○慶長十八年癸丑誕生、母同前、

五郎左衛門尉

○元和元年丁巳誕生、母同前、○鮫島孝左衛門尉爲

養子、○寛永十八<sup>辛巳</sup>早世、年二十五

政武

女子

初小藤次

源助 ○元和七年辛酉

萬治元年誕生、母始

誕生、母(マツ)

良三郎兵衛尉忠種女

女子 鎌田刑部左衛門尉政固室

○寛永八年辛未十一月三日誕生、母北郷加賀三久女

○政辰

後改政方、

源六 忠右衛門尉 四郎右衛門尉 後藤兵衛尉

左京 大藏 六郎右衛門

○寛永十二年乙亥六月十二日誕生、母同上、○所補

地頭職次第、初郡山、次平松、次中郷、次坊津、

次清敷、次帖佐、

○享保三年戊戌十一月十三日死去、法名圓寛院殿義

海政方大禪定門

政平

正友

源四郎 十郎右衛門尉

○寛永十四年丁丑二月晦日生、母同前、○曾木甚右

衛門尉爲養子、然後離別、以号鎌田也、

女子 新納次郎四郎忠饒室

○寛永十九年壬午六月十日生、母同前、

正員 早世

女子

寛文六年丙午四月廿五日生、<sup>「イニ十五日」</sup>母平田九郎右衛門純

直女

政親

仲右衛門尉 四郎右衛門 十右衛門 法躰名桂

山

○寛文七年丁未十一月廿八日生、母同前、

○延宝六年 綱貴公奥御小姓 ○同八年江戸 御出

府供奉、○天和元年御側御小姓 ○光久公御納戸

奉行又御近習役

○寛保元年辛酉七月廿日死去、法号月仙院殿元夢醒

雲大居士

政武

新吉 他腹

政信

忠守 久守 仲右衛門 仲之助 源右衛門

左平太 右京

○元祿六年癸酉二月廿六日誕生、母平田新左衛門宗

正女 ○義岡作助久伴之為後嗣、

政

源八

○元祿七年甲戌七月二日誕生、母同、

政興

仲右衛門 休之進 平右衛門 衛衛ヱヱリ 母右同、

○享保十一年丙午正月十一日、吉貴公於 御前平

右衛門卜名拜領、

○延享二年乙丑七月十一日、吉貴公使島津登久連

詞花集全部墨付七、筆者油小路権中納言隆典卿、

外題久我内大臣通誠公、伽羅三種、かさしの梅・

小倉山・雪乃暮、以上從 吉貴公拜領、○角違并

丸、當家定紋也、然元文四年己未四月廿四日、

吉貴公使相良源太夫長以二重十文字之紋拜領、右

丸并角違之内ニ付、

○元文六年辛酉三月十二日、補礪御方 吉貴公大御

目附役、○寛保三年癸亥六月七日、御役御免隱居、

即嫡子平右衛門政恒家督被仰付、

○明和八年辛卯六月廿七日死去、法名政興院殿覺阿

淨心大居士

女子 平田平太左衛門位充妻

女子 新納内藏久品妻

政恒

一藤太 衛衛ヱヱリ

女子 高橋武右衛門妻

女子 本田甚右衛門妻

政吉

十郎次 強平

○實伊集院織部久東二男、爲養子、  
 女子 強平妻 強平死去以後嫁山田弥九郎、  
 女子 山田弥九郎養女

宮之原主膳通直家略系圖

宮之原家譜引

原、夫宮之原氏遡廻、其源畠山莊司次郎重忠四男武藏守重俊、至重俊男越前守重弘、延應元年八月十一日、始自下著于日州飢肥宮之原地、以宮之原爲家號、而領諸懸郡北鄉地、見古譜、自是以來子孫世々瓜蔓于日隅薩之間也、薩陽司譜官通古編轉諸家大概曰、平姓宮之原氏者、畠山次郎重忠之男畠山重俊之後裔、下日州宮之原號宮之原、嫡家不詳矣、茲以校正之、當家一百年前傳左衛門重氏稱宮之原傳重之一字、則重弘之支流餘裔者也、然自重氏以上關繩ツルヒ、不知其所自出、古譜文獻亦無徵者、嗚呼惜哉、惟一百年前以稱宮之原傳重之一字爲証而已、然則支流餘裔者亦必矣、憶オモヒ是非以他祖爲吾祖者類矣、因以重氏爲

始祖、蓋通直摘取自重氏以來所傳之古簿・重陳代日史舊記等文、而通直今也要裁系譜求之、故不能固辭、應古簿日史舊記之旨趣、錯雜雅俗不厭繁、新編錄系譜、向來覽者監察之幸之幸也、噫夫文者千載不朽者欤、冀此譜傳續于子孫不窮、至祝至禱、

明和三年丙戌仲冬穀旦 薩陽侯司譜官息長清純題  
 畠山二郎重忠四世宮之原上總介弘通餘嗣

平姓

宮之原家譜

○重氏

傳左衛門

○寬永十一年甲戌三月於京師死不傳墓所、法號滿巖常圓居士、建牌於薩州府南林寺之枝院高岳院、

○重尚

五左衛門 筑兵衛

○不傳誕生年月、○養母川上十郎左衛門久慶女  
 重尚爲重氏之養子、實隅州高山郷土福山氏不傳姓名



子也、奉仕嗣嫡侍從綱久公之御近習不詳、劍鑱之家紋自 綱久公賜之、至今傳用、○天和元年辛酉十一月十二日病死、法號德雲道貴居士

○重陳

五左衛門 筑兵衛

○慶安元年戊子閏正月廿四日誕生、母岩切縫殿信豐女 ○元祿二年己巳閏正月廿四日、魔府常盤谷ノ御假館ノ傍ボクシテ宅而應居住、村田爲左衛門經智傳太守 綱貴公之命、且拜領白銀六百錢、○同年九月十二日、綱貴公光貴カンシユウ重陳之宅、有獻賜之品々、○宝永六年己丑七月十三日死、年六十二、法號義雲院大心一學居士、葬南林寺、

女子 傳左衛門重行妻

延宝三年甲寅七月十二日誕生、母永山用右衛門女 宝曆二年壬申十一月二日病死、年七十九、法號梅清院殿春顔貞香大姉、葬笑岳寺、

○通貫

初重行 左門 宇右衛門 傳左衛門 甚五大夫 甚大夫 後號秋山、

○永山用右衛門女爲養母、○延宝三年己卯二月十三日誕生于田布施郷、江田五兵衛國重三男也、乃父國重・長兄江田五郎左衛門・仲兄同氏清左衛門、始奉拜謁 太守綱貴公、乃轉左門改賜宇右衛門、時ニ拜領金子二百匹、○同年奉仕 綱貴公之御近習月日不傳、○同二年己巳二月、因 公命嫁筑兵衛重陳之一女、而爲養子、時見染親筆、轉宇右衛門改賜傳左衛門、且賜黃金七十五兩、是故ニ買求西田村内田中門知行高三十石、○同年九月十二日、重行爲御近習小姓、○同年十月九日、綱貴公賜康光備前協刀於重行、○同六年癸酉九月三日、於江都爲御近習六人、○同年奉東叡山本堂造管助役之事之時、綱貴公奉 命預勤事、○宝永二年九月廿日、因願許御近習役、同月廿一日、爲御船奉行、○同七年庚寅三月十九日、重行相續養父重陳之家

統、○正徳元年辛卯十月九日爲御使番、○同二年壬辰九月廿八日、重行因費用乏而上書被免容役職訟于 官府、故自今年至五個年、每歲白銀二貫錢賜之、島津仲休・黒葛原源左衛門忠以傳 公命、○同五年十二月廿六日爲御用人役、同月廿八日山川地頭職、○享保元年四月重行家爲代、小番、○享保三年戊戌正月十一日、吉貴公因逃職于江都、重行應附從 高駕也、故高五百石在旅中賜之、○同十年乙巳正月、有令避重字改諱於通貫、重治亦改通興、○同十一年丙午正月十一日、轉補四番組頭兼御用人職、役料高百五十石重而賜之、○同十四年己酉正月十一日、補御勘定奉行兼組頭職、役料高如元、○同十九年甲寅八月廿六日、及老身許御勘定奉行職、同日許四番組頭、○同二十年乙卯閏三月廿一日、許隱居、通興於江都、三月廿三日、許續家統、○宝曆九年己卯閏七月廿九日病死、享年八十五、法號見隆院殿秋山仙翁大居士、葬于笑岳寺、

○通興

初重治 傳千代 甚五兵衛 後號冬山、

○元祿四年辛未後八月晦日誕生、母宮之原筑兵衛重陳一女也、○同年九月廿七日、太守綱貴公賜名於傳千代、○同十二年己卯二月十四日、乃父重行携傳千代登御臺所之奥ノ間、綱貴公之御前而元服、加冠國老佐多豊前久達、理髮大山後角右衛門貞長、公染親筆改傳千代賜甚五兵衛、○同年後九月六日、來歲勤與御小姓役、宜附從 綱貴公述職之高駕也、○同二年九月十八日勤部屋栖小番、〔享保元年マ、〕○同三年戊戌五月十一日爲新番六人、○同七年十一月十八日爲騎馬役十人、○同九年甲辰六月廿八日爲郡奉行役、同十一年丙午六月十五日爲高奉行役、○同十三年戊申三月十六日轉御使番役、年俸五十俵賜之、○同十九年甲寅正月十一日、於芝邸有 命爲江都御留守居役、因部屋栖添賜シヤツカ牙七十五俵、○同二十年乙卯三月廿四日、於芝ノ邸續

家統、○同年八月廿六日當家爲小番、同年七月廿一日始補野田地頭職、○寛保元年辛酉七月廿八日爲御近習役、職田百石賜之、○延享四年丁卯三月廿一日爲御側御用人役、賜職田百四十石、○同年四月十一日、在旅中賜高貳百四十五石、○同年六月七日轉野田地頭職、補隅州大根占地頭職、同七月廿一日賜年俸貳百四十石、○宝曆元年辛未正月廿八日補寺社奉行職、同三月四日、因寺社奉行職屬御家老組、同四年甲戌四月十一日轉大根占地頭、補薩州頭娃地頭職、○同六年丙子十一月廿八日、因請許寺社奉行職、○同七年丁丑六月十一日、稟官府而隱居、通直於江都許相續家統、○同年六月十八日、從老父秋山之例稟 官府蒙允容、剃髮而改名冬山、

重賢

甚六 兵衛

○元禄八年乙亥十一月六日誕生、母同、○享保六年辛丑八月廿六日於江都病死、享年二十七、法號義

運淨堅居士

女子 於福 市來左中政方妻

○元禄十二年己卯八月廿一日誕生、母同、

女子 於益 島津仲久隣妻

○宝永元年甲申五月廿八日誕生、母同、

女子 於徳 大山後角右衛門貞洪妻

○宝永四年丁亥十月廿六日誕生、母同、

女子 於松 福山平太夫安都妻

○宝永七年庚寅十一月晦日誕生、母寺山太郎左衛門

久年女 ○享保十八年癸丑二月十六日病死、法号

蘭宝院春花妙真大姉

女子 於久利

○享保元年丙申正月七日誕生、母同、○同四年己亥

九月廿六日夭亡、法号恕真了縁童女

○通直

傳千代 宇右衛門 甚五大夫 主膳

○享保三年戊戌十二月十二日誕生、母同、○元文四

年己未二月十一日爲新番六人。○延享元年四月廿二日、於江戸爲馬廻十人。○同四年丁卯七月廿二日爲御目附役、賜役料銀六枚三十錢、○寬延元年戊辰六月廿一日爲御使番役、役料米四十八俵賜之、○同二年己巳三月、在旅中白銀三貫四百五十錢賜之、○宝曆三年七月十一日補御用人役、職田百四十石賜之、同四年九月十五日爲御勝手方假御用人役、○同六年丙子正月十五日補御側御用人役、職田百四十石賜之、○同年正月二十七日、在旅中白銀七貫三百五十錢賜之、○同七年丁丑四月十二日、於芝ノ邸通直襲家統、○同年九月朔日、芝ノ邸旅中知行高二百四十五石之所務料賜之、○同年九月十八日補市來地頭職、○同十一年四月十八日、知行高二百四十五石、所務料銀當秋在旅中賜之、○安永二年癸丑九月九日爲寺社奉行役、賜職田百八十石、島津左中久金傳 公命、同七年戊戌正月十一日爲大御目附役、賜職田二百石、島津久金傳 公命、○同年九月十一日補伊作地頭職、二階堂主

計行且傳 命、○天明二年壬寅正月十一日御勝手方補家老職、島津兵庫久徵代 公命之、賜役田千石、同日、補日州高岡地頭職、○同六年丙午五月十三日補表御家老、○同七年丁未五月廿七日、依願御役御免、一世御養料百石賜之、

(ママ)

12

惟宗姓

市來左仲政方家略系圖

家嫡市來早左衛門家之元祖自家續九代

○家保

備後守

○家利

備後守

市來早左衛門家

△民部左衛門尉

始右衛門次郎

○竹内隱岐守養子

△家政  
織部助 備後守

○父民部左衛門尉相續竹內家、家政繼號竹內兵部少輔實位、又改織部助、而後依家嫡家尚訴復父之本氏為家尚之庶流于 太守家久公、公許焉、越興民部左衛門尉之家、家尚書寫系圖以附與之矣、

△家(77)  
助左衛門尉

長千代丸 早世 母喜入休右衛門久洪女  
△家賀  
次十郎  
○助左衛門尉病死、而長千代丸亦蚤死、故助左衛門之遺妻奉訴 家久公、以家賀為後嗣、實喜入休右衛門久洪之二男之弟也、母澤養雲女

△家賢  
次郎左衛門

△政方  
次郎九郎 次郎左衛門 左仲

△政為  
次郎左衛門  
(77)

13  
○維遠  
駿河守 從五位下 二階堂氏元祖也、  
長和四年乙卯誕生、○寬治元年為軍忠賞、賜陸奧國須賀川莊、

○維兼  
遠江守 駿河守 從五位下  
自天喜至寬治軍奧劬抽軍功、將軍賞其軍忠、賜一

引兩御紋云々、傳而定家紋、

○維行 ———— ○行遠 ———— ○行政

三郎 駿河守 從五位下 号白尾三郎、山城守

從五位下

維賴

遠江權守 相良之元祖

家嫡藤原姓

二階堂氏正統系譜

艸稿寫

二階堂氏原其先所遡ツルカガ、出自天兒屋根命矣、其遠孫大織冠

鎌足始賜藤原姓、其孫南家武智曆之男乙曆也、自此歷是

公・雄友・弟河・高扶・清夏・維幾・爲憲・時理・時信、

至十一世駿河守維遠者、則當家之元祖也、維遠五世二階

堂山城守行政自維遠四世行遠至行、奉事 右大将頼朝公、爲政

所執事自行政至行景事、見于東鑑及舊史矣、其子隱岐守行村檢非違使或伊勢國

益田庄・尾張國西門真庄・肥前國鏡社・陸奥國信夫庄内

鳥和田村等領之、奉事 將軍實朝公爲侍所司、建曆三年

五月七日、實朝公賜相模國大井莊是年五月二日三日、和

其子左兵衛尉元行或冒機鳥家号爲評定衆列、同年五月九日、

實朝公以御下文賜相模國懷島殿原郷是亦依和田、合戰勲功也、因以爲履

焉承久三年七月十二日、將軍、河重原在地頭職、賴經公補參河國重原在地頭職、

倉柳營及足利將軍家、各々有武名、累補諸國莊園地頭

職、尊氏公所賜御下文及直義・直冬感狀等亦箭藏焉

筑前國植木庄本富名・同國內武藤某跡、元行適子隱岐守行氏

同國佐江村宇都宮某跡、其餘舉前後焉、或号懷島三郎判官、實治元年六月二十三、其子隱岐守行景冒機島、將軍頼朝公補安房國北部地頭職、家号

其子隱岐三郎左衛門尉泰行的的相續、世居相州鎌倉二階堂

邑之第、因以爲家号矣嘉元二年五月二十六日、將軍久明親王令

國菊池某、正應五年十二月七日、泰行奉 右大将家之命

爲警固異賊、慈尊、翌年發於相州、始來于所領薩摩國阿多北方

母忍照尼豫依願後号田、遂居焉、代々隨仕 將軍家、兼貴重守護之命矣、

其子左衛門尉行雄・其子紀伊權頭行仲、建武觀應之間父

子屬 將軍方、而有勲功、尊氏公賞之加賜所々之地、

直義・直冬亦屢投感牘焉、自是以降、子孫尚延領諸國莊

園及薩州田布施・同國所々之地河辺郡得宗跡・額姓郡額姓某跡、

跡・河邊内神殿村・給養院之内等也、家聲顯榮、枝葉亦繁茂

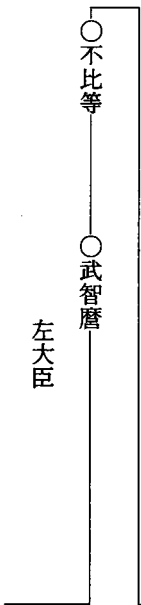
焉、太守貞久公 師久公 元久公所賜證書筒藏之、其餘相傳之地明白所藏 將軍家及執權探題之書・代之讓狀等也、應永四年十二月、伊作大隅守久義與別府某別府某者行貞婿有隙、當此之時、山城守行政十世山城守行貞也、居加世田、行貞者久不與久義、久義年來憤焉、遂乞 太守元久公于義姉婿也

援兵、公容之、同十二年冬進到田布施、圍行貞之營半禮、雖阿多氏・別府氏來救、而衆寡不偶、翌年二月、行貞勢竭、獻城地於 元久公請降乃得赦、於是之同國日置郡市來鄉寓居焉上總山城守忠朝者行貞之婿、市、同年九月二十六日、元久公賜阿多之内觀音寺及同所十町地是時去市地、而移居于阿多、以後復、應永二十二年、十一世山城守行隆陰欲拔田布施城此時伊作家之領地而不遂焉、同二十九年、伊作遠江守十忠叛、此之時亦黨焉、爾來至十四世山城守行治雖未墜家聲、漸減其采地、迨其子隱岐守行存、家風大衰矣、十八世行格、寬文四年依 太守光久公之鈞命、以家藏之文書備 英覽、即以有所其徵、故降 高命曰、行格自今去田布施宜徙于府下也、於是同年十二月十六日、剋移居于魔府、以勤仕 綱實公矣、明和七年行且奉 恩許、

承行政二十一世統、先是行且近仕 太守宗信(公説之) 重豪公之三世、而遂任重職、以高家門、恩遇殊渥、秩祿稍贍矣、於予也、寧謂顯于烈烈乎、今也幸有行政以來所傳文書實證也者、是故行且仍其證書考此事蹟、新撰系譜以為傳來世、是即感戴國恩、在續承祖業而已、豈實可謂世寶謨訓乎、自今而後孫子支葉懋善脩身齊家、續繫世系不遺不忘、則赫乎家聲、與系譜共同榮、使子孫永傳令名於億萬世、

安永三年甲午十一月良辰(マツ) 主計行且誌

❧大織冠鎌足  
初鎌子 内大臣 正二位  
○天智天皇八年授大織冠、始賜藤原姓、仍改中臣姓為藤原姓、



豊成 右大臣 内舍人 兵部丞 中衛大将 従一位

母安倍氏真康女

惠美仲磨 大納言 中衛大将

○乙磨

従三位 兵部卿 参議 母大納言朝磨卿女

○天平勝宝四年六月薨、

巨勢磨 式部卿 参議 従三位 母勅大肆小治田朝

臣功磨女

右少弁 正五位下 母従三位佐為女

許磨

菊地磨

○是公

神祇大副 少納言 式部大輔 春宮大夫 左大

弁 中衛大将 正二位 右大臣

○母従五位下石川連磨違丸女

○延磨八年九月十九日薨、六十一、贈従一位、号

午屋大臣、

眞友 大藏卿

○雄友

中務卿 美作・播磨守 大宰帥 民部大輔 参

議 正三位 美作・播磨兩國守護

第友 阿波守 従五位上

友人 相模守 従五位下

文山 右京大夫 従四位上 母大納言従二位宅綱卿

女

廣河 河内介 母同前、

第男 従五位下 母正四位下石川恒守女

秋常 因幡守 従五位下 母文山同、

○第河

越前守 伊賀守 従五位下 母第男同、

右衛門佐 陸奥 従五位上 母参議直友女

○高扶



有年 上野介 伊豫守 從五位下 母坂上關守女  
 ○清夏 ○維幾

上總介 從四位 或維義 常陸介 從五位下  
 母同前、 母彈正大弼正行女

○爲憲  
 本介 遠江守 從五位下 母平高望女

時輔 工藤大  
 ○時理  
 遠江守 從五位下

○時信  
 駿河守 從五位下

維清  
 入江 右馬允 從五位下

○維遠

駿河守 從五位下 二階堂氏元祖

○長和四年乙卯誕生、

○寬治元年、為軍忠賞賜陸奧國須賀川莊、

○維兼

遠江守 駿河守 從五位下

○自天喜至寬治、軍于奥州抽軍功、將軍賴義朝臣

令嗣義家朝臣賞其軍忠、賜一引兩御紋云云、傳而

定家紋、

【維兼譜】

○天喜五年丁酉秋、与父俱属官軍征伐奥州之夷賊安

倍頼時、維兼達射藝、官軍夷賊會戰之日、頼時中

維兼之發矢殆將斃、漸歸于鳥海柵竟死、將軍頼義

朝臣及義家朝臣大賞之、相議授一引兩御紋之旗幕

維兼、拜戴焉、傳其御紋子孫、永以為家紋、其至

朝恩更可有勸賞云々、○同年十一月、頼義朝臣父

子出軍攻伐夷賊安倍貞任・同宗任頼時二子大戰奥州鳥

海、官軍失利士卒多敗亡矣、而將軍父子僅為七騎、  
義家朝臣力戰大顯武功、賊軍恐之漸退、時維兼集  
敗賊軍之諸卒、來襲擊賊軍之後、賊弥敗走云々、

○維行 遠江守

○行遠

三郎 駿河守 從五位下 號白尾三郎、從五位下

維頼

遠江權守 相良之元祖

大織冠鎌足後胤元祖駿河守惟遠五代

○行政

白尾三郎 二階堂主計允 民部少丞 民部太夫

從五位下 山城守或山城前司

○母熱田大宮司散位藤原季範妹

○奉事 右大將頼朝公、為政所執事、

○自行政至五世行景之事蹟、大小事在載于東鑑者不  
暇枚舉焉、繁故附于別錄、如今<sup>1</sup>摘其要以載于此、

卒去年月不傳焉、安永三年甲午秋追考、而以二月  
七日為忌日、謚大道院殿封州行惠勝阿弥陀佛、安  
牌于田布施紹聖寺、

山城次郎

○行村

山城三郎 左衛門尉 從五位下 檢非違使太夫

判官 隱岐守 入道行西

○久壽二乙亥年誕生、母不詳其姓氏、卒去年月不傳焉、安永三年甲午秋追考、而

以二月七日為忌日、謚正善院殿花  
顔法式房、安牌于田布施紹聖寺

○正治二年十月廿六日任左衛門尉、

○建曆三年、和田義盛謀叛、而五月二日三日戰于鎌

倉、義盛敗績矣、行村在幕府預軍事、以故同年五

月七日、將軍實朝公為勲功之賞賜相模國大井庄、

○建保六年七月二十二日、實朝公定侍所司五人

北条武藏守泰時為別當、山城太夫判官行村、三浦  
左衛門義村・江判官能範・伊賀次郎兵衛尉光家也、

○行村致仕之後退老所領伊勢國益田莊、

○嘉禎四年戊戌二月十六日於伊勢國益田卒、享年八

十四、安永三甲午秋追考、而諡太光院殿行西淨阿  
弥陀佛、安牌于田布施紹聖寺、

行光

民部太夫 從五位下 信濃守 信濃前司

○長寛二年甲申誕生、

東鑑第二十一之卷

○建保元年癸酉十二月十九日乙巳、雪降、將軍家

爲御覽山家景趣、入御民部太夫行光之宅、以此次

行光献盃酒、山城判官行村等群參、有和歌管絃等

御遊宴、入夜還御、行光進龍踏黒、

東鑑第二十二之卷

○建保二年甲戌正月三日己巳霽、午刻 將軍家御參

鶴岡八幡宮、民部太夫行光在供奉列、

東鑑二十四之卷

○建保七年己卯二月十三日、信濃守行光上洛、是六

條宮・冷泉宮兩所之間爲閑東 將軍、可令下向御

也、禪定二位家人令申給之使節也、

東鑑二十四之卷

○承久元年己卯九月六日戊戌、伊賀次郎左衛門尉光

宗補政所執事、信濃前司行光依病痾危急辭退、替

云云、

右同卷

○同月八日庚子霽、已刻前信濃守從五位下藤原朝臣

行光法師卒、年五十六

女子 佐藤伊賀守朝光室伊賀式部丞光宗母

○元行

或基行 山城判官次郎 山城左兵衛尉 山城左

衛門尉 從五位下 隱岐左衛門尉 入道行阿

或號 懷島

○正治元己未年誕生、母不詳其姓氏卒去年月不傳焉、安

以二月十六日爲忌日、諡登覺院殿大知了式房、安牌于田布施紹聖寺、

○和田義盛叛、建曆三年五月二日・同三日大戰於鎌

倉、元行有戰功、將軍實朝公賞其勲功、同年五

月九日、補相模國懷島殿原郷地頭職、公手自書  
花押以賜御下文、其正文一通在家藏、

○承久三年七月十二日、將軍賴經公令元行補三河

國重原莊地頭職、執權北条陸奥守義時在判之奉

書一通、在家藏、

○歷仕 將軍賴經公、爲評定衆之列、

○仁治元年庚子十二月十五日卒、享年四十二、安永

三甲午秋追考、而謚德雲院殿仁岳行阿弥陀佛、安

牌于田布施紹聖寺、

行義

出羽守 正五位下 或隱岐 出羽前司

入道道空

○嘉禎四年四月二日爲評定衆、

行有

出羽次郎兵衛尉 左衛門尉 從五位下 太夫

判官 尾張守 備中守 備中前司 引付頭人

○行有・行藤之事蹟所載于東鑑者略之、

行藤

出羽次郎兵衛尉 出羽三郎左衛門尉 備中次

郎左衛門尉 出羽守

時藤

備中守

有藤 貞藤男 遁世

女子

成藤

安藝守 ○家嫡隱岐 行種 左衛門尉

守泰行之男也、 同氏隱岐左近將監

行敦

行房養子

備中守 遁世

貞藤 兼藤 長藤 眞藤

出羽守 入道道瀧 左衛門尉 尾張守 出羽二郎

男子四人・女子四人

行久

隱岐四郎左衛門尉 從五位上 常陸介或常陸前

司 入道行日

○建長元年八月九日、將軍賴嗣公・執權北条相模

守重時・同陸奥守連判之奉書一通、正文在家藏、

○行久領地薩摩國阿多北方併此文書附屬于其二女

室、仍宗家傳來焉、事見于泰行之譜、

行清

行雄 常陸次郎兵衛尉 左衛門尉 近江守

○母同氏四郎左衛門尉行定女

女子

母同、

女子

隱岐守行景室 母同、

行方

或行賢 隱岐五郎左衛門尉 式部丞 大藏少輔

和泉守 從五位下 或和泉前司 引付頭

季春三日

○島津修理亮入道殿宛書在判之書狀一通、正文在家

藏、

行章

和泉次郎左衛門尉 三郎左衛門尉 ○母佐々

木近江守信綱女

推行

白河四郎 隱岐式部大夫

行定

四郎左衛門尉

行氏

隱岐三郎 左兵衛少尉 左衛門尉 使 從五位

下 太夫判官 隱岐守 入道道智 或号懷島、

○承久三年<sup>辛巳</sup>年誕生、母不詳其姓氏<sup>卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而</sup>

<sup>以十二月十五日爲忌日、謚慈泉院殿、心源孝式房、安牌于田布施紹聖寺、</sup>

○嚴父左衛門尉元行在判之領地讓狀一通、正文在家

藏、

○仁治元年十月十四日、陸奥國・安房國・伊勢國內所分書付一通、在家藏、

○仁治元年閏十月廿日、任嚴親基行之讓狀、肥前國鏡社・伊勢國益田莊・尾張國西門真莊・參河國重原莊・相模國懷島殿原郷・陸奥國信夫莊内等可領知云云、即北条武藏守泰時在判之 將軍家政所下文一通、正文在家藏、

○寶治元年六月二十三日、 將軍頼嗣公令行氏補安房國北郡地頭職、

○文永八年辛未六月七日卒、享年五十一、安永三甲午秋追考、而諡常稱院殿道智禪阿弥陀佛、安牌子田布施紹聖寺、

○行景

隱岐三郎左衛門尉 從五位下 隱岐守 入道道願 或號懷島、

○仁治三壬寅年誕生、母山井彈正大弼行經女卒去年月不傳

焉、安永三甲午秋追考、而以六月七日爲忌日、諡湖月院殿雪齋蓮一房、安牌子田布施紹聖寺、

○當家領知所々堺之事、文永八年五月七日可致沙汰之狀一通、裏判在二所、正文在家藏、

○文永九年五月廿六日、 將軍政(つとむ)所下文古寫、都而四通、正文在家藏、

○弘安六年七月廿三日、 惟康親王・執權北条相模守時宗・同駿河守業時連判之 將軍家政所下文一通、正文在家藏、

○弘安八年乙酉十一月十七日卒、享年四十四、安永三甲午秋追考、而諡廣德院殿道願大阿弥陀佛、安牌子田布施紹聖寺、

行長

隱岐四郎兵衛尉 左衛門尉

行重 五郎左衛門尉

行連 六郎

朝行 丹後守

行宣 九郎

女子

○泰行

或安行 隱岐三郎左衛門尉 從六位下 隱岐守

入道道忍

○母同氏常陸介行久入道行日女也行景卒去之後爲尼、稱月日不傳焉、安永三甲午秋追考、而以二月廿八日爲忌日、諡明光院殿靈一忍照大法尼、安牌于田布施紹聖寺、

○行久入道行日、忍照尼界焉以領地相模國大井庄內

吉田島・薩摩國阿多北方也、爾來爲當家領地、行

久在判之讓狀二通、正文二通在家藏、即文永三年

六月十日之讓狀、

○文永四年四月廿四日、將軍宗尊親王・執權北条

相模守時宗・同左京權太夫政村連判之奉書一通、

正文在家藏、

○文永八年九月十三日、有蒙古人襲來鎮西之聲矣、

以故執權北条相模守時宗・同左京權太夫政村降令

曰、速差代官於所領薩摩國阿多北方、宜防禦異國

且鎮領內之惡黨云云、時宗・政村連判之奉書一通、

正文在家藏、

○泰行蚤歲喪父、蓋當此之時北条氏擅權募勢、而鎌

倉之功臣多觸誅辟者也、慈母忍照尼防其未然、以

爲避鎌倉、於茲乎邇使子息泰行下于鎮西所領警固

異賊於將軍家、正應五年十二月七日、奉 久明

親王之恩許、(登)翌年發鎌倉、初下向所領薩摩國阿多

北方、遂居焉、

○正應五年十二月七日、執權北条相模守貞時・同陸

奥守宣時連判之奉書三通、正文在家藏永仁二年十二月十日之奉書

書・永仁五年十月十日之奉書

○嘉元二年五月二十六日、將軍久明親王令泰行補

豐前國金田莊地頭職、且加貳同國菊池某跡領地、

執權北条相模守師時・同左京權太夫時村連判之奉

書一通、古寫在裏判一通、

○諸國所領證文頭書一通、正文在家藏、

○嘉元三年四月六日、北条上總介政顯執達狀一通、

正文在家藏、

○嘉元三乙巳年卒、月日不傳焉、安永三甲午秋追考、

而以三月十七日爲忌日、諡寶學院殿道忍珠阿弥陀

佛、安牌于田布施紹聖寺、

盛行

貞氏

近江四郎左衛門尉

或定氏 隱岐孫三郎

女子 備中守行教室

○行雄

泰藤 隱岐三郎 木工允 從六位下 左衛門尉

入道行存

○母不詳其姓氏、卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以三月十七日為忌日、諡權窓院殿仙林壽式房、安

牌于田布施紹聖寺、

○嘉元三年二月十七日、嚴父隱岐守泰行領地讓狀古

寫一通、在裏判正文在家藏、

○嘉元三年六月、鮫島光家訴狀、在裏判一通、正文

在家藏、

「元亨元年十二月廿九日、任木工允」

○貞永元年十一月廿八日、関東御下知狀古寫、在裏

判正文在家藏、

「元亨二年正月廿六日、任左衛門尉」

○嘉元三年八月廿九日、北条陸奥守宣時・同相模守

貞時各加判有之祖母忍照尼在判之讓狀一通、正文

在家藏、

○同年九月十二日、北条上総介政顕在判之執達狀一

通、正文在家藏、

○延慶二年正月六日、忍照尼置文二通、正文在家藏、

○正和三年二月二十八日之置文、

○元亨元年四月十五日、將軍守邦親王治世前上野

介在判之執達狀一通、正文在家藏、

○同年十月廿日、行雄依東大寺修造功、所望勅負尉

即 守邦親王・執權北条相模守高時・前武藏守連

判之奉書、正文在家藏、

○元亨元年十二月廿九日・同二年正月廿六日、行雄・

行久并庶流成藤除目聞書二通、正文在家藏、

○正中二年九月廿七日、守邦親王御治世、鎮西探

題北条修理亮英時在判之執達狀三通、及下知狀在

裏判一通、古寫一通、在家藏、

○正中二年十月十六日之文書、



- 嘉曆元年十二月廿五日之文書、
- 同四年九月廿日之文書、  
右同案古寫一通、
- 元德二年九月十六日之文書、
- 同三年八月廿日、探題北条修理亮英時在判之下知狀一通、正文在大隅州數根士二階堂八左衛門行寬家、
- 自建武至觀應之交、屬將軍方有勲功、尊氏公賞之以手自花押御下文、加賜所々之地、直義・直冬亦屢贈感牘焉、自是以往從事足利將軍家、
- 建武四年三月七日、將軍尊氏卿手自證花押、賜行雄所領安堵之御下文一通、同案古寫一通、
- 同年十二月廿五日、太守貞久公御名判御執達狀一通、
- 曆應元年十一月、執印又三郎友雄言上狀一通、  
右ニ相付建武五年閏七月廿九日之文書、
- 同四年十月五日、貞久公御裏書御加判文書一通、
- 正和三年二月廿八日、忍照尼置文一通、

- 正應五年十二月七日・永仁二年十二月廿七日執達狀、古寫二通、
- 嘉曆四年九月廿日下知狀、
- 曆應四年十月五日古寫一通、御裏書文書、
- 貞和二年閏九月十一日、尊氏卿爲勲功之賞、賜筑前國內武藤某、參河國重原庄內牟田下切・馬渡・小林三箇村地頭職御下文、古扣一通、
- 貞和二年十二月廿七日、赤松次郎左衛門尉宛書之狀一通、
- 貞和三年四月十二日、尊氏卿爲勲功賞、手自證花押以御下文、賜筑前國植木庄本富名、即御下文一通、正文在家藏、
- 同五年二月九日、庶流左近將監行房在判之所領讓狀一通、
- 同七年五月廿日、足利左兵衛督直冬在判之下文、
- 同七年五月廿日、隱岐左近將監行房江下文一通、  
惟宗友躬裏書判古扣、
- 同年六月二日、足利直冬下文一通、正文在二階堂

與右衛門孝行家、

○觀應二年十月五日、大宰少貳頼尚狀一通、正文在

二階堂與右衛門孝行家、

○同年十二月廿七日、足利直冬在判之下文一通、

○同三年正月廿一日、行雄贈下野守之狀一通、正文

在大隅州敷根士二階堂八左衛門行寬家、

○正平九年霜月廿八日之狀一通、

○同年十一月晦日そうこんの御房江讓狀一通、

○正平九年甲午年卒、月日不傳焉、安永三甲午秋追

考、而以十二月廿九日爲忌日、諡安昌院殿泰阿行

存大禪伯、安牌于田布施紹聖寺、

女子 備中守時藤室

行教

隱岐五郎

○嘉元三年二月十七日、執權北条相模守貞時・同陸

奥守宣時加判有之嚴親隱岐守泰行領知讓狀一通、

「イニ直」  
真顯  
法印

成藤

六郎左衛門尉 修理進 左衛門尉 安藝守

○備中守時藤養子

行武  
又三郎

女子

○行仲

行久 隱岐三郎兵衛尉 紀伊權守 能登守

○母不詳其姓氏 卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以十  
二月廿九日爲忌日、諡梅舍院殿香式自温大姉、

安牌于田  
布施紹聖寺

○元弘三年五月廿五日、行久應 尊氏卿之命、發向

筑前國、遍探題北条修理亮英時之博多宿所合戰有

軍功、

○同年六月、行久言上狀 太守貞久公御解狀一通、

○建武三年三月十二日、將軍尊氏卿執事高武藏權

守師直在判之奉書一通、

○同五年九月二日、嚴父左衛門尉行雄在判之領地讓

狀一通、

○曆應三年七月十日、將軍尊氏卿令弟左馬頭直義

在判之感狀一通、

○同四年七月廿九日、彈正少弼在判之執達狀一通、

○康永二年三月二日、足利直義在判之感狀一通、

○正平九年十二月、行仲依爲筑前國植木庄本富名地

頭職、目安狀一通、

○同十一年、領地豊前國金田庄田畠注文一卷、

○同十二丁酉年卒、月日不傳焉、安永三甲午秋追考、

而以十一月十日爲忌日、謚秀運院殿忠阿道高菴主、

安牌于田布施紹聖寺、

直藤 二階堂與右衛門孝行之元祖也、

近江守

行重

行隆

行義

隱岐右京進

采女正

左衛門尉

○直行

三郎兵衛尉 從六位下 隱岐守 入道禪桂

○母不詳其姓氏 卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以十一月十日爲忌日、謚美樹院殿玉式貞松大姉、

安牌于田布施紹聖寺

○貞和七年卯月三日、祖父左衛門尉行雄在判之領地

讓狀一通、同案古扣一通、

○貞治五年八月廿三日、太守師久公手自加花押阿

多郡内觀音寺・同所白河村可知行之御狀一通、

○卯月廿九日、左兵衛督泰季書狀、古扣一通、

○正平十年十一月十日、嚴父能登守行仲領地讓狀一通、

○永德三癸亥年卒、月日不傳焉、安永三甲午秋追考、

而以五月廿二日爲忌日、謚見性院殿禪桂直心大禪

伯、安牌于田布施紹聖寺、

次郎 遁世

行門

隱岐右兵衛丞

○延文五年卯月五日、行門依軍忠呈奉行所在判之申

狀一通、

○行貞

山城三郎 從五位下 山城守 入道永行

○母不詳其姓氏、卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以五月廿二日爲忌日、諡法智院殿照心自光大姉、

安牌于田布施紹聖寺、

○永德三年卯月廿二日、嚴父隱岐守直行在判之領地

讓狀一通、

○應永三年二月十八日、島津上總介伊久在判之狀一

通、

○應永四年十二月、伊作大隅守久義與別府某別府某者行貞

增也、居于加世田有隙、丁此之時行貞不與久義、久義雖年

來含之、時未到勢亦不乘焉、粵コニテ同十二年、乞 太

守元久公于援兵、 公容久義之言、同年冬進到田

布施、圍行貞之營牟礼城者甚急也、雖阿多某・別府

某來救而衆寡不偶、翌年二月、行貞勢竭力屈、請

降遂獻城地於 元久公也、於茲乎去田布施、之市

來鄉而依頼市來氏、

○同七年三月卅日、 太守元久公手自加花押河邊郡

内神殿村可知行之狀一通、

○應永十三年九月廿六日、 元久公手自加花押賜阿

多觀音寺村及同所十町之地、

據焉考之、是時辞市來鄉、依領地而移居于阿多、

以後復緣舊領子孫可住田布施也、

○應永十八辛卯年卒、月日不傳焉、安永三甲午秋追

考、而以八月廿二日爲忌日、諡自參院殿永行得心

庵主、安牌于田布施紹聖寺、

○忠持

行綱 行隆 六郎 山城守 從五位下

○母伊作下野守親忠女字宝壽、卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以八月廿二日爲忌日、

諡智明院殿觀心惠法大姉、安牌于田布施紹聖寺、

○應永十八年八月廿二日、嚴父山城守行貞在判之領

地讓狀一通、正文在大隅州敷根士二階堂八左衛門

行寬家、

○同年九月十八日、島津上總介久世在判之契約狀一

通、

○同二十二年、行隆欲拔田布施城而不遂焉、

○同年正月十一日、行隆之寄進狀・古棟札寫、在田

布施金藏院舊記、

○卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以七月八

日爲忌日、諡高岩院殿樹山道榮大禪伯、安牌于田

布施紹聖寺、

女子 加世田別府某室

女子 上總山城守忠朝室

○古系圖不記女子、今據舊史載之、未詳姉妹之序、

○忠行

左衛門尉 從五位下 大夫判官

○母不詳其姓氏卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以七月八日爲忌日、諡本壽院殿法戒智永大姉安

牌于田布施紹聖寺、

○康正二年七月二十五日、將軍義政公大将御拜賀

之時忠行列供奉、

○康正三年卯月廿六日、忠長在判之狀一通、

○卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以十一月

十日爲忌日、諡實翁院殿心參道休大禪定門、安牌

于田布施紹聖寺、

1402

○行次

佐渡守 正六位下

○母不詳其姓氏卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以十一月十日爲忌日、諡珠光院殿如山了意大姉

安牌于田布施紹聖寺、

○細川右馬頭政國被呈 太守立久公狀在家藏、傳來

之由緒不詳、

○所獻 太守忠昌公之文書副書案文一通、

○明應八年八月六日、忠昌公御家老伊地知周防守

重貞・本田因幡守兼親連判之請取狀一通、

○古棟札寫在田布施金藏院舊記、

池邊西光坊阿弥陀堂再興明應七戊午年

大施主二階堂佐渡守入佛導師秀善敬白

○卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以六月七

日爲忌日、諡大透院殿一無了闕大禪定門、安牌于

田布施紹聖寺、

○行治

山城守 從五位下

○母不詳其姓氏卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以六月七日為忌日、諡瑞松院殿雪操妙白大姉、安牌于田布施紹聖寺、

○永正八年十月廿一日、下部女請狀一通、正文在大隅州敷根土二階堂八左衛門行寬家、

○所獻 太守貴久公起請文前書艸案三通、

○卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以十二月五日為忌日、諡觀性院殿廓道了然大禪定門、安牌于田布施紹聖寺、

○行存

隱岐守

○母不詳其姓氏卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以十二月五日為忌日、諡本智院殿心戒妙宗大姉、安牌于田布施紹聖寺、

○曩行隆獻城地以來封邑稍減、家聲亦不振、至行存門葉大衰弊、以無由奉事 公室、故猶沈淪在田布

施、

○卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以六月八日為忌日、諡廓翁院殿徹參了悟大居士、安牌于田布施紹聖寺、

○行昌

三郎左衛門尉 但馬介

○母不詳其姓氏卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以六月八日為忌日、諡覺心院殿自戒玄了大姉、安牌于田布施紹聖寺、

○家傳云、行昌在田布施之際、值良辰佳節、則鄉中之士庶早來、必先伸其慶詞、而後交訪親友之門、蓋亦有由來者乎、

○卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以七月廿九日為忌日、諡久松院殿繁山常榮大居士、安牌于田布施紹聖寺、

○定行

行吉 三左衛門

○生誕日不傳焉、母不詳其姓氏卒去年月不傳焉、安永三  
甲午秋追考、而以七月廿

九日為忌日、諡清壽院殿花林妙  
月大姉、安牌于田布施總聖寺

○寬永年間、肥前國高來郡島原之鄉民信耶蘇邪宗、

結黨蜂起于郡中、大將軍家光命關西之侯伯治

罰焉、此役也、寬永十五年寅正月十一日、定行發

於田布施、從軍于島原、

○寬文六年丙午十二月廿九日卒、法號泰心院殿直巖

永正大居士、葬於田布施正春庵、安牌于同寺、

行家

源三郎 源左衛門

○慶安元年戊子十一月十八日卒、法號奇峯院殿才

林良秀居士

行格

源三郎 源右衛門

○生誕日不傳焉、母不詳其姓氏慶安二年己丑七月廿日卒、  
法號心光院殿鏡惠妙臺大

姉

○伯父定行無嗣子、故為養子承正統、

女子

米

惠心 淨珊寺住持 天翁和尚

行格

源三郎 源右衛門

○實同氏源左衛門行家嫡男也、

○養母不詳其姓氏卒去年月不傳焉、安永三甲午秋追考、而以  
十二月廿九日為忌日、諡觀智院明山自鏡大

姉、而合錄于其追号於  
田布施正春庵定行墓石、

○寬文二年壬寅冬、太守光久公光臨于田布施、御

滯駕之際、十一月九日賜名源右衛門、即進上御着

一種・御樽一荷、奉拜謝之、

○先是所管藏之古系圖及文書達 光久公之高聞、蒙

可備 英覽釣命、即呈上之 英覽、畢而復賜焉、

公熟閱焉、寬文四年甲辰十二月十一日降 命曰、

行格之家實有遺證、則自今以往宜來居于府下也、

國老鎌田藏人正勝使喜入五郎兵衛久治傳 高命、

越同月十六日、去田布施初移居于覺島以奉事 公、

即賜扶助、

○爲二階堂氏先祖及養父三左衛門定行・實父行家夫婦創建石塔一基于福昌寺、即在于西塔中、

○御當家及 將軍家御直判之文書筒藏之、寬文中依公命呈上其文書數十通、

○庶流二階堂源大夫行朋トキ口上覺書艸案在家藏、

○延宝八年庚申二月十一日、奉願御番入、即同年三月四日、國老島津圖書久竹使諏訪采女兼延傳令曰、行格之家出自固有舊證、故以所恩免勤番也、

○綱貴公賜御扶助米五十俵、

○元禄元年九月十三日、奉 命移居于御里君夫人所在之庭園、國稱御里之内、於茲就帖佐次左衛門宗秀請其役職目、

宗秀達 公聽及令曰、行格之家有由緒之證、難以卑陋之目、故不見定其役名也、

○綱貴公光臨行格之敝廬數回、フツトヒ 恩賚進獻屢有差、

○當家筒藏之文書備 綱貴公之 英覽者再次、公每ツキ褒稱之、遂命國老佐多豊前久達、於御記錄所舉古系圖及文書惣計、而新裝潢之、藏函以賜之、其

製殆清麗矣、且降恩 旨曰、往歲若夫有敗損則須訴之、繕脩而復可賜焉也、

○宝永元年九月十九日、 綱貴公逝去矣、行格奉追舊日之殊遇、承恩許剃髮矣、翌年十一月八日、改名宗見、國老島津大藏久明使川上八郎左衛門久清

傳 命、

○同三年丙戌正月九日、讓家督于行宅隱居、

○正徳元年十二月廿九日卒、享年八十有餘、法號光善院殿星輝宗見大居士

女子 於源 於清

○寛文十三年癸丑七月廿二日誕生、母石神氏女享保十八

年癸丑四月十七日卒、法号春窓院殿梅間貞香大姉、葬于南林寺、安牌于同寺中月松院、

○太守綱貴公妾錦保丸及町田郷九郎久壽室於養島津仁十郎久福之母堂也、

○寶曆三年癸酉九月十五日卒、法號永照院殿月山妙

皎大姉

○行宅

行佐 源七 出右衛門



○延宝五丁巳歲誕生、母同前、

○元禄元年戊辰十二月十七日、奉仕 綱貴公、爲奧

御小姓、國老佐多豊前久達使渋谷周防重依傳

命、

○同五年壬申九月廿六日、轉御側御小姓役、此時亦

久達使重依傳 命、

○元禄十年丁丑閏二月十六日、 綱貴公賜名出右衛

門家傳云、出之字以爲當家由緒有門之文字、賜之旨蒙 御意拜領焉、

○嚴親行格以爲、 覺府來住之後、未獲捧家格之獻物、

而拜 公位也、是故元禄十二年己卯七月朔日、請

使行佐進上御太刀・馬代以拜謁 公位、即同月六

日被聽焉、國老喜入安房久亮使大野隼人久明傳

命、越同年九月十五日、初進上御太刀・馬代、拜

謁 太守綱貴公、野村太左衛門廣實執奏之、

○元禄十二年、轉御小納戸役兼務御小姓役、吉田次

郎清兼御納戸傳 命、月日不傳、

○宝永元年九月十九日、 綱貴公即世東武芝第、於

茲同年十一月廿三日夜、飯葬 遺體于本藩玉龍山

福昌寺、行佐追感舊恩、請剃髮供奉于葬場、然不

許剃髮、而免列葬場矣、翌年納 公遺髮于紀州高

野山、先期行佐頻請供奉曰、此行也若不所聽焉、

則以自己之費用可追隨、強請不止、 公憐其志之

切乎、即承恩許矣、於茲宝永二年四月六日、扈從

靈髮發覺府、閏四月三日到着高野山蓮金院、法筵

畢而同年五月還薩府、

○同二年三月五日、辭役、依 公即世也、同年閏四

月三日免焉、

○同年十月六日、佐多久達使相良清兵衛頼庸傳 高

命曰、御里邊 公子出遊之時、須陪從焉、是故賜

俸如舊矣、

○同三年丙戌正月九日、爲家督、國老島津中務久輝

使赤松新之丞則春傳 命、同年三月朔日、拜謁

太守吉貴公、進上御太刀・馬代奉拜謝之、掘甚左

衛門興昌執奏之、

○所賜行格御扶助米五十俵相續而賜焉、

○同七年十二月廿五日、入来院主馬重矩御番傳令曰、

乃父行格以来依有家世之舊證、雖所免御番、先是所建直觸格之号、是故在小組之列、咸以勤番矣、コキ行宅嘗在小組之列、以故令家格為代々小番、以往宜勤番也、

○享保五年正月廿八日爲納殿役、國老比志島隼人範房使平岡八郎大夫之品傳 命、

○同十年乙巳七月八日於江戶卒、法號悟得院殿壽道全長大居士、葬于東武芝大圓寺、安牌于同寺、薩府南林寺亦葬遺髮建墳墓、置牌於月松院、

女子 東郷藤兵衛重治妻

女子 辻

○元祿十五年壬午八月廿一日誕生、母和田六郎左衛

門助延女宝永四年丁亥五月五日卒、法号桂香院殿久安貞昌大姉、葬于南林寺、安牌于同寺中月松院、

○本城朝之丞輝昌妻

女子 多野

○元祿十六年癸未七月廿七日誕生、母同前、

○相良彦左衛門長意妻

○明和七年庚寅八月十日卒、蓮池院殿仁窓妙義大姉  
女子 縁

○正徳六年丙申二月四日誕生、母皆越氏女寛延四年辛卒、法号蓮清院殿芳心淨香大姉、葬于南林寺、安牌于同寺中月松院、

○藤山氏妻

○行道

源七 出右衛門

○享保六年辛丑三月三日誕生、母同前、

○同十一年丙午二月六日承家統、國老島津中務久貫使伊集院十藏久方傳 命時行道僅六歲、故本城朝之丞輝昌代行道承命、

○同年二月廿四日爲代々小番、國老島津木工久武使入来院主馬重矩傳 命、

○同年三月廿八日、進上家例之品于 太守繼豊公、

奉拜謝承統之恩惠此時亦輝昌代行道擇獻物、奉、此日拜謝承統及初謁公位之禮、

改名出右衛門、

○嚴親行宅卒去之時親舊等相議曰、行道幼稚、自是家資用不可贖也、於茲享保十一年丙午四月七日、上言家系之由緒、且自行格至行宅、相續而以賜御

扶助、故奉歎訴之、即同年五月廿五日、國老久貫使中神與五左衛門頼常降 恩命曰、以行道成長而奉仕 公爲其限、每歲賜八木貳拾五俵、到死拜戴焉、

○明和六年己丑二月七日卒、法號嶺翁院殿傑山全義大居士、葬于南林寺、安牌於同寺中月松院、

行篤

熊太郎 喜三太

○享保十乙巳年誕生、母同前、

男子 鉄藏

○宝曆六年丙子誕生、母妾腹

○同十一年辛巳九月十七日早世、法名慶玉童子、葬于笑岳寺、

女子 夭亡

○行且

初長興 行澄 行中 行寧 四郎次郎 森右衛門

門 蔀 主計

○享保八年癸卯十二月十八日誕生、實相良彦左衛門長意之三男、而母行宅第二女也、

○二階堂家傳書留、○長倉卜山覚書、

○平松中納言時行卿并雜掌兒島郡司南泉院權僧正書状等、

○寛政二年庚戌九月十五日死去、年六十八、法名實知院殿義翁道成大居士、葬于壽國寺、

女子 直

○寛延三年庚午四月朔日誕生、母同氏林左衛門行通

女

○初嫁村橋兵十郎久馮、離別後諏訪甚六伴兼室天明七年

丁未十二月廿三日死

行充

行孝 傳八郎 新十郎 蔀

○寛延四年辛未五月十六日誕生、母同前、

女子 照

○宝曆七年丁丑正月十六日誕生、母同前、

○嫁細瀧幸次郎將賢離別、而後爲島津平馬久通妻、

亦離別嫁肝屬彈正、

岩袈裟

○宝曆十二年壬午閏四月三日誕生、母同前、

○明和四年丁亥十一月十三日早世、法名溪水一滴童子、安牌于月松院、

行都

千次郎

○明和七年庚寅七月三日誕生、母同前、

行「典」

民次郎

○安永五年丙申十月十一日誕生、母肝屬主殿兼昌女

行(ママ)

(ママ)

○安永七年戊戌二月八日誕生、母同前、

15

庶流二階堂氏系圖

二階堂氏正統十一代左兵衛尉行雄之三男也

○行重 — 行隆 — 行義 — 行秀

隱岐右京進 隱岐采女正 兵部左衛門尉 安房守

大和守 内匠允 源左衛門尉 紀伊守 備前守  
右京亮

行恒 — 行弘 — 行唯 — 行前 — 行藤

行與 — 隆行 — 行友

民部左衛門尉 丹波守 尾張守

行前 式部少輔

○天正六年於日州高城戰死、

○行恒

源左衛門尉 傳右衛門尉

○仕于 太守義弘公、勤殿別當矣、

○扈從 太守義弘公、渡海于朝鮮國勞軍務矣、

○寬永十六年己卯十一月廿九日死于加治木、法名天

永常春居士

○行廣

弥六 源左衛門

○天正十一年癸未誕生、母富滿讀岐女寬永元年甲子九月廿二日死、法

名玉山妙  
金大姉

○慶長四年己亥三月九日、忠恒公有故親誅伊集院

忠棟入道幸侃于伏見宅、幸侃之嫡子源二郎忠真籠

日州庄内之都之城既振逆威、依之 忠恒公告 大

樹家康公賜暇而歸國、自將師庄内攻伐之、忠真失

防禦之術、慮滅亡之近、獻諸城而降參、三月十四

日、忠恒公與 龍伯公共進軍入都之城、翌日唱

凱歌歸軍、時行廣從 太守公處々勞軍務、

○同五年庚子九月十五日、濃州関ヶ原合戦、関西之

軍忽敗、太守義弘公向強敵破重圍、不乱我軍退

去、而經伊勢伊賀大和河内、十七日之夜到著泉州

平野、自平野入田邊屋道與于住吉之宅、其後被移

堺之塩屋孫右衛門之家、二十二日之曉解纜、而二

十九日著船日州細島至富隈、行廣生年十八、自戰

場至于此、須臾不遠君邊、所以供奉遂首尾也、於

是拜領感牘及新恩地五十斛矣、

○寬永十四年丁丑正月二十日死、享年五十五、法号

慶庵紹永居士

和泉 ○母同前、

○爲松元德玄入道之養子、

行親 ○母同前、

傳右衛門

○宣行

始行昌 采女 丹波 十左衛門

○母日野内膳資顯入道如孫女

○寬文四年甲辰正月廿四日死、法号唯我常也居士

慶尊坊

始弥右衛門

○寛永十一年甲戌四月廿六日死、號權大僧都慶尊、

女子 ○四元八郎兵衛忠守室

○行朋

三郎兵衛 兵右衛門 源大夫

○母帖佐長右衛門宗康女

○太守綱貴公以叶結忝賜于行朋、謹拜戴之、爲當家之定紋也、

○天和三年癸亥九月廿八日、太守綱貴公忝賁臨於

行朋之宅、御令弟島津内匠久住・國老佐多豊前久

達候于御前、時行朋獻盛膳、事竟而 公謂行朋曰、

此地古來唱枯木坂、自今汝之宅地之邊稱常盤木谷、

世人亦可稱此名也、於是 公詠御歌、久住亦吟一

首忝賜于行朋、蒙貽後世宜爲當家之家珍之恩命、

行朋謹欲奉謝 尊命之忝、頻流泪辭 御前、公

御氣宇能御一宿於行朋之宅、明朝又進上御膳、

公光臨于行朋之宅數回、又拜賜品物若干也、依之裝飾御歌爲掛軸、傳子孫以爲當家之綿榮也、

○貞享五年戊辰九月五日、太守綱貴公賜新恩之采

地五百斛、國老島津縫殿久寛使用人福屋助左衛門

兼貞・黒葛原吉左衛門忠通傳之、翌六日、行朋登

城就伊勢八右衛門貞庸拜謝鴻恩之忝矣、

○元禄二年己巳二月七日、被補薩州久志秋目地頭職、

○同九年丙子十二月十四日死、法名一如院殿眞觀實

相大居士

行道 ○母同前、

三七 仲右衛門

女子 ○二階堂五左衛門行貞室

女子 ○富山権平義延室 ○母同上、

女子

○承應二年癸巳御誕生、

○二十代之太守綱貴公之爲國夫人、奉称於重御方也、

○延宝二年甲寅四月六日、太守公爲述職發魔城赴

東武、於重御方屬于 大駕到武州、同三年乙卯六

月、國夫人歸薩府、

○延宝三年乙卯九月十七日、菊三郎公後奉稱松平修

是則二十一代之太守也御誕生覺府、御母堂者於重御方也、御

令弟菊二郎君亦生此御腹矣、

○天和二年壬戌二月六日、太守綱貴公爲參觀發薩

府赴武都、國夫人從尊輿四月六日到著于江府也、

○同三年癸亥二月十九日辰刻、逝去于東都芝第、享年三十一、稱蘭室院殿身安貞法大姉、葬禮東都大

圓寺、置牌於薩州福昌寺裏惠燈院、

行明アキ

始行乘 采女 十郎右衛門 八大夫

○享保十二年丁未十月廿日死、法名榮樂院殿唯山泰

心大居士

女子

赤塚清左衛門眞興室

行紹

牛菊 源六 源左衛門

○勤御小姓、○先父行朋死去、

○貞享四年丁卯八月十二日死于江府旅邸、法名道徹

了禪居士、葬于東都大圓寺、

尚芳

初尚方 新六 新左衛門 新右衛門 與大夫

○爲左近丞四郎右衛門尚昌之養子、

行篤

新五右衛門

○元祿三年庚午三月二日誕生、母仁礼民部左衛門頼

定女

行登

始行重 源助 十郎兵衛

○元祿四年辛未誕生、母同、

女子

岩 ○平田平太左衛門位充室

○元祿七年甲戌九月廿七日誕生、母同、

○行篤

始行能 行宏 行生 行寧 新五右衛門 舍人

○元禄三年庚午三月二日誕生、母仁礼民部左衛門頼定女

○元來行紹・行篤・行登雖爲兄弟、家兄行紹早世無嗣、以故奉 太守綱貴公之尊言、行篤・行登爲兄行紹之直子矣、

○元禄三年九月六日、太守綱貴公柱 光駕於行篤之宅、忝賜名於新五右衛門、御手自書之拜戴之、因進上御太刀・馬代奉禮謝之、且賜金子三百匹之御目錄、

○同十一年戊寅二月廿八日、嗣君吉貴公光臨于行篤之宅、獻盛膳、行篤母及行重各頂戴御盃、御交代久達・國老島津大學忠守候于 御前矣、

○同十四年辛巳正月十日、於築出之御茶亭獻盛膳於吉貴公、時拜戴 御盃御手自、賜印籠・巾著緒紋亞媽珊瑚、且賜金子五百匹之御目錄、

○同十五年壬午九月十三日、嗣君吉貴公柱 光駕於私宅、行篤進上御前、御交代久達爲御相伴、

公賜御盃于行篤、且拜領御目錄、

○宝永二年乙酉十月三日、補薩州山川地頭職、國老肝屬主殿久兼傳之、

○同年十月六日、於薩府御四配屋敷、國老肝屬主殿久兼令用人相良清兵衛頼庸傳 公命曰、行篤年頭歲暮諸節句謁 城營見于 太守公、則須爲番頭稱今寄之格也、行篤奉謝 尊命之忝退去矣、

○同年十二月廿八日、獻御太刀一腰・銀馬代・二種一荷、奉拜謁 太守吉貴公、嚮是奉謝賜家督之事、堀甚左衛門興昌奏達之、

○同四年丁亥十月廿一日、轉補隅州鹿屋地頭職、國老島津大藏久明傳之、

○同七年正月廿五日、補二番組御番頭、國老肝屬主殿久兼傳 貴命、同年二月朔日、謁 太守公獻御太刀一腰・銀馬代、奉謝之矣、

○享保三年戊戌二月廿八日、任御側詰御小姓頭役、國老比志島隼人範房傳之、因同年三月廿五日、於魔城御輿獻御膳于 太守公、奉謝命役之忝也、



- 同年四月十一日、太守吉貴公有命賜職祿百五十斛、相良清兵衛頼庸傳實命、
- 同五年庚子六月廿三日、吉貴公爲參觀發府城、取路於九州中國東海、八月十一日著御于大坂、同十九日、行篤奉 高命、代于 公詣伊勢大神宮、止宿于御炊太夫之家、廿五日發勢州、廿八日於池鯉鮒駛從于 高駕、九月十二日到著于東都矣、
- 同六年辛丑正月二日、吉貴公有徵恙不能謁 玉城、以故行篤奉使乎之命、著法服登 玉城、留守居川上後五右衛門親房依紹介於大廣間謁執政、獻年頭賀儀之御太刀、內藤丹波守政森奏進之、
- 同年六月廿八日、太守繼豐公登 玉城謁 大樹吉宗公、禮謝繼統之賀儀、從先躡御家臣九人於白書院奉拜謁 將軍家、第一番島津玄著貴備一族取、第二番島津內膳久兵・種子島彈正伊時・名越以上御家老右膳恒渡以上御家老、各獻上御太刀一腰・銀馬代・時服六領、第六以行篤番頭奉謁 將軍家、奉獻御太刀一腰・銀馬代・時服五領酒井修理太夫、忠春奏進之、次御用人

- 三雲新兵衛定恒・宮之原甚大夫重行・伊集院權右衛門久盛・福山平大夫安村等亦取謁矣、既而行篤詣於執政各館、進上御太刀一腰・銀馬代、奉謝取謁之忝、各以書謝之矣、
- 同年六月、吉貴公致仕之後、奉 命奉事于繼豐公矣、
- 吉貴公致仕之後初賜告、同七年壬寅二月十六日、發東都赴薩州、行篤扈從 尊輿、四月廿一日到著薩府、直入大儀之館、行篤舍 命自出水先 公四月十六日到于魔府也、
- 同七年十二月廿一日任大目附役、賜職祿三百斛、國老島津內記久貫傳 命、同日賜名舍人、國老島津將監久當傳之、
- 同九年甲辰九月四日、轉補薩州邊地頭職、國老島津大藏久明傳之、
- 同十一年丙午八月廿三日、以國老範房告 吉貴公、以風車花爲當家之替紋也、
- 同十三年戊申四月初日、吉貴公光臨于行篤之宅、

獻御膳、國老比志島範房・近習鎌田平右衛門政香候 御前、而 公賜御盃於行篤、時三幅對掛軸左ハ禮樓、中ハ東方朔、右ハ觀機樹、各匣入・三界房・楊弓的等獻之、且母妻亦進上品物、奉拜謁 尊顏、各蒙懇篤之美音矣、○同十四年己酉六月廿三日、國老島津大藏久春傳御旨於行篤曰、今歲 繼豊公結婚姻於 竹姬君御方、而以今歲暮有可整婚禮之 台命、故以行篤命 吉貴公之使節也、行篤舍 命、同月廿六日發薩府、七月廿五日到江府、即日謁 繼豊公、奉述 吉貴公所命之旨趣、且國老伊集院藏人久矩之依紹价、奉謁于嗣君益之助公矣、

○同十九年甲寅二月二日、 繼豊公任若御年寄役、賜職田四百斛矣、翌年六月廿八日、獻上御太刀一腰・二種一荷奉禮謝之、○同年六月十一日、 繼豊公御簾中竹姬君御方、以國老島津中務久貫拜戴白銀二枚矣、○嚮是雖行篤之病頗得快驗、有時氣字不全、以故奉訴若年寄役恩免之事達 繼豊公之聽、元文二年丁巳五月初日、如願恩許御役、國老

栴山主計久初令御用人鎌田源左衛門政昌傳之、同月廿七日、賜御養料百俵、郷原金大夫久雄傳 命矣、  
〔久登〕

初行重 源助 十郎兵衛

○元祿四年辛未誕生、母同上、

○同五年壬申九月十七日、 綱貴公枉駕於嚴父行朋之宅、時有 命改賜名源助、○宝永四年丁亥十月二日、命御側御小姓、市來勘左衛門家貫執次之、

○同年十月廿八日、獻弓於 吉貴公、初奉謝拜謁

之礼矣、○正德二年壬辰正月九日、命御小納戸市來勘左衛門家貫執次之、○同三年癸巳九月晦日、

有 命改賜名十郎兵衛、○享保二年丁酉六月十一日、 吉貴公 將軍宣下之後初賜告、同月廿五日

發東都赴薩州、行登扈從 尊輿、繫船於藝州御手洗、時登病竟死去矣、法名立功院傑秀源英居士、

葬于同所清光寺、

女子 萬龜 ○島津筑後久珍室

○正德五年乙未六月十一日誕生、母島津内記久文女

女子 阿久理 ○伊集院十右衛門久馮室

○享保元年丙申十月廿一日誕生、母同上、

女子 於盈 ○郷原金大夫久田室

○享保八年癸卯二月十四日誕生、母同上、

○行端

始高次郎 源大夫

○享保十年乙巳十月廿八日誕生、母同上、

○太守吉貴公以相良源大夫長儀傳 尊命於嚴親行篤

曰、嫡子高次郎久不入于 御覽之条、携之明日有

可參候大磯館之命、因元文三年<sup>(1734)</sup>庚午十二月朔日、

父子相共參候于大磯館矣、時有 命高次郎於大磯

之御家老坐元服、國老比志島隼人範房加冠、島津

権五郎久亮爲之理髮也、乃賜名源大夫号行端、而

於鶴之間獻御肴一折奉謝之、行篤亦拜謁 公奉謝

之、則賜懇篤之美音、且令國老範房・若御年寄島

津権左衛門久道賜元服之印章、同月十五日、行端

登 薨城獻納御太刀一腰・御馬代銀枚・二種一荷

于 太守繼豊公、同品于 又三郎忠顯公、奉礼謝

之、喜入主膳久甫奏達之、○延享四年丁卯七月廿

二日命御目附役、新納次郎兵衛久品傳之、○寛延

四年辛未九月四日任御近習役<sup>繼豊公、御方</sup>、賜職祿七十

三俵、若御年寄河野八郎左衛門通興傳之、

行撰

始行佐 彦次郎 佐大夫 千大夫

○享保十二年丁未四月十八日誕生、母同上、

○寛保元年辛酉五月朔日、候于大磯館奉謁 吉貴公、

公曰、彦次郎長高蒙可除前髮之恩命、以故同日於

嚴親行篤宅除前髮、時年十五、

○宝曆二年壬申八月十五日、登 城獻弓於 太守重

年公、初奉謁 尊顔、穎娃内膳久風奏達之、時改

名千大夫、町田郷九郎久儔傳達之、

直五郎

○延享三年丙寅二月廿二日誕生、母比志島隼人範房女

行(ママ)

常之助

○寬延三年庚午十一月十三日誕生、母同前、

二階堂氏系譜之内

○行光適子紀伊權守行盛之三男信濃判官入道行忠之子丹

後守行宗之二男山城守行貞之三男丹後守行廣始行四世

太夫判官之忠之曾孫六郷彈正道行隨事 内大臣家康公、

住羽州仙北郡内六郷邑、因改二階堂為六郷氏、其子兵

庫頭政壽、慶長五年上杉景勝謀叛之時、政壽在隣境不

黨焉、從 家康公勵軍忠、公賞之加賜都合一万石餘

於常州府中地、其後 大樹秀忠公轉府中加賜一万石賜

羽州由利郡本莊、以為城主、子孫相續仕 幕府也、

○行光餘胤因幡守行秋其子右馬允行晴之曾孫石谷十郎右

衛門政清生遠州西郷莊石谷邑、因改二階堂為石谷氏、

奉事 家康公、其後孫御旗本今石谷豊前守清昌也、

○下野國喜連川之領主喜連川氏

足利持氏嫡流

之世臣有二階堂織

部貞英云者、安永中於江府竊求所緣尋問其家系、即報

曰、自曩祖山城守行政五世相續奉仕 鎌倉幕府、為政

所之執事矣、信濃守貞頼・信濃守貞繼從事足利左兵衛

督持氏、自是歷數世、中務行綱・信濃守行秀延任下総

古河城主足利氏

持氏嫡流

、其子亦太郎實綱、其子下総守元

綱、世々為喜連川氏之長臣也、蓋貞頼以來三代任信濃

守、則行光之支族也欵、

○雖行光當家之庶子也、四世相尋為政所執事、故有家勢、

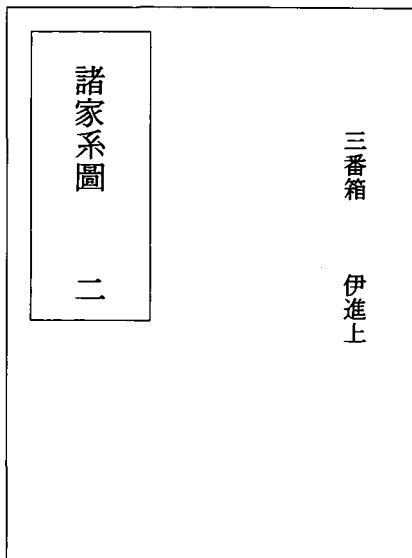
子孫亦繁茂矣、然今考諸譜、未見行光之嫡流者、猶支

流在諸州乎、

○行光之履歷參出於東鑑者多矣、採摭別錄、如今摘其要

以附于傳、自行盛以下所載東鑑、總略之、以別錄、

(表紙)



- 諸家系圖二
- 一 松崎氏
  - 一 平岡氏 藤原姓
  - 一 肝付氏 庶流 伴姓
  - 一 床波氏
  - 一 吉富氏
  - 一 長谷場氏
  - 一 萩原氏 伴姓
  - 一 称占氏 (マウ)
  - 一 伊地知氏 庶流

17 (中表紙)

「松崎采女貞悦家之系圖」

17の1 此系圖者、延宝四年辰九月より同五年巳十二月迄、松崎

采女貞悦六十五才ニ而為被寫置山田聖榮之自記式冊之裏ニ有之、横切小冊ニ而連續致し兼候間、暫番付して取崩し如本繼合せ、此通寫取置、自記者本之様ニ冊子おくもの也、

伊地知小十郎

(天保五年)

甲午七月廿四日

季安

但貞悦延宝二年之事迄書終へ有之、且貞悦ハ寛永十八年十月御家之上り系圖文書清書ニ罷出為被勤事、鳴津彈正殿日記ニ相見得申候へハ、貞悦自撰之系圖ニ候半、

源氏松崎系圖 幕ノ紋、輪ノ内違鷹ノ羽、旗半ヨリ  
元ハ黒、末ハ昇、横ニ五色ノ筋五、

○清和天皇

號水尾帝、諱惟仁、人皇五十五代文德帝第四王子、  
母皇太后明子、號染殿后、藤原攝政大臣良房女也、  
天安二年戊寅十一月七日即位、元年在己卯、治天  
下十八年十一月廿九日、禪于太子、元慶三年己亥  
五月八日落筋、同四年庚子十二月、年三十一崩、  
葬粟田山、置骨於水尾山、法名始素眞又圓覺

陽成天皇
貞固親王 〔元〕
貞景親王 〔平〕
貞保親王 〔保〕
貞平親王
貞純親王
貞觀十六年甲午生、清和六男、〔母神祇伯棟貞女〕 年二十五、時一萬三千佛像安置于諸國、延喜十六 年丙子五月七日薨、〔年四十三〕、号桃園親王、

〔數〕  
貞公親王

〔眞眞親王〕

長猷親王

〔隆〕  
長淵親王

長賴親王

經基

正四位 鎮守府將軍 號六孫王、始賜源氏姓、

〔天德五年六月十五日賜姓源氏、十一月四日卒〕

滿仲

正四位下 鎮守府將軍 號多田院、

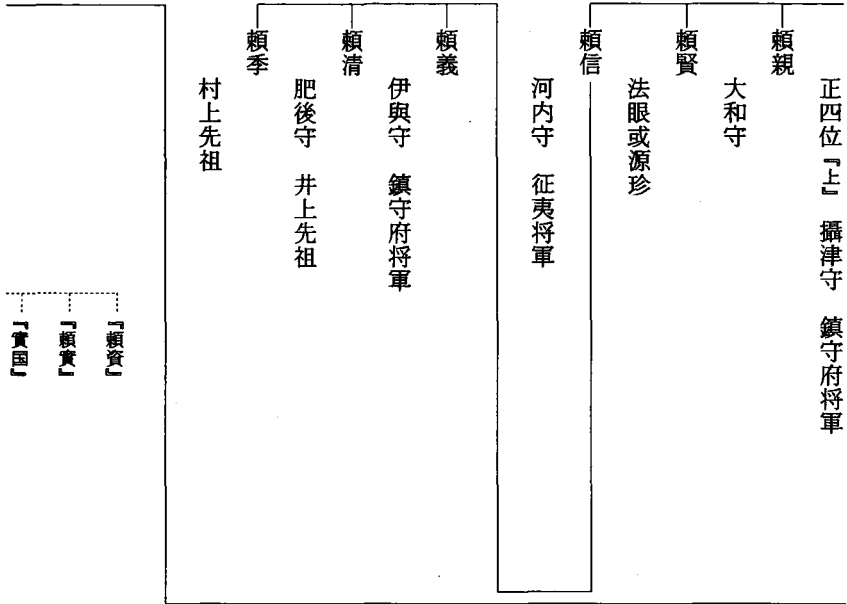
滿政

滿季

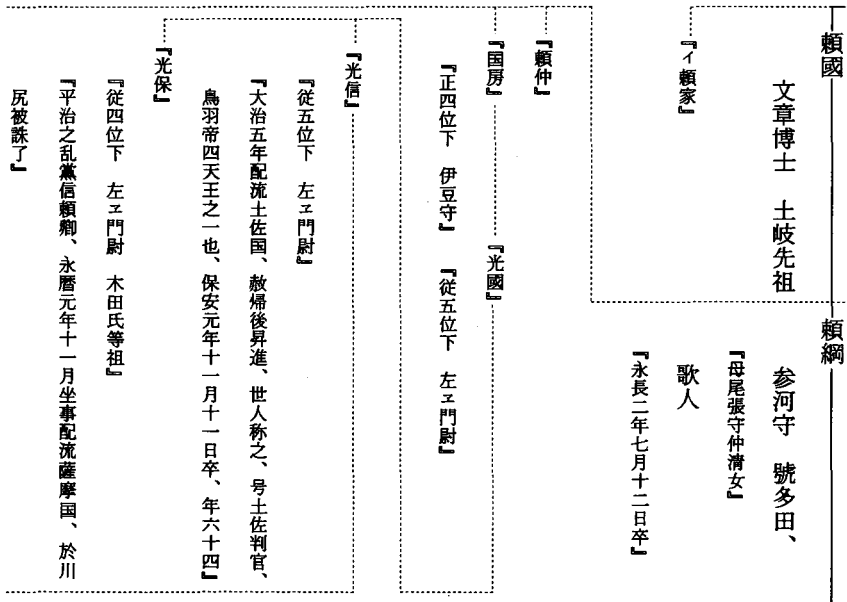
〔上〕  
滿重

〔下〕  
滿快

賴光



「賴資」  
「賴實」  
「實國」



「節光」

「光基」……………「光衡」……………「光行」

「淺野等祖」……………「号土岐、左工門」……………「建保四年任左

保元乱勤王内裏」……………「実光長子カ」……………「工門少尉」

「三光長」

「寿永二年任伊与守」

「二光重」

「光定」……………「光具」

「出羽 藏人 為仲正子」……………「非藏人」……………「判官」

「四光義」……………「從五位下」

「出羽冠者」

「明國 從四位下 下野守」

仲政

「從五位上」……………「兵庫頭 号馬場、

頼政

源三位 仁平三年癸酉於宮中鵜射、

仲綱

頼行

女子

「8」光重

一本号三郎、深栖三郎 母中宮牛大進源行家女」

「實光信子也、為仲政猶子、住于」

下野國「方」西、「号」波多野御曹司也、改姓号

松崎貞為、

泰政

号瀧口、右馬丞「允」

良知

泰光

少僧都

「從五位下 薩摩守」

望政

乘智

帶刀先生 依頼政事配流伊豆國、

法橋

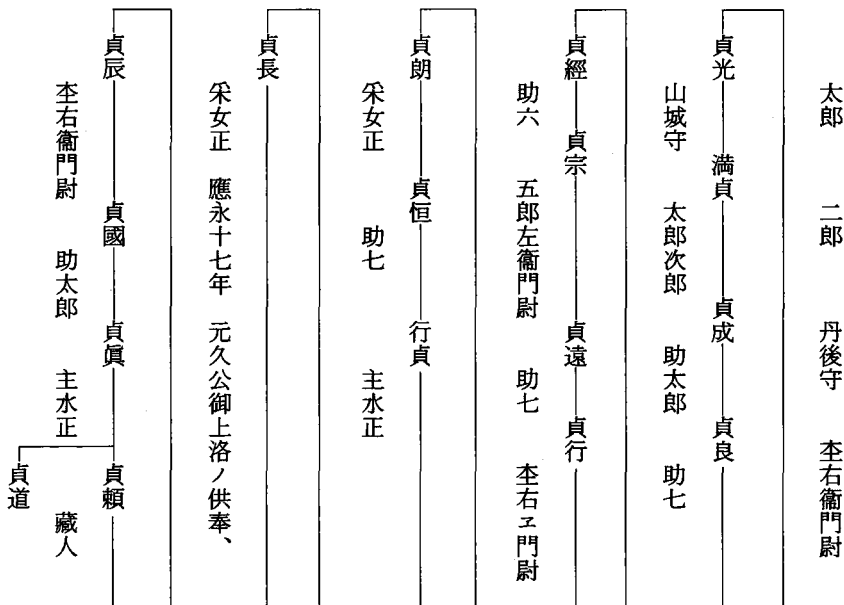
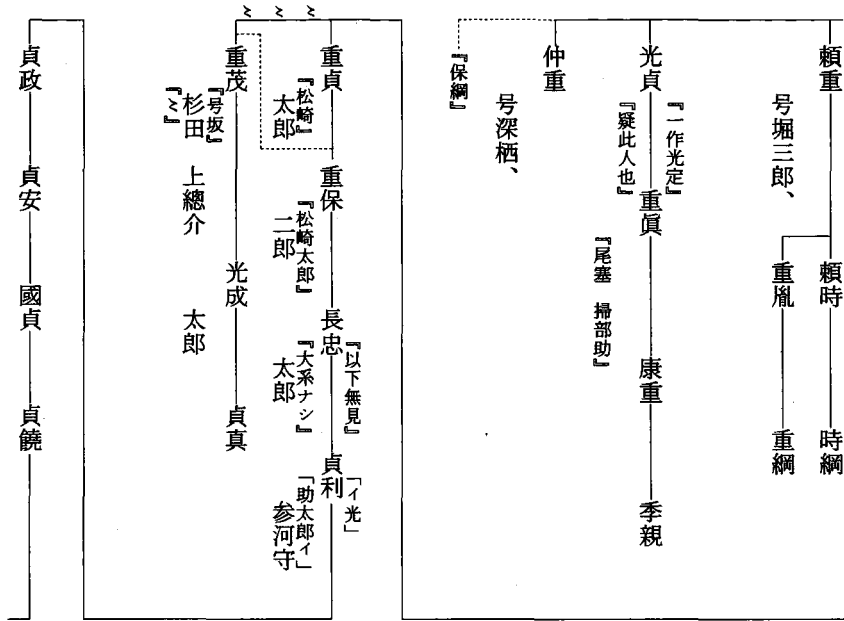
女子

待賢門院 美濃局

重清

號松崎二郎、





助太郎

貞秀

五郎左衛門尉

貞近

采女正

貞隆

五郎左衛門尉

文明十

「光重孫太郎重貞後胤也、  
下薩州以來及數世貞隆住  
日州イニ」

為貞

貞房

貞次

七年乙巳六月廿一日、  
忠昌公飭肥ノ陳後攻  
ノ時戰死、法名永觀

二郎

助七

女子

女子

貞守

五郎左衛門尉

秀貞

五郎左衛門尉

行貞

主水正

貞政

丹後守

女子

女子二人

貞昭

女子

助二郎

貞義

助二郎

貞康

助太郎

女子

貞昌

助六

貞充

助太郎 享祿元年戊子三月二日誕生、弘治二年

丙辰十一月十六日、年三十、日州於福島戰死、

法名梅山永香、妻萩原女也、

貞清

五郎左衛門 永祿四年辛酉七月十二日、於廻戰

死、年卅二、法名花岩玄香

出家

法印 權大僧都 快貞大和尚 元和三年丁巳九

月廿日、年八十六遷化、

貞昌

與五郎 天正十三年乙酉三月廿四日、肥前國於

島原戰死、法名光忠

太郎

早世 法名道珠

女子

藥丸ノ家、天正十年五月廿七日死、法名梅院妙香、子三人、内出家一人、聖律堯言堅國大和尚、其名世ニ鳴、秀吉公度々被召出名譽多、元年乙卯二月廿二日ニ山城國葛野郡廣隆寺於桂宮院入滅、三年前ニ四十二ノ二月廿二日巳ノ刻遷化ト云ヲキン時刻不違、京中稱美之、

貞澄

熊次郎 助六 采女正 本右衛門尉 天文廿一年壬子九月八日誕生、妻水間越前守女

○義久公文祿四年乙未ニ富隈へ御移居ノ時、阿多ヨリ濱市へ被召移、加増六十石拜領也、

隅州桑原郡稻葉崎之村諸侍令配分候、其余分者門割付候之説、

高九斛 此外壱石姫城村ニ給、

右之分為加増被指遣者也、

文祿五年

三月拾七日

伊集院右衛門入道

幸侃

松崎采女正殿

薩州伊佐郡大口之内

高五拾石

北柿原村之内

高九石

くり野稻葉崎村之内

高壹石

曾於郡姫城村之内

合六拾石此内加増五拾九石

伊集院右衛門入道

文祿五年十二月二日

幸侃

益崎采女正殿

○義久公慶長二年丁酉上都致御供、於伏見御眼鏡致拜領也、同十年乙巳ニ國府御移ノ時、國府へ被召移、同十六年辛亥正月廿一日、薨御時剃髮シテ号宗泉、同年ノ十一月、薨島へ被召移也、

(頭注)

「從國分之移衆

高七十七石四升五合

松崎左右入道殿

(門付免カ)  
■ ■ ■ 一夕

龍伯様御代

国分衆中高帳

高七拾石四升五合

松崎左右衛門

元和六年二月二十七日

鹿兒府衆中高究之帳

高七十五石

松崎左右衛門入道殿  
「

○慶長十八年癸丑、江戸へ御質始り、義弘公御姫

様御上洛御代官ニテ、役人四本金右衛門・淵邊領  
右衛門・鳥井與右衛門・堅山丹後・青山與次右衛  
門・迫田源右衛門・山下治右衛門・田尻小左衛門・  
本田彦左衛門・村田源左衛門相具シ、魔島ヲ六月  
廿四日御發足ノ致御供、同十一月十六日ニ江戸櫻  
田御屋敷へ御入宅也、四ヶ年相詰、元和元年丙辰  
四月御暇被下、同十八日ニ江戸ヲ立候時、御盃頂  
戴仕、御小袖ニ致拜領、魔島へ六月七日致參着、  
是櫻田御屋敷始也、

○元和五年ヨリ御藏入代官ニテ候、同六年ニ御質様  
御下向ニテ谷山へ被成御座候、御上洛ノ代官其佳  
例ヲ以、又代官被仰付ヨシニテ左右方承、島津下  
野守殿久元へ御祝儀マテ首尾勤也、

○寛永十二年乙亥十一月廿五日、年八十四薨、五歳  
ノ時父貞充戦死、十歳ノ時伯父貞清戦死ニテ、孤  
ニシテ家ヲ致中興、七十一歳マテ公事相勤、生涯  
大ナル無過、法名覺翁宗泉

貞綱

熊徳 助七 喜右衛門尉 天正十六年戊子正月

二日誕生、妻指宿左近女 「病人去家誓イ」

家久公元和三年・同七年ノ御上洛、日光マテ致供奉、若年ヨリ禪聖ノ両家人、心身不乱□□テ安然タリ、筆ヲ揮事近代ニハ達者也、寛永十年癸酉七月十一日、年四十六歳薨、法名松屋常青

(頭注)

「寛永九年高帳

百石 松崎喜右衛門殿」

(本文書ハ「旧記雜録後編五」五九三号文書ノ抄ナルベシ)

貞盛

龜次郎 小七 文祿四年乙未四月朔日誕生、寛

永九年壬申、家久公御上洛ノ致御供、同十二

年乙亥七月廿六日、年四十一卒、法名風山秋月、

妻坂元隠岐女

(イナ)

貞悦

熊徳 采女 慶長十七年壬子六月二日誕生、妻

吉田新左衛門清房女也、 「吟味役イ」

○家久公寛永元年甲子九月九日ニ年十三ニテ致御目見得、任采女、寛永四年丁卯二月、年十六ニテ前髪取也、○寛永九年壬申ノ夏、年廿一ニテ上洛

被仰付、「六月十四日鹿兒島立イ」同十一年甲戌五月十

一日致下着、「五月イ」東隣ノ相良善右衛門氣違、

刀ヲ拔持致屋簷、依切狂、一門其外雖走集、狂人

ナレハ不痛ヤウニ可捕ト方便ノ處ニ不慮採也、同

十四年丁丑江戸へ参、其冬ヨリ肥前國天草島原ノ

土民鬼利死且ノ結徒黨、因茲翌十五年戊寅正月十

三日ニ右就蜂起、光久公俄有御下向、此時我事御

家老鎌田出雲殿ヨリ直ニ黒葛原治部右エ門ト兩人

へ被仰付事候テ、御留守ハ江戸へ被召置、同五月

「伊勢龜殿美濃路御下向ノ致御供也イ」伊勢龜殿并御懷御下

下向ス、正保四年丁亥大島ノ取納ニ三月二日鹿島向ノ宿御被仰付、松平越中殿城下桑名ヲ除美濃路御通道ニテ、致出船、同十九日名瀬着岸、二穂致取納 慶安二

七月十三日ニ谷山へ御着マテ致御供也イ  
年己丑六月十九日致帰宅也、慶安四年辛卯 綱久

公前髪御取ノ御祝儀并琉球へ震旦ノ使者來着ノ御  
使被仰付、ノ使者ニ七月廿八日ニ魔鳥ヲ罷立、八

月十二日ニ大坂上着候へハ江戸へ窄人油井正雪・

丸橋忠彌・川原十郎兵頭取ニテ、御藏ノ七千石ノ

塩硝ニ火ヲ付、江戸中ヲ可焼トノ謀叛有リ、後見

ニ大名有之由ニテ、「江戸へ出入ノ状、関所ニテ披見ノ由

ニテイニ」大坂ヨリ道中夜白人馬騒動ニ付、大坂ヲ

立、不致一睡日數五日、八月十七日ニ江戸へ致参

着、「同廿日ニ御前髪御取ノ御祝物二種一荷芝御屋敷へ持参」

御祝物差上、「致御目見得、九月十四日罷下也、

〔同廿八日御返書上〕

(頭注)

〔寛永十三年子九月

鹿兒嶋衆中屋敷帳

下屋舖四せ 松崎采女正殿

下々屋敷四せ廿三分

滿坂里介殿  
松崎小七郎殿

(本文書へ「旧記雜錄後編五」九八五号文書ノ抄ナルベシ)

○慶安五年壬辰致上洛在江戸ノ□□、承應二年癸巳

九月自琉球 公方様御慈目為御祝使、國頭王子

□□ 光久公被召列日光へ御参詣ノ致御供、其冬

罷下也、萬治二年己亥□□御誕生前ノヨシニテ、

御進上ノ御腰物為御覽合、堀尾正宗・貞宗・左文

字□□俊・兼光・則光江戸へ被召上候、致持参、

十一月致下向也、○光久公寛□□癸卯春御上洛ノ

御供、二月十四日ノ□□坂奉待道中跡サラヒ被仰

付、四月廿九日江戸へ御着也、大坂へ御滞留中御

番ノ賦番頭嶋津清太夫殿・平山次郎右衛門・大山

六右衛門・是枝喜右衛門・喜入□□衛門・北條次

郎右衛門・上村茂兵衛・奈須五左衛門・平山久馬

□□・松崎采女、江戸御番賦番頭樺山長門殿・本

田與兵衛□□門・名越清右衛門・平山八右衛門・

澤崎主水・税所弥□□武兵衛・市來次郎左エ門・肥後茂左衛門・相良善左エ門・猿渡□□六郎右エ門・宇都八弥左エ門・三雲弥太夫・館小左エ門・白尾金左□□采女・伊勢弥五兵衛也、同六月三日ニ御國へ御急用ノ御使□□□江戶ヲ立、同廿六日魔島へ致參着、同八月十四日御返事承 延□□道具森喜兵衛餅餌ノ人足召召列罷立、京都ヨリ金子□□與ハ一ツニ乗セ、宰領御道具衆長尾権兵衛内藤繁右エ門□□御國御用相濟、又江戶へ九月致參□□御老中御振舞ノ時式臺ノ誥衆島津清□□郎右衛門・名越清右衛門・岩元清右□□衛門・黒田加兵衛・左近允四郎左エ門・山崎□□喜右衛門・税所弥五右エ門也、同十二月十日ニ 綱久公ヨリ公方様寒中ノ窺御機嫌ノ使者、騎馬ニテ御留守居伊勢彌兵衛同道ニテ酒井雅樂頭殿へ參、夫ヨリ御老中阿部豊後守殿・稻葉美濃守殿・久世大和守殿へ參、何モ御直ニ御口上被聞召候、夫ヨリ 御城へ上リ御奏者松平備前守殿へ御進上ノ七嶋經節箱

17の9

(眞注)

懸御目、首尾能退ノ時、御坐敷廣間千帖敷定舞臺白書院蘇鉄間奥玄喚迄致見物、夫ヨリ北條安房殿・伊澤隼人殿へ御書致持參、同四年甲辰四月御下向ノ供奉上下共ニ跡サラへ相勤也、同五年乙巳三月秋月佐渡殿家來、名貫村庄屋川野長兵衛上下廿四人、高岡へ欠落ニ付、佐渡殿へ使者被遣、家老白井久馬、延寶二年甲寅七月、大坂ノ播磨屋七右エ門弟五兵衛、當町へ商下居シニ様子有ハ、大坂御町奉行石丸石見守殿へ使者被仰付、道中大坂篤被下、御留守新納喜右衛門同道ニテ、石丸石見守殿へ差出、御直シ被聞召、無口能九月、

「萬治二年己亥

鹿兒嶋衆中高帳

七拾三石三斗

高(直カ)

松崎采女殿」

(本文書ハ「日記雜錄追録」二八五九号文書ノ抄ナルベシ)

「イニ」

矢上五郎時澄

沙弥阿妙

阿實

貞満

五郎左衛門 實中村勸解由左衛門義康三男  
郡奉行 御書物奉行 公事奉行

貞國

助七 喜右衛門 五郎左衛門

(中表紙)

〔慶應四年戊辰三月寫終〕

伊地知季通

藤原姓長谷場氏系圖

長谷場氏系圖

大織冠鎌足四世孫 上世略、

氏長者 藏人頭 始式部太輔 右少弁 大判司  
左衛門大尉 左大臣 正仁位 母同從七位上百

濟永繼女 或本云、母正五下飛鳥部奈正曆女

天長三七廿四薨、贈太政大臣正一位、号閑院左

大臣、

●冬嗣

沙弥純阿

貞和比

某

兵庫允久純

鶴一九 正平

正平 千代熊丸

文明 弥四郎

貞治 覺阿

建武 六郎久純

康永 十郎兵衛尉幸純

正平 實純

貞治 弥六氏純

貞治 弥五郎久武

貞和 道阿

元惠

乙房丸



●長良

贈大政大臣正一位 齊衡三  
七三日薨、五十五 母阿波  
守真作女 權中納言 左衛  
門督 從二位 号枇杷中納  
言、

●國經

按察使 法性  
寺祖 藏人頭  
正二位 大納  
言 左衛門督  
母從五下難洲  
女

●遠經

正二位 大納言 左工  
門督 右大弁 從四上  
内藏頭 右少弁 右兵  
衛督 正四下 母同國  
從五下 母大和  
守門成女  
少貳 筑前守

●良範

鎮守府將軍 從五下 伊豫掾 藏人頭 右兵  
衛佐 按察使 左馬助 西海也、依勅定日本  
純友

武家始  
國兩將軍ニ被定、西三十三ヶ國將軍ニテ、伊  
与國ウハノ郡ニ在城、有説ニ依謀叛御改易欵、

●●良房

東国ハ政門將軍ト云、是も逆心ニテ誅罰セラ  
ル、也、  
左衛門督 大學頭 右大臣 右近大將 准三后  
按察使 六位藏人頭 攝政 太政大臣 從一位  
氏長者 隨身兵杖蒙輔佐詔、母尚侍美都子、長  
良卿同母、貞觀十四年三月九日、依病賜度者八  
十人、大赦天下、同年九月四日薨、贈正一位、  
諡曰忠仁公、封美濃國、号白河殿、又号染殿、

●基經

小納言 右大臣 左近大將 准三后 按察使  
五藏 无位藏人頭 攝政 関白 從一位 大政  
大臣 實者長良卿男、子孫多々有リ、贈正一位、  
母贈大政大臣繼繩女大夫人、寛平三年正十九薨、  
五十六、贈正一位、諡曰昭宣公、封越前國、号  
堀川殿、

薩隅日州上古者依為春日社領、南都一乘院令下  
知畢、然間鹿兒島之郡司承、弁濟・取納使職ニ

而、堅固ニ致運上處也、

●直純 弥四郎 左衛門尉 号鹿兒島越前守、

任書下、弁濟使・取納使職、堅固ニ南都春日ノ社ニ令上納者也、仍状如件、

師純

弥四郎 左衛門督 号鹿兒島越前守、

●永純 此時構城擲東福司云リ、

弥四郎 左衛門督 伊豫守 後ニ号鹿兒島越前守、又長谷場十郎兵衛トモ云リ、日州飢肥北郷之夏、辨濟使并取納使職、從一乘院榮澄法眼承処、白川藏人ト名乗テ、企狼藉事頗也、依致言上此旨、尊氏將軍直安堵之御内書令拜領、南郷・北郷加下知處也、其證文于今有之、建武四年之事也、

薩日州取納・辨濟使運上、弥四郎 左衛門督

●遠純

伊豫守 号鹿兒島越前守、後号十郎兵衛尉、

●行純

日州飢肥南北郷弁濟使并取納使也、号十郎兵衛尉、伊豫守 越前守 弥四郎 左衛門督 從鹿兒島日向ノ国飢肥兩郷者、掛而申付候處也、

●經純

弥四郎 左衛門督 遠江權頭 号伊豫守 越前守、又有馬共云リ、此時代、肥州高来之被仰付郡司・辨濟使・取納使、是同從鹿兒島懸テ加下知也、法名臺雲坐蓮

●朝純

弥四郎 後弥五郎 左衛門督 遠江權頭 伊豫守 越前守共、法名徳翁 此時迄茂日州飢肥・鹿島・有馬共ニ以テ、任御内書、致下知候處也、兼又日向之國櫛間院雖被仰下致斟酌候早、

弥四郎 左エ門督 伊豫守 号鹿兒嶋、遠江權

●家純

頭 越前守 此時ニ有馬者舎弟ニ被讓渡也、然  
処日州櫛間之院ヲ被仰下故ニ抽忠貞候早、

●連澄

弥五郎 後弥六 号有馬左衛門大夫、被移肥州  
有馬、高来之郡司於代々成本領也、法名平江宗治

弥四郎 左衛門督 伊豫守 遠江權頭 越前守

●資純

始ハ鹿兒島六郎ト名乗也、此代ニ當郡内二十四  
ヶ村之中十箇村被讓与他腹嫡子國秀、其外十四  
ヶ村・居城并長谷場之居屋敷共ニ重代之文書加  
相、為家督分差渡者也、日向之國飢肥・櫛間并  
濟・取納使職不可有相連之事、

●國純

弥四郎 左衛門督 伊豫守 号遠山權頭、越前  
守 此時鹿兒島郡内十四ヶ村并住城・文書・居  
屋敷方共ニ為嫡子分、慥永代請取處也、仍從他

人若雖有虎口讒言、成思兄弟水魚、臣下之法ヲ

不可相違事也、日州兩所使職不可有相違事、證  
狀如件、

●國秀

他腹 弥太郎 雅柔助 号<sup>(マ)</sup>矢上伊豆守、此代  
鹿兒島西原ニ在城也、是ニ十箇村ヲ被相付早、  
雖為嫡子他腹之故家ノ不成惣領、

●忠良

号矢上弥太郎、後ニ雅柔助也、此時依背守護方  
軍兵ヲ被指向間、不相叶落居シテ、肥州高来ノ  
有馬之郡司依為親類頼被打登候、

●宗純

弥五郎 兵部少輔 号十郎兵衛尉、遠江權頭  
鹿兒島・飢肥・櫛間三郡司、越前守是也、

●純連

弥五郎 兵部少輔 遠江權頭 越前守  
如右致三郡司也、

時純

弥五郎 五郎左衛門尉 十郎兵衛尉 遠江權

頭 日州飢肥南郷・北郷、先祖以来辨濟使并

取納使職夏被仰付之處ニ櫛間院共ニ重テ承リ、

家督者薩州鹿兒島郡ニ依有之、彼地ヲ為靜謐、

早速被相移早、

澄純

弥五郎 十郎兵衛 遠江權頭 母櫛間女

霧壹丸

五郎左衛門尉

此時代依為少年、名乘白川藏人、飢肥・櫛間

弁濟使并取納使職雖企押領、堅長谷場方ニ被

仰上下者、不可有永代違輩<sup>(背)</sup>之由、蒙御内書事

一家之可為名譽者也、

晴純

弥六 六郎兵衛尉 母同甥ノ為軍代也、

女子二人

●久純

号鹿兒島六郎、又云兵部少輔 越前守

此時ニ島津御屋形自元久様令拜領御宇、抽忠勤

候早、然則覺島構守護所、住城東福司并長谷場

居屋敷共ニ差上テ、水流吉御在処被見立、清水

ニ御館造早、御動座ヲ申請奉リテ今御繁昌目出

度候也、應永元年甲戌ニ建立福昌寺、開山石屋

大和尚、俗性伊集院、右名字ノ地者今寺地是也、

去程ニ家ノ者成出家時ハ、衣食共ニ未代迄モ可

為寺家之恩之事、開山御掟ノ承處也、

僧一人

女子三人

秀純

号鹿兒島六郎、兵部少輔 又越前守

此代ニ佐多殿次男ヲ申請、妹聿ニ取成シ、下伊

敷一ヶ村被進、号伊敷殿、御當家内縁之儀ニ

才覚如此、弥被抽忠貞者也、雖然改名字長谷場

ト名乘事 義天之御代以来也、又日州江被遣、

時純者薩摩方ヲ為与力、号長谷場十郎兵衛尉、

言上訴陳状、建武之比也、

忠純

号弥次郎、左衛門佐 遠江權頭 伊敷殿是也、

女子二人

●則純

号長谷場六郎、兵部少輔 越前守 法名道了上

座 此時ニ從鹿兒島市來へ被召移、其謂者、伊

集院方ニ与同シテ依有二心、立久様御代ニ被

追罰、然者早為世治之、各市來方ノ捨城ニ致在

番堅固故、陳之内五箇所ノ居屋數モ假屋元ニ被

下置處也、

在天和尚

石屋ヨリ四代以後也、

●治純

号六郎、兵部少輔 越前守

法名心丁 陳ノ内五箇所居屋數、鹿兒島ト市來

ヲ懸テ奉公也、

曇知容 出家

惟純

弥三郎 五郎左エ門尉 僧一人 康純 弥三郎 五郎左エ門尉

笠知容 出家

玲監坐 右同、

女子二人 ハ始良徳丸妻  
ハ高城郡大川妻

高純 号神四郎、  
廣純 号河崎三郎九郎、  
女子一人 日高妻

●貞純

号長谷場弥四郎、兵部少輔 越前守 市來ニ有  
假屋、市來亶者鹿兒島ノ外城戸亦ハ渋谷山北之

依為往返ノ堺目、別而可致忠貞之由從 忠昌様

被仰聞、至彼表令奉公者也、法名中與淨因

重純  
号九郎、廿四歳於  
隅州吉田戦死、

女子一人

御屋形様十一代之時

法名道宗

上原長門守妻

●慶純

号長谷場弥四郎、兵部少輔 越前守 法名山高

盤谷居士 七月十九日薨、八十八歳

此時川上道安斎ニ弓馬之蒙御免許、倅家被施名

拳世間、然者川内於新田八幡馬場、笠懸御法業

之時者、手組衆十二騎ノ内ニ被加召候、亦馬上

御狩之時者、四目之役被仰付、彼在之所々、河

邊内月白山・市来之内大峯山所也、或ハ武勇

ニ度々高名、或歌鞠之二道、共ニ令致奉公忠勳

者也、

純里

号伴三郎、治部少輔 備前守

純富  
弥次郎 十郎左エ門尉 備前守

伊東御退治之刻、日州曾井ノ城ニ被召移、

女子三人

一ハ野田ノ妻 二山田民部妻 三坂本妻

純真

弥次郎 出雲守 豊州ニ京勢下向之時、於水流

崎主從八人戦死、五十七歳、天正十五三十五日

也、供養僧一人、

純徳

弥次郎 雅楽助 肥州於隈部郡致軍勞、

純房

弥七郎 賀左衛門尉 三郎兵衛尉 筑前至岩屋

城攻ノ時、十六歳而太刀始ス、其外日州・豊州

於御弓箭、度々致高名早、稻津乱之時、日州ノ

穆佐之城ニ攻来候刻、松下同心、兩人而指答門

ヲ固ケル間、稻津引退所也、

純正

平左衛門尉 實純 依無男子為養子、

純秀

刑部少輔 戸右衛門尉

女子一人

田中妻

純堯

平左衛門尉

女子

●孝純

号弥四郎、兵部少輔 越前守 法名淨宗居士

薩州出水ニ付テ市来之城依格護、伊集院之内被

破却寺脇拵、為其御返塔市来城被攻落、此時御

案内仕候事、然者 御大將軍 忠良様 貴久様

ヨリ被成下御感處也、

巨純

号六郎、中務丞 佐渡守

女子三人

一ハ脇本妻 二ハ日高妻 三金田妻

純辰

号弥四郎、織部佑 筑後守 法名華翁居士

文祿二癸亥二月朔日死去、五十五、御當家十六

代 竜伯様ト奉申者、 義久様之御事也、此時

ニ御右筆役承也、

女子二人

一人ハ市来小四郎妻 一ハ上原弥四郎妻

純智

号弥四郎、織部佑 慶長十三丁未九月十三死去、

四十二、肥州宇都ノ内郡之浦城攻ニ十月十五日

合戦ス、依其忠節、從 義久様御多羅枝被下早、

純正

号四郎次郎、後主 純次 号弥次郎、主膳正 父

膳正典 兵衛尉 八長門守ノ三男養子タ

於庄内安永十二月 リ、

八日戰死ス、

女子一人

同名主膳亮妻

愛壽丸

部當

女子

●治純

号弥六、兵部少輔 長門守

天正十四九十日死去、六十八、法名香庵淨榮居

士、母ハ大寺ノ姫、此時父子同心ニ市來城攻致

案内者、薩州郡山・日州小林ノ致両軍ニ太刀打

蒙疵、日州之高城ニ着陣、豊州之大将大友宗麟

同新太郎、率二十万騎攻ル、故ニ薩摩方ニ先手

大将軍嶋津中務太輔家久、彼城ニ被籠城之時令

供奉、然處開御運刻、父子三人共ニ高名仕ル、

其時次男ハ戰死ス、

女子一人

平田石見守妻

●宗純

号弥四郎、兵部少輔 越前守 法名徹山慶薰庵主

渋谷退治之時者被移川内、伊東退治之時ハ被移

日州飢肥、元和十年十月七日命落ス、七拾八歳、

母宮原出雲守姫、日州於小林之城攻、父子共ニ

致合戦、同心衆間瀬田形部左衛門尉・田尻荒兵

衛尉也、此時父者面ニ得鎧疵、私者左手蒙鎧疵

早、年廿一、永祿九年十月十五日・同十一年三

月廿三日、大口従求麻菱刈弓箭之時、至一山籠

敵一人躰ヲ射伏ル、同心本田掃部兵衛尉・愛徳

鬼丸名字也、其後下大隅於垂水野頸之城戸、郡

山名字ノ敵一人射殺、同心者関主殿助・前田又

左衛門尉、其次者牛根板城戸破之時、矢車稠仕



ル、同心衆吉田若狹守・祇答院新兵衛尉・曾木圖書助、天正元十一廿三日ノ事也、又菱刈大口城ヲ取卷三日、初日敵一人仕ル、次日ニ一人射殺ス、此時同心者、初日真連山伏・宮原助太郎・椎藤太、次日間瀬田刑部左エ門尉・上床源六兵衛尉・伊地知新三郎・茂山源三右衛門尉、又於根占横尾ノ軍致合戦、同心衆野村兵部少輔・鎌田助五郎也、此時得河上上野守褒美、其外諸侍ヨリ得感悦、播面目事は偏神慮恐深處也、日州高原城詰之時、一番衆間瀬田刑部左エ門尉・瀨田右京進・宮原越中守・同名右京亮・四本半八郎・井尻早左衛門同心ニ致軍勢也、其後日州御手裏之刻、海江田ニ打入テ忠貞仕ル、然處天正七年戊子十一月十一日、從朝軍至夕日迄、折田權五左エ門尉兄弟同心トシテ、松山敵陣ヲ攻落令軍勢、此日ニ弟者戦死仕ル、同十二日、豊州陣衆切テ懸ル、敵勢者廿万騎ト云リ、味方者雖為小勢、頭張良秘術打勝タル、其時ニ敵二人打

テ、彼等両馬ニ乗替リ、美々河迄此日ニ懸詰ル、翌日山陰堺目ヲ豊後衆逃通ヲ、追着テ一人搦捕又肥後ノ國內矢崎之城攻時致合戦、同心者多田和泉守・塚之脇駿河守也、此時得鐘疵三箇所、敵一人討捕、其以後同國ニ於堅志田落城之刻、敵一人討捕、又同國中竹迫之住人合志藏人追討之砌抽忠節、故ニ御大將義弘様上意者、長谷場忠之上ノ忠ヲ仕候由被仰下、至同席延新納武藏守祝儀ヲ承候早、然者此郡内ニ富十二町村ノ地頭職被下、而筑前・筑後・豊後ノ御在陣ニ軍衆ヲ召烈致忠勲也、次ニ從高良山筑紫上野守カ居城ニ軍兵被差向、其境目限代ト云ル大河アリ、諸軍勢此川ニ打望ミ、舟渡リヲ被相待處ニ、越前守薩州吉野ノ大黒毛ノ馬ヲ嗜、於于爰先陳トシテ掛渡ル、是ヲ被見伊集院右衛門大夫者、諸勢ニ加下知被渡、後陳衆彼馬ヲ一日ニ三度被見物、褒美不少、軍陳軍旅之高名者弓馬ノ道ニ極欽、又豊後守宗麟之被官高橋入道ハ、筑前国岩

純時

屋ノ城ニ楯籠ル、彼ヲ亡シト被懸責、天正十四年丙戌七月廿七日之事成ニ、三ノ圓ヲ攻破一丸ニ切上リ、太刀始仕ル、脇太刀者薩州衆ニ向江九郎・中馬右衛門尉、肥後衆ニ井手田親綱・同州高橋二人也、又豊後国破却之時、入田・邊次・朽網・野上・武宮・府内・三重、日州縣・高城・都於郡迄令供奉、此所ニテモ碎手軍劣、至根白ノ京陳致合戦、同心者木下帶刀長、又伊集院源次郎依存野心、庄内ニ被成御着陳之時、慶長四年辛亥十月十六日、於三侯ノ高城若武者卅騎計所及難儀、本田助左エ門尉致同心、懸入テ相助候早、其後同十二月八日、至安永御方ノ敗軍ニ、小川之渡口ヲ限ニ持勘利運仕ル、又慶長五三月九日、山之口城ニ詰入り、本田内藏丞難遁處ヲ見續助命、是偏ニ神明佛陀之非感應哉、

母同、号弥九郎、豊州衆日向國ニ着陳シテ軍ノ時碎手戦死、十九歳、法名善林上座、天正七年六年

成ノ誤ナリ十一月十一日ノ合戦也、

女子三人

- 一ハ長野民部少輔妻
- 二ハ大田兵部少輔妻
- 三ハ田實妻

●實純  
女子一人アリ、純正為智養子相繼也、  
号弥四郎、十郎兵衛尉

高麗御帰陳以後、中山琉球國為被入御手裏、樺山権左エ門尉・平田太郎左エ門尉両大将トシテ、数百艘ノ兵船被遣、其時右御兵具奉行ニテ致渡海候、其後大坂御陳立之時節モ、宗純ト父子致供奉、右ノ奉行承處也、元和四年三月十日病死、卅八歳、法名仙翁宗鶴居士

前大閣殿下秀吉公、於于朝鮮征伐之時、君我義弘様与其御子 家久様走従其軍、数年之間勞於軍務、時ニ實純十七歳、令奉供致一騎之武者役、吾

軍屯於泗川者僅一萬餘、較之大明諸軍豈翅九牛一毛哉、大明諸將令數百萬之軍攻我泗川之城、主君義弘父子胸中自有數萬之兵甲、不戰而屈人之兵、是故自提三尺、直進入百萬之軍、軍一時瓜如潰追亡、逐北伏尸者八萬有餘、流血漂楯矣、於是參謀大夫龍涯者求和義於我軍中、義弘御父子謂之曰、武豈可久驢乎、且止二人之戈、是謂之武、竟應於參謀之求、令大明將茅渭濱為質、載之与俱歸日本矣、大閣殿下為賞其功、賜親子似寶劍、且復賜薩州之地和泉・高城二郡、以為其履矣、日本東西之諸將無不稱贊、其武名者可謂義弘・家久樣被成克我國家者也、此時實純泗川在陳而遂少年數度之高名之克、且先世善業、且佛神三寶被垂哀憐哉、

●純正

号平左門尉、兵右衛門尉 為實純躰養子、純

房嫡子也、法名卯英宗傳庵主

從若年家久公・御子大隅守光久公御兩殿様ニ奉仕

候、関東ニ之御奉公及度々ニ、有馬御陣立ニハ普請奉行、於御国元ニ御兵具奉行、其後御吟味役ニ被召加、萬治元年戊午、日州松山地頭職被仰付、同二年、琉球國押ニ奉行被仰付、二月十二日致出船、腰ヲレ歌一首仕、櫻島コキワカレツ、行船ニ花ノ香ソエテヲクレ春風ト如此侍リ、風ニ任テ走行ケルホトニ、三月二十一日琉国ニ着船仕、三月二十八日ニ王位様ニ御目見得仕所也、翌年六月十二日歸帆仕、首尾能相勤候、同心衆鹿兒島衆岩切諸右衛門・国分衆三宅七兵衛・出水衆長谷場五郎右衛門・松山衆吉田次郎四郎也、先奉行川上將監殿ニ交替也、翌年松山ニ初地入仕、衆中・寺社家・町・在郷不殘酒飯振舞所也、仕置申付候畢、次年日州真幸・吉田地頭被仰付候、吉田亥ハ依境目ニ被仰付候、堅固ニ御奉公可相勤之上意被仰下所也、依其寛文六年午ノ春、吉田ニ初地入仕、衆中・寺社家・町・在郷無殘致振舞所也、掟申渡候也、

女子四人 一ハ純堯妻・二ハ源栖・三ハ新原・四ハ  
徳尾妻也、何レモ子孫多々有之也、

●純堯 (P. 2)

(中表紙)

「藤原姓平岡氏

系圖 伴姓萩原氏

伴姓肝付庶氏」

北家藤原日野末平岡系圖

鎌足五代

内曆

内大臣

仁王五十二代嵯峨天王弘仁三年壬辰十月十六日薨、

真夏

関雄

日野治部

冬嗣

演雄

閑院左大臣

從五位下

仁王五拾二代嵯峨天皇弘仁四年癸巳山階寺南圓堂  
建立、道師弘法大師空海也、

家宗

弘蔭カク

繁時

輔道

有國

日野・廣橋・柳原元祖

演成

道成

與風

良風

家宗

盛朝

春繼

良尚

富士曆

有貞

為衡

義衡

大納言 正二位

義清 — 尊義 — 義房 — 義明 —  
 權大納言 富士上野守 紀伊守 三位大納言  
 女子

義村 — 義成 —  
 大納言 權大納言

義純  
 平岡川内守  
 仁王七十代後冷泉院康平五年壬寅十一月廿九日、  
 源伊与守頼義奉勅追伐安倍貞任高宗任(マ)被宣旨、發  
 向ニ義純出張、依其軍忠下賜川内国平岡郷、義純  
 富士本名ニシテ此代より平岡と號し、一然トモ、  
 富士平岡と代々名乗者也、

義治 — 義守 —  
 平岡川内守 川内守 童名文珠丸

義陳  
 童名金千代 平岡城之介  
 保元三年戊寅、源六条判官為義、新院依謀叛、白  
 川合戦ニ為義戰死、其時為方人、平岡城之助義陳  
 代也、

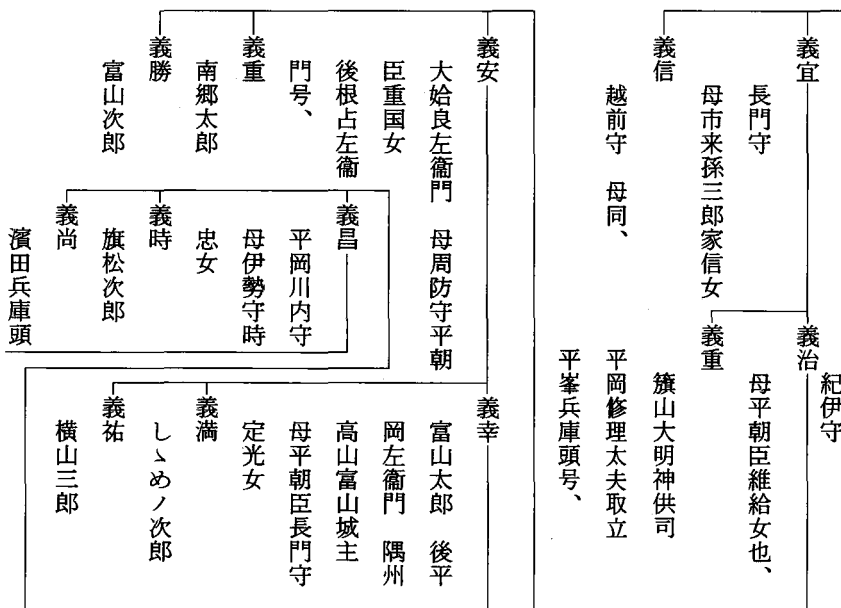
義真  
 富山紀伊守  
 平治元年己卯、藤原信賴依謀叛、源左馬頭義朝打  
 負無已明ル年永曆元年庚辰正月三日、於尾張国青  
 塚宿、長田庄司平忠致誅之、其時義真為方人故、  
 川内国平岡為打替、而下賜紀伊国糸之郡也、

義夫 — 義養 —  
 平岡川内判官  
 童名鬼千代 城之助 文治二年丙午三月卅日、

隅州大始良に下着、紀伊国牟婁郡為打替下給大始良、文治三年丁未、甥富山判官代義堯ニ令付属大始良、上洛シテ而川内国平岡庄ヲ下給、此平岡左衛門義堯・同氏城之介義養、甥・伯父九州江流罪す、紀伊国為打替、大隅ヲ義養ニ源頼朝公より下給也、同三年丁未三月十三日ニ平家ノ小松ノ三位ノ中将維盛ノ嫡男六代御前と申ヲ帝より、禪師の公と申に、隅州大始良ヲ下給、為親分平岡左衛門義堯、小根占四十町の御掟を帝より被仰付也、都より御書付別ニ有之、平岡城之介義養甥ノ平岡左衛門義堯江大始良を付属して、文治三年丁未ニ上洛して、川内国平岡郷を源頼朝公より下給也、故に富山平岡を改大始良・根占トモ号、

義典

小根占三郎 後鳥濱又ハ神川トモ号、駿河守と号、母左中将忠時女



義則

後忠義 平岡城之介と号、



大始良也

嶋津修理亮氏久隅州始良ニ住城之時、大始良川内守義則島津氏久(ママ)に身方シテ、延文二年丁酉二月五日於志布志楡井之頼長合戦に高名す、頼長於宝地庵自害ス、依之嶋津殿より松尾城之城司トシテ、十之字ノ紋免ヲ下シ賜也、七代目元久公ハ松尾城にて御誕生、後鹿兒嶋東福(ママ)ヶ城へ迂玉フ、親分トシテ平岡ヲ改、大始良左衛門太夫忠義号、

義周

母源忠純女

大始良太郎 永和元年乙卯三月、庄内本原ニ而、

伊東・北原三家取囲北原(ママ)讀岐守住城、〔本ノママ、〕從浪志嶋津

氏久公・同元久御加勢、為後巻梅北西生寺之天ヶ嶺御着陣ニ義周も致供奉、

義有

西俣次郎 母同、義時

義利

長谷三郎 母同、義宗

くしま 郡本次郎 母同、

平岡紀伊守 母佐多式部女

義泰

左衛門太夫 母梅北刑部左衛門女

義兼

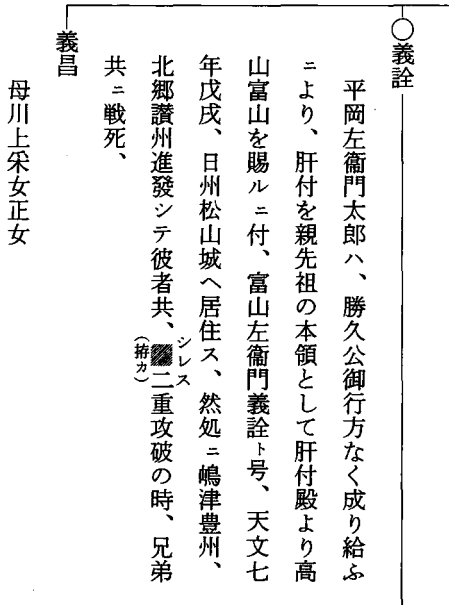
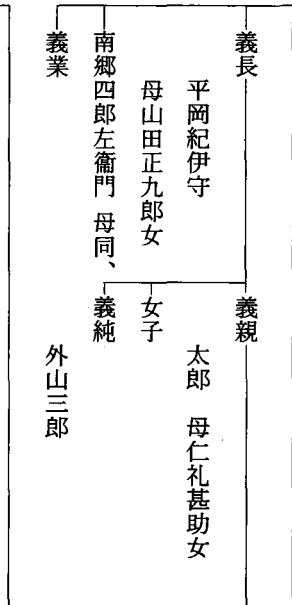
おびノ公文次郎 母同、

義種

平岡川内守 文明十六年甲辰、日州飢肥院新納

近江守住城ヲ伊東祐国張六陣折角ニ及刻、嶋津忠

昌公大軍勢ヲ為御加勢被差向時出陣ス、同十七年乙巳六月、伊東祐国父子打捕、依之飢肥泰平也、



20の1

○義信

母外山次郎右衛門義治女  
 平岡左衛門五郎 弘治四年戊午、於日州大崎龍山原、肝付殿より大將分ヲ、嶋津方北郷左衛門・大野出羽・日置ノ何某、肝付平岡左衛門諸共ニ戦死、義信事、肝付殿取聲ニ而、名代トシテ上京シテ御帝ヨリ、宣旨写、

上卿中山大納言

弘治二年十月五日宣旨  
 権大僧都省鈞(肝付兼統)

宜轉任法印

藏人頭左大辨藤原頼房奉

(本文書ハ「家わけ二」肝付文書二二七号文書ト同一文書ナルベシ)

義理

平岡次郎三郎 天正元年癸酉正月六日、於日州之



国合住吉原、肝付左兵衛・伊集院三川入道発向ス、  
其時北郷時久・同相久・忠虎、彼者共走續、合戦  
に討死ス、肝付軍衆大将共ニ数百人打死早、  
義光

平岡又兵衛 後ニ関白秀吉卿ニ御奉公して、後  
内府家康公ニつかへ、此子孫御旗本ニ有之、

女子

肝付八郎左衛門兼行 窄人シテ大峯大藏太夫妻

長照寺殿心了常庵居士

法名寒水院殿喜盛妙歎大姉 富山長照寺造立、同  
慶長十六年二月彼岸、長照寺立、笠野山薬師堂造  
立也、前代笠野山安樂坊天台山ニ而候処ニ、大峯  
大藏太夫より改て覚勝庵と云、後長照申テ禅宗ニ  
改る也、于時元和九癸亥六月廿二日、常安記ス、

義秀

平岡太郎 後ニ拾郎兵衛 妻ハ九城地頭川上因  
幡妹 法名富山院殿剛岳透金大居士

天正六年戊寅十一月、嶋津圖書頭殿取持ニより、  
太守義久公へ御奉公、豊後大友大軍勢日州新納院  
高城攻来時出陣す、文禄元年壬辰四月十二日、高  
麗に出張す、武功ニより大崎横瀬村ヲ下し賜なり、

兼供

兼遠

大峯藤兵衛 賀翁宗慶隠士 大峯大藏亮号、

子孫富山寒水と有之、 母小杉宗分女

義辰

平岡助右衛門 伯父拾郎兵衛養子 慶長四年己亥

六月廿三日、伊集院源次郎忠真領土之隅州恒吉城、  
吉田美作守清在屬于手、高山富山より出陣、其時  
嶋津圖書忠長・同寺山四郎左衛門・椋山権左衛門  
久高・桂山城守忠助・迫水内記入道等津・柏原將  
監、恒吉より発向して城落、慶長五年庚子、串良  
杉尾口ニ平岡助右衛門義辰被召移、正保三丙戌四  
月廿三日死去、号舜屋宗堯居士、寛永十年癸酉六  
月十四日、義辰妻死去、号花隠妙香大姉、

女子

伊達休右衛門信成妻 号宝岩香珠大姉、

女子

竹之下刑部左衛門頼行妻 号月窓妙心大姉、

女子

母野村三郎兵衛女 早世 法名好山如雪大姉

女子

母同、早世 桂秀精窓大姉

義元

平岡長左衛門 元禄七年甲戌九月十二日卒、実

叟院殿真恵了語大居士、法花一千部讀誦依功德

院号大居士被免、

義長

平岡権之助 親類之故助右衛門義辰より取立、

義元之為庶子分、名字附属、

義宣

平岡傳兵衛事、義知従弟故為庶子分、名字屋敷

附属、

桃覚女子

鹿児嶋士曾木甚右衛門妻 母内之浦岸良山樓東

膳坊正照女

男子

千代太郎 七歳而早世 泡幼正彰童子

義儀

助右衛門 母山樓東膳坊女 母鎌田新兵衛女 女子 小倉善右衛門妻

女子

天和三年癸亥六月十日卒、 享保八年癸卯十二

月十六日死去、法 名寒岩妙貞大姉

女子

百引士平山千兵衛妻 母同前、

宝永二年乙酉正月廿四日死去、法名雪窓妙心大姉

義彦

平岡喜左衛門

明曆二年丙申八月朔日誕生、母同前、嶋津将監殿

附士也、享保三年戊戌三月廿八日、以證書為高山

預、享保十七年壬子十月朔日死去、年七十七、法

名心岩宗鉄居士

義這

傳左衛門 母同前、

串良之士関左右衛門之為養子、

女子 母同前、

鹿野屋之士二之宮左近源義彦妻

女子 母同前、

二月十日、十二歳

ニ而早世、法名夢

幼春花童女

女子 母同前、

始良之士森田茂兵

衛平重澄妻

義寛

小名左門モリ 十郎兵衛

元禄八乙亥年誕生、母入部

万之允女、依有子細不為家

督、安永六年丁酉八月朔日

死去、年八十三

義隅

小名八之丞

宝永四年丁亥四月八日誕生、

母大崎士中村仁右衛門女

郡山十助依無嗣子為掣養子、

義遇 母同前、

小名八郎 七兵衛 助右衛門 市来七左衛門依

無男子為養子受家督、後違變、而後宝永七年庚

寅八月十一日、為高山士、寛保三年癸亥三月廿

四日死去、

桃寛女子 母同前、

義敬ヒト

鹿兒嶋士新納喜兵

政四郎 母同前、

衛妻

竹之下儀介之為養子、

義業

助四郎 早世 母同前、

小名九郎

寛文十一年辛亥年誕生、母同前、池袋藏之允宗昌

依無男子為掣養子、号池袋安左衛門盛時、

女子 とよかめ 永井諸右衛門実直妻

義臣 義マコ

亀次郎 助右衛門

宝曆三癸酉年誕生、母新納五郎右衛

号郡山七左衛門、

門殿内田中書左衛門女、享和元年辛酉四月廿三日死去、年四十九

渡邊源次郎妻

明和四年丁亥五月廿六日死去、法名梅岩靜雨大姉

藤兵衛

安永二年癸巳生、母四元新左衛門

母高山土黒

女、文政九年丙戌六月廿八日死去、

木諸兵衛女

年五十四

藤五郎

女子

寛文三(ア)辛亥七月十三日死、法名梅香禪童女

女子

義言

小名長次郎 四郎太夫 長左衛門 天和二年壬

戌十二月廿四日誕生、母鹿野屋土竹之下甚左衛門

女、元文四年己未七月五日死去、五拾八歳、法名

月心宗珠居士

女子 母同前、大崎土折田兵左衛門妻

義堯

母同前、小名大藏 喜三右衛門

女子

母同前、長濱慶左衛門妻

義宣

初義典 又義業 小名珍左衛門 甚左衛門

御免醫師 号宗賢桃庵、元禄十六年癸未四月五

日誕生、母同前、安永五年丙申十二月十二日死

去、年七十四、法名普賢院權大僧都法印

女子 けさ

母福永甚兵衛祐宣女、五歳而早世、電秋童女、元

文四年己未七月十四日死、

義敬

小名宗八 甚藏 順英

元文三年戊午五月十一日誕生、母福永甚兵衛祐

宣女、高山土大窪勘兵衛依無子為後嗣、

慶次 母同前、二才早世

長藏 早世 母同前、

女子

高山士風早太兵衛初妻

延享元年甲子七月三日誕生、母同前、安永三年

甲午七月二日死去、年三十一、法名花蓮妙香大

姉

女子

寬延四年辛未九月八日誕生、母同前、宝曆十一

年辛巳八月十八日早世、年十一、法名智參幻證

大姉

女子

高山士富山新藏初妻

明和元年甲申七月廿三日誕生、母鹿野屋士竹之下

与兵衛女、寛政十二年庚申五月晦日死去、年卅七

甚左衛門

宗八 順真

義源\*

小名藤四郎 喜兵衛 正徳六年丙申二月五日

誕生、母日高五郎兵衛女

義寄

小名長次郎 次郎兵衛 長兵衛 助七 母同前、

享保三年戊戌五月廿二日生、

女子 母同前、

串良士武田孫右衛門妻

享保十七年壬子十二月六日誕生、

女子 千代かめ

享保廿一年丙辰正月廿二日早世、

彦四郎

延享元年甲子七月三日誕生、母串良士萩原伊右衛

門女、宝曆十年庚辰四月死、

藤助 母同前、寛延三年庚午正月五日誕生、

藤之允 母同前、

(ママ)

宝曆四年甲戌九月廿七日誕生、  
女子

又伴氏書曰伊賀皇子、

孝德天皇御宇壬子誕生、大化八年則白雉ト改元、  
天下泰平、福生大明神、御氏神也、

伴姓萩原家来曆

仁皇

『&』天智天王

推古天皇三十五年丁亥降誕、舒明帝之太子、諱中  
之大兄之皇子ト曰、御母皇極天皇、御年三十六即  
位壬戌正月三日、在位十年辛未十二月三日崩、葬  
近江山岱、後近江志賀大津宮坐、大政大臣、大納  
言、始七年有勅作大安寺、八年藤原姓鎌足麁、天  
下太平國家安全千々萬億歲如意吉祥始、

斯喜王子 ▲光仁帝 ▲桓武帝 ▲曠帝 ▲光孝 ▲宇多帝

▲醍醐帝宝祚  
万億歲

○大友皇子

○黑主王

天武御宇壬午誕生、壽齡一百二十九歲、大勇猛無  
双、

葛野皇子 ———— 池邊王 ———— 小野祖  
内匠頭

兵部太輔 僧聖寶

○與多磨

慶雲四年丁未出誕、又与那足  
大伴氏始、齡一百九十一歲、

都并磨 ———— 夜須良磨加舍元也、

○伴商皇子

天平十年戊寅八月十五曉出生、齡(72)

○伴宿祿

宝龜四年癸巳出誕、

延曆廿四年乙酉誕生、

○義比少將

○伴主磨

承和十一年甲子誕生、寬平二年庚戌九月二日誕生、從五位下、号兼家、

○伴若宿祿

○伴樣大監兼行

天慶三年庚子誕生、童大夫判官 從五位下

冷泉院御宇安和元年戊辰四月七日、薩摩国守護寶、同二年己巳八月十五日、薩摩国鹿兒郡江下向、在神食江四十町築屋形建、伴樣御館与名付、然而村上天皇 勅命有而、幕紋舞鶴給、永觀二年甲申遷于御館大隅国肝属郡高山庄本城、

○兼俊

小字鶴若丸 長徳元年乙未誕生於于大隅郡肝属郡本城、號新太夫、

▲俊貞

▲為成 備前守

2101

安樂豊前守 「彦四郎

受領安樂庄

御姓神

大原大明神

城州乙訓郡 本地薬師如来

平野大明神

山州葛塵郡 本地觀世音

住吉大明神

攝州境 本地虚空藏

曩祖御下向時、在宿願奉崇敬、當家子孫可信護、武運豪英 子孫繁榮 身心勇猛 善增惡滅 七福則生 諸願成就 如意安穩 吉祥不退 具足圓滿 一々通達成而已、穴賢、

○兼經

幼名金剛丸 又曰万壽丸、世俗河内守 從五位上

兼綱

成真 成直 又太郎

国之郷 兵衛佐 平八郎

兼友 兼吉

検見崎 常陸守 左衛門佐

兼智 兼貴

津曲 若狭守 秀若丸

兼益 又八郎 彈正太夫 天喜二年甲午誕生、  
白川院御宇應徳元年在洛、翌年帰国、

兼貞 肝属 始右兵衛佐 後河内守

姓寺建立

高崇寺 祈願所 帝釋寺 菩提所  
此寺建立ハ兼行の座ニ為有之由ニ候得共、写し誤り候ニ  
付兼行ニ而候

兼石 肝属河内守

兼光 兼忠

岸良内蔵丞

兼廣 野崎民部少輔 兼成

兼行 川南左京亮 延兼 北原又太郎

小野口五郎 兼豊 兵部丞

久兼 弥七郎 兼孝 長門守

行俊 和泉兵衛尉 小太夫 兼保 保久 井口諸太郎兵衛尉

和泉知識城主

保忠 太郎兵衛丞

兼藤 肝属河内守 周防守

兼市 兵衛尉 兼重 三俣八郎

三股庄司

宗兼 鹿野屋周防介 忠兼 入道玄兼



兼尚

兵部太輔

兼尚者在鎌倉、而依無世子、曆應三年三股八郎

兼重為番代勤家嫡、其子秋兼成猶子相續家、女

子ニ有内縁、但智養子、

秋兼

周防守 実兼重子也、為智養子、肝属嫡統

後号周防守、

女子

三股五郎秋兼室

兼氏

太膳太夫 光禄 肝属嫡統

久兼

山下権三郎

山下伊賀守 伴権頭

兼朝

太郎左衛門尉 他腹故不為家督、

川北 穂北 橋野 橋口家之祖

兼元

又太郎

河内守

兼忠

三郎四郎

法名龍義

加治木弾正

兼政

左馬頭

藏人

顯娃領主と成、

山城守

小牧家出、

肝付十代兼元者、應永十七年庚寅守護 元久公御

供して在洛ス、嶋津方として將軍 義持卿へ奉調、

被任河内守、隅州加治木陳中卒去、法名龍義

○兼春

萩原因幡守 童名氏安丸 萩原城主

康平三年庚子二月十一日誕生、齋名道聖

兼明

前田佐渡守

兼俊

孫太郎 佐渡守

前田庄主

兼国

對馬守

兼時

玄蕃允

○兼久

幼名霧若丸 若狹守 萩原館

永保三年癸亥八月誕生、祝髮万祝齋、

○兼豊

小字幸壽丸 上野守 萩原庄主

(マヤ)  
嘉祥二年丁亥正月十六日出生、

○兼村

小諱鶴年丸 駿河守 萩原城主

保延四年戊寅<sup>(マヤ)</sup>九月出生、入道壽益齋

兼祿

藥丸兵部太輔為猶子、  
兼安 又次郎

兼胤

古木和泉守  
兼永 美濃守

兼武

武光豊前守

○兼理

小字宝萬丸 豊前守 號称在名萩原、

永万元年乙酉七月誕生、入道道聖齋

兼清

岸良氏兼光之成養子、

女子 津曲備前守兼永之室

○兼孫

萩原甲斐守 童名常若丸

始兼忠 掃部介号之、

建久元年庚戌年誕生、法号日山自照庵主

女子 鹿野屋氏内縁

○兼綱

萩原中務太輔

嘉祿元年乙酉誕生、法号剛岳貞全庵主

兼清

正次郎 天福元年誕生、波見家立、

○兼長

萩原駿河守 小字兵衛太郎

宝治二年戊申四月誕生、法号聖翁道賢庵主

女子 肝屬河内守兼元室

越山叟 道隆寺中興開山 童名三郎八郎

○兼正

萩原彈正太弼 幼字長寿丸

文永七年庚午七月誕生、法名天安覺性庵主

兼真  
次郎三郎 刑部少輔 救仁郷家猶子と成、  
兼氏  
三郎二郎 葉丸某猶子  
女子 肝屬兼連籬中

○兼範  
萩原阿房守 小字右衛門介  
永仁四丙申年誕生、法号天心自性大禪定門  
女子二人 一人ハ柏原豊州室  
一人ハ検見崎氏内縁

○兼良  
萩原豊後守 小名太郎大夫  
正中元甲子年端午出生、法号義峯越道  
僧 智禪藏司 帝釋寺住、出世而寛山自得大和尚  
女子 津曲弾正忠室

○兼胤  
始兼時 萩原左近将監  
観應年間誕生、幼名右衛門次郎、實者鹿屋伊賀前

司之長子也、兼良依無世子為猶子、法号虎岳玄龍  
大庵主

○兼康  
萩原左衛門督 童名右衛門介  
永徳元年辛酉十一月誕生、法名心應唯一大禪定門

○兼延  
萩原三河守 幼名伴太夫  
應永十九年壬辰九月三日誕生、法号繁山昌栄庵主  
女子 川南左馬督室

○兼伴  
萩原始忠大夫 後主計正  
宝徳二年庚午五月九日誕生、実者柏原左近将監好  
国次男也、兼延因无世續<sup>よ</sup>之子、成猶子勤家嫡、法  
名節山良忠

○兼家  
萩原勘解由次官 後治部少輔

文明七年十一月一日誕日、永正三年十月去古来肝  
屬之地、薩州川辺郡江移住、然而天文九年庚子嶋  
津相模守忠良主へ致謁見、移住加世田之庄、且又  
子息兼義召列申也、法号達山自得

○兼義

秋原兵部左衛門尉永正六年巳六月二十日誕生  
薩州川邊庄より天文九年十月加世田江移住、法名  
忠山玄孝  
相模守忠良主江致御目見、御幕下罷成者也、

○兼隆

秋原兵右衛門尉 後治部左衛門尉  
天文四年乙未誕生、義弘公飯野江御移、永祿七  
年甲子十一月十七日、自加世田致供奉罷移、御年  
三十、兼隆同年也、  
幼稚成忠太夫召列申也、於飯野御高七十三石被召  
下者也、法名脱參即解

○兼通

秋原忠太夫 後幸左衛門尉  
永祿元年戊午(ママ) 誕生、寛永(ママ)  
法名觀通天心居士、自飯野出水へ被召移、罷移軸  
谷外城、物主役被仰付、数年首尾能相勤申也、

兼(ママ)

秋原休助

○兼尊

秋原治部左衛門 慶長元年誕生、  
寛文十二年壬子五月廿五日卒、法名簾外珠玉居士  
父兼通自飯野之持高七十三石、如前格護仕申也、

○兼寛

秋原甚助 寛永五年戊辰誕生、  
正徳三年癸巳四月十四日卒去、法名平意長清居士  
女子 久保田少兵衛妻  
女子 佐藤次右衛門妻  
女子 栴山新兵衛妻

○兼亮  
 萩原治部左衛門 万治三年庚子誕生、  
 宝永七年庚寅九月六日卒去、法名相聲玄角居士  
 兼保  
 長左衛門 楠原次助猶子と成、

○兼壽  
 萩原甚六 元禄六年癸酉五月四日誕生、 始兼明  
 兼之  
 萩原次右衛門  
 宮之城  
 女子 二階堂才藏妻  
 女子 宮内休右衛門妻  
 兼 (マ)  
 孫兵衛

○兼英  
 萩原三右衛門 享保五年庚子二月三日誕生、  
 母山元清右衛門女子  
 私記  
 先祖從兼通至兼英六代、薩州出水ニ居住、然ルニ  
 御禁制之宗旨行之、依其科、宝曆五乙亥年自出水  
 隅州肝付郡高山江被召移、始而高山新留村之為百

姓住下之門、

○兼 (マ)  
 甚五左衛門  
 女子 母高尾野衆下田平次郎女  
 寛延三年庚午三月誕生、高山士大石半藏妾

明和二年乙酉十月十五日誕生、母同前、  
 從下之門移宮下村居住、紺屋也、  
 寛政十年戊午二月十三日、卅四歳而出奔高山、於  
 爰断絶す、

2201

伴姓肝付氏庶流系図  
 人皇三十五代舒明天皇第二皇子

天智天皇 — 大友皇子 — 余那足

人皇三十九代帝 中大 又伊賀皇子 号与多王、  
 兄皇子 又葛城皇子 大政大臣 賜大伴姓、  
 亦開別皇子 在位十年 此官之初也、

善名 善男 仲用 仲兼

大納言 大納言 右兵衛督 河内 右馬頭

兼遠 兼行 行貞 兼貞

判官代 伴塚 大監 無官大夫

薩摩国鹿兒嶋神食館

兼俊 兼経 兼益 兼員

太郎 新太夫 金剛丸 号 彈正太夫 河内守

天智帝十二世 肝付河内守 肝付三代

肝付元祖

兼任 萩原祖 兼綱 救仁郷氏祖

俊貞 安楽祖 兼友 検見崎氏祖

兼幸 北原祖

行俊 和泉祖

兼石 (マ)

河内守 周防守 兵部少輔

文永九壬申正 肝付六代尊 在鎌倉留主、兼

月十二日卒、 尚 重番代、

法号玄石阿佛 兼市 兵衛尉 兼重 秋兼

大禅定門 号三侯、 号三侯八 周防守

兼光 岸良氏祖 郎、官方 嫡家相

兼廣 野崎氏祖 宗兼 大将 續、

兼行 川南氏祖 鹿野屋祖

信兼 小野口氏祖

女子 兼氏

大膳太夫 昌林寺龜久禅定門盛光寺殿

肝付九代

秋兼 久兼 權三郎 山下氏祖

周防守 ○兼尚無男子、以秋兼家相續、

実兼重男

兼朝

太郎左衛門尉 他腹、

不継家督、号川北氏、

○兼元

兼忠

肝付十代河内守

三郎四郎 号加治木彈

太守元久公供奉上京、正、法号義翁兼忠大禪

定門

兼政

左馬頭 美作守

久豊公賜顯娃号顯娃、

兼續

三郎 河内守 法号省鈞

永正八年辛未誕生、母嶋津豊後守忠朝舍弟久盈女

永禄五年壬戌四月松山、同五月志布志知行、

同九丙寅十一月十五日、於志布志卒ス、五十六、

兼續嫡男良兼、其妹三人、其弟兼勝 小五郎 山

城守 母他腹、其弟兼樹 他腹、兼包 右京亮

母同、其弟兼政 母肝付九郎将監女、兄良兼早世

故以良兼二女妻、兼政嫡家相續、慶長五庚子九月

十五日、於濃州関ヶ原戦死、其弟僧、母同兼勝、

女子

母三位義祐女

女子

伯父兼政室

22の2

右、拳肝付氏嫡流之古系図巻頭、顯當流自出傳稱、河

内守兼續入道省鈞致仕跡、豊前守兼隆之弟治右衛門尉

兼清為鼻祖、雖然無于古系図、号兼隆・兼清者、然世

遠歳隔無所徴之文献、故弄合不能以举其線矣、仍以兼

清為肇祖、繫世系記訂考所見、備再撰一助後代龜鑑矣、

皆天明七年丁未正月吉祥日 山縣遠流源盛富

判之

22の3

兼清

治右衛門

死去年月・法名等不詳、

○兼陳

伴七 舍人

慶長二年丁酉九月十七日誕生、母志ふし土永山主計女、実志ふし土(ママ) 二男也、兼清無嗣為養子、  
○万治三年庚子四月十二日死ス、年六十四、法名亭月陳長上坐

○兼林

次郎丸 伴五左衛門

寛永十二年乙亥二月十二日誕生、母志ふし土川野新右衛門女、(ママ) 子二月十二日死ス、歳(ママ)  
法名久雲龍昌居士

○兼高

次郎丸 伴左衛門

明曆四年戊戌則万治元年也四月七日誕生、母志ふし土久保清左衛門行祖女、元文三年戊午十二月廿三日死、

歳八十一、法名圓應了山居士

女子 志ふし土愛甲勘左衛門季貫妻

寛文四年甲辰三月十五日誕生、母同、

兼陳

伴之助 七右衛門

寛文九年己酉十月五日誕生、母同、

女子 志ふし土貴嶋源八左衛門実頼妻

延宝五年丁巳八月廿八日誕生、母同、

兼(ママ)

女子 瀬戸口源左衛門(ママ) 妻

兼(ママ) 新助

兼(ママ) 孝右衛門

兼(ママ) 伴之進

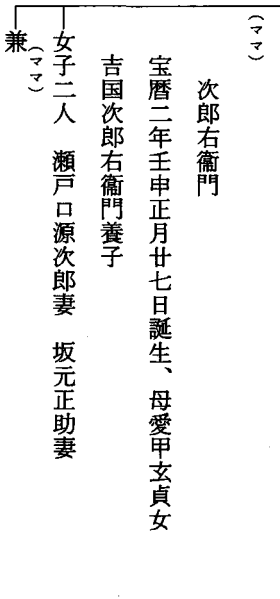
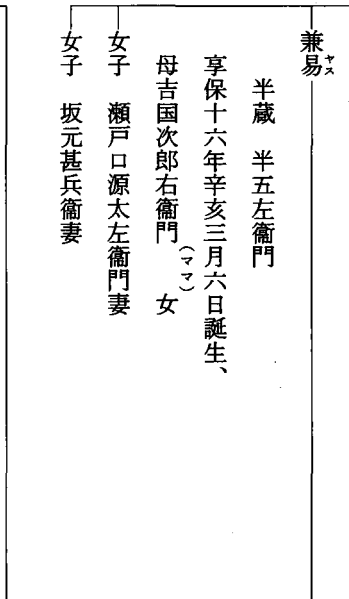
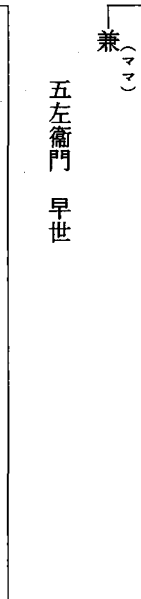
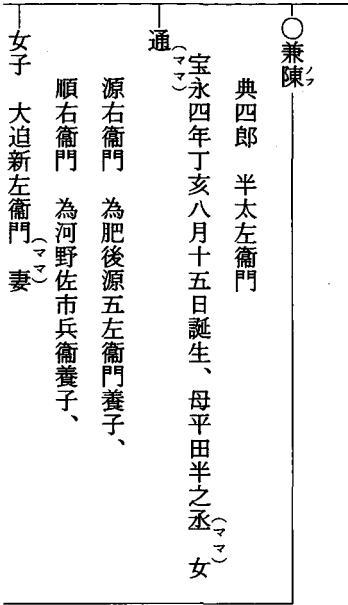
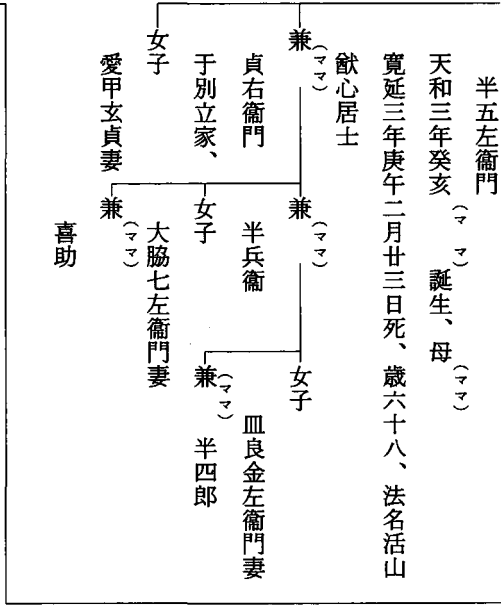
兼(ママ) 鉄太郎

兼(ママ) 野村新蔵 妻 新次郎

兼(ママ) 孝助  
兼(ママ) 孝次郎

○兼浮ウカ





典四郎

明和九年壬辰則安永元年也五月廿九日誕生、母同、

22の4

此通ニ書付有之掛物ニ而、盆ニ巻度

妙鏡禪定尼

六親春屬七世父母

ツ、かけ候て祭られ候由、

日窓禪定尼

道本禪門

節宗正忠大姉

権大僧都春朝

如山宗意上坐

楊花春幻禪定門

同歸月浦省鈞法印

霜月十五日

端翁紹的上坐

四月十八日

妙昌禪定尼 各覺靈

竹雲常林禪定門

八月十日

善良禪定門

玉室妙金大姉

八月十八日

松岩涼秀大姉

切叟無碍禪定門

妙圓禪尼

越岩妙超禪定尼

三界萬靈十方至聖

(中表紙)

「禰占氏略系」

23の1

上祖未考  
兵右衛門

禰占氏

○年十八、就 忠政君求、為士於府下 君乃令為與  
力以埃時宜、而至寛永十二年始計戸口、悉驅妖賊  
札改貫、君戸籍姑為家臣、猶為與力如初、於是  
君特恩眷賜之田宅充六家列、既而 君卒、所嘗求  
亦不果云、後 君倉廩不足、遂割田祿致之、有所  
餘伍斛伍斗焉、別賜廩米、終身食之云、

四郎兵衛

○移居邊川、遭火燔亡系圖、  
○自普請方為役人、仕 光樹君、亦賜廩米如父時、

仁左衛門

○自南戸役為取次役兼目附役、從行江戸以病客死、

勘右衛門

○為家兄後、

勘右衛門

○年九歳為小姓、仕 久亮君、後為兵具方兼馬役、

勘七

四郎兵衛

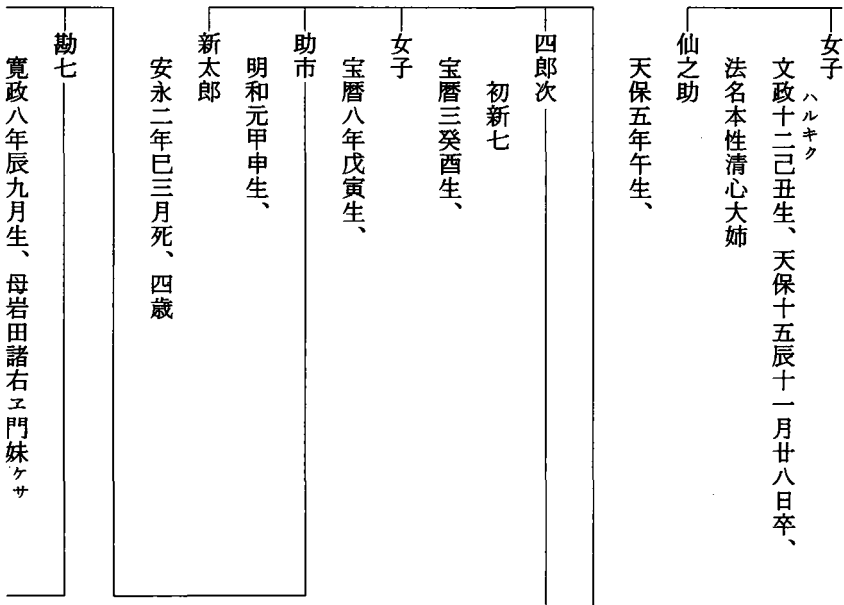
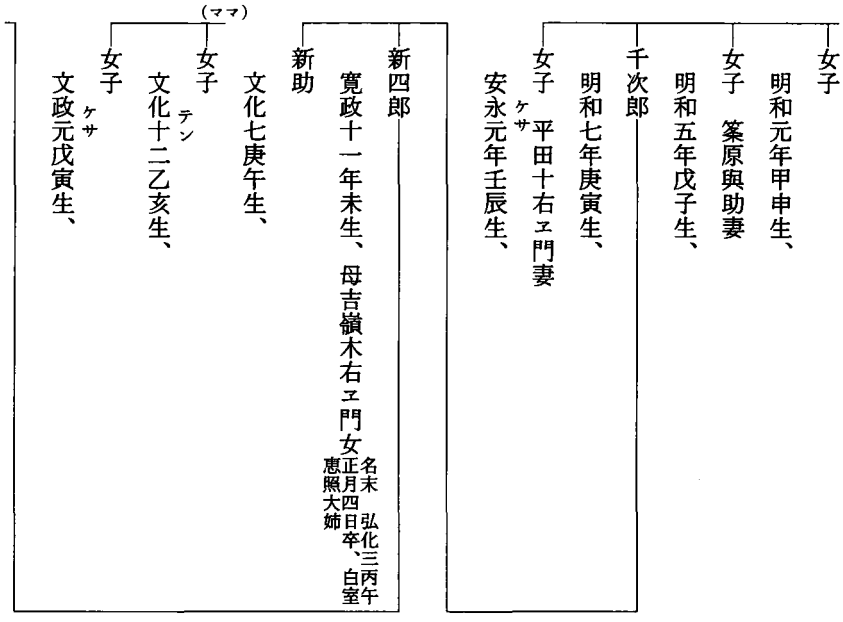
享保八年癸卯生、

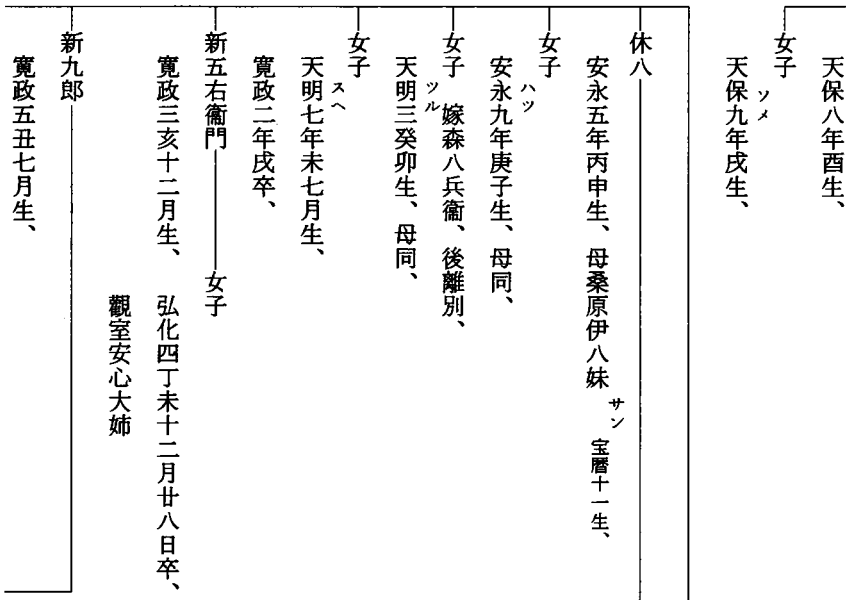
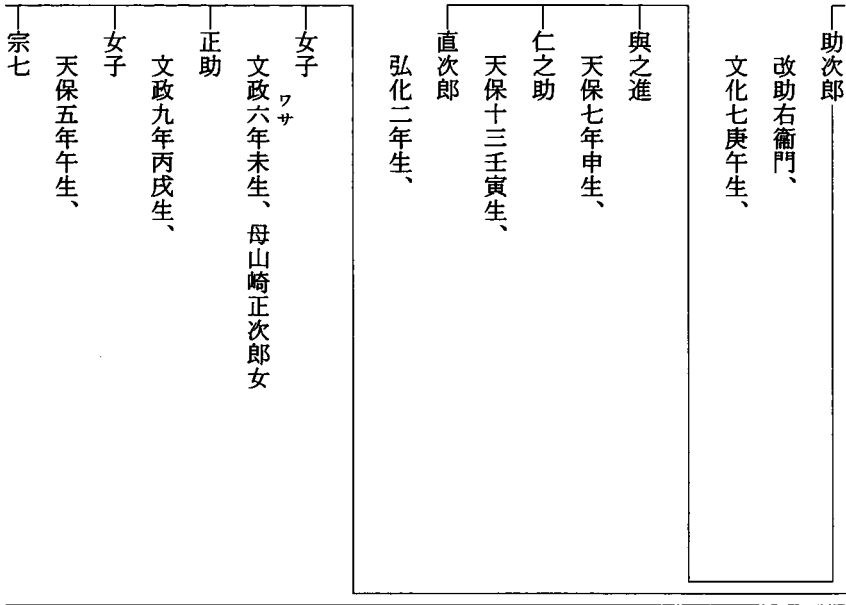
新次郎

安永二年巳正月卒、年四十二

女子

宝曆十一年辛巳生、





四郎右衛門

寛政九巳七月生、

女子

文政六年未生、母藤田源太兵衛妹スヘクリ

袈裟助

天保二年辛卯生、

仁三次

天保六乙未生、

源之進

天保八丁酉生、

富吉

天保十二辛丑生、

女子

スヘクリ  
文政六年未生、母池上與助妹名保登、天保十三寅三月十日卒、法名法雲妙光大姉

女子

マツ  
天保元年生、

新左衛門

天保六年乙未生、

四郎次

天保九年戌生、

市助

天保十二年辛丑生、

女子

ヨネ  
文化三丙寅生、

女子

ケサ  
文化八年辛未生、

作次郎

文政元年戊寅生、

女子

イサ  
文政七年甲申生、

23の2

(別紙)

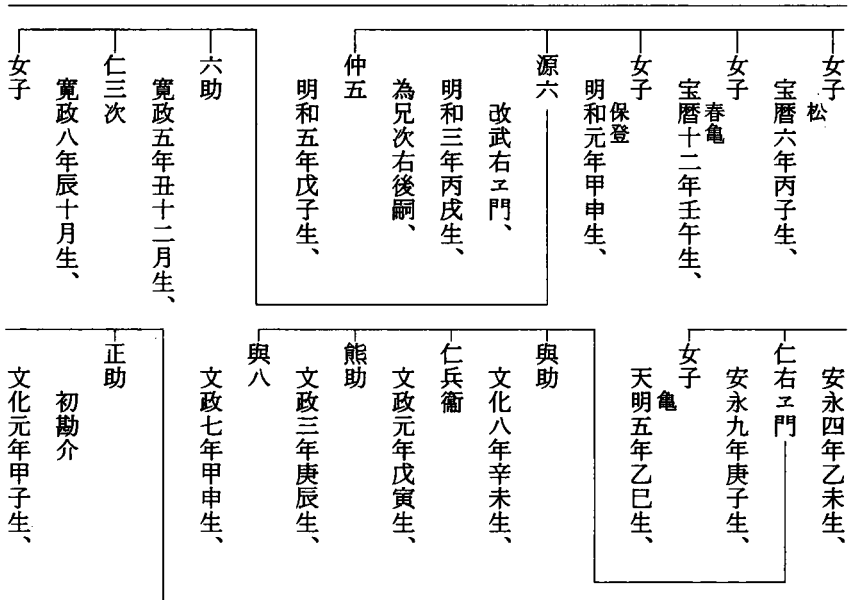
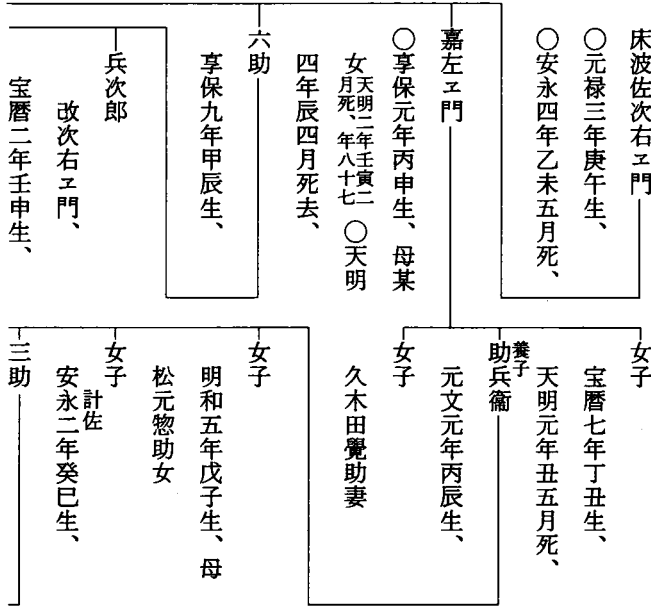
「明和二乙酉九月朔日

白峯了雲居士	禰占四郎兵衛	父	秋月妙光大姉	祢占新五右衛門妻
天明三癸卯八月四日			天保四巳六月六日	
寶山大珠大姉	右同人	母	花榮祥心大姉	祢占新四郎
天明五乙巳正月五日			天保九戌十一月十九日	
道岳昌久居士	祢占仙次郎	父	心傳妙理居士	祢占勘七
寛政四壬子十月十五日			天保十二丑六月八日	
快翁一慶居士	祢占四郎次	父	寂山了道居士	祢占助右衛門
文化七庚午二月十六日			右同年八月一日	
雲庵洞鱗大姉	祢占仙次郎	子	春夢如幻居士	祢占四郎
寛政十二庚申五月廿五日			天保十三寅三月十六日	
白林秋雲大姉	祢占四郎次	母	法雲妙光大姉	○祢占新九郎
文政五壬午五月七日			天保十五辰十一月廿八日	
宝隣善室大姉	祢占休八	母	本性清心大姉	○祢占新四郎
同年七月十六日			弘化三丙午正月四日	
隆光意温居士	祢占仙次郎	母	白室憲照大姉	○右同人
文政六癸未十二月十二日			弘化四丁未十二月廿五日	
月窓妙壽大姉	右同人	母	觀室安心大姉	○祢占新五右衛門娘
文政十二己丑八月十九日			嘉永四亥二月十四日	

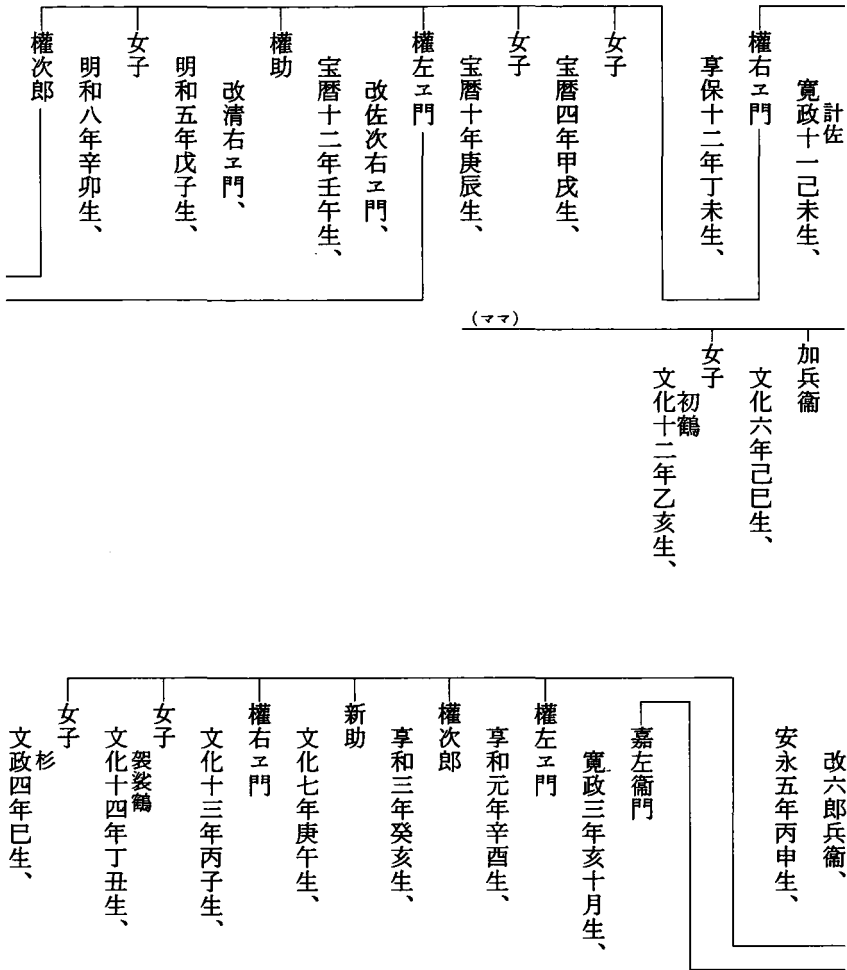
道雲本性大姉

祢占新四郎 妹

床波氏系圖







(中表紙)

「系圖 寫

伊地知唯右衛門季昭」

25 九代重豊五男

●山城守

入道伊白

證文

雅樂助無直子、跡断絶之家ニ而候処ニ、右名跡之儀、願ニ付令免許、系り入進之候、溯之上家之儀、此方江由緒有之候故、伊地知ニ相改候儀も別紙ニ進置候、以上、

元文四年

未三月廿四日

伊地知真学殿

將興

秩父十郎右衛門



山城守

主税助

丹後守

雅樂助

溯ノ上  
清右衛門

妻ハ帖佐兼中  
下田喜右衛門女

同  
清左衛門

妻ハ  
今村孫左衛門女

●真學

●只右衛門

元文五年庚申八月十日死、

法名唯實相心

法名延命慶順法師

妻ハ  
窪田甚助女

妻ハ  
上杉庄兵衛女

●季庸 清太郎 只右エ門 清右衛門

宝曆三癸酉九月十三日死、

法名秋光覚、心

妻ハ 栞山長之丞妹

(ママ)

●季近 萬治 別立号洵之上、

●季朗 金藏 清右衛門

明和二酉五月八日生、

天保二卯十月廿三日死、法名青山實應

●季昭 藤吉 唯右衛門

文化三寅五月廿日生、母洵之上岩右衛門姉、實ハ

前田萬右衛門二男、季朗爲養子、

●季哲 藤吉 清右衛門

(ママ) 文政十二己丑九月十二日生、母増水嘉左衛門氏壽  
女

(本系図ノ人名上ノ「●」・「●」印ハ朱書ナリ)

(中表紙)

「吉富氏系圖写」

26

平姓薩摩氏吉富系圖

顯娃三郎忠長之六男

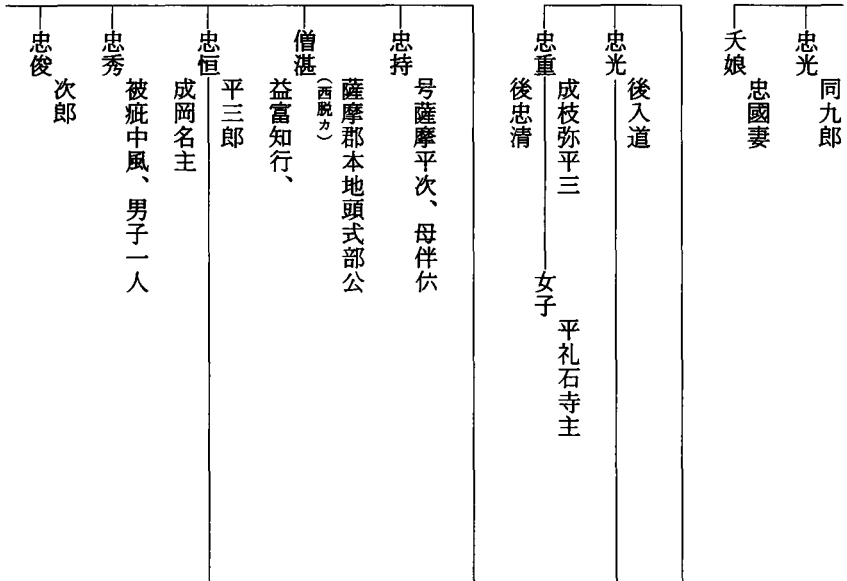
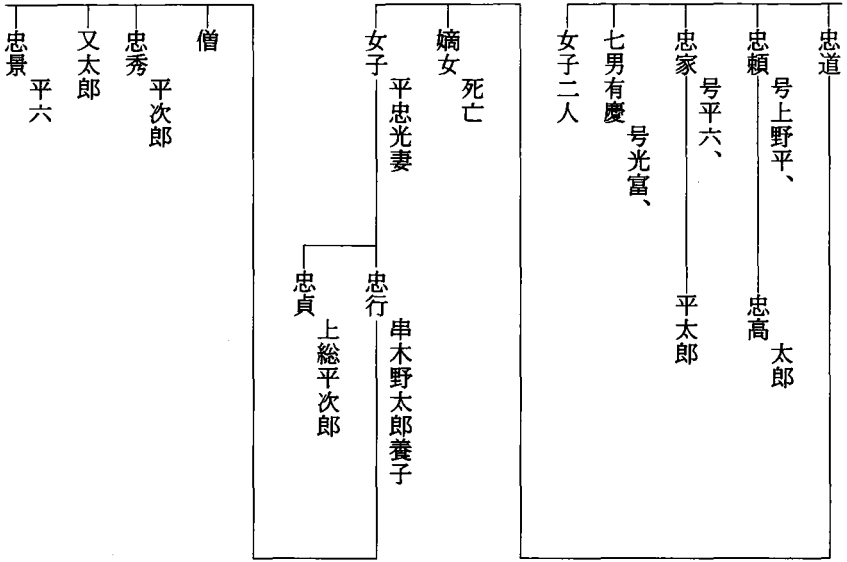
薩摩六郎忠直

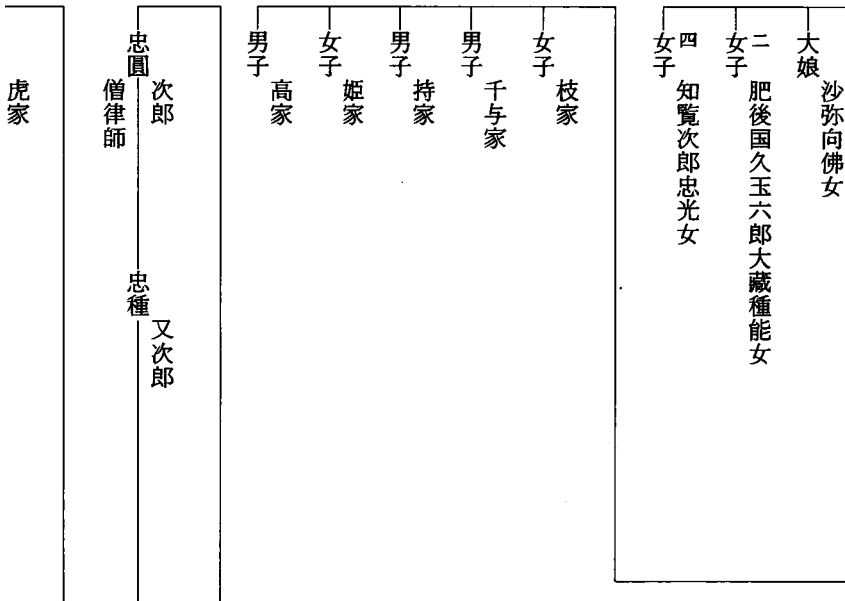
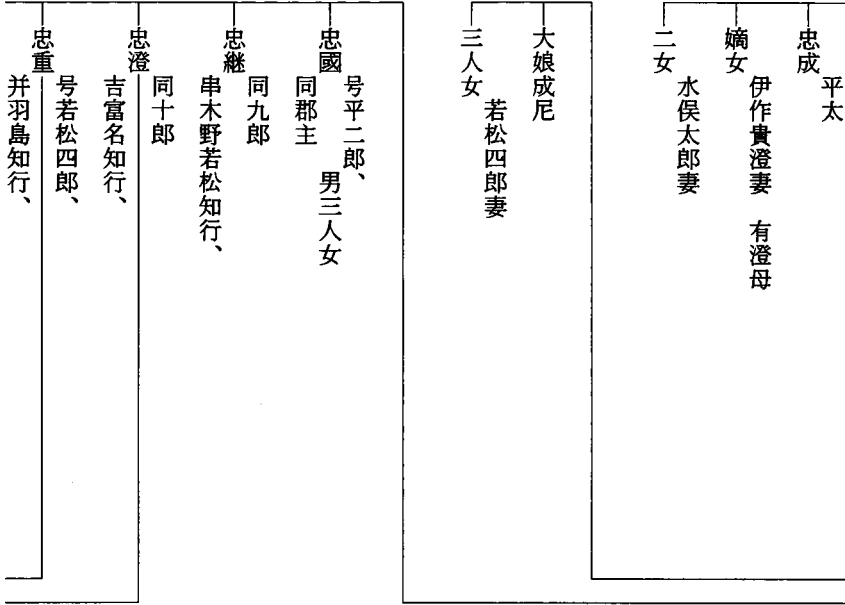
母栖和江之三新太夫娘

忠友 号薩摩太郎、

忠宗 号山口次郎、

号串木野三郎、





女子

虎石

三男

字滿

女子

女子

女子

忠胤

号又太郎、入道正惠 此正惠号ハ御家五代貞久  
公御文書ニ見タリ、薩摩郡司 但嘉曆三年注進

状見タリ、

又次郎

忠元

貞久公御文書之内ニ又太郎入道子息又次郎忠元  
トアリ、

忠平

二郎 入道

薩摩郡司 嘉曆三年七月三日修理亮英時之状ニ

見、

飛彈守 (マモ)

二郎左衛門尉

忠家

宗忠

忠清

與四左衛門尉

天文七年戊戌十二月廿九日、於薩州加世田城戰  
死、法号雪山道白禪定門

女子

富松氏妻

忠基

平十郎 肥前守

法号月光道休禪定門

從、義久公之命移日州飯野、而飯野御城乾方居  
城、至于今吉富城ト云、

忠實

志摩介

内藏介

薩州樋脇ニ居住、

忠安

忠則

志摩介

後弥太右エ門

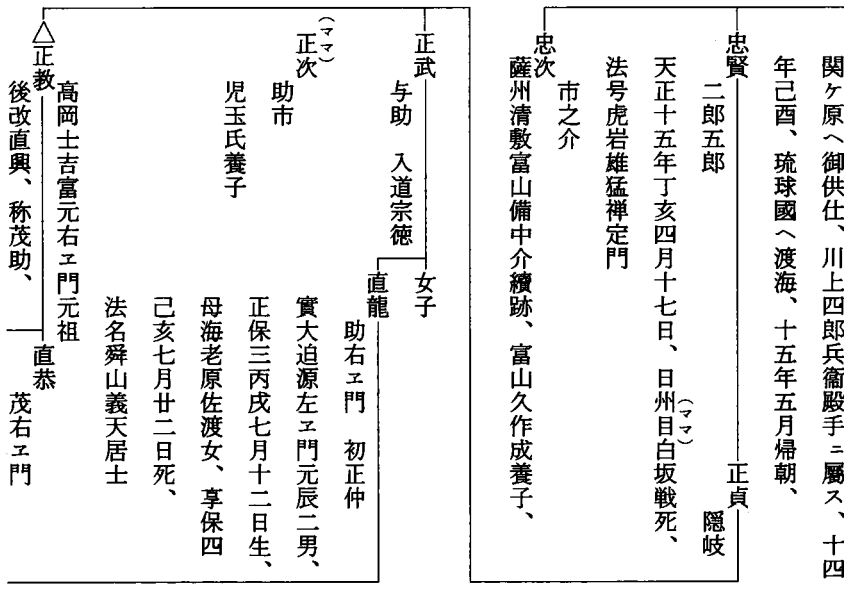
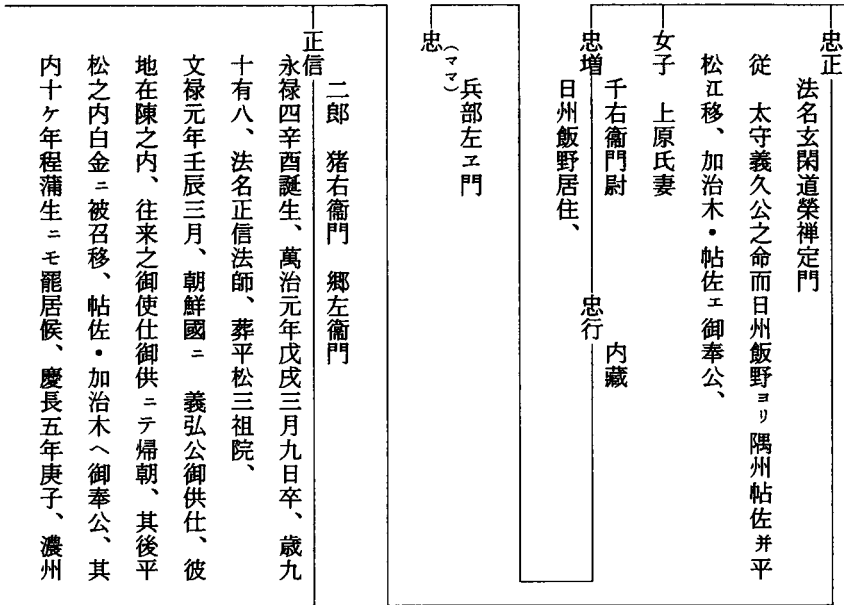
仲右エ門

忠清

平次郎

二郎右エ門

入道玄閑



「直共  
茂左工門

長重  
三右衛門

寛文十庚戌正月廿八日生、母高岡士福島新兵衛

女

正徳三年癸巳三月十日死、法名慶岩萬昌居士

女子 高岡士高木五郎左工門秀信妻

延宝五丁巳五月七日生、母同、

直年

勘右工門

元禄八乙亥十月八日生、母倉岡士黒木佐五右工門

女

直郷

次右工門

此子孫高岡士吉富平助

女子 高岡士神崎森右工門妻

助之丞 為左工門 入道慶益

「正榮

母重田右京亮女 慶長十二年丁未六月廿九日誕生、

貞享四丁卯五月九日死、年八十一、法名學耕慶益

居士、葬平松三祖院、

忠文 松千代 徳介 為左工門

寛永六己巳七月廿一日誕生、母本田小吉女

御右筆 糺明奉行 物奉行御役相勤、

享保六年辛丑十一月八日死去、年九十三、風車軒

正心宗貞居士 墓所浄光明寺

右室平城一貫女 寛文九年酉五月廿三日死、法名

天壽院明心證佛大姉、墓所同前、

女子

母同、赤塚諸右衛門重勝妻

忠以

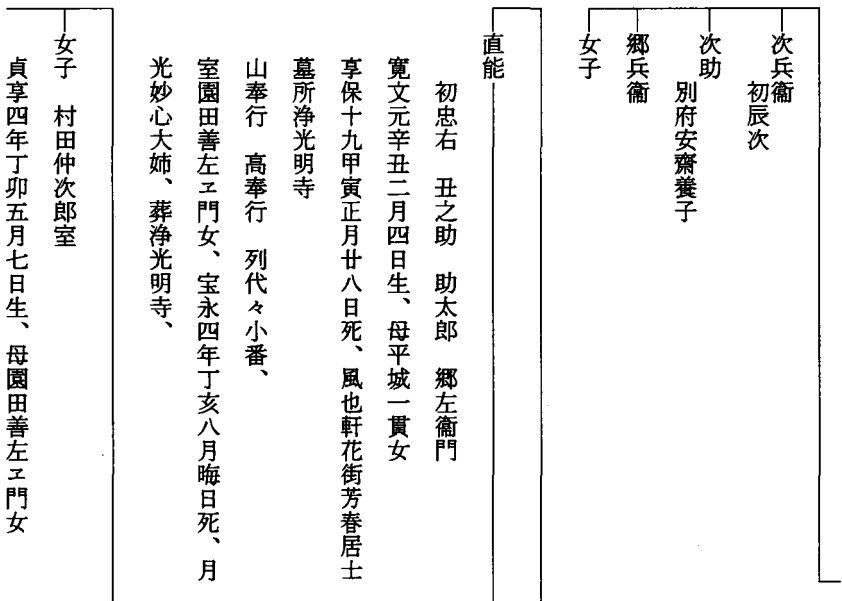
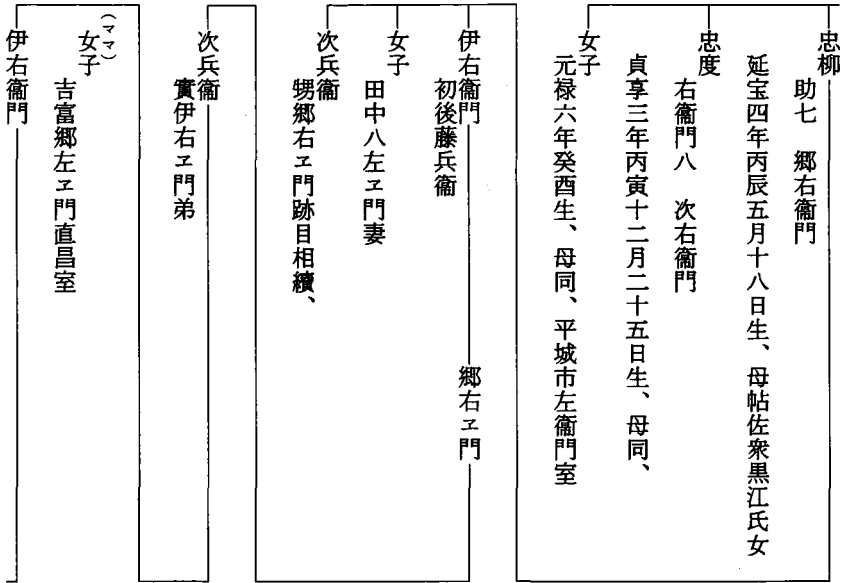
虎助 為右工門 脇元吉富氏元祖

寛永十八年辛巳三月二十有三日誕生、母同、

女子

他腹、新納平右衛門久朗妻





直基

初忠考 次郎 次郎右エ門 郷左衛門

元禄九年丙戌四月廿二日生、母同、

享保十九年寅六月十六日、中務殿ヨリ繼目被仰付、

取次島津弥市郎殿、七月五日、代々小番、主計殿

ヨリ被入置、

同廿年乙卯十一月朔日、 繼豊公江繼目御礼、郷

左衛門ト改、中紙進上、

元文三年戊午七月十二日、依願隱居、

同五年庚申四月十八日死、風松軒直心是道居士

墓所浄光明寺

直英

初忠曾 辨之丞 順右エ門

元禄十三年庚辰四月七日生、母同、

加藤權兵衛清風ヨリ武術相傳、

元文四年己未十二月十九日死、風草軒一心是法居

士、墓所同前、

忠次

三七郎 為僧名博道 時宗

宝永元年甲申三月七日生、母同、

享保十三年戊申六月廿二日死、文阿博道大徳、墓

所同前、

女子 夭亡

男子 夭亡 小次郎

直恒

快次郎 為左エ門

享保六辛丑十二月晦日生、母馬場長軒女

十五年庚戌八月廿六日元服、加冠馬場彦右エ門、

廿年乙卯十二月九日、初見 繼豊公、鎌田源左エ

門贊之、

元文元年丙辰十一月十二日、請角子額、

二年己五月九日、請除前髪、

三年午七月、請為父後、十二日、乃国老・主計

使本田信次郎親・許之、父告老故也、廿日、命

使本田信次郎親・許之、父告老故也、廿日、命

以世爵列於小番、乃亦国老・大藏使義岡左平太傳之、九月十八日、獻中紙三束拜嗣續恩、川上縫殿贊之、寛保二年壬戌六月晦日、命為進物番、延享四年丁卯二月七日為横目、月番御目附西左太郎傳之命、  
明和元年甲申九月二日卒于江戸、葬大圓寺、法名大心了道居士

女子

寛延二年己巳生、母宮本十右工門女

嫁野津八左工門、

直昌

次郎 郷左工門

宝曆元年辛未十一月五日生、母同上、

十三年未八月廿八日、獻中紙<sup>三</sup>為贊、始見

公<sup>大信</sup>於朝、島津内記贊之、

明和元年申閏十二月廿三日、請命為父後、国

老島津主鈴使新納次郎四郎許之、廿八日、列代々

小番、乃亦国老島津主鈴使島山教馬傳之命、明和元年申正月、請角額、閏十二月廿四日、上拜嗣續恩請、不幾許之、  
二年酉正月廿九日、請命除前髮、  
天明九年酉、先是以横目如江戸、二月十五日死江戸、葬大圓寺、法名英心院覺了義雄居士

女子 野津八郎太妻

天明二年辰七月十七日生、母吉富次兵衛女

寛政元年亥六月十五日死、

平八

安永八年亥七月六日生、母同上、

天明四年辰五月廿六日、夭亡、

直香

称猪助、

天明三年癸卯六月六日生、母同上、

直寛

幼字吉次郎 改吉之丞、

天明五年乙巳八月十八日生、母同上、

直(マ)

為左エ門

直(マ)

庄次郎

直(マ)

郷右エ門

直(マ)

郷之丞

直堅

小字有助 称與右衛門、改與兵衛、

享保十年乙巳十月十二日生、母馬場長軒女

廿年乙卯二月十一日元服、馬場彦右衛門加冠、

十二月九日、始見

繼豊公、小林仲太兵衛贊之、

元文四年未二月廿九日、請角額、・・大藏許之、

五年申閏七月五日、除前髮、・・左京許請、

寛保二年壬戌八月十一日、請分族異家門、乃国老

・・大藏使川田与右エ門傳 命、

寶曆十一年巳三月四日、始請求祿、乃国老・・隼

人使川田彦七傳之 命、

天明九年酉正月廿八日、請 命改与兵衛、国老・

安房使村上靜馬許之請、

安永二年巳三月、買宅地一區百八十八坪於野元左平次、

乃十三日、請 命為己宅地、国老・・主馬使谷山

角太夫許之、

享和元年辛酉十月十二日病死、年七十七、法名有

保軒徳阿泰道居、(土脱力)葬于淨光明寺、

妻吉井權兵衛女、以文化四年丁卯十二月二日死、

法名念室妙護大姉

直貞

小字郷袈裟 称平右衛門、又改平之丞、

宝曆十二年壬午閏四月朔日生、母吉井權兵衛女

明和九年辰二月廿五日元服、馬場傳右エ門加冠、

安永二年癸巳八月十五日、始見

重豪公、菱刈孫兵衛贊之、

文化十五年戊寅五月廿一日、先是為大目附座書役、

至是擢任御勘定方小頭、

文政二年己卯閏四月廿一日卒、年五十八、葬淨光

明寺、法名天性軒涼阿淨榮居士

直方

幼字鐵之助 改與右工門、又改孫兵衛、

寬政九年丁巳二月七日生、母村田源藏女

文化二年乙丑十一月十五日元服、村田源左工門

加之冠、

五年辰二月六日、始見

齊宣公、

仕至御代官、

天保十三年壬寅十一月廿一日死、年四十六、法

名良昌軒觀阿常心居士、葬于淨光明寺、

直風

小字平次郎 改半助、又改休兵衛、後称源左

工門、

寬政十二年庚申十月六日生、母同上、

文化六年己巳二月廿五日元服、吉富次兵衛加冠、

八年未五月廿八日、始見

公、山岡齊宮贊之、

出嗣村田源左工門後、

直温

幼字林袈裟 改新次郎、

文化七年庚午正月十五日生、母同上、

直(マ)

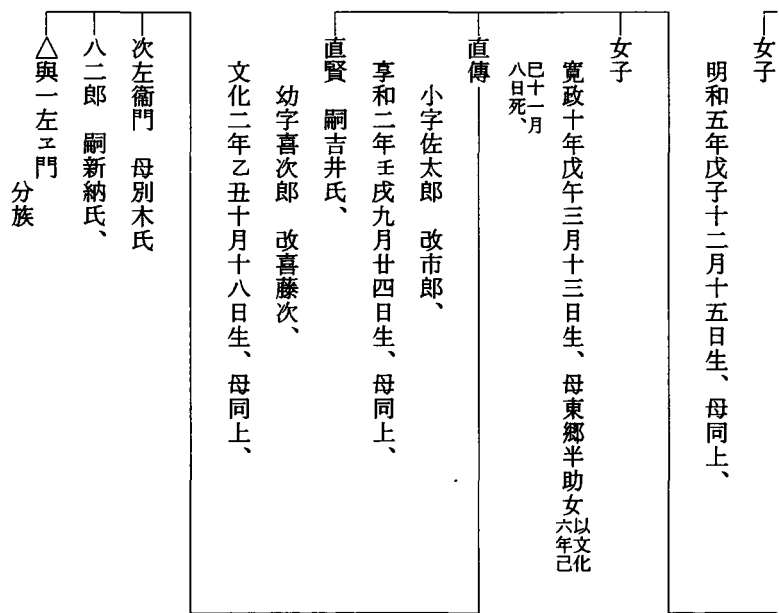
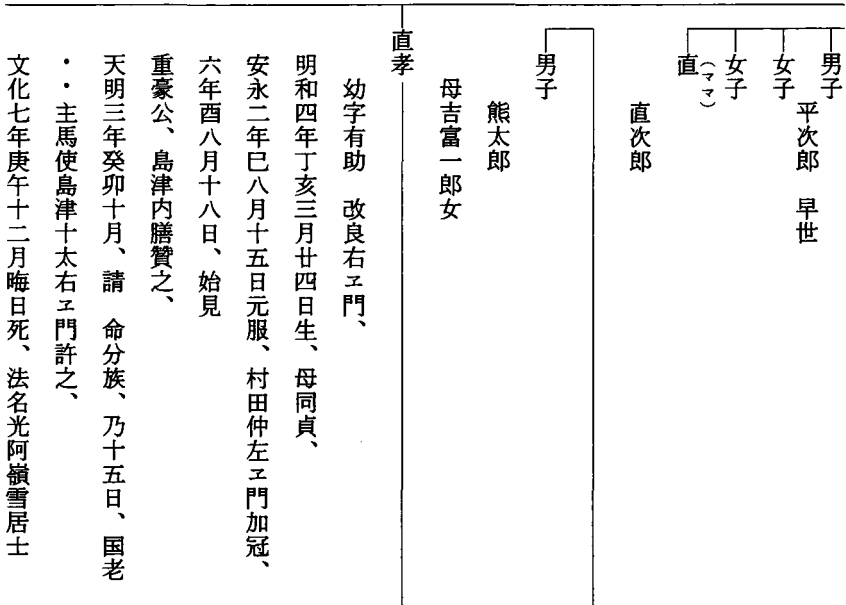
称直之進、

直寬

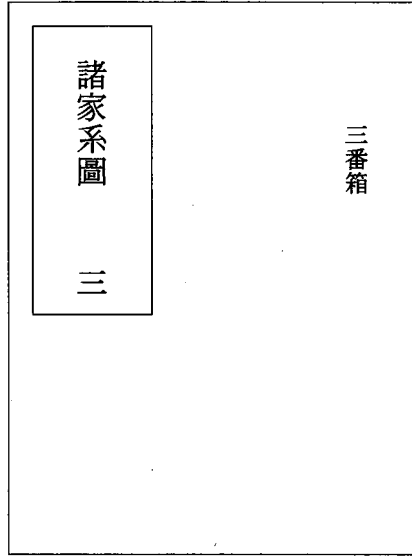
小字熊太郎 称平右工門、

文政(マ)年 月 日生、母河野十右工門女

女子



(表紙)



諸家系圖三

- 一 稅所氏系圖  
文書
- 一 海江田氏
- 一 永山氏
- 一 國分氏
- 一 野村氏
- 一 那須氏
- 一 田代氏
- 一 讚良氏
- 一 仁禮氏
- 一 入田氏
- 一 小川氏
- 一 餅原氏
- 一 左近尉氏梶原氏
- 一 相良氏
- 一 江田氏
- 一 菱刈氏本家也
- 一 肥後氏
- 一 黑田氏

27

「諸家系圖」

(中表紙)

- 一 藤崎氏
- 一 村田氏
- 一 高城氏
- 一 淨案院
- 一 相良氏
- 一 莫根氏
- 一 岡村氏祿獲氏
- 一 西俣氏比志島氏  
庶流
- 一 有馬氏
- 一 三原氏
- 一 土持氏
- 一 東郷氏斧湖氏
- 一 大河平氏
- 一 高木氏
- 一 古佐多氏
- 一 肥後氏
- 一 鮫島氏
- 一 伊東氏三家
- 一 菊池氏古
- 一 加治木氏
- 一 宮里氏
- 一 有川氏

稅所氏系圖

大隅

曾於郡系圖

人王五十八代 人王五十九代

光孝天皇 ○宇多法皇

諱時康

諱定省 仁和元年

母式部卿時親王女

敦實親王

○篤房

一品式部卿

正二位 大納言

○承平三年出家、

○母康名朝臣女

○天曆九丙子二月始給藤原姓、

○篤相

正四位 右京大夫

篤靜

正三位 左中將

○篤澄

正三位 右中將

篤子女(マ)

清和天皇御時内侍

○母撰津守家信女

子孫在于別紙、

○篤仲

敦長

正四位 左少將

○母播摩守有房女

正五位下

○治安元年

○敦如

辛酉三月廿一日自流

大隅國曾於御館地、

○篤義

坂上御館

嫡女

○篤貞

重枝 曾於野太夫

○篤近

重枝 曾於野太郎

太夫

正五位下 刑部太輔

篤忠

一条藏人

長保五年癸卯 子孫在

別紙、

篤信

重武 檜次

篤季

篤清

重武

源太夫

時久

中太夫篤吉

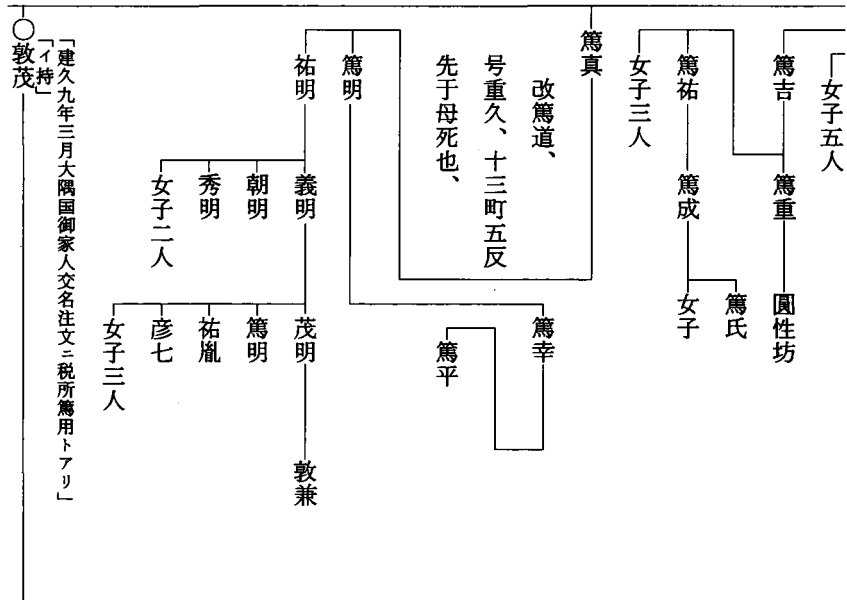
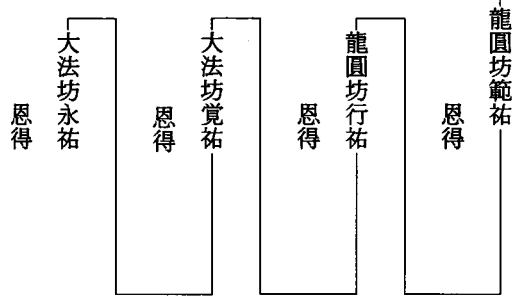
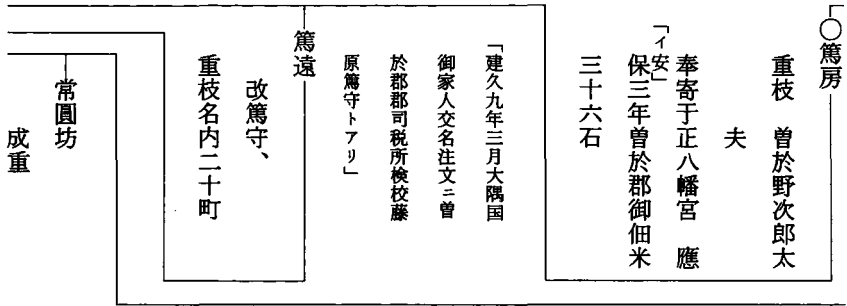
系丸

源次郎太

夫

篤正





重富 曾於野七郎太夫 押領使職 松永名・栗野・恒次・重武名等御知行、○源平御乱之時、為右大將家御時、度々致忠節、預御判御下文、税所・惣檢校兩職、恒次名等同給、依其勲功号税所太夫、此外雖条々多無尽期之条、不書載也、

篤利

八郎 先于母義、

「十五代税所弥五太夫系圖席ニアリ、○川畑氏系図ニハ教満ハ祐満之後實名と見得たり、而教満ハ、永久五年十二月誕生、母加治木大隅大掾頼光女とアリ、法名尊光、建立税所宮」

教満

右太夫 大掾兼 ○建保元年五月二日、三浦和田左衛門尉義盛追討之時、義盛子息四郎左衛門尉以下敵向三人討取之、大事之疵數ヶ所負之、同三日死去、新左衛門常盛戰場を遁れ去ル、  
「嫡子也」  
「四男也」  
 四郎左衛門義直

伊具馬太郎盛重打取也、

「按東鑑、和田合戦御方被討人有之内ニ筑紫之税所次郎とアリ、此教満なるべし」

安弁 法乗坊

霧島座主

教久

得重檢校職、

義弘

得重惣檢校職、

教命  
 敦國  
 敦總  
 女子

敦高  
 得一丸  
 乙万丸  
 乙一丸

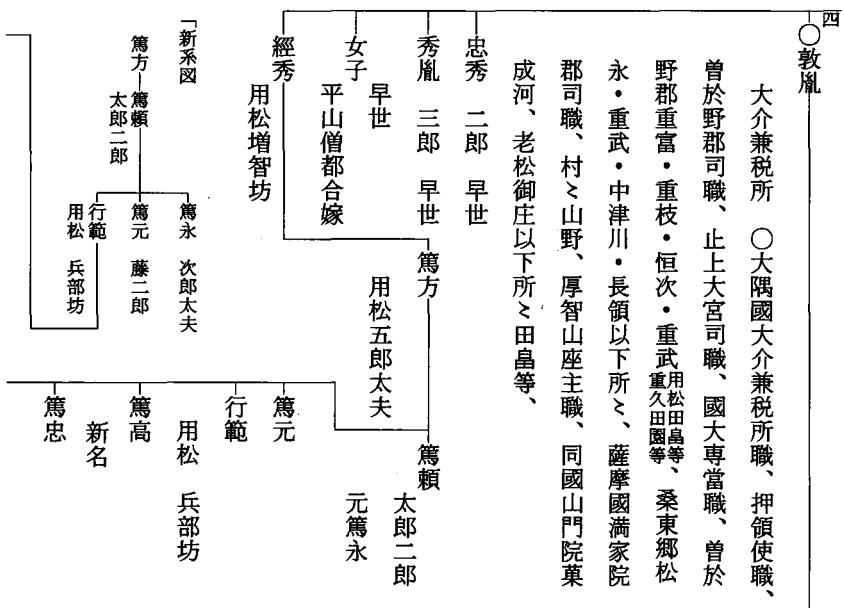
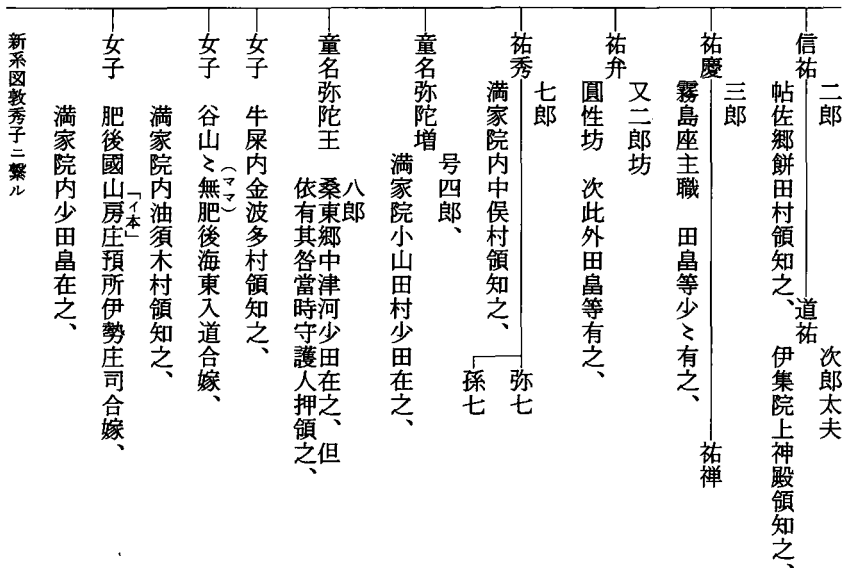
阿弥陀丸  
 志磨丸  
 女人四人

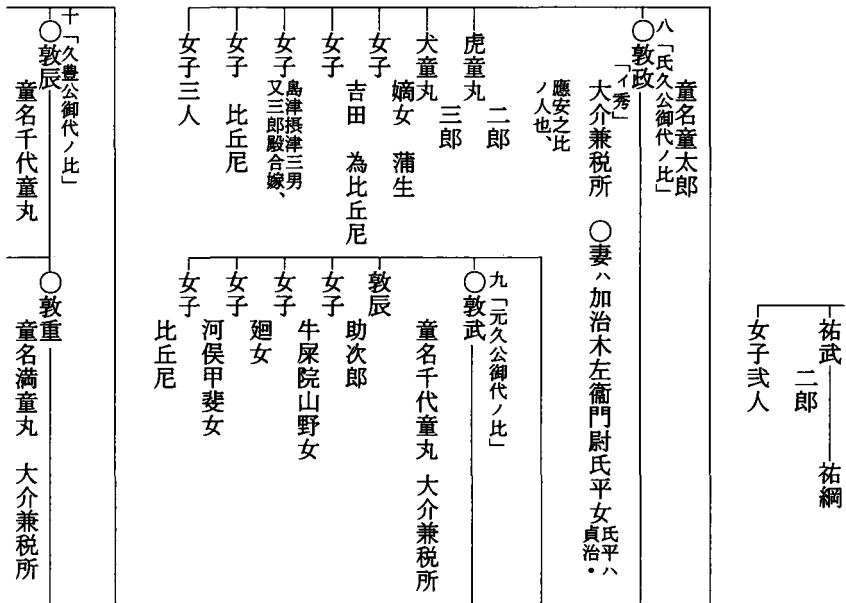
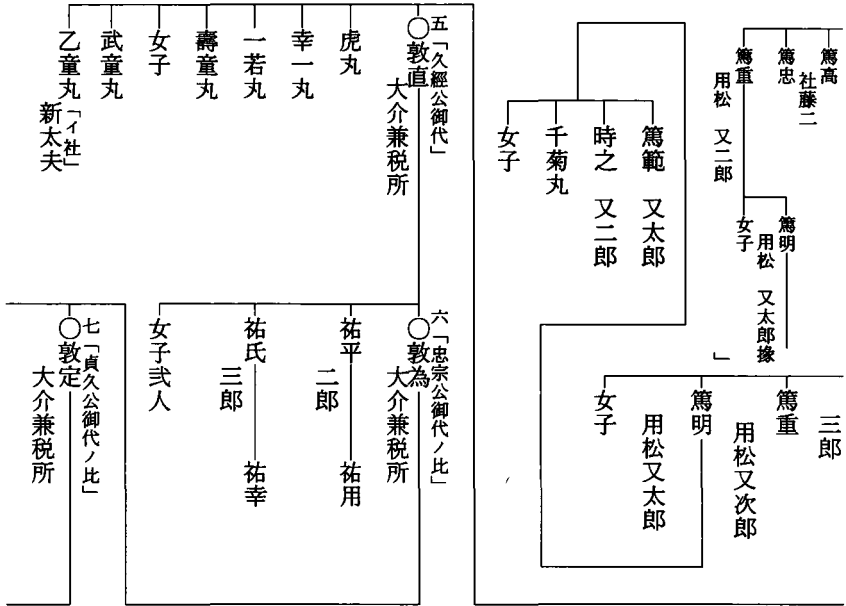
「川田家由緒記、比志島元祖重賢姉、税所太郎篤満ニ嫁す、篤満重賢を追出して奪満家院、因重賢為備トアリ」  
 四男元祖  
 祐満

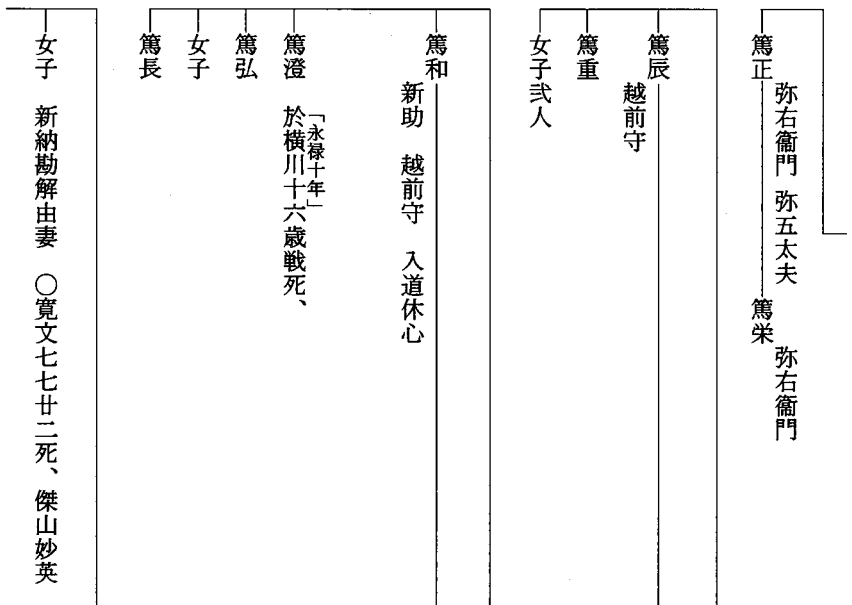
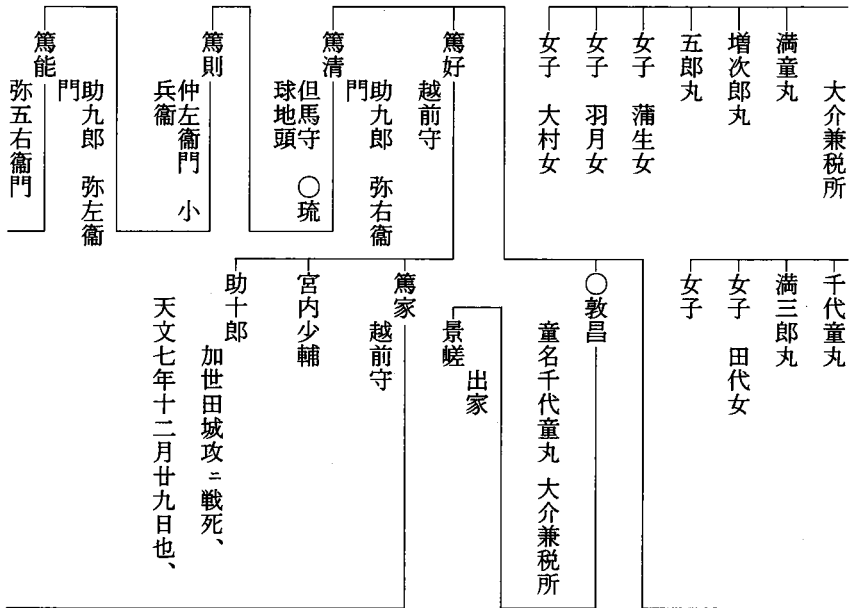
「善兵衛家系図ニハ号妻屋、号税所兵衛トアリ」

重富 号税所兵衛、









篤長 大姉

次郎右衛門 ○実ハ弟也、篤和無男故為猶子、  
○慶長十一年五十八死、林泰庵主

慶長十九大坂出陣人数賦 高五百五十石 人数

十一人乘馬一疋 助七

篤貞 助七 次郎右衛門

○寛永六十二廿三死、宗白居士

篤成 三兵衛 次左衛門 篤能 新助

○萬治二二晦死、道用居士

篤元 龜市 右衛門兵衛 龜徳 出家

篤義 (ママ)

次兵衛 ○実ハ弟、兄嫡子為僧故家督、

28 對當家可抽忠勲之段、別而顯心底、兩度之 神載尤頼敷  
子細感之訖、倍到向後不可有愆易之儀、可為肝要者也、

仍證狀如斯、

天正拾八年

六月十五日

税所越前守殿

(島津義久) 龍伯 (花押)

右御包紙

税所越前守殿

龍伯

(本文書ハ一旧記雜錄後編二二六六号文書ト同一文書ナルベシ)

29

猶々、萩原寺も其方へ参候由承候間、其元にて可有

談合事尤ニ候、将又、何篇長寿御頼有へき之由承候

と被申候、左様ニ候てハ悪かるへく、石田殿より直

ニ其元諸事幸侃可有分別由、被仰付候而被召下候間、

別人ニ御談合有様ニてハ悪かるへく候、為御心得候、

幸侃より存松・税所越入を以、只今談議所寺中にてから

め取候科人之儀被申出候様子を、萩原寺京都にも高麗に

も彼儀被申上候由承及候、彼勘介と申者ハ、超雲か女房

を蜜懷仕候を可致成敗企ニ候之處ニ、逃候て霧嶋をたの

ミ、それより談議所のことく参候由、披露にて候、拙者

田代

返事ニハ、萩原寺之口よりハ無聞事候、此等之取沙汰ハ不殘承及候、高麗へ萩原寺言上も候つる哉、京都へハ無其儀候、とかく御成所隙入之刻ニ候之間、此節者此等之取沙汰可被差延由申聞候、明日其地へ被罷越由候間、定可被申上候、御談合を以、可有返事儀肝要ニ候、為心得早々申入候、猶巨細者川善左衛門尉可申候、恐々謹言、

六月一日

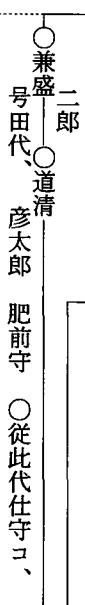
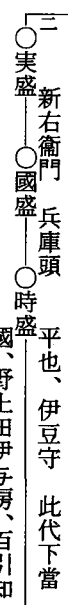
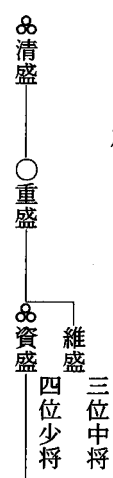
龍伯(花押)

兵庫頭殿

参

久保氏見聞秘記

○寛永十八年迄、長崎ハ長崎奉行而已也、大番なし、是年筑前福岡城主黒田右衛門佐忠元、初テ請司吳國警固ノ防護為西裔之藩鎮、許焉、翌年肥前佐賀城主鍋嶋氏亦請為同職、自是交行テ看察ス焉、正保四年命雖非番之歳尚加番之事、因夏秋之間、每年在國加番之、冬参勤江戸翌年春帰國、而其歳勤長崎在番、正保四年南蛮船来ルコトハ先ニアリ、





川邊、法名黙良 ○代元久公朝九州探題筑前博多トモ、  
公給御證判、三十六才

○清定 彦太郎 肥前守 ○此代在鹿府、法名大素

「イ元」「イ助七郎」  
○清光 助七 刑部少輔 ○忠昌公時戰死加治木、法名  
「イ以精」  
以釋、三十六才

○清親 備後守 「干トモ」八郎 新右衛門 ○勝久公代於  
「大永七年六月五日、  
帖佐打死、四十七才  
梅岳君島津昌久ヲ帖佐ニ討玉フコトアリ、此時カ」

○文清 助太郎 新右衛門 「イ左」  
○同代戰死加治木、廿八才、良慶讚庭  
「イ忠昌公御代」

○清宣 二郎 助六  
備後 縫殿助 入道 ○清辰 甚助 助六  
慶長十二死、

○清秀 助六 刑部少輔  
○元和四死、茂岩宗繁居士  
○清良 宗次郎  
甚右衛門  
寛永十四生、

○清 次郎助 甚助  
○延宝元年生、

○田代久助 元久公御代 將軍博多へ被差遣候  
節、御辭退申上候処、辭退之分無分別候、謂家  
謂仁謂分限、是彼不可有子細、阿蘇谷者可為副  
將、將軍と元久公被成下候御證判有之候、

32  
梶原 左近尉

梶原左衛門景時二男  
○景高  
平次左衛門  
二  
三  
四  
○景純

五 純家  
六 兼純  
七 滋純 号北条弥次郎、

○法名道朝  
○住日置、建武元年入于下大隅、

八 信純  
新左衛門 ○應安五日州合戦、  
御旗之役、法名宗安

九 義純  
新左衛門  
法名一安  
十 重純  
新左衛門 三郎丸  
法名道一

十一 政純  
太郎三郎 ○久豊公東福寺城御重代御太刀御番  
之時打死、應永廿四十二月七日也、法名祐了

十二 梶原四郎太郎 新左衛門  
元純

○文龜四二十四日、忠昌公初詣隅州正八幡宮時、  
御供騎馬之内也、○元禄十二月三日記録官史  
云、自應永廿四至文龜四、八十八年也、然則元

純ハ非政純之子也、

十三 備前守  
氏純  
十四 平左衛門 備前守  
房純

○天文十四於加 ○初号大迫純身、於外戚大迫氏  
世田死、 仕貴久公、

十五 平八郎 駿河守  
成純  
○尚純  
平左衛門 内蔵丞

改左近尉、彦岐守

掃部重純

○寛永七於江戸 家久公命曰、

其先称梶原、中比有故称大迫、後可左近尉改、  
友純大迫八右衛門養子  
爽ハ尚純二男也

源之進 八右衛門

○尚(マシ)

友純 八右衛門 ○重純猶子 ○母ハ大友家支流瀧





35

紀内親王

日下部氏ト号、ユリハカ大神ト号、

海江田氏

△景治 孫太郎 主水  
(ママ)

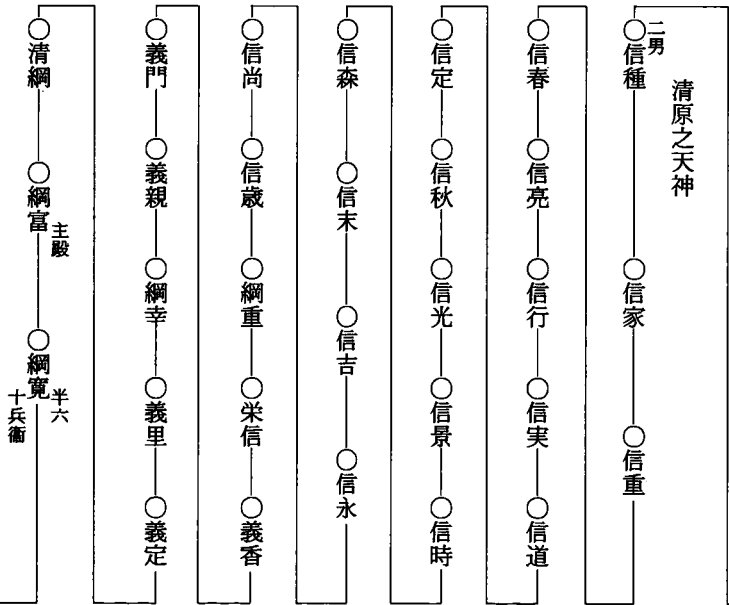
△景孝 主水  
孫次郎  
△景房 孫次郎  
△景貞 孫次郎  
喜右衛門

△景氏 右衛門  
知行吉野、  
△景家  
△景安 左衛門

○孝純 主計  
△景信 六男 勘解由  
△景茂 左衛門

34 梶原家嫡

阿多ノ定番征伐之時、但馬國木崎郡賜八千町、子孫フクセイ將軍ノ御供、薩摩郡給、



讚良氏

川越太郎重頼三男

♂重貞 三郎 重輔 修理亮 重貞 修理亮 号讚良、  
領河内國讚良郡故也、

綱藤 仲左衛門  
吟味役 久志秋目地頭 綱保 仲左衛門 信 外記

貞與 大膳亮 重矩 刑部太輔 重治 大膳

重純 重賢 二郎 刑部太輔 重年 二郎

重寛 二郎 重朝 二郎 土佐守 重高 二郎兵衛

重喬 二郎 大膳亮 貞盈 二郎兵衛 貞喬 二郎 大藏太輔

貞能 二郎 土佐守 貞敦 二郎兵衛 貞秀 大膳 貞禄二生、母和泉讚 岐守女

○貴久公給宝刀、

十九 善助 貞行 貞資 善助 貞勝 二藏 貞増 銀八 権右衛門

貞清 銀八 外記 貞雄 次郎 七兵衛 善助 (44)

相良氏

○佐近

○頼安

童名軍七

犬童美作

入道休意

清兵衛

○頼兄

○永祿十一年於求磨生、○復本氏相良、○慶長五年  
濃州大垣城へ福原右馬助主取ニ而、熊谷内藏之助・

木村宗右衛門・垣見和泉守・相良宮内頼房・高橋

右近・秋月長門守籠城候、然処ニ秋月・高橋・相

良、関東方ニ申遣候ハ、此節罪於御赦免ハ、返忠

可申上旨申上、城中ニて五将ヲ打取、降参ニて候、

皆清兵衛謀ニて候、依之 家康公より御感状被下

候、其後大垣之依功、昵近ニ被召成、肥後葦北郡

可被下旨被仰渡候へ共、御断申上候、左候而 御

目見昵近同前被仰付候、其時求磨城主彦岐守、一

城之仕置清兵衛仕、我俣有之、家中より申分有之、

江戸へ被召上候、其跡仕置、清兵衛後妻列子犬迫

伴兵衛江頼置候処ニ、清兵衛・喜平次於江戸不仕

合風聞有之起一揆候、清兵衛公義向不相濟内一乱

有之、清兵衛ハ津輕江御預ニ而候、

内藏助

○頼安

○天正十六年生、○於江戸死、五十二 ○妻島津中  
書家久女也、

喜平次 内藏丞 (A.P.)  
○母ハ家久女也、

○頼章

○元和三年加治木へ差越 義弘公御加冠、

○寛永十七年、喜平次在江戸ニ而候処ニ、上使御出、

求磨仕置之儀ニ付、奥州津輕江御預之節、喜平次

薩摩屋敷へ被遣候、夫より公義無御構、薩州為臣

二千石被下候、

永山休兵衛

〇義昭  
靈陽院

南都大乘院門首

義尋  
〇丹波赤井悪右衛門直正妻字アル直正早世

義尊 圓滿院

常尊 実相院

右二字、母ハ古市胤栄女也、播磨人也、初義尋門首而生二子、故不得任南都、居京号高山、右母有艷色、後仕 後陽成帝、号三位局、生道晃法親王、故初二子トモ帝為子分、帝王系図ニ出ツ、

〇義在  
号永山、千壽 右近 休兵衛 〇義昭公泉州蟄

居之時出生、遠流隅州、于時主永山信濃守、故借用名字号永山、

「知足軒道性志ニ出ツ」  
〇在故下薩、妻永山氏女、称永山休兵衛、薩州府

〇義房 彦右衛門 休兵衛  
〇義比

仁禮覺左衛門系図

〇文徳天皇 惟喬親王 号木原王子、  
諱道康 小野宮

一品式部卿宮 二品親王

〇建守親王 〇康和親王

二品中務卿 一品式部卿  
〔兵部卿〕

〇正明親王 〇仁禮親王

正三位 修理大夫 〇始給藤原姓、

〇惟貞

左少辨 宰相者受勅有、伴丞大監兼行者、少将

〇頼明



善男之裔也、元祖善男奉宇多帝勅、任薩隅日之長吏、寛平元年下當國退治基橋氏、以来世々執權、至兼行背勅命、故天禄二年仁礼新宰相頼明、奉圓融院勅、為三州任下國、平治伴家、

○長明 — 頼嗣 — 景泰 — 康景 — 左京大夫

○明通 — 新左衛門 — 通胤 — 景廣

撰津守 仁礼 ○安元二年大橋左中將經  
 ○國景 — 景晴 忠弟時忠、奉 後白川院勅、為三州長吏下向、因景晴辞上洛、二弟經憲共帰京、住万里小路、故

經憲 号万里小路、  
 兩兄上京、故經景在国(欽カ)  
 薩州別府庄、改藤原為平姓、

三 景政 — 兄 — 信景 — 子孫号中島、  
 四 景治 — 修理大夫 号宮原、

二 景葉 — 修理大夫 — 景葉 — 「イ如此」五  
 筑前守 中央景 — 時景

○忠景 — 景隆 — 大炊介 — 通景 — 出羽守

○景與 — 兵庫頭 — 景益 — 筑前守 — 太郎左衛門  
 任友久公、

○景種 — 兵庫頭 — 筑前守 — 景次 — 人物志ニ傳記アリ、  
 ○景晴

○景衛 — ○景頼 — ○景治 (天) 二郎太郎 太郎兵衛  
覺左衛門

寬永二生、御用人 長  
嶋・伊佐地頭 吟味役

江田源助家

品家綱

小野太郎 ○領日置住焉、○文治三 頼朝卿為  
惣追捕使、諸國國人被補御家人、故家綱為日置  
地頭、從 忠久公命、勤内裏大番、

「本ノマ、」  
別立式部 ○受父ノ讓領日置、

○家重  
京都大番 管崎警固

○家長  
大田次郎 ○兄無男故為其後并領日置、号大田、

○家忠  
大田太郎  
式部

○家氏  
大田式部太夫 退大田、後改大田号江田、

肥前松浦品湊村、同國移万名等地頭、住于此地、  
(早九)

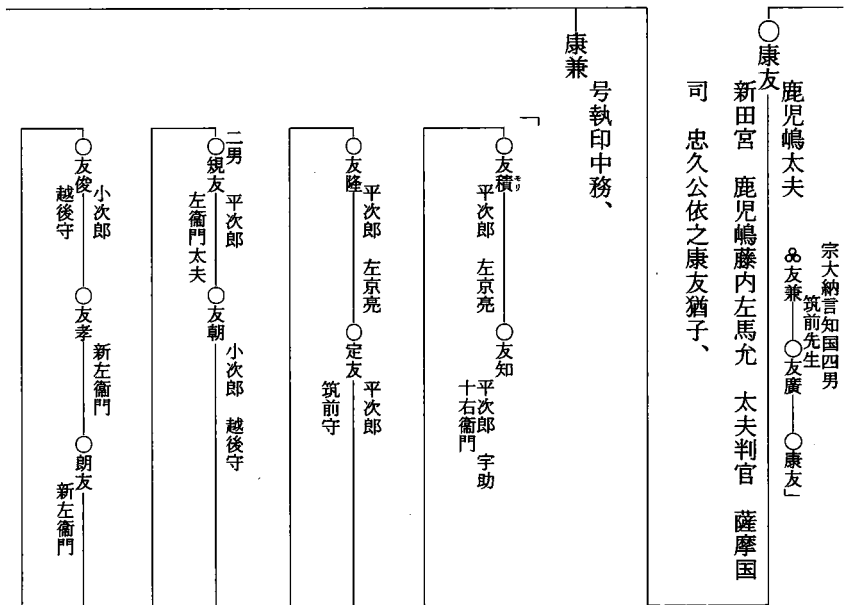
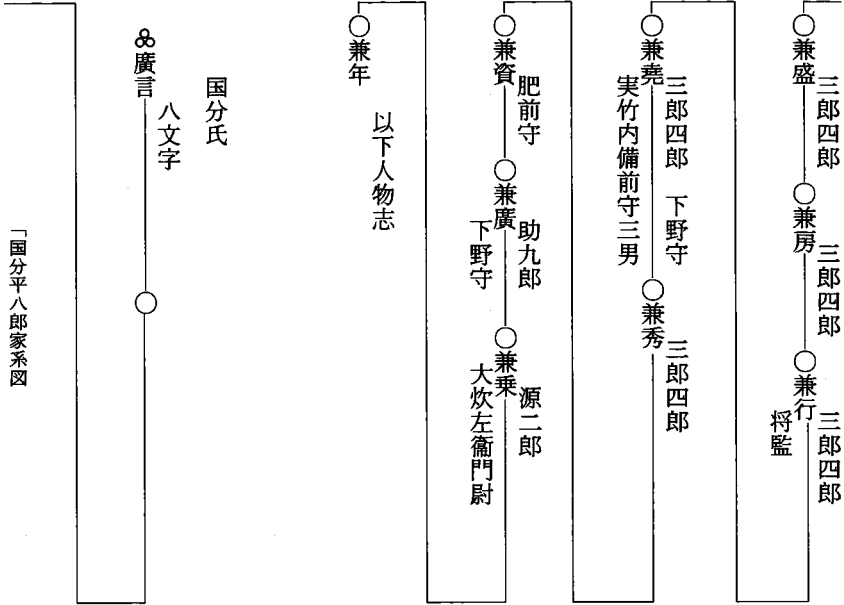
○家房  
式部少輔 ○退松浦在日州三侯、

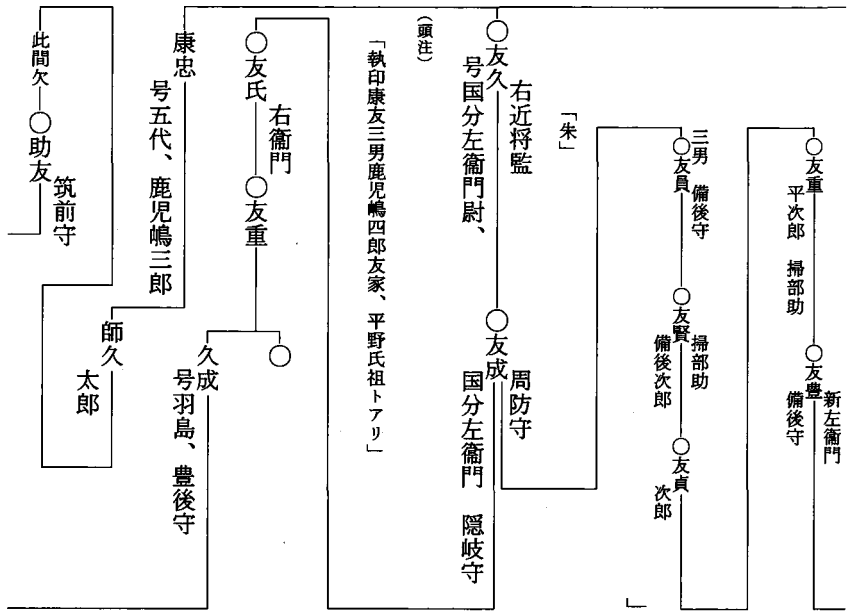
○家貞  
式部 ○在三侯、三侯ハ肝付兼重領也、○尊氏  
公依命、畠山式部攻兼重、定必死、于時家貞請

兼重曰、我代死于茲、速遁去隱身於山林、相言  
云、肝付絶ハ江田可續、江田絶ハ肝付可續、家  
貞則名乘肝付八郎兼重打死ス、

○兼政  
金太郎 ○父自殺時七才也、家人懷之隱、其後  
兼重不違誓言、為一門ノ好、与伴姓及兼字、因  
名兼政、

41





「○友慶 勝左衛門  
 ○五代院右衛門友清文永年間人也

○五代筑前守文永比仕立久公、京都所司浦上美濃守則宗より被遣候状アリ、

友宗 豊後守 忠國公征伐伊東ノ時有功、因給加江田及柏杵、

友致 次郎五郎 友綱 天文十六生、伊豆守 宗次郎

友堅 若狹守 宗六 友明 若狹守 肝付合戦於、平房八幡打死、

友重 右衛門 友秀 善兵衛 ○朝鮮番船打死、

○友昌 藏人  
 ○友快 喜兵衛  
 子孫助之進

入田  
 大友四代因幡守親時二男

⊗泰親  
 号入田次郎、因幡守 兵庫頭 後秀直 初松屋  
 次郎 ○領豊後南郡而入田居城、

○氏綱 治部少輔 因幡守  
 豊後守 ○正和生、  
 ○氏朝 治部少輔 大膳太夫  
 豊後守  
 ○母草野筑後女

○親忠  
 次郎 兵庫頭 治部太夫 因幡守

○氏廣  
 修理亮 丹後守 ○親廣 出羽守 ○親廉 大膳太夫

相模守 兵庫頭

○親直 掃部頭 豊後守  
 ○居住入田城、○年十六  
 才時、同父与戸次玄興  
 戦有軍功、戦死古野尻、  
 輝氏  
 ○義 丹後守 入道宗和  
 右衛門 入道半林  
 如心治部少輔 入道如心  
 筑後守

義氏  
 右近将監 ○住高崎、○庄内山田戦死、

義昌  
 九郎 筑後守 九右衛門  
 ○御国御暇申上、一節住肥後、其後又々御国へ罷出  
 候、

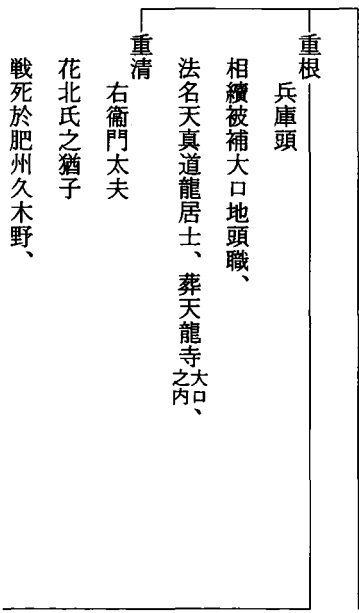
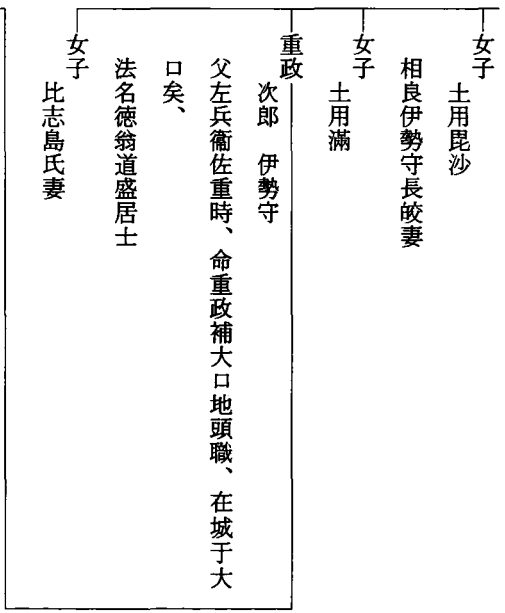
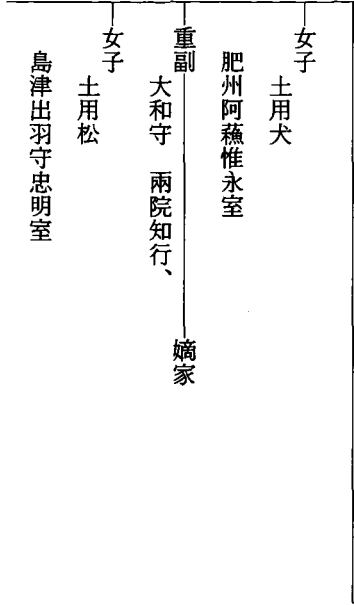
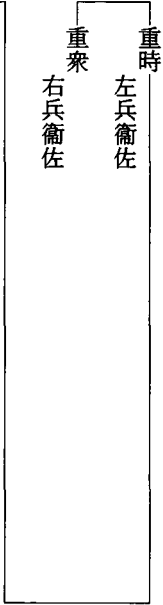
義豊  
 新五郎 数馬介 右近将監 次左衛門 九右衛  
 門 ○從高岡移鹿、元禄六死、

(中表紙)

「菱刈氏略系圖」

43

菱刈氏略系圖  
嫡家十二代ノ家督



重昌

四郎 越後守

家嫡大和守重猛獻所知於 太守義久公而降、故重昌相共降 公之旗下、故 義久公賜曾木一所於重昌、而為履厥后、改曾木賜花北住焉、國老伊集院右衛門太夫忠金・川上上野介忠克入道意釣・三原遠江守重秋、所贈於新納刑部太輔忠元之書簡如左  
今簡、藏之、

菱刈四郎との曾木就被差上、當時在所等無落着候、就夫即達 上聞候、然者從最前抽被成御奉公候、為其忠花北一所、先々可被差遣之由被仰出、早々可被仰達候、追而御加扶持之段上意候、聊疎儀有間敷候、恐々謹言、

十二月廿日

(伊集院) 忠金  
 (川上) 意釣  
 (三原) 重秋

新納刑部太輔殿 (忠元)

(本文書ハ「旧記雜錄後編」一四三〇・五三一・五七三号文書ト同一文書ナルベシ)  
 (本文書ハ「家わけ七」菱刈文書ハの11号文書ト同一文書ナルベシ)

法名英心良雄居士 葬花北、

女子

肝付彈正忠兼盛室 越前守兼等之母也、

法号秋岳妙椿大姉 秋岳庵殿

女子

北原氏妻

母高城備前守重誠女

隆豊

孫三郎 越後守 源兵衛 休兵衛

母同、

文禄元年丙辰 (ママ) 義弘公 久保公渡海於朝鮮国、隆

豊以自力加供奉之列、在陣屢勞軍務、慶長二年丁

酉和平之時、憑上井仲五兼政請歸國暇、因茲

義弘公使新納伊勢守久饒入道遊甫有 高命、隆豊

父祖奉仕之勤勞且隆豐軍功異于他、御歸朝之後、約賜采地三百斛焉、隆豐忝 高命、賴遊甫奉謝厚意、朝鮮七年之在陣、江原道之敵國及南原之攻城、唐島番船破之時有軍勞、不遑枚舉、就中慶長三己戊十一月十八日、唐島之番船交戰太急也、切乘敵艦蒙疵、因茲從壹岐賜歸國、慶長四年伊集院源次郎忠真叛逆而籠居庄内、少將忠恒公賜暇下國攻擊忠真、隆豐始終勞軍務、和平之後參候伏見、同五年秋、石田治部少輔三成奉對 家康公相為鉾楯、九月十五日大戰于濃州関原、 義弘公應三成而奮戰、隆豐在公之旗本拔戰功、雖然終離其列無所投托流浪于諸國、而數年之後歸本國、

頃年家嫡善四郎重秀殉死 龍伯公、而無繼子、隆豐奉 嚴命而為家督代、移居伊集院神殿勤仕者也、雖然半右衛門重榮者善四郎之甥也、以是為重秀之後嗣、隆豐辭當家復本家、再住花北也、

慶長十五年庚戌、琉球国入 太守之手裏、是故為正經界、鹿島駿河守・市來小四郎・面高連長坊・

瀧聞傳右エ門・毛利内膳正・伊地知少左衛門・隆豐、相共奉 高命渡海于琉球國、將渡球国、詣加治木 義弘公、使鎌田與兵衛賜御鑓、

元和二年丙辰三月、愁訴於朝鮮國御約諾之加增采地事、 公在江府、故不達 上聽、隆豐亦同四年戊午七月廿七日死、法名孤山良舟居士、葬成就寺大内、

隆次  
四郎 早世 母同前、

重種

龜松 四郎 越後 久右衛門 九兵衛  
九左エ門

慶長十五年庚戌六月廿五日誕生、母町田新左衛門久直女

寬永十五年戊寅 光久公賜暇看 家久公之病、且攻擊島原凶徒、重種自武城至麿府、不離 公之膝下供奉、翌年又 御上洛亦供奉、同十六年己卯、



光久公巡見領国、于時重種蒙 殿命、為大口諸士之衆頭、

萬治三年庚子八月、奉 高命移居麿城下勤仕、是兼所奉愁訴也、被侵疾養老於加久藤者有年、

寛文七年丁未十二月二日死去、法号真室清見居士、

葬徳泉寺之内、

女子

高城氏大口妻 母同前、

忠充

甚助 才左衛門 仲右エ門 母同前、

外祖父阿多源左衛門忠利猶子

女子

荒田氏妻 早世

重利

新四郎 早世

母伊地知彌右衛門重延女

重高

彌右衛門 母同前、

外祖父伊地知彌右衛門重延養子

女子

川上彦四郎久張妻

實洪

初重興 龜松 久左衛門 次郎兵衛

明曆三年丁酉十一月九日誕生、母同前、

實邦

次郎左衛門

實春

三左エ門

43の2

一 菱刈一族交名注文

菱刈太郎家重

菱刈郡司重信

太郎小次郎重世

曾木彦太郎直茂

曾木彦五郎忠茂

長池藤平重直

曾木藤五郎重政

入山彦五郎入道元古

他門

藤嶋左衛門四郎光重

井手籠孫二郎重久

得光孫太郎入道成法

柿木原太郎左衛門入道囚次

花北左衛門太郎入道妙道

同次郎太郎家保

同兵衛門二郎義保

同左衛門太郎長保

右、交名注文如件、

實天正四年丙子二月彼岸日

菱刈大膳亮隆商

(本文書ハ「家わけ七」菱刈文書一七の2号文書ト同一文書ナルベシ)

久綱系

盛綱

○信實

同太郎

○実季

次郎兵衛

○実綱

○長綱

次郎兵衛  
筑前守

○時綱

太郎左衛門

○時秀

源太左衛門

○盛蓮トアリ  
筑前守

野村

佐々木元祖式部太夫成頼之後也、

盛綱

佐々木三郎トモアリ  
号加治三郎左衛門尉、

○仁安元藤九郎盛長加冠、

故号盛綱、○仕頼朝公有功、出家而号西念、

○盛秀

小三郎 ○建仁中戦死、

加治太郎 信実弟也、

○盛蓮

佐々木四郎坊

○慶幸

佐々木大夫坊

日州四所庄下向、

近江白菰郷領主

○頼親

踏切、

号野村左左衛門、為伊東信濃守祐光一族領日州

領近江國ノ内野村トアリ、

○重親

領知上同、

佐々木野村源太左衛門

○盛秀

盛親弟

二男 左左衛門

中務

兵兵衛

○重綱

民部少輔 但馬介

於日州廣原打死、

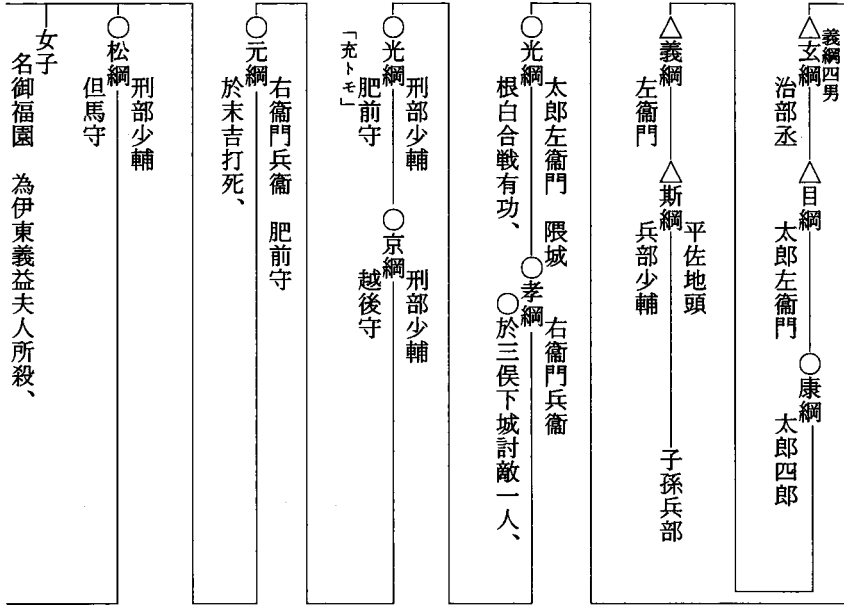
○義綱

但馬守

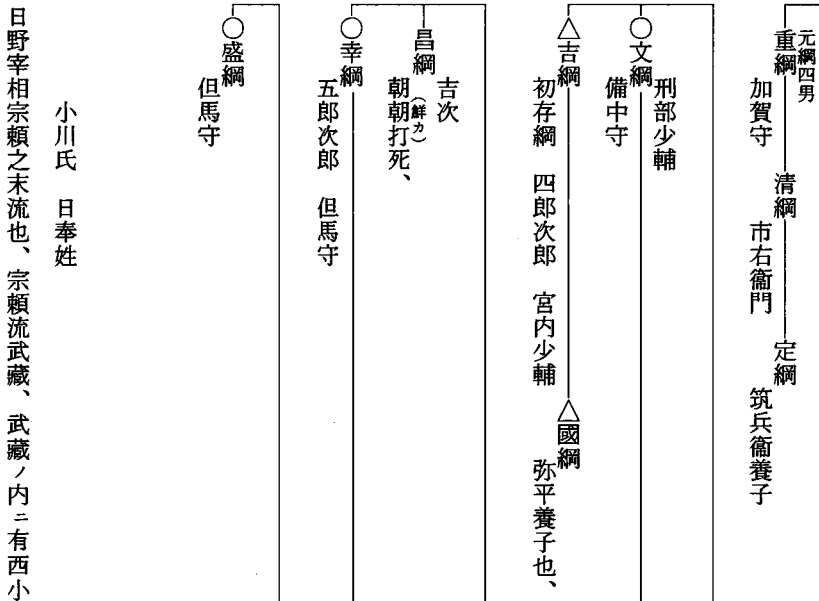
○康綱

四郎 但馬守

谷山ト飯田ト合戦



45



川、因号小川、

♠季能 小川小太郎  
○季直 小太郎  
下向甌島、

○字治合戦依功給甌島、

○季有 又太郎  
○季久 前美濃守  
○公季

○久季 遠江守  
○高季 三郎太郎  
○久季 太郎三郎  
越後守

○公季 遠江守  
○季安 伊勢守  
○忠季 越前守  
○妻ハ吉利下総 女也、

○有季 又八 中務太輔  
○尚常 喜兵衛(ママ)  
○妻ハ嶋津義虎女也、  
○養子 実ハ伊勢内記三男

肥後

種子島同

行盛子 自藤原氏續跡、  
♠信基 二男 五郎左衛門  
肥後守 文永二切腹  
○信家 父ト同切腹、

云々、八十二

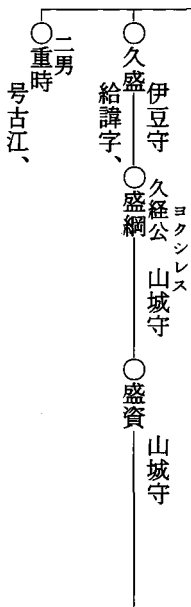
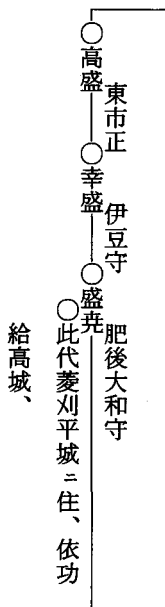
○正信 六郎左衛門  
○信盛 六郎左衛門  
○正盛 中務少輔

盛久 大和守  
○氏盛 大和守

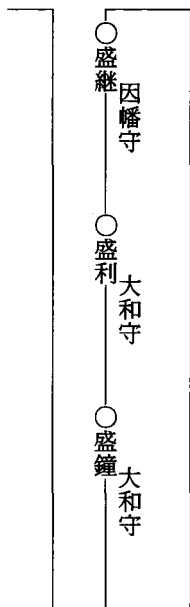
○盛武 駿河守  
○建久 六大隅國守護代、先下着日州穂  
北一節住、○從 忠久公下薩、  
○東福寺城取嶽  
初被仰付、由忠給下大隅九十五町、

○信盛 大和守  
此代下大隅山之城ヲ取住、忠義久皆奉  
公為牢人、然共奉佗、肥後助四郎盛綱ハ古江之

内六町給り、移鹿府住立野、肥後ノソントシテ  
古江ニ罷成、古江ハ肥後ノ一族也、



〔○文明八年四月廿八日肥後平盛高トアリ〕



盛家 周防介 領伊集院谷口、仕 貴久公(従カ)谷口、給  
花棚村、奉 貴久公命、經歷日本國中、奉納一  
國一部大乘妙典、



47

那須五左衛門家  
四郎左衛門 為頼  
品頼賢 為義四男

太郎 上総介 初八条藏人義房伯父路連續 アトナルベン  
為信 備中守行家一男也、久壽二下野那須野原ニテ勤

狐狩、

○祐高 太郎 下野權頭 與市 左近太夫  
号那須、  
○宗高 文治二於八島射扇的、

○宗治 小太郎 右馬丞 ○文治二 忠久公下向薩州、  
(宗之)  
宇治當國之蒙仰政道、同元年先陣下、其後住白  
杵郡、

○祐治 主膳正 与市 美濃守  
祐友 祐平

○祐章 小三郎 左衛門 祐貫 小源太 上總介

○義祐  
○正慶二楠正成從謀反、北条高時・大佛陸奥守貞直

等至河内國攻関節、義祐就左京属六原勢、同二月  
千劍波城懸合戰死、

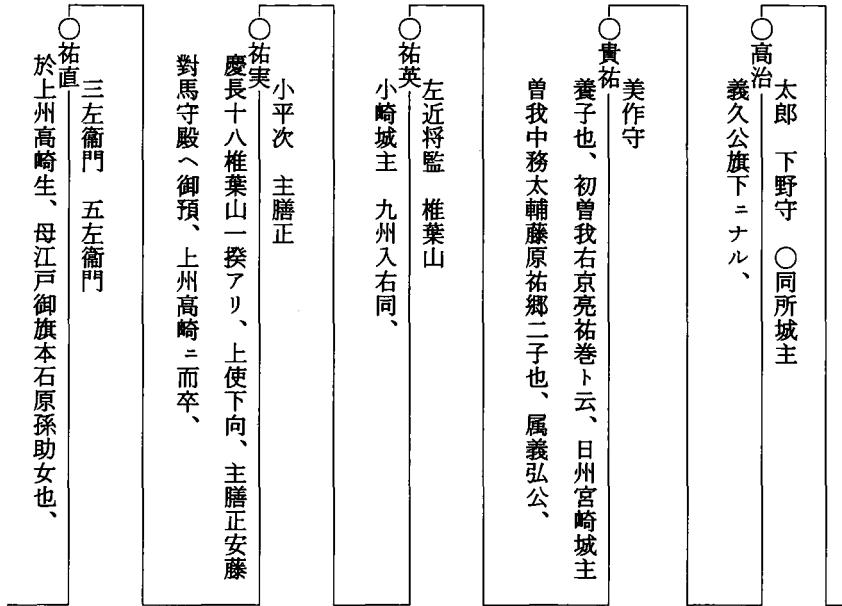
○祐泰 兵市 長門守 ○祐是 九郎 左兵衛

○清祐 小太郎 与九郎 左近太夫 ○應永四筑後  
右馬丞 ○元祐 國於上妻、菊地武政与大内義弘合  
戰三付、元祐致菊地方、同十二月  
懸合、大津主水祐を討、

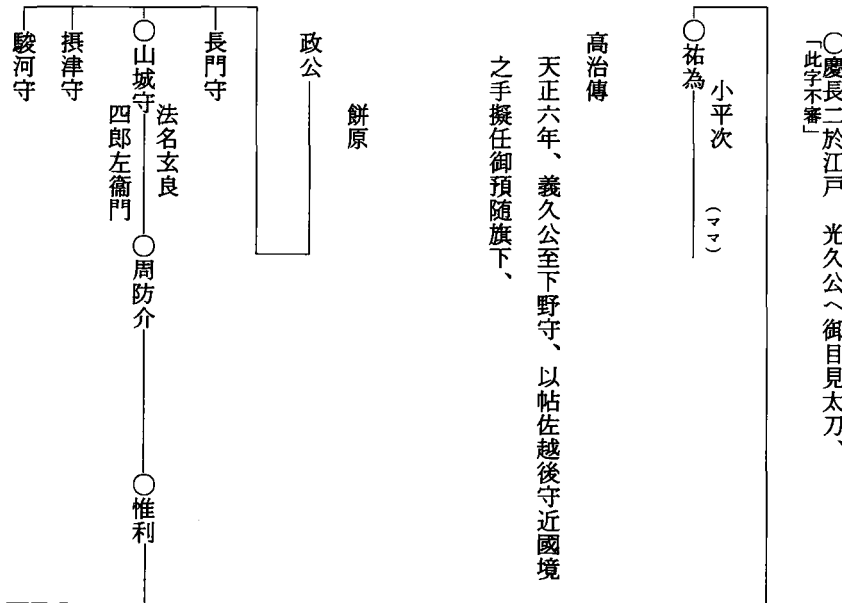
○祐供 小平太 彈正少輔

○祐脩 九郎 八右衛門 与市 祐弘 十右衛門 九郎 祐旨 左兵衛

○祐繼 与九郎 大右衛門 高祐 小太郎 美作守 高久 ○日州椎葉山小崎城主



48



○惟之 周防介 ○家嫡宗能嫡子 肥前守  
無子故惣領職トナル、

○惟延 肥前守  
○惟清 兵部  
○惟興

○惟 大隅守  
(ママ) 打死、  
○惟 与四郎 庄内打死、  
○惟元 平右衛門

○惟秀 平左衛門  
(ママ) 実岩下弥兵衛三男也、

子孫十郎左衛門

黒田

○義清長男 号黒田四郎五郎、  
○宗満 領筑前黒田、  
○三男 頼満 初下薩仕 貞久公、

○頼房 太郎次郎  
主水  
○頼秀 太郎次郎  
○佐渡

○頼長 主水  
隈城合戦有功、  
○頼重 太郎兵衛

○頼廣 越中守  
○頼季 二郎七 佐渡  
○頼宗 越中守

○頼定 久右衛門  
実弟  
○頼 (ママ) 太郎次  
子孫黒田源左衛門



橘姓東山藤崎系圖 子孫六太夫

橘諸兄公末流

公紀  
小四郎 從五位下 美濃守 号藤崎、○鎌倉合  
戰為官方加新田陣、始下薩州、領向島及諸所、

公辰 美濃守 備前 肥前守  
橘次 小四郎 公兼 平六兵衛

公範 豐前守 善六左衛門 助右衛門  
小四郎 公行 但馬守 小四郎 公昌 吉次

公朝 六郎右衛門 母島津 善六左衛門  
左近将監忠富女 公常 (マ)

有馬次右衛門系圖

先祖八領撰津國有馬、

純長 ————— 純衣

伊与守 文治二從忠久公下薩、

伯耆守 石見守 左衛門太夫  
純幸 ————— 純門 ————— 純國

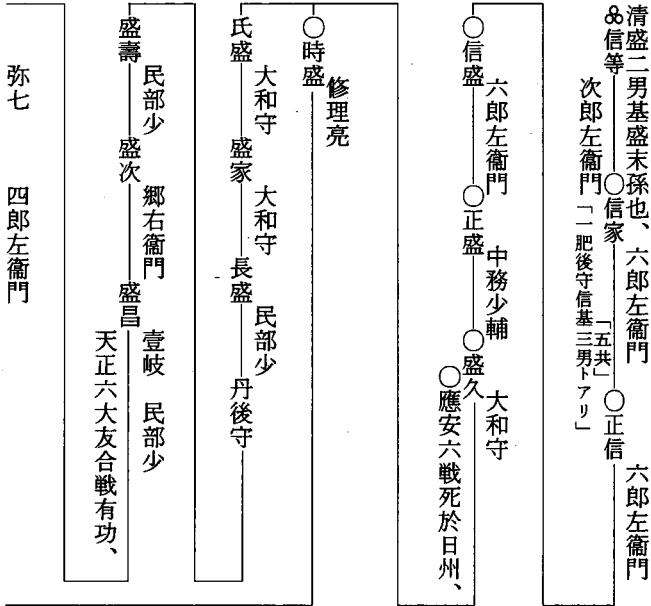
豐前守 日向守 次郎左衛門  
純滿 ————— 純尊 ————— 純恒

對馬守 大和守 三河守  
純行 ————— 純森 ————— 純文

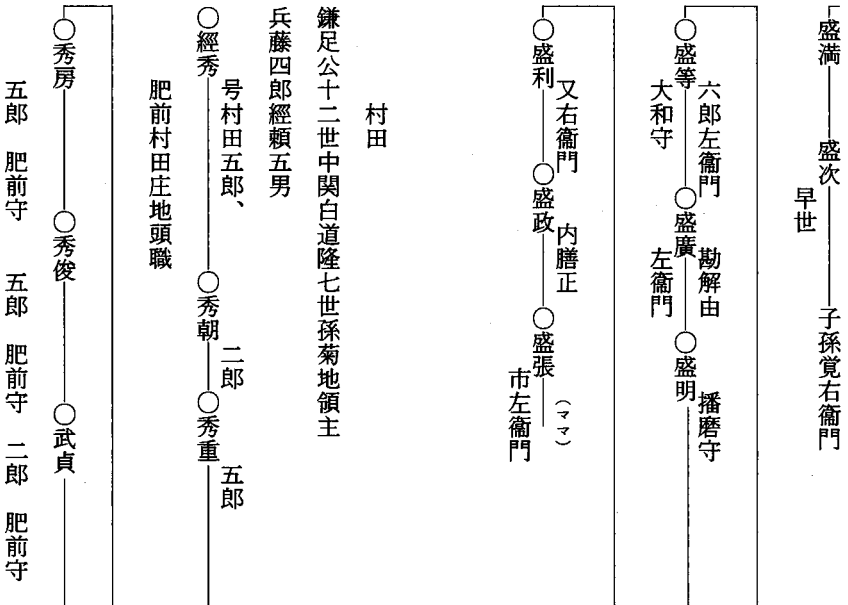
兵部太夫 對馬守 主計助  
純柄 ————— 純守 ————— 純武  
住田布施仕 貴久公、弓歌達人

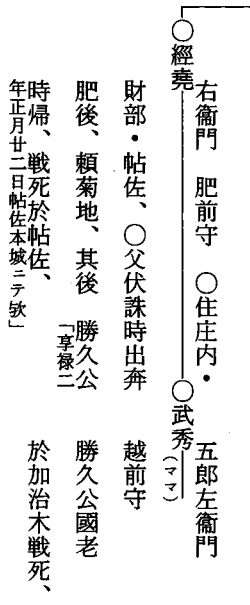
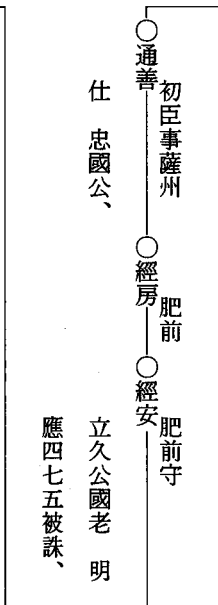
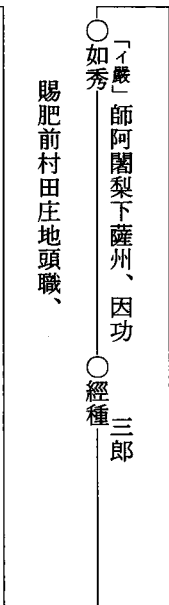
丹後守  
純茂 (マ)

肥後庄右衛門系図



村田





「此通ナレハ經俊ハ元弘・建武ノ人也、左アレハ 餘リ代數ナガシ」

三原 後醍醐勅給三原城、

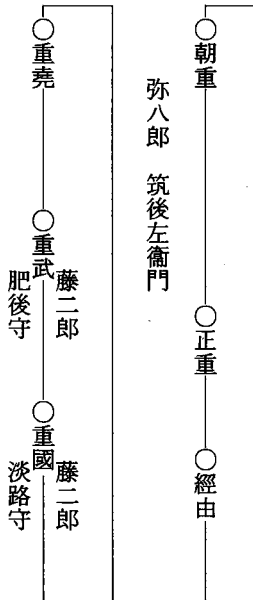
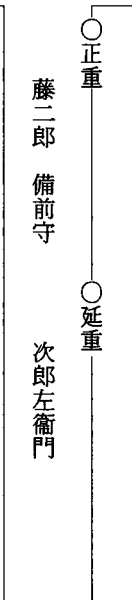
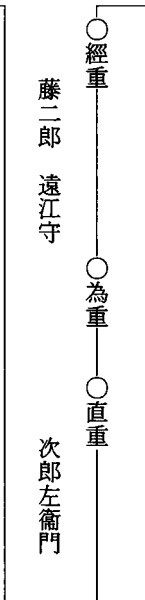
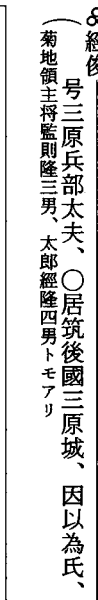
經義

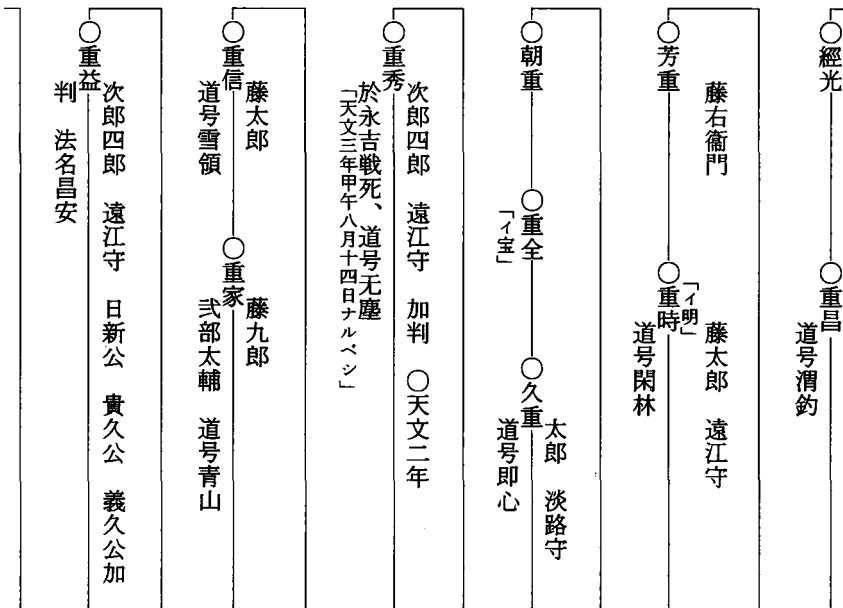
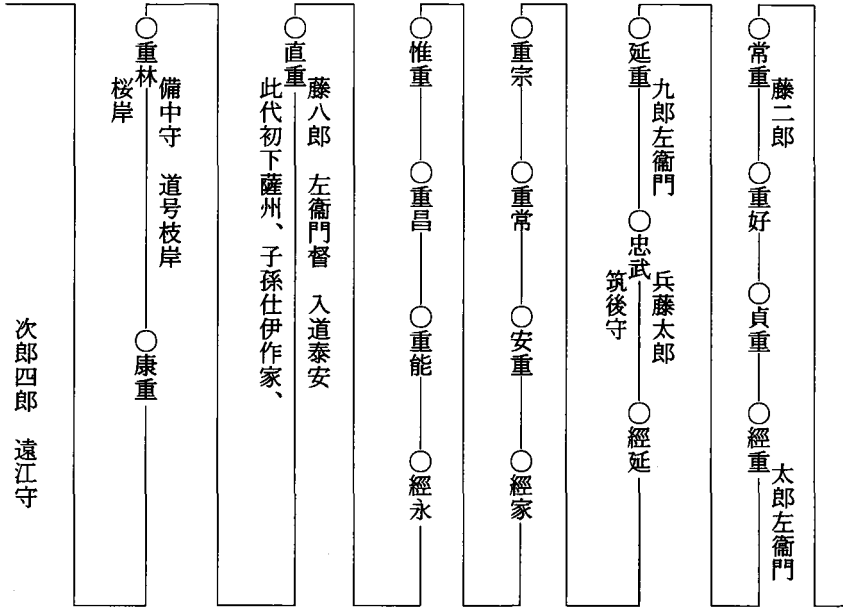
大職官流遠江守經重男

「義トモ」

号三原兵部大夫、○居筑後國三原城、因以為氏、

菊地領主將監則隆三男、太郎經隆四男トモアリ



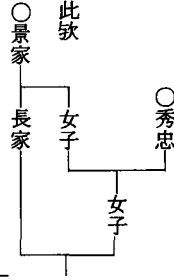


○重次 次郎四郎

〔天文廿三年九月晦日〕  
帖佐岩劍戰死

鮫嶋氏

如此歎



工藤四郎家光子

○宗家 鮫嶋四郎 領駿河國鮫嶋郷、属 頼朝公石橋山  
合戦有功、建久三年 公給薩州阿多地頭職、

刑部允 入道行願

二代  
○家高

嫡女  
女子 山門郡司秀忠妻

〔按此説ハ誤ナルベシ、宗家ノ嫡  
女歎、秀忠ハ宗家ト同時ノ人也〕

〔景家トモ〕  
三代 弥二郎

○家景 〔景家ノ子歎〕  
○三郎左衛門長家

○弥二郎

〔イ弥二郎ハ蓮道初稱トアリ〕  
妻ハ山門郡司忠秀女

三男 四郎左衛門  
兼家

仕日新公、  
九代孫五郎三郎宗喬

○彦次郎

入道蓮道 仕 貞久公領加世田・知覽・指宿、

○蓮性 仕 師久公、  
又太郎

○又太郎

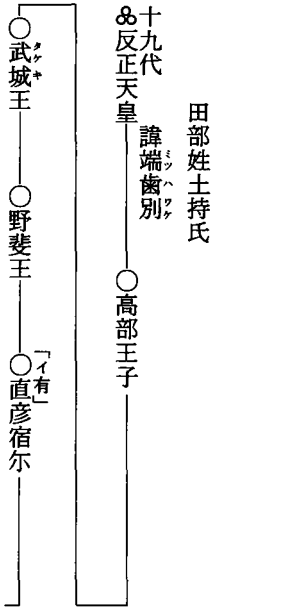
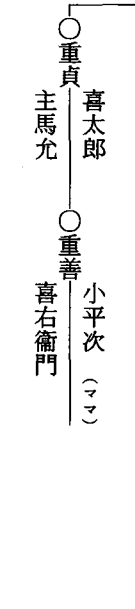
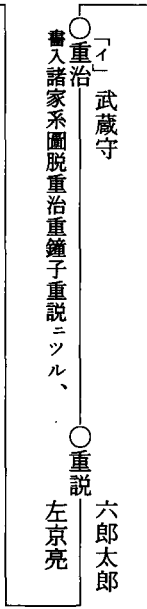
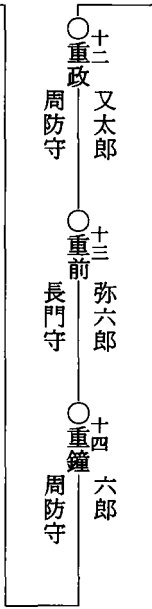
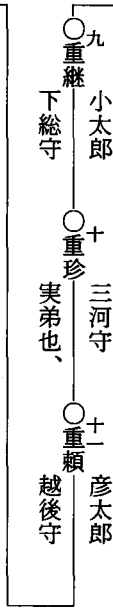
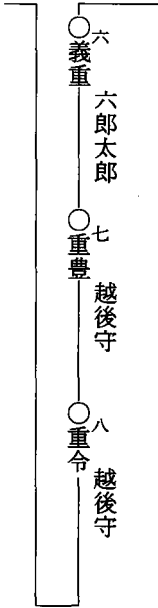
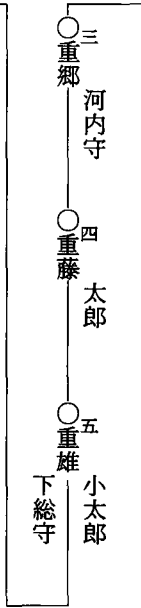
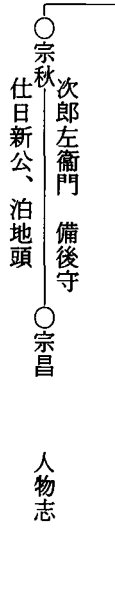
一イ蓮性

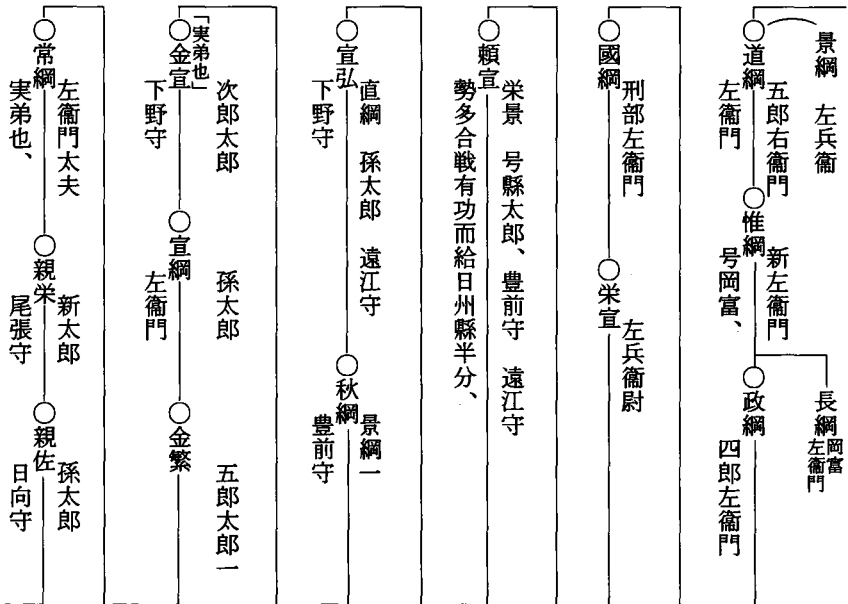
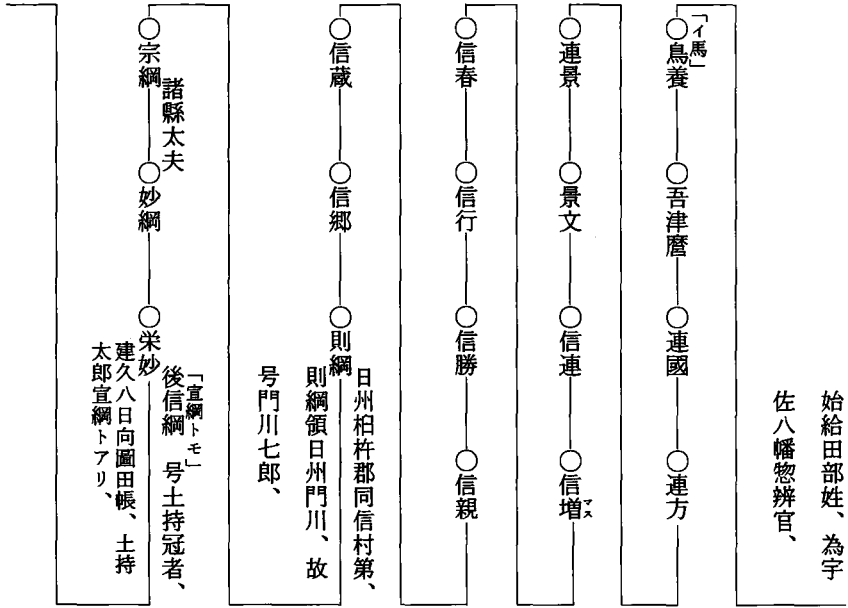
○忠宗 民部 為伊作家落阿多、  
仕 久豊公、

○宗吉 越中守

○宗満 彦二郎

三郎右衛門





○親成 新太郎 右馬頭 ○親佐無子、右馬頭佐栄嫡子也、○大友入日州為大友被責自殺、

○久綱 次郎九郎 彈正忠 權頭 実同氏相模守栄續嫡子也、

伊東作太夫家

○祐康 号井尻、孫右衛門 仕 伊作久逸戰死加世田、源兵衛 ○祐能 「明應九年庚申十一月十一日久逸戰死ノ時ナルベシ」

○祐秀 四郎左衛門 仕 日新公、伊賀守 戰死間瀬川、 ○祐貞 日州日知屋移地頭

「天文七年戊戌」

○祐盛 伊賀守 太郎四郎 有功、 ○祐盈 於京都死、

伊左衛門 寛永十一生、母仁禮藏人女、養子也、

○祐義 実喜入休右衛門久守三男 改号伊東、 光久公江戸御下向之時、於平戸死、

伊東權角家

曾我大臣末孫曾我兵部 祐清二男

○祐泰 号井尻八郎右衛門、 七郎右衛門 七郎次郎 祐貞 八郎次郎

○祐徳 (權之介) 七郎右衛門 祐守 九郎次郎 佐渡 祐俊 八郎右衛門 早左衛門

祐元 九郎次郎 祐宗 九郎次郎 佐渡守 打死於高原、 祐雪 九郎次郎 相左衛門



祐保 八兵衛 権右衛門 ○元和六請宗家相模國伊

藤惣左衛門祐重、改并尻為伊東氏、身帶逼迫  
而為御酒藏役并御里役、

伊東才藏家

品伊東加賀守 ○右衛門

実ハ弟也、為兄猶子、

加賀共、戦死於木崎原、

次左衛門

○佐土原没落時為浪人、後屬伊十院忠真、忠真下城  
後居于指宿、其後至加治木仕 惟新公給知行、

仙右衛門

志摩助 ○仕 光久公、御守役

仙右衛門 ○江戸上御屋敷類火之節、女房介

藤五郎

(マ)

抱仕退候、 光久公御病キ之節、霧島御躰へ

二昼一夜參籠仕候、其後納殿役相勤候、

○浄楽院

品満市

号満諸院、「満市より十八世」從忠久公下薩、

○宝山檢校

住伊作、

○十一代常慶院

○壽長院

俗生洵協氏、

日新公有功、

○大光院

家村氏 仕 貴久公、

有功給三ヶ國家督、

○常徳院

長倉氏 仕 家久公、

中興開山

幼名仙千代丸、祐次ト云、父ハ伊東家臣日州穂北

城主長倉大和守祐時弟伊賀守祐住、薩州与台戦之

時、於右所仙千代事、中務殿より命被助、盲人ニ  
而仕 家久公、

○常樂院 長友氏  
○大光院 案原氏

○明秀院 長友氏  
○常樂院

薩摩國在國司大前氏東郷斧洩系図

敏達天皇後胤橘諸兄公の苗裔也、  
○道胤

菊王丸 東郷彈正少弼 左衛門尉 西前寺殿  
法名慈覺 ○居住于東郷城、○建久九上洛、内  
裏大番勤仕、

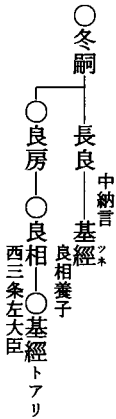
○道武  
菊壽丸 兵衛尉 武藏守 西前寺殿 慈光  
○妻ハ山門院郡司秀忠女

○道義  
平太郎 藏人 彈正少弼 撰津守 号斧洩、  
○西前寺殿 慈道  
○正平六年十二月廿三日、渋谷九郎重興催軍勢戦ふ、  
女子

○道長  
平次郎 彈正少弼 相模守 ○西前寺殿 法名  
慈法  
女子  
道張  
号山田、  
道久  
道宗  
号荒川、  
僧 西前寺殿

○道將  
平六郎 彈正少弼 相模守 西前寺殿 慈徳  
道重  
号銘津、  
「本ノマ、」

大河平系図ニハ



○良道  
 伍位源五郎 神力坊 不動院 子孫入来院家臣、斧刈仁兵衛也、  
 ○入来院重時家臣也、

○道信  
 伍位大坊 大泉坊 不動院 ○住於平佐城、又住樋脇天神坊、領三十五町、○法名仙香、八十二才卒、

○道盛  
 平六 兵衛尉 ○法名慈心  
 道真  
 号今村兵部太夫、  
 道時  
 道實  
 号藤川、  
 女子

藤原氏菊地系図

天津児屋根命廿一世 母大德冠大伴比子卿乙女知仙女  
 ○大織冠鎌足

内大臣 贈正二位大政大臣 ○天智帝八十三授大織官給藤原姓、同十六日薨、五十六

○不比等  
 右大臣 正二位 贈大政大臣正一位 諡文忠

○養老四八三死、六十二

武智磨 — 此子孫相良

○房前二男  
 按察使 參議 正三位 贈正一位左大臣

○天平九丁丑四十七薨、

○真楯三子  
 大納言 正一位 贈大政大臣 右大臣 從二位

○天平神護二三月薨、  
 (陰陽頭 左大將)  
 贈大政大臣

○冬嗣  
二男

春宮大夫 左中將

左大臣 贈正一位

号閑院、○天長三

七廿四死、五十一

○弘仁三十月薨、五十七

○良房  
二男

撰政 大政大臣 贈正一位 諡忠仁公 白川殿

○貞觀十四九四死、六十九

○基經

閑白 大政大臣 從一位 贈正一位 諡昭宣公

堀川殿 ○寬平三正十九死、五十六

○忠平  
四男

撰政 閑白 大政大臣 贈正一位 諡貞信公

(一)一条殿 ○天曆三八月死、七十才  
小一条殿ト大河平系ニアリ

○師輔  
二男

右大臣 正二位 九条殿 ○天德四五月死、五

十三才

○兼家  
三男

大政大臣 贈正一位 法興院殿 ○天曆元七月

死、六十二才

○道隆

正二位 撰政 閑白 内大臣 從一位 二条殿

○隆家  
二男

中納言 正二位

○政則  
二男

對馬守 馬場宮 品則隆 大夫 將監 ○菊地領主

○為武家、後三条院延文二年初下菊池、

政隆

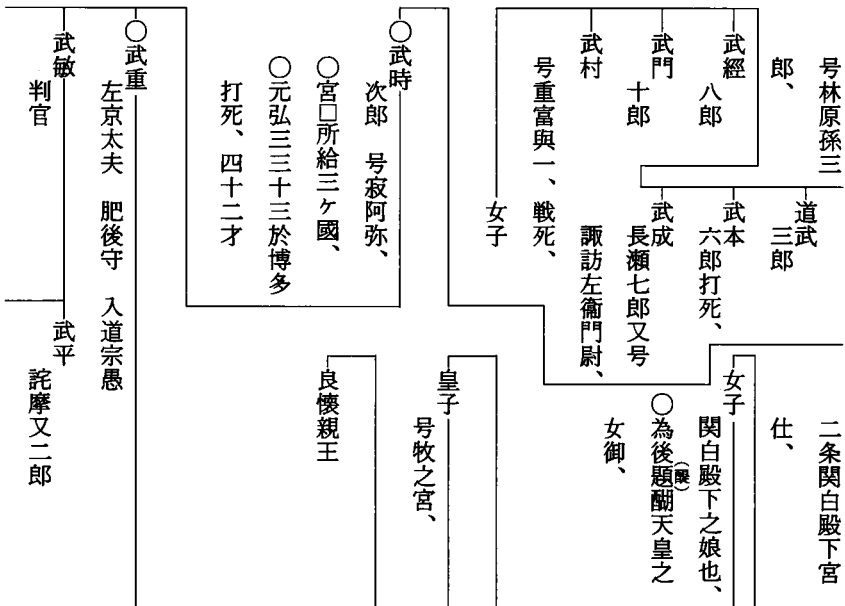
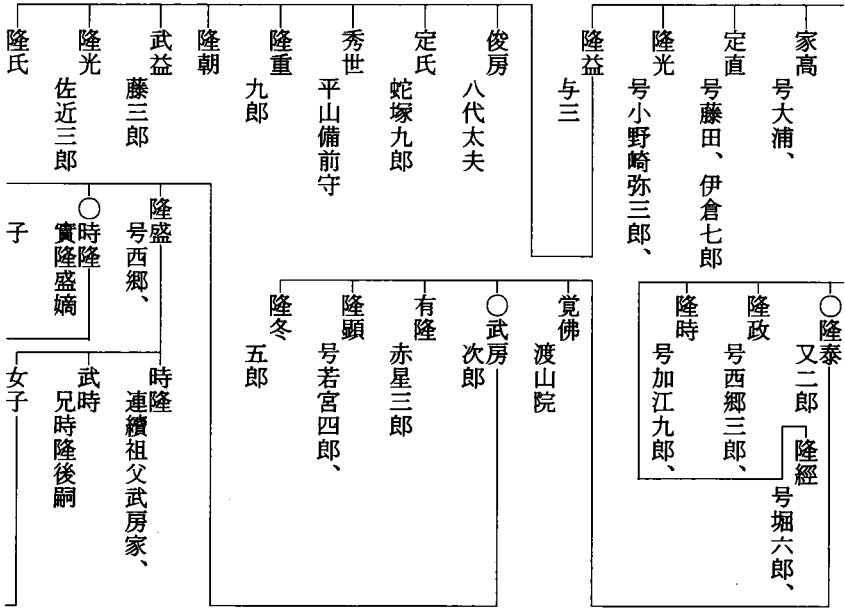
西郷太郎

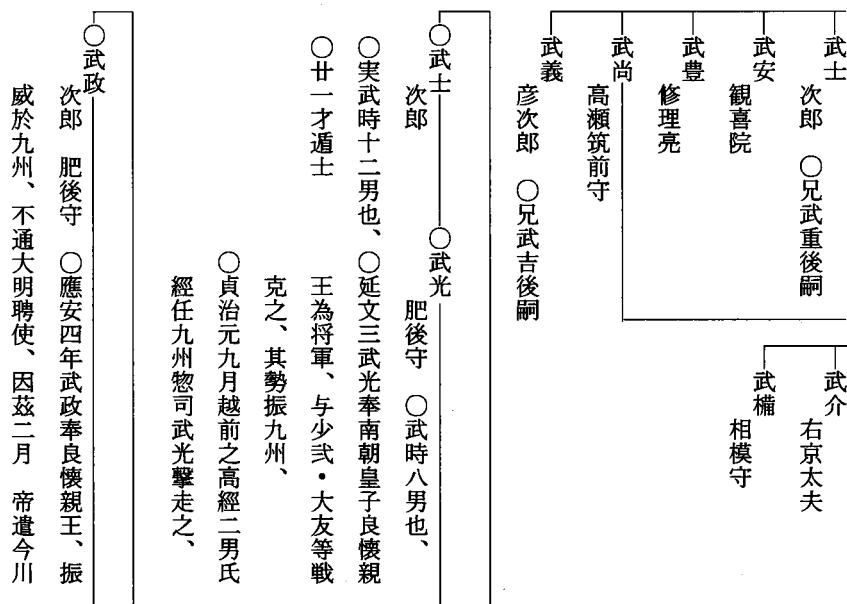
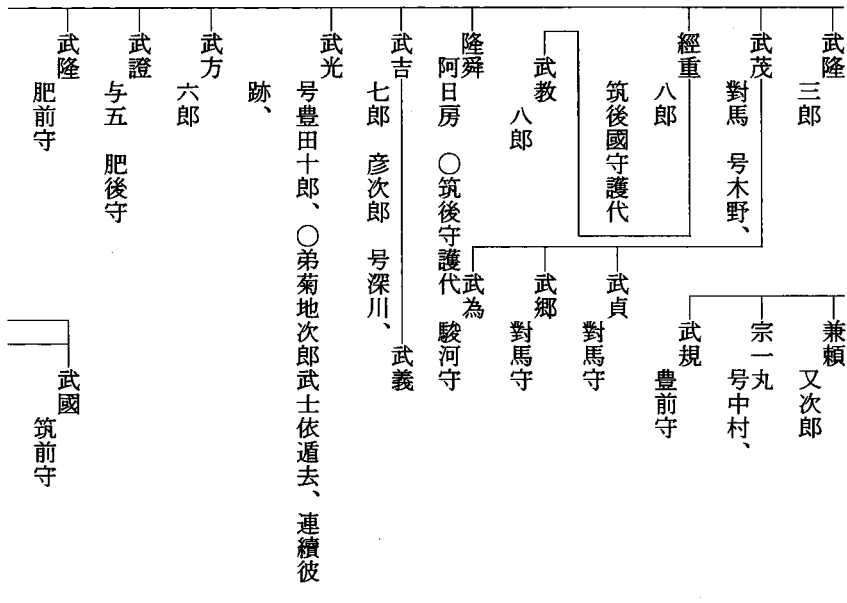
隆基

大夫

隆房







了俊、往鎮西安撫九州、大内義弘副之、○同七年三月義滿將軍西征与武政戰、伊東氏等降、武政退屯宰府、原田・秋月等亦降、武政終勢衰、九月請降、義滿公許焉、十月公帰京、

○武朝  
左京大夫 法名常朝  
肥後守 法名元朝  
元中ノ比  
○四月十五日死、四十五  
○六月十二日死、

○持朝  
肥後守 從四位下 法号靈染 道号阿三  
○三十八才死、

為邦  
肥後守 号夫治、  
重朝 應仁ノ比  
為安  
肥後守  
号逆瀬川、肥前守  
為重 義宗 永正ノ比  
領菊地逆瀬川庄  
五十町、  
為光 (ママ)  
号宇都少弼、  
安興

「安光

文明十一年、重朝筑後合戦  
討取田尾美作守、被賞賜云

藤原姓相良氏

入来家土種田小仲藏

○武智曆四男—○乙曆二男—○是公二男—○雄友二男  
大納言 正三位  
弘仁二四月薨、五十九

五男 越前守 陸奥守「イ清夏上總介トアリ」權中納言  
○弟阿高扶—○兼輔  
從三位 号權中納言、

○維義 常陸介 李介  
○為憲 号工藤、遠江權介

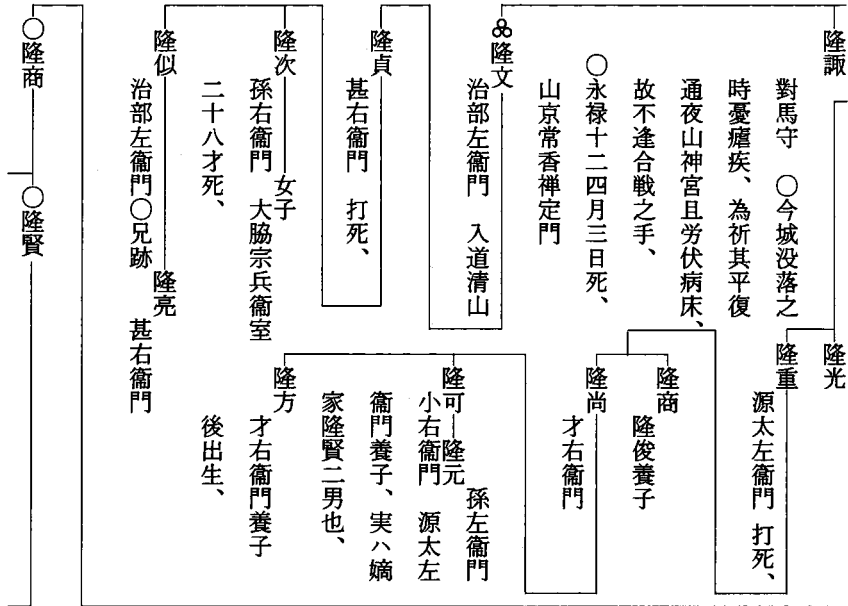
時輔  
時理  
工藤大夫 駿河守 維景 駿河守 從五位下  
時信 從五位下 駿河守



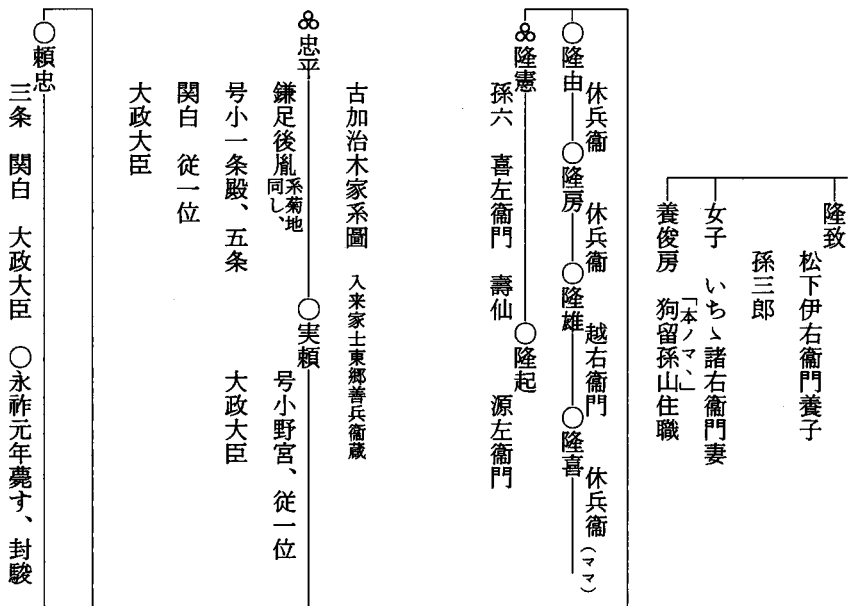








66



河公、諡廉義、

經遠 藤大納言 ○一条院御宇寬弘三年<sup>午</sup>、依御許咎  
小野宮関白殿君達三人、被配流國々、○經遠ハ

肥後國菊地、

顯經

權中納言 ○駿河國池上

經平

藤宰相 ○配流大隅國加治木郷、于時加治木本

領主大藏良長依無男女子息、後家<sup>号肥喜山女房</sup>當郷郡

司及國方檢非違所惣官職兼帶之間、受取流人經

平卿令警固之時、彼後家女与經平為夫婦所生之

後胤也、○此時、依為氏社春日大明神、始奉崇

當郷、

經頼

藤大夫

同諸職得經平讓、

大隅<sup>(ママ)</sup>

頼平

頼長

大隅大拯

頼光

大隅大拯

資光

大隅大拯

資房 ○資平

擬神崎別 大隅守

當、○依

成給宮御

勘當云々、

「資頼

号小山田、○然者無子上向背

資光之間、奉讓小山田村於執

印行賢之間、成神領、

元改吉平、

親平

号加治木八郎、○改藤原氏為大

藏氏、以後勤仕御家人所役祗候

関東、○大隅國檢非違所并加治

木郷文治四年<sup>申</sup> ○建久六年六

月廿二日給 右大將家御下文薩

州満家院、文治・建仁二通、同

給 御下文也、

六郎

二 法名安明

恒平

○母万歳女 法

名盡阿 安貞二

年死、○大隅國

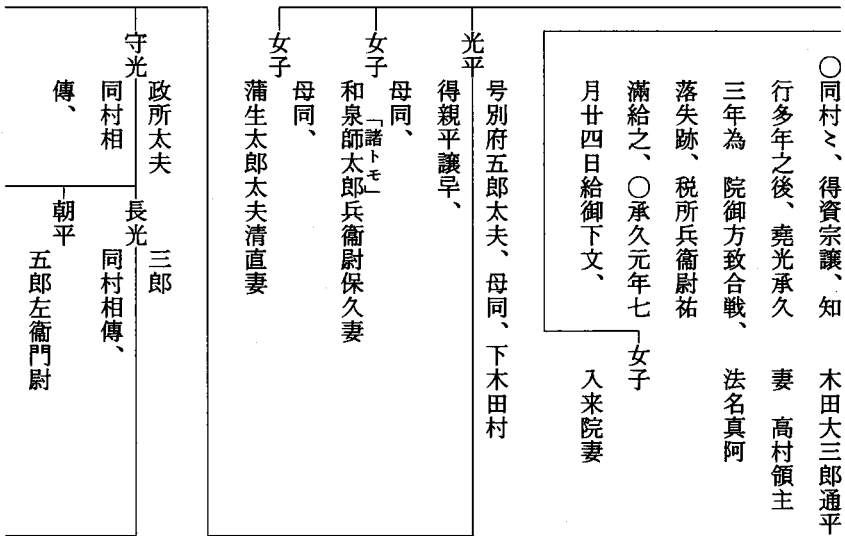
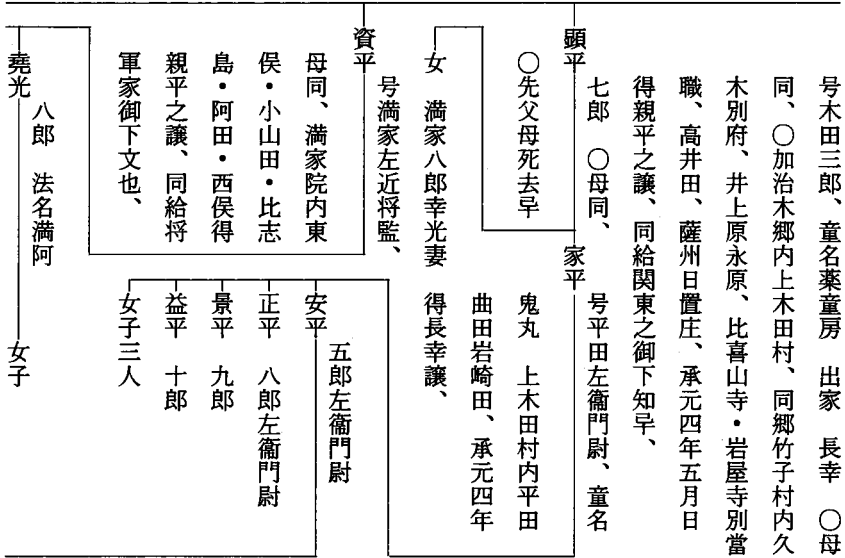
加治木郷建保二

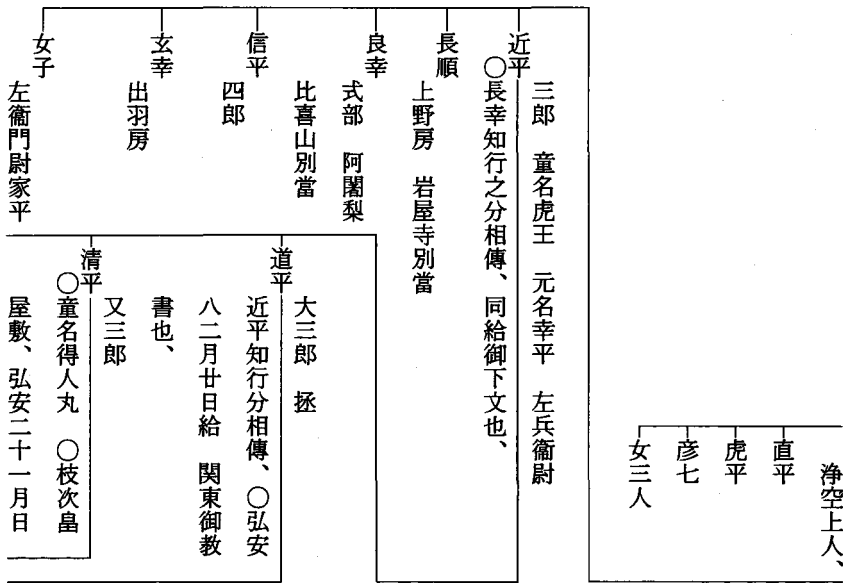
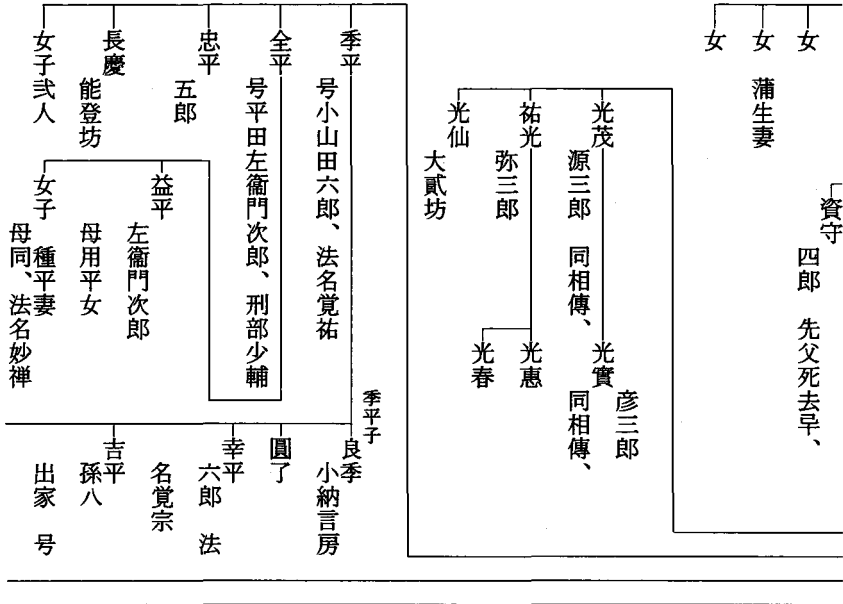
年九月四日給

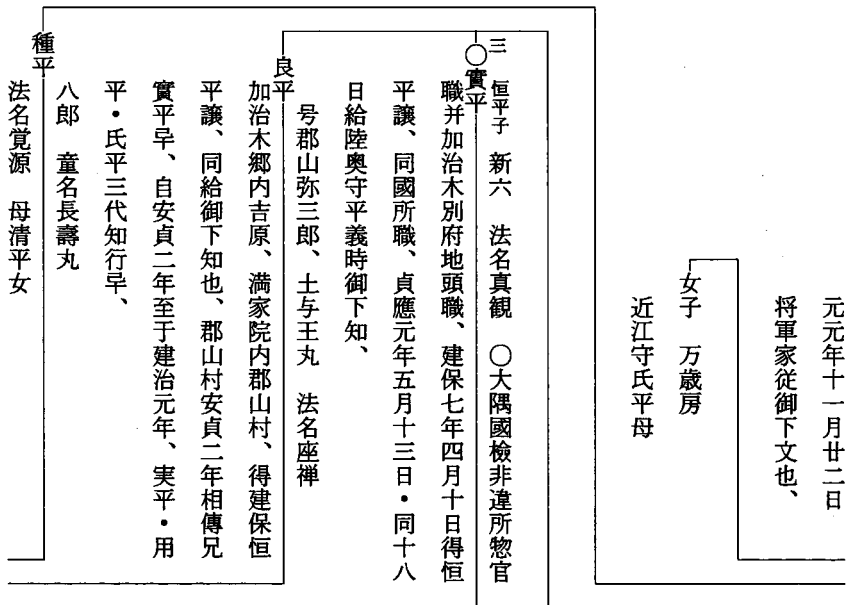
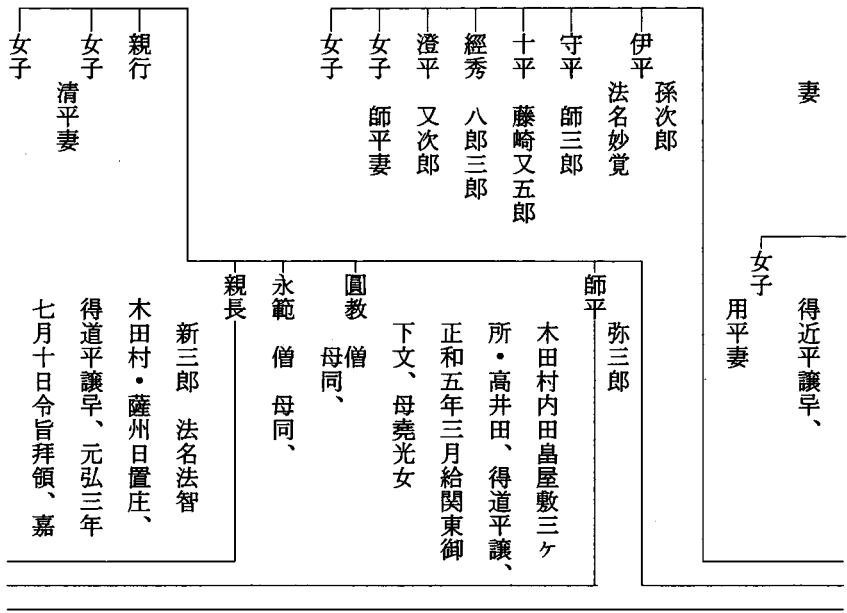
右大臣家御下文、薩州満家院ノ内郡山村内給御下文、

○建曆元年四月廿八日得親平之讓早、○承久三年死、

信經









○師平知行分相傳、又枝次田畠屋敷等、元弘元年十月一日得伊平讓、同給御教書早、

盛平 号枝次八郎、童名鶴一丸 法名永源

○改大藏氏為元藤原氏、○種平知行分、永和元年八月四日得讓早、

武平 太郎三郎 童名鬼鶴丸 法名覺貞

法号松峯 ○母滿家河田左衛門太郎源資清

女 ○應永廿五年八月四日得盛平讓早、

女子 嶋津河上上野守藤原兼久妻

相明 大和法橋 窪田領主

母下大隅弁濟使女

又次郎 法名願佛

俊平

母田多四郎盛俊女 ○加治木郷内吉原村相傳、

筑前國七隅郷北伊郷長洲庄、弘安四年蒙古合

戰恩賞仁給早、

有平 四郎 龜河領主

左衛門尉 母同、

女子 西俣新三郎信明妻

母弁濟使女

女子 母同、

種平 李助 法名無邊

賴平 弥五郎

吉原村并恩賞地頭職等相傳之、正中二年給御下知早、

尚平

保平 彦次郎 法名珠覺 道号花岳

母河田弥太郎源義氏一女 ○應仁二十月廿九

日死、五十六

若狹守 母同、

豐平 薩州牛屎住、

唯平 太郎三郎

平榮 又七

左京亮

女子

寬平 八郎二郎 母同二女、

於帖佐院氏平一所ニ討死、

文章 母同、

僧

桂林 母同、

僧

乘平 八郎次郎

打死、

經寬

民部少輔

平有

彦七

彦次郎 討死、

吉平

彦八郎 筑前守 法名榮崇 道号高雲 母薩摩

郡内山田村領主永利長門守女 ○永享十年生於

薩州鹿兒嶋、○長享元九月廿四日死、五十

隆慶 母同、

大隅國肝付郡含粒寺中興賀俊大和尚

房平

兵部少輔

八郎 母和泉四郎左衛門尉伴貞保女

演平

琮祐 母同、

女子三人 母同、

貞平

又八郎 筑前守 三郎右衛門尉 寬正六三月

廿七日生、母佐多伊佐敷入道幻也女 ○永正

十四二月一日逝去、五十三 法名了通 道号

圓哉

正平 十郎 八郎左衛門尉 母同、

安平 与三郎 新左衛門尉 母同、

永正三十月廿七日死、四十七

法名道為

琮順 僧 母同、

清平 助七 三郎右衛門尉

女子 母同、

長野筑前守藤原祐秀妻  
女子 母同、經寬妻

隆平 又八郎 刑部少輔 筑前守 (マ)

母永吉三河守藤原良續女

怡平 彦七郎 兵部少輔 加賀守

女子 母同、法名妙心

永正六八二死、十七

法平 彦三郎 備中守

猶平 三河守 (マ)  
入来院重時家臣也、

四 大三郎 童名二万才 ○母信山入道女

○用平  
改志平

○天福元十月二日実平知行分相傳、宝治元四月九

日同給 將軍家御下文、○法名寂念

為平 三郎 鎌倉腹

女子 肥喜山良幸妻

女 蒲生太郎太夫妻

「女子

五 又六 法名覺譽 ○建長三八月三日用平知行分

相傳、文永二十一月廿二日同給 將軍家御下文

也、

致平 弥六 次郎左衛門尉 景平 孫三郎

久平 三郎右衛門尉 八万歳

法名空智

女 正万歳 ○刑部少輔全平妻 ○南園早田永溝領

主

女 伊集院妻

女子

貞平 彦六 先父死去早、

嗣平 孫六

直平 胤平 三郎

新六 先父死去早、加治木郷内岩本得祖父  
女子三人 讓、

熙平 六郎

六 彦次郎 左衛門尉 法名通覺  
○政平

○大隅國所職并加治木郷地頭職等、文保三六月廿日  
得祖父讓、貞和七五月七日同給 將軍家御下文、

藤平 左近將監

富平 五郎 中務少輔 法名專阿

貞平知行分相傳、

仲平 彦四郎

武平 六郎次郎

女子三人

七 左衛門尉 法名寛全 ○政平知行分相傳、文和五

○里平 年八月三日得讓、

元平 号高山三郎兵衛尉、

女子 平山寶林母

明平 法名寛統 道号綱庵  
金平被討、 (マ)

八 應安三年任近江守、

○氏平 左衛門尉 童名吉萬歳 法名寛順

○母木田新三郎親長女 ○貞治二七月二日里平知  
行分得讓早、又木田村知行、

九 應永十七年六月廿七日任能登守、

○忠平 左衛門尉

賴平 近年

号木田、

金平

女子 祢寝妻 得賴平知行分讓也、

女子 税所介政妻

十 号加治木三郎、法名寛鎮 道号安世

○氏平 母肝付伴頭兼女

改大藏氏為元藤原氏、○於隅州帖佐院二月十六日

為 忠國公御方季久ニ被討、四十八  
女子 母同、

山田領主永利長門守妻

十一 三郎 法名覺闇 道号大闡 ○母栗野女

○實平 ○三月四日死、三十六

平厚

三郎四郎 淡路守 伊平 山城守

吉平

女 伊集院尾張守妻

女 平瀬妻

女 北原妻

十二 右衛門佐 満久

実ハ島津豊後守季久三男也、実平養子 ○法名道

隠 道号密山

宋器

実平一男 他腹 ○隅州帖佐院雲門寺汝舟大和尚

女子 満久妻

十三代大和守 母実平女 刑部少輔

○久平 法名道忠 道号功岳 ○明應四七月二日反忠昌公

攻之、翌年二月落城、移阿多、

忠光 三郎五郎 母同、

女 母同、 肝付河内守伴兼久妻

女二人 母同、

三郎 能登守

久恒 (マ、マ) 永正十年壬酉正月久恒寄進川邊

宝福寺田地、

67 莫根系図

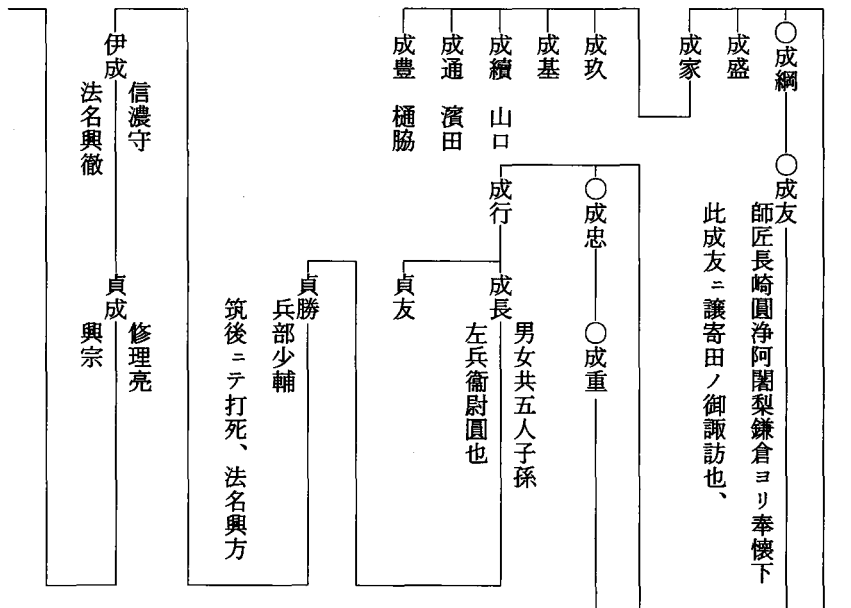
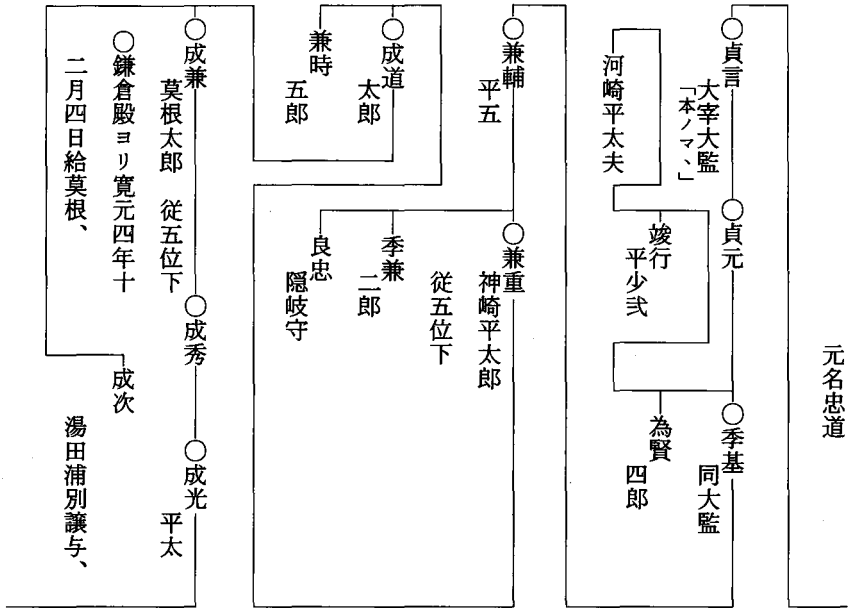
良文 村岡五郎 忠朝 二郎 駿河介

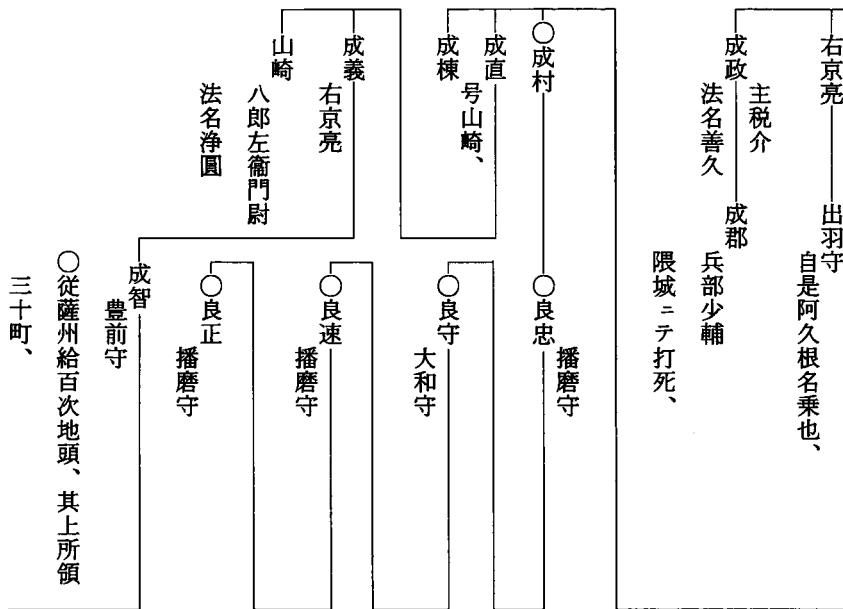
從五位下 從五位下

孝輔 小五郎 貞道 伊作平三

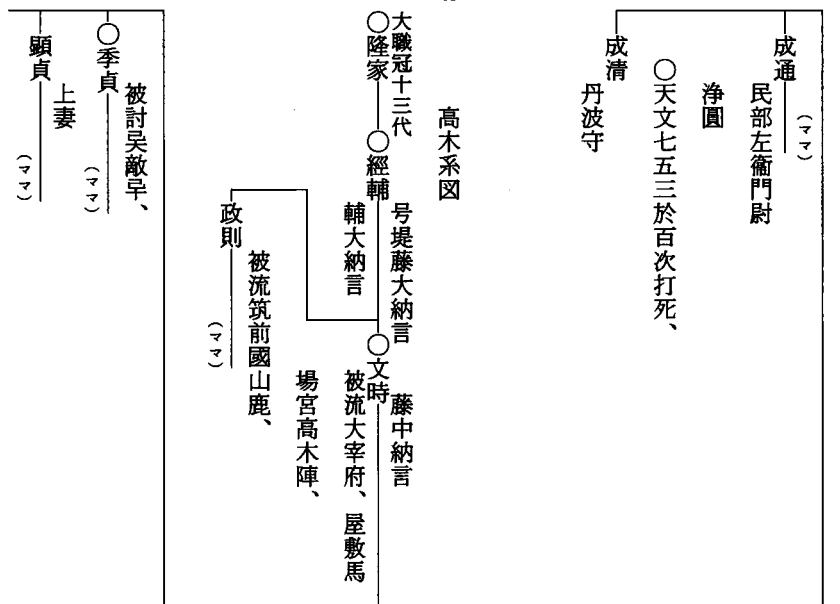
駿河介 頼光四天王一人也、

元名忠道





68



龍造寺  
季平 (マ)

日向高木

品實遠

女 美賀之嶋御前

女三人

○恒貞 住日向國、号妻住小太夫、同七郎  
高木太郎 ○守光 高木太夫 ○貞兼

○末兼 高木太夫 ○末忠 同太郎 ○貞國 同四郎  
法名良西

○國房 同四郎 ○重家 同弥次郎 ○宗重 同三郎左衛門尉  
法名覺勝

○重兼 同新左衛門尉  
○久安 同三郎左衛門尉  
○久長 同四郎兵衛尉

○久家 同長門守  
○匡家 同近江守 法名名高  
應永十九年九月廿五日日向國於  
原東打死、  
ゲントウ

女子 島津和泉守妻  
女子 和田遠江守正貞妻  
元家 高木大和守  
豐家 同能登守  
全家 同讚岐守

○是家 高木三郎左衛門尉 法名見善  
○八月十二日於志和地打死、

良直 高木永吉 三川守 嶋津殿為御子、  
「久盛公」  
長家 高木左馬介  
金家 同民部少輔  
高木号朝倉、  
氏家 三郎右衛門尉  
女子 高木讚岐守妻



〔女子 嶋津栴山美濃守妻

○殖家

法名永照左衛門尉、然ハ父ハ三郎ナルベシ、

同彦太郎

高木孫六

幸家

法名廣圓

重清

公家 同十郎三郎

女子 嶋津栴山次郎三郎妻

○家重 同長門守

頼有 的野座主

○章家 同孫三郎

女子 嶋津新納十郎妻

家兼 高木孫次郎

女子 柏原妻

松次郎丸名孫太郎 家結

69

紀姓宮里系圖

○孝元天皇

道元

紀中納言

友則 紀

實之 紀

○正任

紀三郎太夫

古佐美

紀朝臣

武内

應神天皇

醍醐天皇

△正信

紀四郎太郎

○始領宮里郷、御公事足六十町

正平

紀四郎太夫

△正家

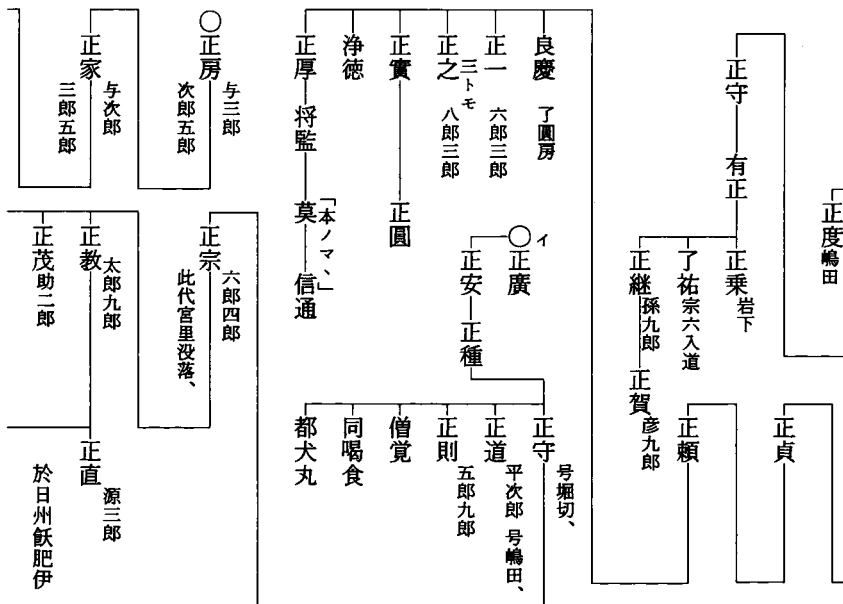
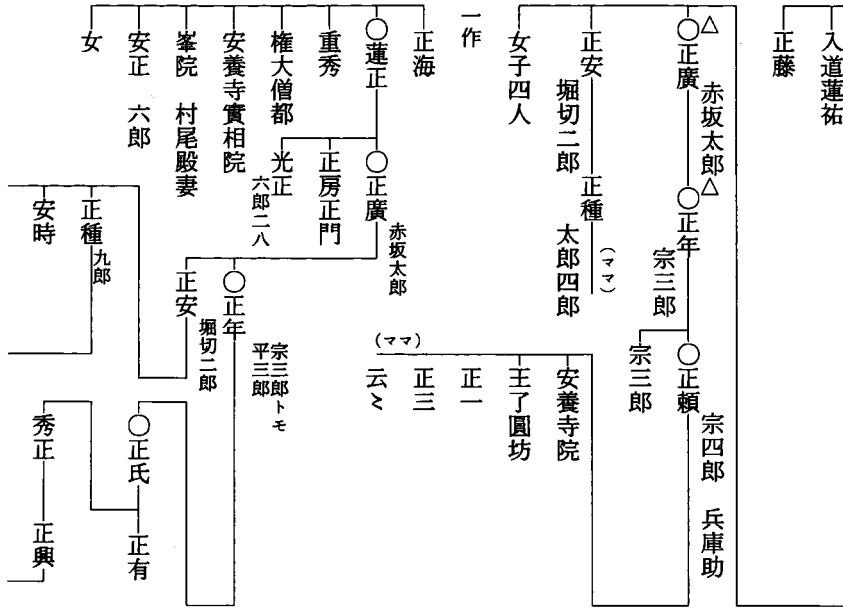
郡司

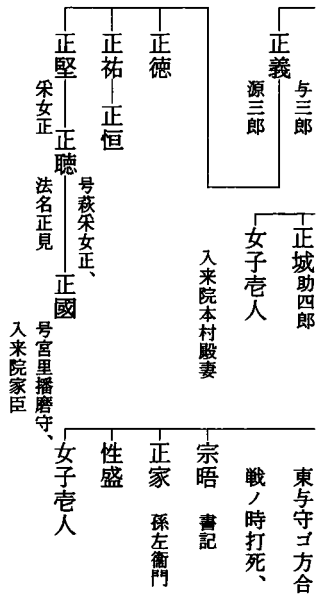
紀太夫 ○号宮里、御公事足四十町

正綱

郡司







衾寝山城坊

女子

龜山又兵衛妻

女子

近衛信輔公御側江被召置、其後被召列 御上京、  
 右妾腹ニ御子出生、以後岡村伊織へ縁與被仰付  
 候、伊織事ハ、元和元年秀頼へ御味方仕、落城  
 後牢人ニ而罷居候、

岡村新左衛門

岡村市兵衛

伊東清左衛門

伊東休意

初而伊東家江  
參候由

七条大佛師康殿弟  
子ニ而、佛師也、

子欽孫欽

伊織事松平下總守様へ被召仕候節、出生いたし候、  
 十六才ニ罷成候節、母事御國へ罷居候、尤母為見  
 廻、新左衛門召列罷下り、龜山又兵衛宅ニ罷居候、  
 暫滞在仕、其後上方へ罷登候処、父伊織相果候、  
 以後母為介抱、又々御國へ罷下り居住仕候、札御  
 改之節、龜山家預從弟札ニ申受候由、

衾寝式部大輔元就

衾寝駿河頼治

覚兵衛重好

避衾寝氏名乘川口氏、

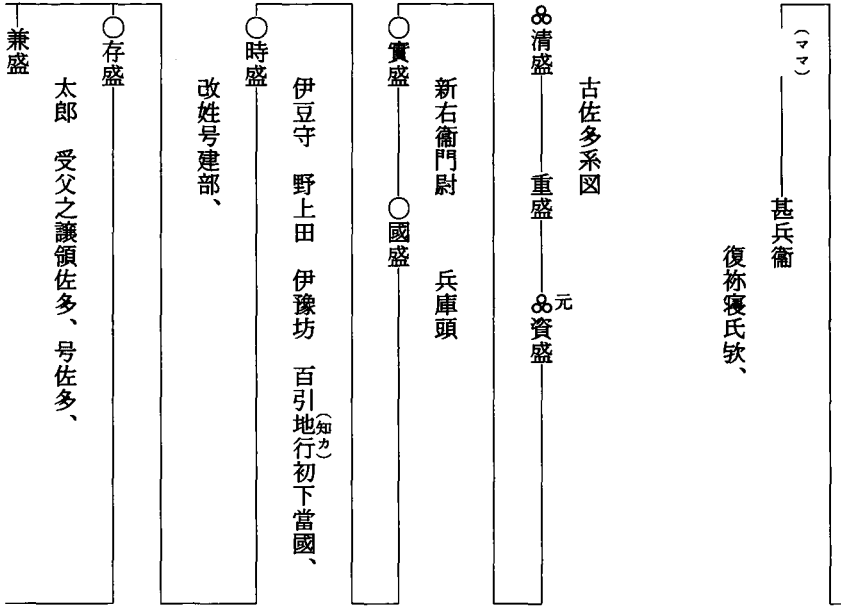
喜威重頼

覚内重昌

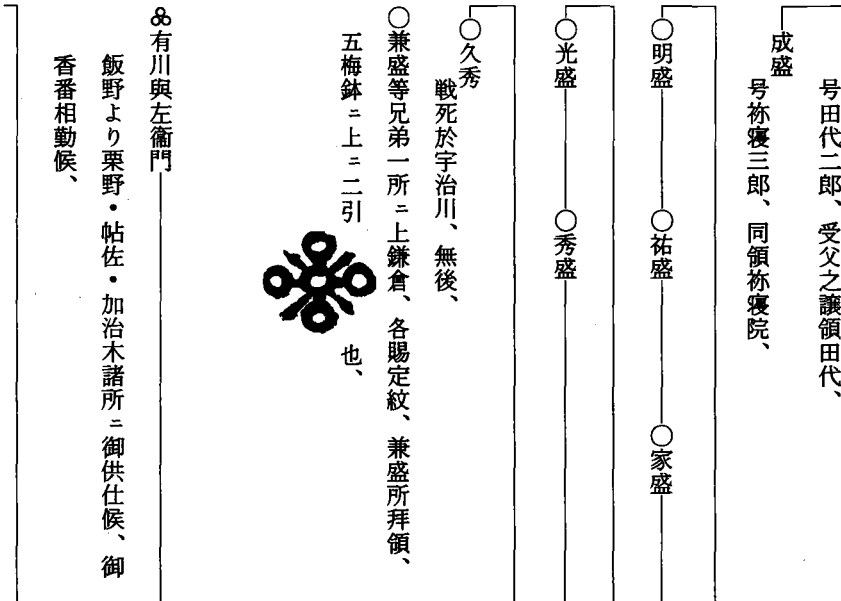
於吉利死、

平左衛門重貞

73



74



○與左衛門

鹿兒嶋ニ被召移候、○正保四年王子ケ原犬追物之時新納小右衛門与兩人、御普請奉行被仰付候、  
某 子孫有川幸右衛門

○與左衛門

○泉阿

與左衛門

清兵衛

兄之養子

西侯代之系圖

清和天皇

号水尾帝、貞觀元年九歲即位、

人皇五十六代文德帝第四王子 治世十八年、三十一

崩御、

貞純親王

經基 六孫王

清和帝六男

正四位

貞觀十二年三月誕生、鎮守府之將軍

滿中

賴光

撰津守

正四位

賴國

多田新発意

鎮守府將軍

文章博士

正四位 將軍

賴信

賴義

河内守

伊与守

征夷將軍

鎮守府將軍

義家

義親

八幡太郎

對馬守

鎮守府將軍

康和年中被誅畢、

豊後前司

為義 賴朝 忠久 (ママ)

六条判官 右大将 征夷大将軍 薩劔守護  
保元之乱被誅、日本國惣追扶使ヲ給也、

義賢 仲家 六条藏人  
義仲 義隆

帶刀先生 木曾冠者 清水冠者

義憲 賴重 村上三郎左衛門尉 此國下向之

志田三郎先生 時、嶋津忠久賴而薩摩滿家院住  
常陸國信太郡 給、而二子誕生有、後ニ信劔江  
居住、 飯國、其子榮尊母儀之私領知行

賴賢 四郎 左衛門尉 入、

重賢 左近太郎 滿家左衛門尉 上総介

入道榮尊

薩摩國滿家院知行ス、件之所領ハ母儀之知行也、  
滿家院郡司大藏氏永平ト云人之娘菩薩房、彼之村

上賴重之妻也、

滿家院郡司職相傳之事、關東下文・京都之宣旨并  
薩摩國守護豊後前司等之文書相傳也、

祐範

比志島城主 孫太郎

滿家院惣郡司 關東之下文・守護前大隅守等之文  
書相傳、

時範 五郎二郎 孫太郎

誓阿

滿家院惣郡司相傳、宮崎異國番多年勉、弘安四  
年蒙古賊船襲來之時、一族召具壹岐島ニ渡防戰  
候旨、大炊亮長久之證状有、

忠範

彦三郎丸 孫太郎 佛念

滿家院惣郡司比志嶋城主宮崎警固番之事有、九

勅探題所金澤上總前司代評定衆鎮西引付ニ有、

盛忠

西侯弥三郎 西念

満家院之内西侯郷領

主之事、又法橋栄尊

建長五年讓ル、

盛資

河田右衛門尉

榮秀

前田又四郎

榮慶

邊牟木又五郎

義範

彦一丸 彦太郎

義阿

満家院惣郡司相傳也、

建武三年宮方合戦討死、

尊氏之感状其子範平ニ

給、

久盛

西侯又三郎 道念

西侯之郷相傳、筥崎勤番、

義時

西侯又七郎 西侯之郷領主

鎮西引付ニ阿蘇遠江守代勤番、

忠辰

西侯又七郎 彦兵衛 入道 西侯城主

守護忠宗公之諱ヲ給、元服之号忠辰、所々一戦之軍勞有、

義定

西侯弥平三 弾正左衛門 出羽守 西侯城主

貞久公抽軍功事度々、仍御書多給、

義光

西侯弥三郎 弾正左エ門 西侯城主

所々軍勞之故、久豊公御書給、又下大隅之内領

所ヲ給事有、

義村

金兵衛 出羽守 西侯城主

永亨年中 貴久公御合戦ニ討死、

貴久公賜御感状也、



源家西侯氏

比志島元祖上総介重賢入道法橋榮尊二男

盛忠

号西侯弥三郎、

薩摩州満家院内西侯名主職之事、被讓與父上総介法

橋榮尊而孫々領所也、

○久盛

又三郎 法名西念

久盛・義時此二代之頃、筑前宮崎異國番勤仕之事有、證書世々傳來、而今有比志島嫡家、

○義時

初義兼 又七郎

○忠辰

又七郎 彦兵衛 入道

康永年間賜奈良一乘院家文書、水間藏人守政就飫

肥北郷濫妨悪行之事、見継取納使方致忠旨也、本書有長谷場源介純莨家、

○義定

弥平三 弾正左衛門尉 出羽守

貞和四年十一月十六日、從 道鑿公賜御書、為楡井四郎頼仲退治可発向之旨也、本書有比志島嫡家、

○義光

弾正左衛門尉

應永十八年十一月廿七日、從 太守久豊公下大隅之内為領所被下之旨賜御書、本書有河田嫡家、

○義村

金兵衛 戦死、

○久清

長秀

義村依無繼嗣為猶子、實蒲生彦太郎清冬二男也、  
於蒲生建立永秀庵、開山蒲生永興寺六代萬年和尚、  
亦稱巍名、号萬年山、

○盛時

左近將監

蒲生久徳村中勸請長谷勸音、而建立勸音院、亦号  
泊瀬山長谷寺、寺地有于今矣、

○盛通

八郎四郎

○盛昌

長門守 法名心嶽長源禪定門

右衛門兵衛

與三郎

○盛家

武藏守 法名傑心長勝上座

天文廿三甲寅蒲生越前守茂清、欲攻加治木之城主  
肝付三郎五郎兼盛、武藏守盛家者蒲生氏類族故、  
約一味屬士卒數輩、盛家令守岩劍城、茂清自將多  
兵而陳取加治木燒山、此時 太守命諸將使大軍攻  
岩劍城、盛家及城士等乞援兵於茂清陳、茂清有燒  
山、而聞變走軍士雖救岩劍失勝計、敗軍於池嶋ヶ  
原、遂城落去為灰燼、盛家父子自害矣、此日天文  
廿三十月二日也、

彦八郎 法名心月明清

天文廿三十月二日 於岩劍城自害、

清房

出羽守 法名俊叟常英居士

清房者岩劍落城之期幼、其母匿之懷中以流落菱刈  
院表、漸及長、奉公 太守之旗下而所々出陳、軍  
中有供奉、且到大坂出陳、從 黃門家久卿給繼一  
領于今相傳矣、

清房家督ヲ讓彦右衛門尉清昌隱居、而被補薩州清敷地頭職移於彼地、清敷者以前平田氏増宗之地頭也、死後故為彼表押主、給清房矣、

女子

法名花月昌春大姉

岩劍敗軍之後、蟄居蒲生邊、或日金吾歳久公通路期覽女聞由來、則携之帰領地、而常侍側、後從総州致弾正少弼、被称母堂、以瀬口喜右衛門尉重明二男一角盛友、使遺跡為後嗣也、

盛友

一角 市右工門

慶長八年癸卯十月十八日生、

寛永年間依弾正少弼懇望、清房妹之嗣遺跡、称号西侯氏、實瀬口喜右工門尉重明二男也、延宝三年乙卯十月十八日死去、法名乾室常坤居士

盛盈

女

一角 與左衛門

弥助盛方妻

寛永十八年辛巳六月十四日生、母東郷但馬助重範女也、

重幸

賀左工門

瀬口九郎左衛門重政為養子、

盛方

弥助

寛文十二年壬子四月五日生、

盛盈依無實子、阿久根六郎兵衛良安三男妻盛盈女為養子、

盛次

一角

元禄七年九月二日生、

○清昌

彦右衛門 法名自山得然居士

彦八郎

年廿一死去、法名月室源心上座

潭州守龍和尚

福昌寺三十世之住

寛文二年壬寅七月二日、於鹿兒島橋隱軒遷化、

享年七十

清重

兵部左衛門 肥後左衛門尉

慶長四年己亥生、

出羽守清房賜清敷地頭之時、携肥後左衛門尉清

重而居住清敷有年、

寛永十九年 太守光久主到薩州清敷之日、九月

廿三日、清重茅厦寄 光興、有賜物御樽御肴、

時 太守謂清重曰、曾從 家久久卿(マカ)所賜之鑑有

台覽、清重拜伏而件鑑莊席上、 公感悅不斜、

而其夜滯駕、清重贗結構、翌朝奉備饗膳、供奉

之各比志島左京亮義時・東郷若狹守・喜入吉兵

衛尉等此外數輩、調進饗應、及黄昏還御也、

寛文元年 辛丑八月四日死去、法名喜慶常快居士

女子 大井七左衛門実延妻 母平田宮内少輔女

盛貞

兵部左衛門 彦右衛門 孫兵衛

寛永三年丙寅九月廿七日誕生、母同上、

孫太郎盛清為養子、

僧 玄索 母同上、

女子 早世 母同上、

盛順

治部右衛門 權之丞

慶安元年戊子十一月五日生、

盛貞盛清為養子、清重依無胤子為養子、實小佐

伊右衛門重武男也、

女子

相良弥五左衛門長恒妻 母柴平右衛門義堅女

義元

覺右衛門 母同上、

柴平右衛門義堅為養子、

盛秀

肥後左衛門

延宝八年己未六月六日生、母同上、

女子 母大田新左エ門女

女子 八木助左衛門信秀妻 母同上、

○盛清

孫太郎

元和二年丙辰誕生、母同上、

寬永十一年甲戌四月廿一日死去、法名雲山源白上座

○盛貞

兵部左衛門 彦右衛門 孫兵衛

孫太郎死去之後、孫太郎姉與肥後左衛門中不快、

八九年間孫太郎遺跡姉使支配、到此時、家之證書

重物等盡紛失、然處從 太守光久公孫太郎跡職、

孫兵衛依被 仰付、万治二年、自清數移於鹿兒島、

是故家之證書重物等不相見、跡職并所領計安堵、

○永盛

彦次郎 兵部左衛門 數馬

慶安二年己丑八月朔日誕生、母本田九衛女

守榮

母同上、

承應二年癸巳十二月三日生、

盛壽

權三郎 粹石 因悅 母同上、

萬治三年庚子八月十四日生、

盛次

小七郎 嘉右衛門

貞享四年丁卯八月廿八日生、母高原惣右衛門篤

忠女

女子 母同上、

盛興

孫九郎

貞享元年甲子五月四日生、母木原太左衛門家時女、父守榮自幼少之時盲目也、是故不得御目見、然孫九郎事、伯父數馬依訴訟、拜謁 太守公、奏者鎌田太郎右衛門也、

女子

女子 伊勢六郎左衛門貞賢妻

母肥後八右衛門盛治女

○盛房

彦兵衛 彦太夫 弥三郎 孝右衛門

寛文十一年辛亥四月九日誕生、母同上、

女子

有馬治右衛門純益妻

盛武

權九郎 四郎右衛門 母同上、

天和二年戊七月十八日生、

女子 幼死

母肥後主膳盛康女

(ママ)

76の2

私家元祖ヨリ相知候由緒家傳等、去元禄七年之冬、系圖御方江差出候、亦々此節御再撰ニ附、庶流迄相記差出候条、御記録所江御差出可被下候、以上、

西侯數馬(花押)

寶永三丙戌年九月廿三日

比志嶋平右衛門殿